編集復刻版

国連軍の犯罪

民衆・女性から見た朝鮮戦争

●編・解説　藤目ゆき

不二出版

編集復刻版

国連軍の犯罪

民衆・女性から見た朝鮮戦争

●編・解説　藤目ゆき

不二出版

『国連軍の犯罪』収録内容

解説

解説　国連軍の犯罪――民衆・女性から見た朝鮮戦争

藤目　ゆき

本書は、朝鮮戦争のさなかに戦場を視察・調査した三つの国際NGOの報告書を一挙に集成した資料集である。

一九五〇年六月二五日に戦争が勃発すると、米国はただちに駐日米軍を派兵して介入し、台湾海峡を封鎖し国連安全保障理事会を召集してソ連欠席の中で朝鮮民主主義人民共和国を侵略者と決議させ、国連軍を組織した。国連軍には一六カ国が参加したが、いずれも小部隊で、中心は米軍である。李承晩（イ・スンマン）政権は米軍に軍隊指揮権を委譲、大韓民国軍は米軍指揮下で戦闘に従事した。当初、戦局は朝鮮人民軍が圧倒的に優勢であり国連軍は釜山の一角にまで追いつめられた。が、九月の国連軍仁川上陸作戦で戦局は逆転し、国連軍が三八度線を越えて北進、一二月には中国国境に迫った。中国人民義勇軍の参戦によって戦局は再度転換し、五一年春頃から両軍は一進一退の膠着状態となり、休戦が実現したのはようやく五三年の七月であった。本書に収録した三つの報告書は五一年・五二年に朝鮮を訪れた三つの調査団がそれぞれまとめたものである。

三つの報告書は、朝鮮戦争の続いていた時期に日本でも翻訳され、公刊されている。

国際民主法律家協会調査団の報告書は、一九五二年一〇月、三一書房から出たメアリイ・イーツ著／勝部元・小野義雄共訳『白人は有色人種を迫害する』に付録として掲載された。

国際科学委員会報告は五三年一月、片山さとし訳『細菌戦黒書』として蒼樹社から出版され、同書のなかに国際婦人調査団による報告書も付録として収められた。法律家・科学者・女性の専門家団体がそれぞれの視点から朝鮮民衆の体験をつぶさに調査したこれらの報告書を読めば、この戦争を論議する際に最も隠されてきた「国連軍の犯罪」の実態がよく分かる。

だが残念なことにこの二書はつとに絶版になっており、これらの報告書の存在は忘れられてきた。今日では国際調査が行われたこと自身、専門研究者の間ですらあまり知られていない。二書を所蔵している図書館も少なく、一般市民が入手することは難しい。本書は埋もれてきたこれらの資料を広く人々に提供したいとの趣旨で編集・復刻したものである。

この資料の歴史的背景について解説しておきたい。

三つのＮＧＯが朝鮮戦争戦場に相次いで調査団を派遣した背景には、反ファシズム国際連帯の経験を基礎に成立した第二次大戦後の国際平和運動の高揚がある。冷戦で軍事緊張が激化し新しい世界戦争の危機が深まるなかで、軍事同盟・軍拡・核兵器に反対し、軍縮・民族独立と民族自決権・民主主義を擁護する世界規模の平和運動が高まっていた。

七二カ国の代表が参加した四九年四月の第一回平和擁護世界大会の開催、五〇年一一月の同第二回大会と世界平和評議会（World Council of Peace）の創設（会長フレデリック・ジョリオ＝キューリー）などを通して、宗教思想信条にかかわりなく平和を求める一点で全世界の広範な諸民族・諸階層が結集した。米国は朝鮮戦争において原爆使用も辞さずと宣言していたが、核兵器に反対するストックホルム・アピールには五〇年三月から一一月にかけての九カ月足らずの間に世界中から五億を超える署名が集まり、米国の原爆使用を事前に封じ込めた。朝鮮戦争の続く五〇年代初頭、世界平和評議会は、相互対立を深める両陣営・米英ソ仏中の五大国とは自律的な世界人類の平和への意志を代表する「第六の大国」であることを自認して、地域紛争の停戦・新しい世界戦争の阻止を掲げて活躍していたのである。

一連の国際調査団の先駆けになった一七カ国の代表からなる女性調査団は、国際民主婦人連盟（Women's International Democratic Federation）によって派遣された。同連盟は四五年末にパリの国際女性大会で創立され、平和擁護世界大会や世界平和評議会に重要な役割を果たした国際女性組織である。中国・朝鮮の女性団体は早くからこれに加入し、その呼びかけで四九年に北京で国際女性会議が開催されるなど、アジアでの活動も活発であった。

五〇年九月の仁川上陸以後、国連軍は三八度線を越えて北進し、北朝鮮諸地域を占領した。中国

人民義勇軍の参戦・朝鮮人民軍の反撃で国連軍が後退したのが同年末である。五一年年頭、朝鮮女性同盟は国連軍の侵略を訴え、国連軍参加国の女性たちに夫や息子を朝鮮に送らないように連帯を求めるアピールを出した。国際民主婦人連盟はこれに応えて朝鮮戦争調査のための女性委員会を組織し、五一年五月に調査を実施したのである。その報告書は「国連軍の犯罪」に対する国際NGOによる最初の告発状となり、二四カ国語に翻訳され、世界中に衝撃を与えた。

続いて調査団を派遣したNGOが、ベルギーに本部を置く国際民主法律家協会(International Association of Democratic Lawyers)であった。国連軍が国際法に違反する行為を重ねているという女性調査団の報告を重くみて、同協会理事会は五一年九月ベルリンにおける協会代表大会ののち、八カ国の法律家で構成する調査団を組織し、五二年三月、朝鮮に派遣した。

女性調査団が訪朝した五一年五月以降、細菌兵器・毒ガスの使用、ナパーム攻撃・無差別爆撃の本格化、捕虜に対する虐殺・虐待と、「国連軍の犯罪」はさらに拡大していた。法律家協会調査団はこれらを検証し、それぞれが一八九九年・一九〇七年のハーグ章程、二五年のジュネーヴ議定書、二九年と四九年のジュネーヴ公約、ニュールンベルク国際法廷の原則、四八年のジェノサイド禁止公約、国連憲章といった国際法にことごとく違反する戦争犯罪にあたると確認した。

なお当時は軍隊の性暴力をそれ自体として重大な戦争犯罪とみなす現代的視点は確立していない。だがそれでも女性・法律家の調査団双方が国連軍の強姦・性拷問をはじめとする性暴力の事例

を数多く報告し、非戦闘員への攻撃・虐待を禁じる国際法をふみにじる戦争犯罪であると指摘していることは注目される。

続いて世界平和評議会の提案によって、五二年六月から八月にかけて国際科学委員会の細菌戦調査が行われた。第二次大戦後の国際平和運動に科学者が果たした役割は大きい。四六年には第二次大戦前からファシズムと戦争に反対する運動に参加してきたジョリオ＝キューリーらによって世界科学者連盟が創立されている。四八年にはポーランドで「平和と科学を守る国際知識人会議」が開催され、科学的発明が人類破滅の道具に使われないよう協働する「平和擁護国際知識人連絡委員会」の設置につながった。同委員会と国際民主婦人連盟などの共同の呼びかけで平和擁護世界大会の開催や世界平和評議会の創設が実現したのである。

五二年になると北朝鮮・中国から米軍の細菌攻撃に対する抗議が相次ぎ、同年三月に訪朝した法律家調査団も細菌戦が実行されていると報告した。世界平和評議会は、国連軍側に偏向するおそれのある国際赤十字や世界保健機構に頼らず、公平で独立した科学者の国際的団体を現地に派遣して細菌戦実施の真否を確かめるために科学委員会を組織したのである。三カ月におよぶ現地調査を行った科学者たちは、確かに米軍が第二次大戦中に日本軍が使った方法を利用して朝鮮と中国の領内で細菌兵器を使用しているという結論に達した。この報告書は、米国人捕虜の証言など四六件の参考資料とともに同年九月に公表された。

以上のように三つの調査団はそれぞれ独自に派遣されたのだが、いずれも第二次大戦後の冷戦・新しい戦争の脅威に対抗して取り組まれた国際平和運動の一部であり、「国連軍の犯罪」を国際社会に告発し、国連軍の朝鮮即時撤退・朝鮮戦争の停戦を求める国際世論を高揚させる上に大きな役割を果たした。

だが、これらの調査団派遣や報告書の頒布はやすやすと行われたわけではない。当時、西側諸国では反共・赤狩り旋風がふきあれ、平和運動に対しても「アカ」のレッテルがはられ、女性も法律家も、調査団に参加したり報告書を頒布して「国連軍の犯罪」を告発した人々の多数が自国の政権から厳しい弾圧を被っている。

朝鮮戦争勃発当時米国占領下にあった日本は、全土が米軍の朝鮮出撃・兵站補給のための基地と化し、平和運動は徹底的に抑圧された。実のところ国際女性調査団報告書の最初の邦訳書は本書で復刻した『細菌戦黒書』ではなく、国際民主婦人連盟に加入していた日本民主婦人協議会が発行した小冊子『血のさけび』であり、これは占領下の五一年一二月、調査が実施された同年に刊行されている。しかしこれは秘密出版の禁書であり、頒布した女性たちは反米活動の容疑でたちまち逮捕され、小冊子は回収されてしまっている。

『細菌戦黒書』など調査報告書の公然たる出版は、五二年四月にサンフランシスコ講和条約が発

効して占領が解かれ、ようやく米国批判が自由に行えるようになった一方、朝鮮戦争が三年目を迎え、停戦を求める国際世論が高まっていた一時代の所産であった。その意味でこの資料集は、朝鮮戦争下に敢行された国際平和運動の一端を知る史料としても貴重である。

「国連軍の犯罪」を明らかにする今日的意義についても言及しておきたい。

朝鮮戦争勃発五〇周年にあたる今年六月、朝鮮半島では南北頂上会談が行われ民族の和解と統一に向かう機運が高まり、韓国では今日、朝鮮戦争下の米軍犯罪問題が現在の駐韓米軍に対する批判と結合して公論化し、米軍による民間人虐殺の真相究明・米国の国家賠償・駐韓米軍の撤収を要求する声がかつてなく高まっている。この声は、米軍によって脅かされ続けてきた沖縄県民の「基地の整理・縮少」「基地移設反対」の声に響きあう。駐留米軍に苦悩している人々にとって、朝鮮戦争下の米軍犯罪は遠くに過ぎ去った昔のできごとではなく、すぐれて現在的な問題である。

その一方、新ガイドラインで日米安保が飛躍的に強化され、北朝鮮の脅威が喧伝されて朝鮮有事を想定した戦時法制が整備され、在日朝鮮人への暴行事件が続発し、都知事や首相の妄言がくりかえされている日本（ヤマト）の状況はどうであろう。アジア太平洋侵略戦争や朝鮮戦争加担への反省どころか、冷戦イデオロギーにどっぷり浸り、北朝鮮を敵視し続けている有様である。沖縄では県民投票や名護市民投票にも示された民衆の平和への願いをよそに、米軍基地の県内移設・拡張が

推進されている。新ガイドライン安保体制は沖縄を犠牲にして在日米軍基地を強化し、朝鮮戦争の再開を準備しているのである。これらが南北朝鮮の統一・アジアの平和へと向かう歴史の流れに逆行するものであることは論をまたない。

国民の戦後史認識の欠如と歪みが、戦争のできる国家体制づくりが支持・容認され民族排外主義的な妄言や暴力が横行する現在の憂うべき状況を基礎づけていないだろうか。

第二次大戦後日本は朝鮮戦争時の対米協力を通して米国の世界戦略に固く結びつき、米国との同盟を国家の土台として歩んできた。朝鮮戦争が戦後日本の進路を決定づけた戦争であったにもかかわらず、今日まで戦争の実態が国民にほとんど伝えられていない最大の根拠はそこにある。朝鮮戦争に実質的に参戦し、戦後も朝鮮半島の南北分断に加担してきた日本にあって、朝鮮戦争下の「国連軍の犯罪」の事実は隠され、戦争の性格は歪めて説明され、真実は容易に伝えられなかった。五三年七月の朝鮮戦争停戦協定調印以後、ベトナム戦争や日米安保など米軍を問題にする著作のなかで、例えば林茂夫『駐「韓」米軍』(一九七八年)がそうであったように、朝鮮戦争期の米軍犯罪が顧みられ、国際調査団報告書の一部が紹介されることはあった。だがそのような著作はごく少数に限られた。とりわけ九〇年代になると北朝鮮の「開戦責任」が盛んに論じられる一方、朝鮮戦争が日本や米国の侵略なしには起こり得なかった戦争であり、国連軍の侵攻で南北朝鮮民衆がとほうもない被害を受けたというシンプルな事実はどこかにかき消されてしまったかのようである。このよう

にして多くの国民は朝鮮戦争に関する最も重大な情報であるはずの「朝鮮民衆の体験」を知らぬまま、国連軍－米軍の正義を疑わず、北朝鮮への不信感や敵意を抱き続けてきたのではないだろうか。

それでも韓国や沖縄をはじめアジア諸地域の民衆と共に平和な未来を創り出そうとする人々の草の根の運動が存在していることは希望である。二〇世紀最終年の本年一二月には、ベトナム戦争中に米軍の有罪を宣告したラッセル法廷を参考に、アジア太平洋戦争期の日本軍性奴隷制度を裁く女性国際戦犯法廷が東京で開かれようとしている。隠蔽され歪曲されてきた戦争犯罪の真相を究明し、裁かれずにすまされてきた罪を罪として告発する取り組みは、平和と人権が尊重される世界を築くための前提条件をつくりだすだろう。このような運動がさらに前進し、朝鮮戦争における「国連軍の犯罪」に多くの人々の目が向けられるようになることを願う。国連軍の侵略戦争犯罪を告発し、その責任者を世界民衆の法廷で裁き処罰しなければならないとしたＮＧＯ調査団の結論は、半世紀を経た今も正当だからである。

本書が冷戦の呪縛から人々の歴史認識を解き放ち、民衆・女性の視点からアジア駐留米軍の存在意味を洗い直すために役立てられることを祈っている。

二〇〇〇年七月二七日　朝鮮休戦協定調印四七年

参考文献

世界婦人大会代表報告会中央準備会編『平和と幸福のために――世界婦人大会報告・決議集』五月書房、一九五四年

熊倉啓安『戦後平和運動史』大月書店、一九五九年

池山重朗『危機からの脱出』合同出版社、一九六三年

林茂夫『駐「韓」米軍』二月社、一九七九年

国際シンポジウム「東アジアの冷戦と国家テロリズム」日本事務局編集発行『台湾シンポジウム報告集』一九九七年

国際シンポジウム「東アジアの冷戦と国家テロリズム」日本事務局編集発行『済州島シンポジウム報告集』一九九八年

藤目ゆき「冷戦体制形成期の米軍と性暴力」『女性・戦争・人権』第二号、行路社、一九九九年

藤目ゆき「照らし出される戦後史の闇――国際シンポジウム『東アジアの平和と人権』に参加して」『世界』第六七六号、二〇〇〇年六月

VAWW-NET Japan 編集『戦犯裁判と性暴力』緑風出版、二〇〇〇年

姜禎求「朝鮮戦争と良民虐殺」アジア共同行動日本連絡会議編集発行『資料集　朝鮮戦争と良民虐殺』二〇〇〇年

藤目ゆき「国際女性調査団のみた朝鮮戦争」『女性・戦争・人権』第三号、行路社、二〇〇〇年

国際シンポジウム「東アジアの冷戦と国家テロリズム」日本事務局編集発行『沖縄シンポジウム報告集』『光州シンポジウム報告集』二〇〇〇年刊行予定

藤目ゆき「冷戦体制形成期の女性運動――占領下の日本民主婦人協議会と朝鮮戦争」三宅義子編『日本社会とジェンダー』（竹中恵美子・久場嬉子監修『叢書・現代社会とジェンダー』第三巻）明石書店、二〇〇〇年刊行予定

I アメリカの朝鮮における犯罪行為

――国際民主法律家協会調査団

附録　アメリカの朝鮮における犯罪行為

国際民主法律家協会調査団

（瀋陽の民主新聞社刊行の同書名のパンフッレトより転載しました。）

（新華社五日電）国際民主法律家協会調査団は、朝鮮地区において、アメリカ帝国主義が、すすめている細菌戦およびその他の犯罪行爲に関する調査をおこなった結果、「アメリカの朝鮮における犯罪行爲に関する報告」と題する報告を作成した。この報告はすでに調査団の全団員によって三月三一日、北京でおごそかに署名された。その全文はつぎのとおりである。

説　明

1、この報告は、国際民主法律家協会より委任をうけた調査団が発表するものである。協会本部の所在地は、ベルギー、ブラッセル市レグラー街七〇番地である。

2、調査団はこの報告をいそいで発表したために、文中の朝鮮人名と名詞の飜訳にあやまりがあると思われる。この点についてとくにおわびをしておく。

3、朝鮮の行政単位は「道」であり、「道」のつぎは「郡」、「郡」のつぎは「面」、「面」のつぎは「里」すなわち村である。しかし、都市のなかの分区もまた「里」とよばれる。

4、朝鮮名。

斗　（重さの単位）

里　（長さの単位）　（一キロは八分の五哩）

坪　（面積の単位）

5、この報告の括弧內の数字は、報告の末尾に附した文書と主要な証人表の数字をしめす。

6、この報告は調査団によって英文を用いて署名された。

一　序　言

朝鮮民主主義人民共和国政府は、共和国の敵がその領土においておこなった国際法に違犯する行為について国連に抗議することを数回にわたってもとめたが、しかし、国連はこの要求に対して理由もなしにこれを放置している。

この陳述はすでに各種の調査をうけた。とくに、国際民主婦人連盟が朝鮮を訪問したのち、一九五一年五月二七日に発表した報告は、このことについてのべたものである。

この指摘はきわめて重大なものであった。ゆえに国際民主法律家協会理事会は一九五一年九月、ベルリンにおける協会代表大会ののち、とくに各国の法律家のなかから数名を選んで調査団を組織し、朝鮮におもむかせ、法律的方式の調査にもとづいてこれらの指摘を現地調査することにした。

調査団の成員はつぎのとおりである。

ブランドヴェイネル（団長）　フラチ大学国際法教授（オーストリア）
カヴァリエリ（副団長）　ローマ最高裁判所弁護士（イタリー）
ガスター　ロンドンの弁護士（イギリス）
ジョキエル　パリ、控訴院弁護士（フランス）
柯柏年　北京中国人民外交学会研究委員会副主任（中国）

メーレンス　　　　　　　　ブラッセルの弁護士（ベルギー）
デ・ブリット　　　　　　　リオデジャネイロ裁判所弁護士（ブラジル）
ワシルーコフスカ　　　　　ワルシャワ最高裁判所法務官（ポーランド）

調査団の朝鮮に逗留した期間は、一九五二年三月三日から三月一九日までである。この逗留期間において調査団団員は、平安南道、平安北道、黄海道、江原道におもむき、平壌、南浦、价川、碧潼、安州、安岳、信川、沙里院、元山などを訪問した。

調査団は時間的な制約をうけたし、同時に戦争という環境下なので提出されたすべての指摘を逐一調査することはできなかった。しかしながら、調査団はその使命をはたすうえでのあらゆる必要な便宜を朝鮮当局からあたえられたので、もっとも重大な状況についてはこまかく調査することができた。これらのことがらは、その規模と被害者の数からいっても、また、暴行者の使用した手段の性質の特殊さからいっても、いずれもきわめて重大な内容をもっている。

このすべての調査にあたって、調査団団員はまず第一に関係当局が提出した報告と談話について研究し、そののち直接調査をすすめ、その間百名以上の実証人をじん問した。

調査団の結論は、これらの事件の調査の結果にもとづくものであり、みな調査団が直接にぎった証拠によって実証されたものであり、また一切の関係文書の研究と結びつけて到達したものである。

この報告の中ではとくに細菌兵器と化学兵器について、重要な証拠が分析されている。戦争の起因についても歴史的な意義をもつ文書によって研究している。この報告のなかにあげている一切の暴行事件、たとえば都市と保護をうけるべき建築物の爆撃、平和な住民にたいする殺害、虐待および屠殺行爲は、みな直接的な証拠があり、さらに適切な調査を行って実証されたものである。この二つの条件をそなえてない事実については、この報

告はすべてとりあげていない。この報告のおわりに、調査団は結論をかかげている。調査団はこの結論がすでに実証された事実にもとづいて適切に作成されたものであると考える。

この報告のなかでは、どの一つのことがらもすくなくとも一人の証人の名をあげており、また多くの文件をかかげているが、そのなかで比較的に重要なものはすべて一表としてこの報告のあとに附してある。われわれはこれらの重要な証人の証言を要約して発表し、また、これらの文件を別冊としてこの報告の附録として発表するつもりでいる。

調査団は、これらの事実をその性質によって分類したのち、その一つ一つについて考慮をくわえた。その一部分はニュールンベルグ国際軍事法廷法規第六条の定義にもとづいて戦争罪かあるいは人道違反あるいは平和に反する罪と決定し、他の一部分は現行の国際法を破ったものか、または戦争法規と慣例に違反したものと決定した。

調査団が今度の調査においてふれた問題はひじょうに広はんであり、多種多様である。これを一ページの紙上に多くの問題についていちいち国際法を引用することは、おろかなやり方である。しかし、一般の読者の便宜のために、そのことと関係のある主要な条約、協定および慣習法を簡単にかかげることは必要なことだと考えた。だがこれがまったく完全なものであるとはいえない。調査団がこの結論をみちびくにあたって、どのようにさまざまの法律を慎重に考慮し、どのように解釈を加え、引用したとしても、このような複雑な問題をみな一つ一つはじめからくわしくのべることは不可能である。

まず第一に、調査団がその活動をすすめるにあたってその根拠としたものは、一八九九年七月二九日と一九〇七年一〇月一八日の二つの陸戦にかんする法規と慣例についての公約——ヘーグ章程である。なぜならば、この二つの公約のなかには、戦闘部隊の武装衝突中における行動を規定した多くの条項が包括されており、そしてこ

の二つの公約がすべての国家の習慣法を約束していることは国際的に公認されているからである。ヘーグ章程のなかには戦争法規の基本原則がふくまれている。つまり、戦争に参与する国家は敵に損害をあたえる手段を無制限にすき勝手に選ぶことはできないし、また、それよりもさらに重要なことは平和な住民を直接攻撃し得ず、こうした行爲は禁止されていることである。ヘーグ章程は、都市と地区、防禦設備がほどこされているものといいものに区別するよう規定し、また一部の建築物たとえば教会、病院、学校などは特権をうけることができると規定している。この二つの公約は、さらに、略奪を禁じ、またある種の兵器とある種の戦争手段の使用をひなんしている。禁止された兵器のなかにはとりわけ毒物と有毒な兵器が包括されており、また、化学兵器と細菌兵器も含まれている。この二つの禁令は、戦争中に窒息性、毒性をもった氣体および細菌兵器の使用を禁止することについての一九二五年六月一七日のジュネーヴ議定書のなかで、さらに詳細に規定されている。このほか、調査団は戦場における軍隊傷病者の改善についての一九二九年七月二七日のジュネーヴ公約、同日に署名された俘虜に対する待遇についての一九四九年八月一二日のジュネーヴ公約を考慮した。最後にかかげたこの公約については、朝鮮民主主義人民共和国外相が一九五〇年七月一三日に発表した宣言の中で、朝鮮人民軍がこの条約の規定を守っていることを正確に表明している。

調査団はニュールンベルグの原則をとくに注意した。この原則は、ニュールンベルグ国際軍事法廷の法規および、この法廷で下された判決に表現されている。ニュールンベルグの原則は、国際法違反の犯罪行爲を二種類にわけている。

イ、戦争犯罪

戦争法規あるいは戦争の慣例に違反する行為は、つぎのことを包括する（しかし、これのみに限らない）。占領区の平和な住民あるいは区内の平和な住民に対する殺害、虐待、追放労役あるいはその他の目的をもった追放、俘虜あるいは海上人員に対する殺害または虐待、人質の殺害、公私財産の略奪、ほしいままの都市、村落または農村の破壊、あるいは軍事上の必要によらない破壊行為。

ロ、人道に違反する犯罪行為

すべての平和な住民に対してくわえられる殺害、絶滅、奴れい労働、追放あるいはその他の非人道行為、あるいは政治、種族および宗教上の原因から人民に対してくわえられる迫害は、もし平和に反対する犯罪行為あるいは戦争犯罪にあたるものとして行われ、またはこの種の犯罪行為とつながりをもってなされたとしても、いずれもみな人道に違反する犯罪行為としてかぞえる。

これらの原則は、ヘーグ章程およびすでに慣例となっている国際法のより一そうの発展であり、これはすでに公認されているものである。

最後に、調査団はさらに一九四八年二月九日、国連総会を通過した集体屠殺罪の防止と懲罰についての公約を考慮した。所謂集体屠殺とは、その意味は民族、種族あるいは宗教集団に対してこれらの集団を絶滅する考えをもってとられるか、あるいはとられんとする行動をいうのである。この言葉の定義は、なおこれらの集団の成員を殺害すること、これらの成員の肉体的あるいは精神的完全さを厳重に破壊すること、かれらの全部または一部分の絶滅をはやめるような生活条件の下にかれらをおくことをも含んでいる。

朝鮮戦争の起因について、調査団はいたれりつくせりの調査はくわえていないけれども、この問題についてや

や一般的に言及する必要を認める。

国際法によると、一国において内戦がぼっ発した場合、第三者は一般的にこれに対して干渉する権利はないのである。国連憲章第二条第四項および第二条第七項はさらにこの原則をはっきりと規定している。さきの一項は、国連会員国が、いかなる国の領土をも武力をもって破壊すること、あるいは、国連の宗旨と符合しないいかなることをなすことをも禁止している。あとの一項は、憲章第七章に規定された特殊な状況をのぞくほか、国連は一国の内政に干渉し得ざることを規定している。

国連の朝鮮干渉についての決定は、それ自身憲章に違反するものである、なぜならばこの決定は安全保障理事会の常任理事国全部が第二七条第三項にもとづいて全体一致して票決して通過させたものではないし、かつまた、第三二条に違反しているからである。

国連がまだ上述の不法な決定を通過させていないとき、トルーマン大統領はアメリカ海軍と空軍にただちに干渉をおこなうよう命令した。これはアメリカの干渉が不法であり、あきらかに事前に準備され計画されていたものであることをしめしている。したがってこれは一つの侵略行動である。

国連のその他の会員国が干渉に参加したのもまた、国連憲章に違反するものである。

ここでもまた、国連各会員国が南朝鮮を支持する軍隊を提供し、国連の提案によってアメリカ軍隊の最高司令部の指揮に入ったということは、必ず指摘されねばならない。

調査団はさきにのべた一般的な説明のほかに、この報告の附録のなかで、調査団が朝鮮において検査した朝鮮戦争の起因についての重要な文書の写真を出版する予定である。

調査団は朝鮮に到着してから、一つの突発的な任務に直面した。それは朝鮮でアメリカ軍が軍隊と平和な住民に対して細菌兵器を使用しているという非常に重大なひなんを調査することであった。調査団団員は朝鮮各地区におもむき、実地に証拠を集め、特殊な環境のなかで昆虫を発見した証人をじん問し、発見された容器の破片についての証拠を検査し、専門家をじん問し、衛生工作人員および専門家から最近の数年間における衛生状況および疾病発生の原因についての材料を入手し、また官側の文書と調査団がえたその他の材料を研究した。調査団は多くの素朴で誠実な農民および事実の証拠を提供したその他の人びとのはっきりした献身的な誠実な態度にたいして深く感動した。

調査団の調査した結果は、つぎのとおりである。

朝鮮人民軍、中国人民志願軍および地方防空部隊の看視所の報告によると、北朝鮮の百六十九ヵ所の地点にそれぞれちがった各種の昆虫が発見された（1）。一九五二年一月二八日から三月一二日までの期間に発見された昆虫では、一五の典型をもつ例が専門家の手で検査がおこなわれ、これらの発見された昆虫についての識別があきらかにされた。検査の結果は、つぎのとおりである。

1、一月二八日　江原道平康郡で蒼蠅、蚤、くもを発見（2）。

2、二月一一日　江原道鉄原郡で蒼蠅と蚤（蚊）を発見（3）。

3、二月一七日　江原道平康郡でくもを発見。
4、二月一八日　平安南道安州郡で蒼蝿と蚤を発見。
5、二月二三日　平安南道平原郡で蒼蝿と魚を発見。
6、二月二五日　江原道徳源郡で蚤およびその他の昆虫を発見。
7、二月二六日　平安南道大同郡で蒼蝿と蚤を発見。
8、二月二七日　平安南道江東郡で蒼蝿を発見。
9、二月二七日　黄海道（軍事単位）で虱を発見。
10、二月二七日　平安南道宣川郡で蒼蝿を発見。
11、二月二九日　黄海道遂安郡で蒼蝿およびその他の昆虫を発見。
12、三月一日　平安北道鉄山郡で蒼蝿と蚤を発見。
13、三月一日　平安南道陽徳郡で蚤およびその他の昆虫を発見。
14、三月二日　咸鏡道高原郡で蚤およびその他の昆虫を発見。
15、三月四日　平壌市内区域で蒼蝿を発見。

多くの地方において、特種な蒼蝿、蚤、くも、かぶと虫、南京虫、こおろぎ、蚊およびその他の昆虫が発見され、そのなかの多くのものはいままで朝鮮にいなかったものである。これとちがったところでは、昆虫は人里遠く離れた地点や雪の上、河の氷の上、草の上や岩の間で発見されている。

これらの昆虫の出現は、疑いをひきおこした。なぜかというと、当時の気温はひじょうに低く（一月の最高気温は一度、二月は五度であり、この温度は一日のうちのわずか数時間にすぎず、平均温度はずうっと攝氏零度以下である）、通常このような状態では昆虫は存在することはできないが、なおかつ発見された昆虫はしばしばそ

の数がひじょうに多いからである。はなはだしいことには蒼蠅とくものような類が、ふつうでは一しょにいない各種の昆虫と群をなして一しょになっていることだ。専門家がしらべた結果、大量の昆虫が細菌を保有していることがあきらかにされた。

多くの地方では、これらの昆虫が卵をもっていることが発見された。一九五二年二月二三日、平安南道平原郡の粛州面という村からあまり遠く離れていない山の上で、蒼蠅のほかに大量の魚が発見された。この魚は鹹水（しおみず）と淡水のなかで生存する魚の一種である。この魚はすでになかば腐敗している状態で、コレラ菌を保有していた。推測するところによると、この魚はあやまって山上に投下されたものである。

培養されたものと假定することができると認めている。

発見された細菌の種類には、コレラ螺旋菌、ペスト桿菌、チフス桿菌、パラチフス桿菌の甲と乙、発疹チフス病原体、赤痢などがある。検査の結果は各種のちがった昆虫が撒布された地区の報告を実証しており、投下された昆虫がペスト、コレラおよびその他の伝染病を保有していることが証明されている（1）。

調査団はつぎの状況についてとくに調査をおこなった。

1、**一九五二年一月三〇日**。江原道利川東南の雪の上と岩の間で、いきている蒼蠅、南京虫およびくもを発見した。この地方ではこうした毒虫を発見するとすぐにこれを焼きすててしまっているが、しかしなお直径六百メートルから七百メートルの地上で一平方メートルごとに二十乃至三十の標本を発見することができた。

専門家が検査したところによると、この蒼蠅はコレラ菌を保有していることが明らかにされた。昆虫の発見された地点から約三、四百メートル離れたところで、ビラ入り爆弾によくにた容器の破片を発見した。この容器は一種特別な装置をもっていて、容器が地上に落ちるとすぐに口がひらくようになっている。一人の証人はかれがみた爆弾が第八号と第九号の写眞（4）にある爆弾であることを証明した。この写眞の爆弾と調査団が親しくみた

破片はまったくおなじ型のものである。

2、**一九五二年二月一八日**。平安南道安州郡大尼面発南里で蒼蠅、くも、南京虫が一平方ヤードの空地の上に三つのかたまりになっているのを発見した。そのおのおののかたまりの間かくは一メートルであった。一つの場所にはまだ雪があり、他の二つの場所では雪がなかった。これらの昆虫はみないきていた。調査団がこの地点に到着したとき、これらの昆虫はすでに一つ場所にちらばっていた。この蒼蠅は朝鮮で普通みかける蒼蠅とくらべるとてもちがっている。この蒼蠅のはねは比較的に長く、ひらき具合がせまく、胴体はわりあいに大きく、頭部と胴体は普通の蒼蠅のものよりも大きい。くもについていうと、普通のくもは大ぐもと小ぐもの二種類に分けることが出来て、色は眞黒であるが、発見されたくもは、中ぐらいのもので、胴体はやや白色を呈している。南京虫は普通のものは胴体が丸く色は黄色がかっているが、発見された南京虫は胴体が扁平で色は黒い。一年中のこの時期に、この地区ではいままで蒼蠅とくもを発見したことがなかった。地面の温度は攝氏零下二十度である。

昆虫の発見された前日の夜半近く、その地方の上空を低空飛行で、数回旋回している飛行機を見たが、爆弾や焼夷弾も投下せず、掃射もしなかった。専門家が検査した結果、これらの昆虫はペスト菌を保有していることがあきらかになった。二月二五日、この村にペストが発生し、病気にかかった者は五十人で、三月十一日までに三六人が死亡した（この村の人口は、約六百人である）。この病気はその後まん延してはいない。この地区はいままでペストが発生したことがない（6）（7）。

3、**二月二二日**。黄海道鳳山郡楚臥面鐘洞で、直径約二百メートルの面積をしめる氷雪上に、蒼蠅がうずたかくかたまっており、一平方メートルごとに五——一〇匹いるのを発見した。それは人里をひじょうに遠く離れた曠野の中である。

同郷同面の月山で、最もちかい家屋から七百メートル離れたところに蒼蠅が発見された。この二つの地方で発見された蒼蠅はみな普通の蒼蠅よりも頭はちいさく、翼はながく、胴体には毛が比較的たくさんはえている。三月十二日までに、全道で三十六ヵ所に蒼蠅、くもおよび蚤によくにた異状な昆虫が発見されたことが実証されている（8）。

4、**二月二五日**。いらい平安南道价川郡の九つの地方で蒼蠅およびその他の昆虫が発見されている。そのうちの一部は雪の上で発見された。発見された昆虫はいままでこの附近でみたことのない種類のものである。朝鮮ではふつう四月以前には蒼蠅は出現しない（調査団の団員が訪問したときまでは、どのような病気もまだ発生していない）。

5、**二月二六日**。同郡の北面で雪の上に、大量の蒼蠅と蚤が発見された。この蒼蠅と蚤はそののち南新日（音訳）村から南新叉（音訳）村へ伝播した。二キロ離れた地点の雪どけした湿地の上で黄色い紙につつまれた一群の蒼蠅が発見されている（9）。

6、**二月二八日**。平安南道江東郡元灘面松里附近の puk Eang 江（この江は平壌の水源である）の江岸の氷上で直径約三〇ミリのいくつかのちいさなかたまりになっている蟻によく似た昆虫が発見され、そのかたまりの間隔は約三メートル乃至六メートルであった。二日目になると、その昆虫はすでに八百メートルの面積にちらばっていた。昆虫が発見された前日、アメリカ機がこの地方の上空を三〇分にわたって旋回したが、爆弾や焼夷弾は投下しなかったし、掃射もしなかった。証人は、専門家がしらべた結果、この昆虫は腸病をおこす細菌をもっていることがあきらかにされたとのべた（10）。

7、**三月三日**。平安南道順川郡長山面高棠里の一平方ヤードばかりの場所で特殊なかつこうをした蒼蠅が発見された。この蒼蠅は、摂氏零下一〇度の雪の上でもなおいきていた。この蒼蠅の頭は、朝鮮蒼蠅の頭よりもちい

さくはねはおさめられており、胴体は普通の蒼蠅よりも長い。一年中のこの時期ではこの地方は通常露天でいきている蒼蠅をみることはない（11）。

8、**三月四日**。さきにのべた同郡の信川面馬洞村で、おなじような状況のものでおなじような蒼蠅が発見された（11）。

9、**同日**。安州市附近でいくつかの群をなしている蚊を発見し、それはさきにのべたものとよくにていることおよび、第八号の写眞のものとおなじ一つの容器が発見された（4）（12）。

10、**同日**。安州面車廠村で蚊が発見された。群をなしているこのような昆虫がこの地区のいろんなところで発見された。それは普通の蚊とはひじょうにちがった種類のもので、普通の蚊は頭から胴体にかけていくらか毛があるが、この蚊にはえているものはより一そう多い（6）（7）。

11、**三月五日**。平壌市中区南門里の街路上に大きなかたまりと小さなかたまりになっている蒼蠅を発見した。その蒼蠅は約一メートル半から五メートルの地上に分布していた。そのつぎの日には道路を一つへだてた街に、コレラが発生した（13）。

12、**三月一一日**。碧潼郡の俘虜収容所から数キロ離れたところの雪の上にうず高く一かたまりになっている蒼蠅とその他の昆虫の群が発見された。

調査団が実証したこれらの狀況は、調査団が被害をうけた地方をすべて視察することができなかったので、まったく事実のなかのきわめて一部分にしかすぎない。ビラ入り爆彈によく似た容器が発見された地方およびその附近には、まだどんなビラも発見されていないということは説明しておかねばならない。

北朝鮮では過去四年らい伝染病は発生していない。調査団が訪問したときまで、さきにのべた群をなして昆虫が発見された附近の地区をのぞいては伝染病が発生したということを耳にしない。われわれの観察したところに

よると、細菌を保有した昆虫が撒布されたのちでも伝染病が流行しないというこの事実は、当局が人民と十分に密接に協同して周到、厳格な防疫対策をとった結果によるものであることは疑う余地のないことである。

最初にコレラにかかった人は、二月二〇日に発見された。この人は江原道鉄原郡北面区の四〇歳になる金学文で、かれは二月二三日に死亡した。二月二五日、同村の三五歳になる金述善がまた発病した。平安南道粛川面のある村で二人の人が三月五日に発病し、二人とも二日目に死亡した。三月八日また三人が発病したがそのうちの一人はその日に死亡し、いま一人は三月九日に死亡した。平壌市では、さきにのべたように、二人の者が三月六日に発病し、いま一人は三月八日に発病している。そのうちの二名は三月八日に死亡し、この居住地区は隔離された。黄海道（さきにのべたように、この道の記録表はすでに三六の地点で昆虫が発見されていることをしめしている）遂安郡水求面石達里では、二名の者が三月八日に発病し、そのうちの一人は三月九日に死亡した。兵士のなかにはコレラにかかった者は一名もいない。コレラにかかった者は総数一三名で、そち九名が死亡している（1）。

最初にペストにかかった人は、二月一五日に発見された。その人は安州郡発南里の黄利彩といい、年は二九歳である。かれの病気は危とく状態にある。二月二九日、同村の朴善玉（二六歳）が発病した。この事件のなかから、二月二十日にペスト菌を保有した蒼蠅の出現が確定される。調査団が安州を訪問するまでに、この村でペストにかかった者は五〇名にのぼり、そのうち三六名が死亡している。

軍隊の中に三名のペスト患者がいたことは実証されている。

三月四日、江原道 Tan wau 郡、東河面の一兵士が発病し、三月六日に死亡している。平安南道 Jong Do 郡 Shoang I Dong 村で一名の兵士が三月七日に発病し、二日目に死亡している。咸鏡南道高原郡城南里で一名の兵士が三月一一日に発病し、二日目に死亡している。

ペストにかかった者は総数五三名、そのうち三九名が死亡している（2）。

若干の状況のなかで、コレラとペストが発生した地点と時間は、細菌を保有した昆虫の発見された地点と時間に符合している。

こうした事実から、調査団は大量の昆虫（往々にして朝鮮にはそのような種類の昆虫はいないが）ひじょうに低い気温のもとで、雪の上、曠野のなか、氷結した河のうえで発見されたことに一点の疑問もないとみとめるものである。これらの昆虫は、その大部分のものがペスト、コレラおよびその他の伝染病菌を保有していることがすでに証明されている。昆虫が発見された地点附近で、ある種の容器が発見されている。この容器の構造によってわれわれは次のような結論をうることができた。すなわち、その容器は大量の昆虫を装塡するために使用されたものであると。

発見された容器のなかの一部に、英文の標記があることが発見されている。若干の状況のなかで、こうしたものの発見された地点と時間が、飛行機（それは低空で旋回し、爆撃も掃射もおこなっていない）が出現した地点と時間に符合することが実証される。こうしたものが発見されて間もなく、幾人かの者がペストとコレラにかかった。調査団が調査したこれらの地方については以上のべたとおりであるが、これは昆虫の発見が報告された地方のうちの数カ所にすぎない。しかし、これらの事実は、このような種類の昆虫が大量にひろい地域にわたって撒布されていることをしめすものである。いかなる状況下においても、調査団はつぎのような結論を見出さなければならなかった——すなわち、アメリカ機が朝鮮の上空から伝染病菌を保有した昆虫を投下したのだと。

三　化学兵器

すくなくとも一九五一年五月六日から、アメリカ機は幾回にもわたって窒息性毒ガスおよびその他の毒ガスと化学兵器を使用している。

南浦市人民委員会保健課長が調査団に提供した証拠によると、(1)一九五一年五月六日午後五時六分から六時三〇分にかけて、同市は四回にわたって爆撃をうけた。その日は天気がひじょうによく、気温は摂氏一三度であり、爆撃をうけたのは一三の地区であった。最後の爆撃で住民たちがみな退避していたとき三機のB—29爆撃機が来襲し、後浦里、龍井里、梁洞里などの地区と湧水里の一部の地区にかけて合計わずか〇・三平方キロの地域に毒ガス弾を投下した。この襲撃で死傷者一千三百七十九名をだし、そのうち四百八十名は毒ガスで窒息して死亡し、六百四十七名は中毒にかかった。他の七十六名はその他の原因で死亡し、百七十六名が負傷した。

調査団は、目撃者と専門家(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)から証拠を入手し、かれらが提供した材料と文書について研究した。その結果、つぎの事実が実証された。爆弾が炸裂したのち、毒ガスはすぐさまひろがり、最初に一陣の黒煙がのぼり、それはすぐに黄緑色、黄色にかわり、最後には無色になった。この毒ガスは特殊なにおいをもっており、塩素系ガスのようなもので、その有毒効力はほぼ二時間にわたり、完全に発散したのちはじめてなくなった。防空壕のなかにいた者(多くの子供をふくむ)の中毒が最もひどい。中毒にかか

った者の症状はつぎのとおりである。呼吸困難、声が出なくなる、めまい、せきがひどく、涙と鼻汁がでて、頭痛がおこり、全身が無力状態となり、皮ふがほてり、嘔吐をもよおし、口からあわと血を流し、発熱し、皮ふが青紫色になり、脈搏が微弱、いずれも急性気管支炎と畏光病の症状を呈す。中毒にかかった者の血液を検査すると、白血球が増加し、血色素もまた百分の百から百分の一一五に増加していることが発見された。死者を検査すると、死者の肺臓の体積と重量はいずれも増加しており、肺の表面に肋骨の痕があり、主質から一種のいりまじった滲出性の赤黒い液体が流れだしていた。気管支の表面は、鮮明な灰色にかわり、そのうえ、たちまち消えてしまった。腎臓と心臓は貧血状態を示し、毛細管の構造が拡大したので点状を呈している。脳膜は平滑にかわり、その構造は拡大している。脊髄を解剖すると、一種の白色物質のウッ血斑点が発見された。調査団は南浦において、屍体解剖の記録をみた。

この町の毒ガスが撒布された地区では、草はみな黄褐色にかわり、銅器は藍緑色にかわり、銀の指輪は黒色にかわった。調査団は証人が提供したそれらの物件をみた。

一九五一年七月六日午前八時、二機のアメリカ機（噴射式）が東北から西南にむかって飛行し、元山以南の風浦里の上を飛んでいった。この日の気温は約二七度で、かすかな西北風が吹いており、空気はいくらか潮のしめり気があった。空はよく晴れていた。アメリカ機はこの村の東方約二百メートルの上空で毒ガスと名前のわからない化学品を撒布した。撒布されたものがひろがった地区はほぼ百―二百メートルにおよんだ（10）。

農民安永華とかれの妻楊春玉の二名はそのときちょうど畑で働いていたが、この毒にあたった。二人の皮膚はやけただれ、呼吸は困難になり、涙が流れて目をあけることができなくなった。

保健省科学委員会は、調査委員会を派けんした（11）（12）（13）。本調査団は証人と専門家（14）（15）をじん問し、病歴を研究し（16）（17）、そののちつぎのように確認した。二名の中毒患者の健康状態は、一九五一年

七月六日まではきわめて良好であった。飛行機がとびさってまもなく、かれらの全身のうち露出していた部分（顔面、手と足）がかゆくなり、皮膚に赤い斑点がでたのを知った。この斑点は隠元豆ぐらいの大きさで、あとになってはれあがり、膿がでた。このような損傷は、どのような疾病によっても発生することはありえないもので、それは第二級の火傷とひじょうににているが、腐はい作用はよりつよく、相当長い期間をかけてはじめてもとどおりになることができるのである。男の負傷者は七月一五日に入院して、八月一五日にやっと退院し、女の負傷者は八月二一日にやっと退院している。かれらは入院中、膿胞と水胞が破れ、油を塗ってから、次第によくなり、ふるい皮はとれたが、かすかな傷あとがのこっている。

毒ガスが撒布されたところでは、農作物の百分の十は白色のちいさな丸い斑点ができ、とりわけ豆類にはそれがひどい。この斑点の間隔は一糎で、中毒患者の露出部分にできた赤い斑点のそれと大差がない。

証人は、このとき爆弾の炸裂音はなかったし、それに機関銃の掃射音も聞こえなかったと証言している。

一九五一年八月一日、午後三時前後、黄海道の延成里と元鉄里の二ヵ村は、それぞれ敵機から一発の爆弾を投下された。この二発の爆弾はいずれも空中で炸裂し、その炸裂音は普通の爆弾よりもひじょうに弱く、黒煙が発生し、つづいて地上に黄緑色を呈した煙霧がたれこめた。四名の住民は中毒で死亡し、四〇名は中毒にかかった。その症状と結果は、一九五一年五月六日の南浦爆撃事件で中毒にかかった者とおなじであった。樹木の葉はみなおちてしまい、地上の穀物は破壊され、銅器はみな黒色にかわってしまった（18）（19）（20）（21）。

一九五二年一月九日午後四時前後、元山以北の鶴場里というちいさな山村は飛行機二機による爆撃をうけた。このときは快晴で、温度は最も低くて五度であった。爆弾が炸裂したのち、八三名の中毒患者がでた。この症状もまた南浦爆撃事件の中毒患者のそれとおなじである。このほか、かれらはのどがやけつくほどいたみ、口のなかが甘かった。この事実はみな証人によって肯定されたもので、証人の中には調査団がじん問した医者、それか

ら江原道保健部長の提供した材料および元山中央医院の多くの医師の報告した実証をふくむ(33)。

上に引用した各種の事実は、朝鮮におけるアメリカ軍隊が各種不同の化学兵器をもっていることを何ら疑問の余地なく証明しているとともに、かれらが数回にわたって平和な住民に対してこれらの兵器を使用し、ひじょうに多くの死傷をつくったことを証明するものである。

四　平和な住民に対する集團屠殺、謀殺およびその他の非人道的犯罪行爲

アメリカの軍事部隊の、婦人や幼兒をふくむ朝鮮の平和な住民に対する集団屠殺と個別的な屠殺、およびかれらがおこなった暴行の証拠は、その行った犯罪行爲の数からいっても、またはその使用した方法の頻度からいってもみなひじょうに多い。

調査団は、本章の報告のなかでは調査した二つの道の状況についてのみ述べることにする。その二つの道は、

1、黄海道。調査団団員は黄海道で三つの都市を訪問した。信川、沙里院、安岳。

2、平安南道。調査団団員はここで六つの地点を訪問した。平壤、順川、安州、价川、軍隅里、南浦。

第一部　集団屠殺

一、黄海道

調査団の調査した事件(これは調査団に対して提出された多くの事件のなかのごく少数なものにすぎない)は、つぎのような状況をしめしている。

イ、信川

人民委員会委員長邊允奎の証言によると、一九五〇年一〇月一七日から一二月七日に至る二ヵ月未満のアメリ

カ軍占領期間において、信川面で三万五千三百八十三名の平和な住民（男一万九千百四十九名、女一万六千二百三十四名）が屠殺された。そのなかにはこの面に避難してきていた多数の避難民をふくんでいる（1）。調査した証拠にもとづくと、つぎにあげる事実が疑う余地なく実証される。

一九五〇年一〇月一八日、信川市人民委員会の建物の裏で、九百名の男女（このうちには児童三百名がふくまれている）が屠殺された。そのうちの婦人のなかには妊娠していた者がいた。

この屠殺は、同市のアメリカ占領軍司令官ハリソンの命令によっておこなわれたものである。ハリソンは、かれの命令が執行されるときその現場におり、屠殺状況を写眞にとっていた。

屠殺の状況はつぎのとおりである。すべての者が大きな深い穴のなかにいれられた。ハリソンはかれらに衣服を脱ぐように命令したのち、ガソリンを被害者の身体にあびせかけてこれに火をつけた。この穴から逃げだそうとした者はみな、銃殺された。

一人の証人は「これらの人たちのさけび声は、まったくはらわたをちぎられるような思いをしました。燒け死なない人はいき埋めにされました。ハリソンはつぎの日もやってきて写眞をとっていった。」とのべた。

一九五〇年一〇月二〇日、約五百名の男女が屠殺された。このなかには約百名の兒童がふくまれている。ハリソンはまた、この現場にいた。

これらの人はみな防空壕のなかにおいこめられた。この防空壕には二つの入口があり、この入口は信川市警察本部の裏側の岩のところにあいている。アメリカ兵は、ハリソンの命令で爆薬を防空壕のなかに投げこみ、雷管を外まで引っぱっておき、そののち土嚢で二つの入口をふさぎ、ハリソンの命令で雷管に点火した。こうして壕内の人はみな爆死したのである。

一九五〇年一一月に、またもう一回の集団屠殺がおこった。このときは約五百名の者が屠殺され、このなかに

は婦人や幼児がいる。このときの屠殺の事実はつぎのとおりである。ハリソンは一隊の遠征隊を信川面の九月山に派遣した。その理由は遊撃隊員がこの山のなかにかくれているからだと、かれがいったからだ。この遠征隊はなんの収穫もえなかった。この責任をもっていたアメリカ士官はそこで附近の村に住んでいる全部の居民を逮捕するよう命令した。信川に帰るとき、アメリカ軍の指揮官は、関村里で逮捕した者を殺害するよう命令した。アメリカ兵はすぐさま機関銃でかれらを射殺した。

一九五〇年一二月七日、アメリカ軍が急きょこの地方を撤退しなければならなくなったとき、ハリソンはアメリカ軍の士官とかれが指揮していた李承晩軍の士官に訓話をした。話によるとかれはこの典型的な演説で、撤退するのは「一時的」なものであり、これは「戦略上の理由」からであるとのべ、さらにまだ逮捕されていない住民にはアメリカ軍とともに南方に移動するようつげなければならぬといった。「この地にとどまる者はすべて戦闘中の敵とみなし、原子爆弾を投ずるであろう」。かれは、「共産党」のあらゆる眷族はかならず絶滅しなければならない。朝鮮人民軍兵士の家族および国家のために工作している者の家族はみな「共産党」とみなし、絶滅すると命じた。かれの命令は執行された。

この日、また、約九百名の男女が信川市の元安里監獄の二つの倉庫のなかで屠殺された。そのうちの一つの倉庫の中には二百名以上の児童がいれられていた。アメリカ軍は、ガソリンをこれらの人々の衣服の上にあびせかけて火をつけた。手榴弾が窓から倉庫のなかに投げこまれた。一つの倉庫のなかには、二人の子供をかかえた婦人がいた。かの女は二人の子供を窓からそとへおしだした。その子供のうちの一人は射殺され、いま一人の子供はにげのびた。母親は焼き殺された。ハリソンとその他の士官はみな、この現場にいた（2）（3）（4）。調査団団員は、一九五〇年一〇月一八日におこなわれた集団屠殺現場であるその穴を視察し、この穴は調査団団員が現場にいた時、その一部が掘りかえされた。

調査団団員はまた、一〇月二〇日に屠殺がおこなわれた防空壕および二つの倉庫を視察した。倉庫のうちの一つは屠殺がおこなわれたのちうちこわされており、防空壕および倉庫の周囲の壁にももえたあとがあった。

信川面のその他のところでも集団屠殺事件が発生している。たとえば、

アメリカ軍が信川郡龍湍面三松里に進入したとき、かれらは約四百名を一つの大きな坑においこんだ。そのなかの一人の女の子供――かの女は証人である――はかの女の一家全部一五人と一緒にそのなかにいた。おいこめられた人々はみな生き埋めにされた。そののちこの証人といま一人の女の子供がやっとのことでこの坑の中からにげだして山の中に入った(5)。

一九五〇年一〇月一七日、富井里というところで、アメリカ軍は四百名の男女を強迫して一つの穴ぐらのなかにおしこんだ。一人のこれをみていた証人のいうところによれば、この穴ぐらは多人数がぎっしりおしこめられて身動きもできない有様だった。一九五〇年一〇月一八日午後七時前後、アメリカ軍はかれらの身体の上にガソリンをまき、生きたまま焼き殺した。やけこげた屍体はずうっとこの穴ぐらのなかに残され、解放されたのちはじめてかれらの家族によって発見された。

この証人はうまく通風口からとびだした。かれは傷をうけたけれども、やっとのことで逃げだして命がたすかったのである(4)。

信川面雪梅里では、アメリカ軍の占領していた期間に、二千名の男女が逮捕され、いろいろな方法で殺害された。殺害された者のなかには、一歳の幼児から七十歳以上の老人がいた。これを目撃した一人の証人は獄中のおそるべき状況についてのべた。投獄された人びとはつねに殴打され、幾人かの者は刀とこん棒で殺された。この証人は死刑に処された八十名のうちの一人である。かれは銃声をきき、傷をうけるとすぐに人事不省におちた。かれは気がつくと、うまくそこを逃げだした。かれは、多くの者が屠殺されて一つの坑の中に投げこまれるのを

いくどもみている（7）。

調査団は集団屠殺を目撃したすべての証人をじん問することができなかった。しかしながら、証明されたこれらの事実にもとづいて調査団はつぎのような結論をえた。すなわち、人民委員会委員長ののべたものと、朝鮮戦争犯罪行爲調査委員会の材料にもとづいて断定されるのは、信川面において三万五千名以上が殺害されたことが実際狀況に符合するということである。

ロ、沙里院

一人の証人（8）は調査団に対して、約九百五十人（そのなかに多くの婦人をふくむ）が、どのようにして一九五〇年一二月五日、アメリカのある部隊指揮官の命令のもとに美羅山（沙里院から八キロ離れた）上で銃殺されたかという狀況をのべた。

この屠殺は、アメリカ軍が沙里院を撤退する直前に機関銃をつかっておこなったものである。調査団団員は屠殺が実施されたその山路と被害者の墓を視察した。この墓は発掘されて、調査団の觀察に供された。

アメリカ軍が沙里院大元里に進入したのち、多くの住民が逮捕された。そのなかには、朝鮮人民軍に服務しているすべての者の家族が含まれている。

一人の証人（9）は、アメリカ軍がどのような凶暴さで逮捕した人びとに酷刑をくわえたかについてのべた。この証人は、年若い女の子供である。かの女は五〇名の婦人と三〇名の男子（このなかには一歳から二歳の幼児がふくまれている）と一しょに逮捕された。逮捕された者はたえず殴打された。最も普通につかわれている酷刑は、人間をテーブルの上にねかせておいて鼻の穴から冷水をいれるという方法がとられており、獄のなかでは毎日数人の者が殺害された。

ある人々は、かれらの頭髮で吊り上げられ、アメリカ軍はかれらをまとにして射撃した。ある者はひどく打た

れて死んだ。ある者は石塊で頭をうちわられて殺された。このようにして殺害された者は二九名で、そのなかの三名は婦人である。その他の逮捕された者は、強制的にこうして屠殺される者をみせられたのである。

アメリカ軍がこの市を撤退する直前、まだ生きている人々を獄の外にひきだして銃殺した。かの女の父親と兄は殺された。銃殺するために人びとがひきだされたとき、かの女はここをうまく逃げだした。

いま一人の証人（10）は七百名ばかりの他の人々と沙里院監獄に二〇日間一しょにいた。ここでは全員がなぐられ、冷水をのどに流しこまれた。監獄に入れられていた者のなかには、子供をかかえた婦人が多数いた。一人の姙婦はなぐられて流産した。アメリカ軍は毎夜監獄のなかから数人の婦人をえらんでそとにつれだした。数時間後かの女たちはいいながら帰ってくるが、衣服はずたずたにひきさかれており、かの女たちは半狂乱のように泣きさけんでいた。

一九五〇年一二月五日、アメリカ軍が撤退するとき、逮捕されていた者は幾人かの群にわけられてつれられていった。この証人は、最後の群に入っていたが、うまくにげだした。その後かれは、その他の者がみな殺されてしまったのを発見した。

八、安　岳

アメリカ軍が安岳を占領していた期間は、一九五〇年一〇月一八日から一二月五日までである。人民委員会委員長文鐘成が作成し提出した記録によると、アメリカ軍はこの期間に一万九千七十二名を屠殺している（11）。調査団は屠殺の一部分の状況について証人の立証を聴取した。

一九五〇年一〇月二五日、一人の証人は、かの女の長男が朝鮮人民軍にはいっているという理由でたい捕された。かの女の二番目の子は逃げだした。その日の夜、アメリカ軍は数千名を逮捕し、これを石塘附近の河辺につれていった。そのなかに、この証人とかの女の二人の子供がはいっていた。つれられていった人びとは、二人ず

つ一しょにしばられて、銃または銃剣で屠殺された。この証人と一人の年若い女子は一しょにしばりつけられていたが、この年若い女子は銃剣で刺された。この証人は「わたしは鉄砲でうたれました。わたしたちは二人とも人事不省になった。気がついたとき、背中になにかとても重たいものがのっているように思った。それは、屍骸がわたしの上にのっていたからでした。わたしの身体は、かれらの血で染まっていたのです。」とのべた。負傷していたけれども、かの女とこの年若い女子はうまくそこをにげだした。かの女の二人の子供はみな、銃殺されてしまった(12)。

一九五〇年一一月のはじめ、安岳郡安岳面新井里で、約千名が生きうめにされた。これは息子と幼児をみな生きうめにされた一人の証人がのべたことである(13)。

アメリカ軍は撤退するとき、住民にかれらと一しょに南方へゆくよう命令した。かれらは、「かれらが撤退したのち、原子爆弾がここに投下される」といって住民をおどかした。数千数万の人々とかれらの家族が南方へむかう途中、かれらは米機の掃射をうけ、爆撃をうけて死んだ。そのなかからにげだしてきた一人の証人は、殺された人数は、ほぼ千五百人だと調査団にうったえた(14)。

二、その他の地方

調査団が信川にいたとき、その他の地方の証人がきて証言する機会をあたえてくれるようにと要求した。調査団は、そのうちのごく少数の幾人かの者の要求にこたえることができただけである。じん問をうけた証人のなかには、海州東江岸と延坪島からきた証人がいる。

アメリカ軍が海州を占領したとき、約六千名の男女と児童が殺された。そのなかには、芸術学院の教員と多くの学生がふくまれている。一人の証人(15)と五百人(婦人をふくむ)は、一しょに獄内で生活した。投獄された人びとは、みな数人一しょにひきだされて銃殺された。この証人はうまく、そこをにげだした。かれのよく知

っていた一人は、ひきだされた一組のなかにはいっていた。この人は三カ所に銃傷をうけたが死ななかった。そうして、その後にげだしたが、その他の者はみな殺された。

東江岸では、一九五〇年一二月末に、一人の証人（16）はアメリカ軍が約三百名の朝鮮人（そのなかには多くの婦人と児童がふくまれていた）を屠殺したのをみている。これらの人びとは銃殺されたり、あるいは日本刀で首を斬られた。アメリカ軍はみな、このような軍刀をもっている。

一九五〇年一二月の終りの数日間に、延坪島で集団屠殺がおこった。一人の証人は、殺害された人数を約二千人とみており、その大部分が男女の幼児であり、これらの者は銃殺されたり、あるいは船にのせられて海中に投げこまれた。この証人は銃殺を目撃しており、海中に投げこんで殺害したことはアメリカ軍が語っているのを聴いたものである。

三、平安南道

平安南道において調査団員はつぎの各地を訪問した。平壌、順川、安州、价川、軍隅里、南浦。

イ、平壌市

アメリカ軍は撤退するにあたって、かれらはビラやその他の方法で平和な住民を原子爆弾で爆撃するといって数千数万の平和な住民に大洞江を渡ることを强制した。渡江するとき、アメリカ空軍は武装なきこれらの人びとを掃射し、爆撃した。一九五〇年一二月四日にはこのようにして殺害された者が約一千名であり、一九五〇年一二月五日には約三千人である。このなかには多くの婦人と児童がふくまれている（17）（18）（19）（20）。

ロ、順川

一人の証人は、百四十三名（婦人と子供をふくむ）が、一九五〇年一一月二七日にどのようにして殺害されたかについてのべた（21）。

いま一人の証人は、アメリカ軍が一〇月二〇日、一〇月二一日、一〇月二二日の三回にわたって屠殺した状況をのべた。

第一回目は、一名の婦人が銃殺され、第二回目は、二名の婦人が殺害され、第三回目は、五一名が殺害された。そのなかの五名は姙婦であり、また五―六歳の子供が数名はいっている。屠殺がおこなわれたところは、江東里の河のほとりである（22）。

ハ、安　州

一九五〇年一一月一一日、第二四師団に属するアメリカ軍が、二五名の朝鮮人を銃殺した。つたえられるところによると、銃殺された者は労働党の党員である。かれらは銃殺されるまえ、監禁され、なぐられ、酷刑をうけていた。そのなかのある者は、電気刑にあっている（23）。

一九五〇年一一月一九日、アメリカ軍は四名の朝鮮人を逮捕し、殺害した。それから三日後、アメリカ軍は二〇名前後を逮捕し、附近の谷間で銃殺した（24）。

一九五〇年一〇月二三日、安州郡東面龍東里で、アメリカ軍が九名の労働者を生きたまま井戸のなかに投げこみ、さらに石塊を投げこんで死にいたらしめた（25）。

ニ、价　川

一九五〇年一一月二九日、アメリカ軍の兵士が乙龍里というところで四百名以上の朝鮮人を屠殺した。この屠殺には約三〇数名の兵士が参加した。このとき屠殺された朝鮮人は、そのまえに八日間監禁されており、多くの者は痛打され、電気刑をうけている（26）。

ホ、軍隅里

一九五〇年一〇月二三日、三名のアメリカ軍兵士と一名の李承晩軍の兵士が多くの平和な住民を屠殺した。そのなかには、五歳未満の児童が六〇名、妊婦が八名、六〇歳以上の老人五名がふくまれている(27)。

一九五〇年一〇月二三日か二四日に、幼児を背負った母親と若干の児童をふくむ約八〇名の者が、アメリカ軍と李承晩軍に殺害された。成年者はみな銃殺され、子供は生きうめにされた。一人の証人は、かれの父親がこのときの屠殺のなかで殺されるのを目撃している(28)。

農民具成鎭は、他の八名の農民と一しょにアメリカ軍と李承晩軍のため、あまり遠くはなれていない山にひっぱられてゆき、カラの墓穴にいれられて銃殺された。かれは負傷し、気を失ってしまった。アメリカ兵はかれが死んだものと思いこんだのは明らかで、かれが意識をとりもどしたときには、アメリカ兵はすでにそこにはいなかったので、やっとのことで逃げだすことができたのである(29)。調査団団員と具成鎭は一しょにその墓を視察した。かれらは他の数人の残骸をみた。

一九五〇年十一月二十三日、廣山公(訳音)で五十名の平和な住民がアメリカ軍に銃殺された。殺害された者のなかには、証人と父親と弟がおり、かの女(証人)はその屠殺を現場で目撃している。かの女の母親、祖母、四人の姉妹(いちばん年下のものは三歳である)、そのほか二名の兄弟と隣家の五歳から十四歳までの六人の児童はみな屠殺された。一部の者は銃殺され、他の一部の者は生きうめにされた。証人は、これらの児童が殺害されるのをみた。その他の一部の人びとの屍体は、アメリカ軍がこの地区を撤退したのちになって発見された(30)。

へ、南　浦

一九五〇年十二月五日、アメリカ軍は撤退するとき、一つの工場から六四名の労働者を逮捕してゆき、附近の防空壕のなかにいれ、これに掃射をあびせ、手榴弾を投げつけてみな殺しにした(21)。

つぎにのべるのは、朝鮮の男子、婦人、児童に対する屠殺と凌辱の事件であり、これもまたさきにあげた事実を各道からえたものである。このなかで列挙する事件は、いずれもみなその直接の証拠は調査をおこなって実証をにぎったものであって、その他のものは、このなかでは全然ふれていない。

一、黄海道

イ、信川

アメリカ軍が信川郡草里面月山里に進入した直後のある日、禹末子一家に対してとくに恐怖すべき手段をもって屠殺をおこなった(32)。アメリカ人は、鉄線を証人の夫の両手、両耳、鼻にさしとおした。かれらは家の中から一枚の服務証をさがしだして、これをかれの額に釘でうちつけ、かれをなぶり殺しにした。禹末子の一家には、五歳から二五歳までの一一人の子供がいたが、これらはみな銃殺された。禹末子の息子の妻はかの女のしゅうとがなぐられるのをみて、かれをかばおうとした。アメリカ人は、ひっつかんだかの女のかみの毛でかの女を樹にひっかけ、かの女の乳房をきりさき、一本のこん棒をかの女の陰部につきさし、棒の上にガソリンをかけて火をつけた。つづいてかれらはかの女の身体にガソリンをかけて、かの女を生きたままやき殺した。この屠殺事件に参加したアメリカ兵士は、約二〇名である。

甕泉面の媚谷里で、二三歳の朴龍女が一九五〇年一二月五日に三人のアメリカ兵に強姦された。同日、ここでいま一人、三八歳になる婦人が四名のアメリカ兵に強姦された(33)(34)。

ロ、安岳

一九五〇年一〇月一八日、松山里で、アメリカ兵が全村民を、大人と子供をとわずすべて一つの学校のなかにおいこんだ。一人の婦人、金花実が敵の强姦しようとするのに抵抗した。そのためにかの女は庭で衣服をはぎとられてしまった。ここへおいこめられた人はすべてかの女がひきつづき凌辱され、ひどくたたかれるのをいやでもみせつけられた。敵は、一メートルもあるこん棒をかの女の陰部に挿しこんだ。かの女はすぐに死んでしまった。かの女の屍体は電柱につるされて、そのままずうっと、アメリカ軍がここを撤退するまでおかれたのち、はじめてかの女の屍体はとりおろされた。アメリカ人は、このありさまをすべて写眞にとった。

その他の一〇名の婦人は、三名のアメリカ兵につぎからつぎに輪姦された。かの女たちもまた、こん棒でなくられ、足でけとばされた。さらにアメリカ兵は、こん棒をかの女たちの両腿の間にさしこんだ。母親たちは、だいていた子供をみなとりあげられた。殴打、强姦、銃殺等の暴行はずうっと八日間つづけられた。一九五〇年一〇月二六日、生き残っていた者はみな、海浜につれだされて銃殺された。この人びどがつれてゆかれる途中で休けいした。このとき、警備がちょっとゆだんしているすきに一名の婦人が逃げだした。この生き証人が、ただ一人の生存者である(35)。

龍津面の三成里で、一二歳の証人金玄春はかれの父親(農民)がアメリカ兵になぐられたとき、父親をかばおうとした。するとアメリカ兵は今度はすぐさまこの子供にうってかかり、かれの眼球をえぐりだしてしまった(37)。

ハ、沙里院

一九五〇年一〇月二五日、沙里院の町で、うでにMP(軍事警察)のマークをつけたアメリカ兵が、恐怖すべき方法で金昌斗という男の子を殺害した。かれは刀でこの男の子のくびから腹まで一本の糸をひくようにたち斬り、つづいて生きたままこの子供の皮をはぎとった。かれは皮をはぎとるのにすこし具合が悪いので、石でこの

被害者の頭をうちわってしまい、ただちに死にいたらしめた。

一九五〇年一一月一一日、一人の少女が三名のアメリカ兵に強姦された。かの女はまた、無茶苦茶に殴打され、足げにされ、冷水をぶっかけられた。このほか、あるアメリカ兵は、五六歳の老婦人を強姦した(36)。

ニ、海州

海州市で、アメリカ兵が趙玉姫という朝鮮の少女を虐殺した。かの女は、当地の婦人組織の議長で、当時、証人とおなじ牢獄におしこめられていた。

調査団団員はこの証人をじん問した。証人ののべたところによると、アメリカ軍隊はゆっくりとかの女を折かんし、まずかの女の眼球をくりぬき、そのあとでかの女の鼻をそぎおとし、さらにまたかの女の乳房をきりとったのである(38)。

二、平安南道

イ、平壌市

平壌市におけるアメリカ軍の暴行と犯罪行為は枚挙にいとまのないほどである。個別的な兵士の犯罪行為の最も普遍的なものは、強姦、酷刑、および殺害である。つぎにあげるのは一部の実例である。

一九五〇年一〇月二四日、仁興里で、安得実の一家は一〇名のアメリカ兵に生きうめにされた。この一家は、父親、母親、二人の男の子、二人の女の子、それ以外に一一人の親せきをふくんでおり、そのなかの八人は子供であり、子供のうちの二人はまだみどり児であった。アメリカ軍が撤退したのちに、かれらの墓は掘りおこされ屍体はすべて発見された(39)。

一九五〇年一一月五日から一二月三日までに、仁興里において二五歳の平和な住民崔基玉は電気刑と殴打をうけ、衣服をはぎとられて、赤裸のまま街路をひきずりまわされた。かの女の罪名は、「共産党」ということであ

る(40)。

一九五〇年一一月二五日、松石里で十二歳の金英淑の母親は「共産党」という罪名で銃殺された(41)。

一九五〇年一一月二日から十二月三日にかけて仁興里で、教師趙学律は「共産党」の罪名で逮捕された。かれはあらゆる虐待をうけ、最後に銃殺された。かれの母親佳吉呂は逮捕され、監禁されて殴打された。かの女の罪名は、かの女が「共産党員をそだてた」ということである(42)。

ロ、价　川

一九五〇年一〇月二五日、アメリカ人が在宅中の現役兵とかれの母親を逮捕した(第六章参照)。かれらは、母と子の頸をめがけて射撃し、この二人をうち殺した。このとき、父親は附近の小山にかくれていたが、かれらにみつけられて逮捕された。あとで、かれの死骸が発見された(43)。

一九五〇年十月、アメリカ兵が、一軒の家におしいり、四人の子供の母親を逮捕した。かの女の二人の子供—一人は七歳になる女の子供と、いま一人の二歳になる男の子は、かの女のすそをつかんで放そうとしなかった。アメリカ兵は、この二人の子供をなぶり殺しにした。かれらは、母親のみている前で、女の子供をしめ殺し、男の子を銃床で打ち殺した(44)。

一九五〇年一一月一七日、地方の婦人組織の指導者李淳実は投獄され、そのまま一一月二九日まで、監禁された。獄中でかの女は、電気刑をうけ、二人のアメリカ兵に強姦され、衣服をはぎとられて街をひきまわされた。アメリカ人が撤退する当日、かの女はうまく逃げだすことができた(45)。

証人金用善は、一九五〇年一一月一一日から一一月二九日まで、投獄監禁された。かれは、殴打され、電気刑をうけた。一九五〇年一一月二九日、かれとその他の若干の者が同時にひきずり出され銃殺された。かれは重傷をうけ、気をうしなった。夜になって意識をとりもどし、すぐさまそこを逃げだした(26)。

八、安　州

一九五〇年一一月二〇日から三〇日にかけて、享狭里で二五歳になる教師金泰淳は監禁され、電気刑と殴打をうけた。その理由は、「共産党員だ」ということにあった。

一九五〇年一一月一九日、北松里で、蔡明孫は「共産党」という罪名で逮捕され、獄中で殴打され、そののち銃殺された。かれの父親は、ちかくの湖のほとりでかれの屍体を発見した(45)。

一九五〇年一一月一九日、北松里で三名の農民は、アメリカ軍が証明書をみせず、受領書を渡さず、補償金をださないで、食糧を没収することを拒絶したということで、投獄され、その後殺害された(46)。

一九五〇年一〇月二三日、東岙里で、三八歳の農民朴昌祿は、アメリカ軍が証明書を見せず、受領書を渡さず、補償金をだささずに豚と穀物を徴収するのを拒絶したという理由で逮捕され、投獄された。同日、かれはその他の人びとと一しょに手足をしばりあげられて生きたままさかさまにして竪坑のなかに投げこまれた。それから一カ月のち、アメリカ軍がこの地区を撤退すると、すぐさまかれの母親は屍体をさがして家にもってかえった(47)。

一九五〇年一一月、五里で二八歳のすでに結婚している婦人李善玉は、強姦をこばんだという理由で、殺害された(48)。

一九五〇年一一月二〇日、雹井里で、一二歳になる一人の子供、車憓根とかれの父母(農民)は、同時に逮捕され、銃殺された(父母は二人とも死亡したが、子供は負傷しただけで、その後にげだした)(49)。

一九五〇年一一月二五日、松石里で、一二歳の李允淑の母親は、「共産党」という罪名で銃殺された(50)。

一九五〇年一一月二一日から二九日にかけて、鳳林里で農民李和順は、アメリカ軍が証明も見せず、受取りも補償金も出さずに食糧を徴発するのをことわったという理由で、はげしくなぐられたのち殺された。一九五〇年

一一月二〇日から三〇日にかけて、ある農民一家が食糧の沒收をことわったという理由で、その一家はみな逮捕され、投獄された。このなかには三人の子供がはいっている。一人の子供と母親は殺された。その他の二人の子供—十六歳の李允淑をふくむ—は殺されたが死ななかった。この二人の子供は、手榴弾によって炸裂傷をうけたがそののち逃げだした(50)。

ニ、順　川

一九五〇年一一月、上里で、六十四歳の李という老婦人が强姦された(52)。

ホ、軍　隅　里

一九五〇年一〇月二三日、農民吳鳳允は逮捕され、監禁された。そして、李承晩軍はアメリカ兵の命令と監視のもとで、まっ赤に燒けた鉄でかれに酷刑をあたえた。

この証人は、おなじ監獄のなかで朱承碧という婦人がアメリカ軍と李承晩匪軍によって酷刑をうけたあげく、殺された、と証言した(27)。

報告のこの部分は、調査団がすこしも疑問の余地をのこさぬまでに実証されたとみとめ、直接の証拠によって証明された事実のみをのべたものである。調査団はまた、ひじょうに多くの文書による陳述をうけとった。これらの陳述は、初歩的な証拠によって証明された事実が実証された場合はじめて考慮をくわえた。われわれは、朝鮮各地における上述の狀況とよく似た多くの狀況について調査するよう要請されたけれども、時間的に制約されていたのでそのような活動をすることができなかった。

調査団団員は、一つ一つの狀況のなかで、被害をうけた者が平和な住民および平和な住民として処理される権利をもつ者であることをできるだけ確定するのにとくに関心をはらったし、かれらが裁判をうけておらず、さらにかれらが占領国に対しどのような違反行爲を犯したかについて通知すらうけていないということをできるだ

け、確定することにつとめた。
人民を拘留あるいは大量に屠殺した状況は、調査団が訪問した各大地方に共通したある特徴を表現している。したがって、調査団は、これを個別的な兵士あるいは一単位の犯罪行為とのみみなすことはできない。
大量屠殺は、大体において二つに分類することができる。その一つは一地方の居住民の屠殺であり、いま一つは避難民の屠殺である。
前者についてすでに実証されているところは、一地方に進入した場合、アメリカ軍が自分でやるかあるいは李承晩軍隊、日本の特務を利用して、およそ朝鮮人民軍に服務している男子、国営企業あるいは政府で工作している男子、あるいは労働党の積極分子、婦人連盟の運動を指導している人々の家族を逮捕することである。多くの状況下では、このことは実際上青年男子のいない家庭の者をすべて逮捕することを意味している。ほとんどの状況下で、逮捕された者は各種の年齢の男女と子供を包括している。若干の状況下では、一地方の平和な住民のすべてが逮捕されている。このほか、多くの村で農民とかれらの家族が逮捕されている。それは、アメリカ軍が徴用証をもってゆかず、受領書を渡さず、賠償金を支拂わないとき彼らが食糧と家畜の提供を拒絶したということによるものである。
占領期間中のすべての地区では、たえず集団的な屠殺事件がおこなわれているが、殺害された者の絶対多数は、占領後の最初の数日あるいはその地区を撤退する数日前に、殺害されていることがわかる。視察したどの都市においても、はっきり見出されることは、占領軍が撤退する一日前あるいはその当日、理由なしに人民を逮捕し、故意にかれらを殺害しているということである。
難民の屠殺については、二つの時期にわけることができる。——
（一）アメリカ軍が一九五〇年九月と一〇月に北進したとき、北方にむかって逃げる多数の難民は、とくに信

川と安岳地区において前進してきた軍隊に切断された。これらの難民は、はっきりと難民であることをみてとることができるものである（そのなかには、女、子供をふくんだ一家族があり、男は伝統的な朝鮮の白い衣服をまとい、婦人は色のついた長い裙子をはいていた）。なぜかというと、かれらはその頃はまだ朝鮮人民軍の軍隊と混じりあっていなかったからである。上にのべたところの系統的に屠殺されたのは、まさにこれらの人びとである。

（二）現在、つぎのことが実証されている。アメリカ軍が一九五〇年一一月から一二月にかけて撤退するにあたって、ビラと威かく手段をつかって各大都市の多くの平和な住民に原子爆弾の投下を信じこませようとし、かれらにアメリカ軍と一しょに南方へ移動することを強要した。これらの難民でアメリカ軍に故意に屠殺された数は、千をもって単位とするぼう大な数に達している。

個人にたいしてとった酷刑と残虐行為のやり口もまた、視察した各地区とも同一であることをしめしており、したがってこれは、各個人の虐待狂（サディスト）の行為であるという口実で逃げをうつことを不可能にしている。

本章の報告でのべたすべての状況は、おこなわれた犯罪行為の全部の証拠とすることはできない。これは調査団がもとめられて調査をおこなった類似的な状況の典型にすぎない。なぐる、ける、電気刑、水をぶっかける、身体の各部分をきりとる、手と足をきるといったやり方で人に酷刑をあたえ、銃剣でさす、息をとめる、爆殺する、生きている人間に火をつけて焼く、いき埋めにする、といった方法で殺害した事件は、とうていこれを具体的に表現することができない。

調査団は、これらの実証された事実から結論をえた。その結論についてはあとにのべる。

五　平和な住民に対する空中からの襲撃

1、都市と農村がうけた破壊

調査団団員がおとずれた朝鮮の三八度線以北の各地方の沿路で、したしく目にしたものは、通りすぎた都市や町、滞在した都市や町をとわず、すべてが完全に破壊されているか、また幾つかの完全な建物がさびしく残っているにすぎないことである。調査団はまた、多くの農村が厳重な破壊をうけているのをみた。調査団は、こうしたものの典型的な状況の例をえらんで、調査をくわえ、アメリカ機の空襲がこれらの破壊をつくり出した時の環境をハッキリさせた。

(1)　平壌市

ここは、北朝鮮の首都であり、牡丹峯下に位置している大都市である。戦前の人口は、四十六万四千人であったが、一九五一年一二月三一日にはわずか十八万一千人をのこすだけに減少している。本市の人民委員会副委員長李学秀は、調査団にむかってつぎのような状況についてのべた。

一九五〇年六月二七日から、平壌は空襲の目標となり、敵機は晝夜をわかたず来襲し、事前にはなんらの警告もなかった。こうした襲撃のなかで、平壌市は合計三万以上の爆弾が投下された（爆弾、焼夷弾、母子爆弾）。一九五一年十二月三一日までに、全市八万戸の家屋のなかで六万四千戸が破壊された。一九五一年中だけでも、

空襲によって死亡した者が四千七百六十八名、重傷をうけた者が二千四百三十八名で、医院と薬房三十二ヵ所、教会六十四ヵ所、学校と大学の校舎九十九ヵ所、博物館一ヵ所、劇場二十九ヵ所が全部破壊された。民政部門の管理下にある病院はみな、赤十字の標識をつけていた。一九五〇年八月一八日、朝鮮民主主義人民共和国軍事委員会は、公共衛生事業の使用している一切の建築物と車りょうができるかぎり早く、すべて赤十字の標識をつけ、空中のどこからでもこの標識がわかるようにすることを命令している。

朝鮮人民軍副参謀長兪成哲中将は、平壌市内には兵器工場は一ヵ所もなく、また、いかなる軍用の工場もない。市内には、防衛部隊は全然駐屯していなかった。そのうえ、市内にはまた、従来から高射砲は配備されておらず、高射砲の配備されていた地点はすべて市外であり、都市から相当の距離がある、とのべた(2)。

調査団団員はこの都市を通過したが、住宅の大部分が全部破壊されているのをみた。かれらはある教会の廃墟をたずねたが、のこっていた一つの尖塔からやっとのことで教会であることを認めることができた。かれらはまた、金日成大学の壁や瓦のくずれはてた実情を視察した。この宏大な建物は、山上にあり、都市の中心からひじょうに離れている。アメリカ人は平壌を退却するとき、この大学に火をつけて焼きはらった。そしてこれより以前にもまたそののちにおいても、かれらは数回にわたってここを爆撃目標とした。

証人は、平壌が爆撃されたあるときの状況について、つぎのようにのべた。

一九五〇年九月一六日、当時戦闘はまだ平壌からひじょうに遠くはなれた地点でおこなわれていた。この日、爆撃機百機が来襲し、焼夷弾をもって市街を攻撃した。それからまもなく、またグラマン戦闘機四〇機が来襲し、午前一〇時から午後の一時頃までずうっと攻撃をつづけた。この日の天気はよかった。敵はこの空襲で平壌に対してはじめて母子爆弾を使用した。この爆弾はまず空中で炸裂して無数のちいさな爆弾になり、それが地面にぶつかると、その一つ一つが再び炸裂する。

市内の大火で多くの者が焼死した。このなかには牡丹峯の解放記念塔附近で空襲をさけていた者がふくまれている。ここだけでも七〇名死んでおり、防空壕の入口附近で一七名死んでいる(3)(4)(5)。このときの爆撃で、館後里区の教会も爆撃でうちこわされた。この教会には一つの尖塔、十字架がのこっているので、それが教会であるということを見分けることができた(6)。

その他の空襲では、一度敵のB—29型六機が一九五〇年一二月三日の夜間に来襲しただけで、その他はすべてよく晴れた日のま昼間に来襲してきた。その来襲回数は、一九五〇年一二月八日B—29型七機、一九五〇年一二月二四日B—29型六機、一九五〇年一二月二七日B—29型一一機、一九五一年一月三日B—29型多数が焼夷弾を投下、一九五一年七月三〇日噴射式飛行機五〇機が非常な低空で来襲、一九五一年八月一五日多数の戦闘機と爆撃機。アメリカ軍は一九五〇年一〇月一九日から一二月三日にわたる期間平壌を占領していた。これらの爆撃の多くはかれらが平壌を撤退したのちにおこなわれたものである。多くの証人は教会と学校が爆撃されたときの状況についてくわしく本調査団に語った(7)(8)(9)。

(2)　順川市(平安南道)

この町は空襲をうけた当時およびその以前において、軍隊が駐屯していたことがなく、高射砲も配備されていなかった。ここには一つの化学工場があっただけである。それにもかかわらず、数回にわたり爆撃をうけてほとんど廃墟と化してしまった。

調査団は多くの証人の発言を聴取した。かれらは最も激烈な空襲によってつくりだされた若干の破壊状況についてくわしく話した。

一九五〇年一二月四日、つまりアメリカ軍がこの町から撤退したつぎの日、一つの学校が——それは運動場があるので容易に識別することができるにもかかわらず——爆撃をうけ、破壊された。

一九五〇年一二月一五日早朝、敵軍の噴射式飛行機が来襲し、大量の家屋を破壊し、多数の死傷者をだした。このときの空襲で死んだ者は五〇名で、そのうちの一一名は機関銃で射殺されたものである。

一九五一年一月一一日、B—29約三〇機がこの地を爆撃し、教会を破壊した。この教会を他の建築物と誤認することはまったくありえないことである（10）（11）（12）（13）。

（3）价川（平安南道）

この町はまったく一片の廃墟となっている。

調査団がじん問した一人の証人は、最もひどかった空襲は一九五〇年七月二〇日と一〇月一三日の二回だったとのべた。この二回の襲撃で、全住民七千五百名のうち約一千名が死亡し、六百名が重傷をうけた。敵機は急降下爆撃し、街路上にいた平和な住民を掃射した（14）。

いま一人の証人はひじょうにたやすく識別することのできる学校が爆破された八月一三日の状況について詳細に語った（15）。

調査団は、この町の残されている部分を視察したが、地上にはほとんで一軒の家もなかった。病院、学校、教会、公共建築物はすべて破壊されている。

国際民主婦人連盟調査団は、一九五一年五月にここを訪問しているが、その報告のなかで、かの女たちは当時この町で一軒の病院の残された屋根の一部分をみており、その屋根の上に大きな赤十字があったとのべている。しかし、本調査団の団員が一九五二年三月にこの地を訪問したときには、その標識もみることができなかった。なぜかというと、残されていたという屋根の一部もまた、この期間に爆破されてしまったからである。

戦前、全市には一千三百四十二戸の家屋があったが、いまではわずか一五戸がのこされているにすぎない。現在、全市の住民は四百六十名で、その大多数は郊外の山を掘って穴の中に住んでおり、一部の者は市内の瓦

れきの山を掘って穴をつくり、そのなかに住んでいる。

市内には軍隊も高射砲もなく、軍事目標もない。わずかに郊外に一本の鉄道線路が走っているにすぎない。

（4）安州市

本市のうけた損害はひじょうに大きい。

病院二ヵ所、教会一ヵ所およびいくつかの学校が空襲によって爆破された。

戦前には住宅は二千七百八戸であったが、いまではそのうち二千百七十二戸が爆破されている。

アメリカ軍が撤退した翌日にうけた爆撃で、六十三名が爆死している（16）。

これらの建築物はみな鉄道の附近にはなく、市内およびその附近には軍事部隊は駐屯していない、高射砲も軍事施設もなく、軍事目的に使用される工場もない。

（5）南浦市

南浦市人民委員会副委員長は調査団につぎのような状況について語った。

南浦市には戦前十万人の住民がいた。一九五〇年七月六日、最初の米機の爆撃をうけた（このとき来襲した米機のなかにはB―29型機が数機くわわっていた）。

このときの爆撃で穀物倉庫がおそわれ、大量の糧食がめちゃめちゃにされた。

一九五〇年七月八日と七月一二日に新たな襲撃がおこった。七月一二日の爆撃で学校一七ヵ所、病院二ヵ所、薬局二ヵ所、劇場一ヵ所が爆破された。爆撃はアメリカ軍が南浦を占領するときまでひきつづきおこなわれた。

アメリカ軍が同市を撤退したのちは、飛行機と戦艦によってふたたび攻撃された。

一九五一年五月六日B―29型機がとくに気狂いじみた、残虐な爆撃をくわえてきた（17）（18）（第三報参照）。

この市内には軍隊も軍事施設もなく、また、兵器工廠もない。この港は、漁船の使用に供されているにすぎな

い。

戦争がはじまってからのち、市外にあったガラス工場といもの工場は爆撃によって破壊された。鉄道線路はたえず爆撃をうけている。

調査団団員は南浦を訪問したとき、同市の破壊をうけた状況全部と大きな中学校の廃墟を視察した。この学校は、ちいさな山の上に孤立しており、その周囲には体育場がある。調査団団員はこの中学の周囲の空地にあるいくつかの教会と廃墟と化した病院をみた。この病院の屋上に赤十字の痕跡があるのをみた。また、多くの機関銃の弾痕をもみた。

（6）　沙里院市

この都市は、完全に破壊されている。

沙里院市人民委員会副委員長玉英子氏は、調査団につぎのように語った。同市はいつも爆撃をうけており、最も猛烈な爆撃をうけたのは、一九五〇年九月一四日と九月二一日、一九五〇年一〇月一二日、および一九五一年二月五日、四月三日と二三日、五月一五日、八月一日、一〇月一二日および一二月二五日であり、この空襲はB—29型機、双発機およびグラマン機によってよく晴れた日におこなわれた。この市に投下された爆弾の数は約三千発の見込みである。

市内には軍事目的のために使用される工場はなく、軍隊は駐屯していないし、軍事施設もない。鉄道線路は戦争がはじまっていらい使用しておらず、一九五一年の下半年にはじめて高射砲がそなえられたのである。

爆撃によって破壊された建物のなかには、学校一一カ所、公共図書館一カ所、クラブ四カ所、教会四カ所、薬局と病院一六カ所がある。これらの病院は、民政政府が管理していたもので、人民委員会の指示にもとづいて赤十字の標識がつけられていた。

爆撃と掃射によって生じた死傷者の数は、死者一千三百九十一名、負傷者三千名以上となっている(19)(20)(21)(22)(23)。

（7） 信川市

アメリカのB―29型機、双発機およびグラマン機によって数次にわたり爆撃された。なかでも、一九五〇年八月一三日と一九五一年一二月二三日のものがとくにはげしかった。

敵機は一般に白昼とよく晴れた日に来襲してきた。空襲の時間は三〇分乃至一時間で、一定していない。従来この市の附近では、どのような戦闘もおこなわれたことがなかった。

信川市には、軍事目的のために使用される工場は一つもない。軍事施設や高射砲はないし、軍隊も駐屯していない。

鉄道は戦争の初期に破壊されており、使用されていない。

病院は民政政府の管理しているもので、赤十字の標識をつけている(24)。

（8） 安岳市

市人民委員会委員長文鐘成氏は、戦争がはじまっていらい、同市はつねに爆撃をうけていると指摘した。そのうちのおもな爆撃は、B―29型機の噴射式飛行機による一九五〇年九月二〇日前後におこなわれたものと、一九五一年四月と五月におこなわれたものである。市内には軍隊は駐屯しておらず、軍事施設はなく、軍事目的のために使用される工場もない。高射砲はないし、また、鉄道線路もない。教会二ヵ所、学校八ヵ所および病院一ヵ所が爆撃によって破壊されている。病院は民政政府によって管理されており、赤十字の標識がつけてある。

掃射されて死んだ者は、九百四十一名である。

爆撃をうけたとき、前線はこの市から一二〇乃至二〇〇キロ離れていた(25)。

(9) 龍岡村

調査団団員は、爆撃によって破壊された一つの村落を調査して例とするのは必要なことであると認めたので、龍岡村を訪問した。

この村は平壌の西南にある。一九五一年一月一二日午前一一時、この村は六機の双発機によって三時間にわたり爆撃された。これらの飛行機から投下された焼夷弾の数は約百五十発で、また住民に機銃掃射をくわえた。百十五戸の住宅のうち、三十六戸は完全に焼失した。死者は八名で、このなかには二歳から十五歳までの児童が六名ふくまれている。二名のやけどもひじょうに重傷である(62)(72)。

さきにのべた実例は、アメリカ機が戦線の後方にある一般に軍事目標となるものをもっていない都市と村落の上空を飛行していることを証明している。これらの飛行機は無差別にそうした都市や村落を爆撃し、平和な住民をひじょうに多数殺傷している。赤十字の標識をつけた病院および容易に識別することのできる教会と学校もまた爆撃され破壊されているのである。

2 孤立している建築物の破壊

(1) 軍隅里における学校の破壊

一九五二年三月二一日午前九時三〇分、調査団がこの地点において調査をしているとき、四機のグラマン機が学校を爆撃した。この学校は、住民の住宅から約一キロ離れたところにある。この学校はその建築様式から容易に識別することができるものであって、工場と混同するようなことはありえない。

調査団団員がこの地点に到着したとき、この建物は完全なものであったが、その後、屋根は爆撃をうけて破壊

された。飛行機はつづいて急降下して機銃で掃射した。しかし、死傷者はでなかった。

軍隅里村は、鉄道線路から四十キロ離れており、軍事施設や軍用工場はなく、また、軍隊も駐屯していない。爆撃をうけたのち、調査団団員はすぐさま爆撃を目撃した人の証言を聴取し、団員たちは直接被害状況を検査した。

（2） 文化建築物の破壊

物質文化遺物調査保存委員会委員長韓興洙博士は、建築物と文物の破壊をうけた状況にかんする報告を調査団に提供した。韓博士はまた、二十九個の考古学的、芸術的、歴史的な価値をもった建築物（廟宇、宮殿、および楼閣）の名簿を調査団に提供した。これらの建築物は一般にアメリカ軍が撤退してまもなく爆撃をうけて破壊されたものである。アメリカ軍司令部が爆破されたこれらの建築物のもつ文化的価値について知らないということはありえない。韓博士は、これらの建築物の大部分は宗教的な伝統をもとにした慣用的な建築上の特徴をもって建造されたものであることを指摘した。韓興洙氏はまた、多くの写真を調査団に提供した。これらの写真は、破壊をうけた廟宇が多くの建物の間にたてられてあるものでも、それはとくに風格をもっているものであることを明らかに示している。これらの多くは、孤立的に建築されている（29）。

調査団は平壌に赴き、永明寺の破壊状況を調査した。この廟宇は、一一世紀に建築された最古の建築物の一つである。これは、大同江畔の牡丹峯山上の公園にあって、その附近には他の建築物は一つもない。

永明寺は、アメリカ軍が撤退してまもなく一九五一年一月三日に爆撃をうけた。それは、午前一〇時から午後二時の間にB―29機が来襲し、焼夷弾をつかって爆撃した。この日は快晴であった。このときの爆撃のなかで、この寺院から八百メートル離れた平壌市に焼夷弾を投下した。この日には、牡丹峯のその他のところは爆撃にあっていない（30）。

調査団団員はこの地点を訪問したのち、この廟宇が完全に破壊をうけたことを証明することができた。

調査団は朝鮮各地を長途旅行し、都市、村落、病院、教会、学校、工場、交通機関の破壊されたおそるべき状況をしたしく視察した。調査団はそれが、多くの場合、国際法では軍事目標として根本的にあてはまらない地方をほしいままに爆撃した結果、つくりだされた破壊状況であることを目撃した。防備都市と無防備都市の区別はあきらかになく、また一つの建物が戦争法によって保護されねばならぬかどうかの区別はないかのようである。

調査団はまた朝鮮人民がかれらの家や畑を破壊されたのもいとわずに、どのようにして生活しているかをもみた。都市の瓦れきのなかに掘った穴のなかで、掘ってつくった洞くつのなかで、朝鮮人民はひきつづき日常の活動をおこない、農耕に従事しており、地下工場のなかで工作をしている。子供たちは地下あるいは洞くつの学校にかよっており、ひまなときには地下にある映画館や劇場にでかけている。

アメリカ機がつくりだした破壊は、国際法のあらゆる概念に違反しているものであり、さらにすべての人びとが必ずこのように了解しなければならぬものである。

六　その他の戦争犯罪

イ　平和な住民の財産を故意に破壊する

かつてアメリカ軍が占領していたところであって、調査団団員が訪問した都市と村落では、アメリカ軍が平和な住民の財産を故意に破壊した事件について、ほとんどすべての人が調査するよう要求し、また地方の人民委員会がアメリカ軍の撤退後、任命した調査委員会の作成した報告書を提出している。

調査団は、若干の都市における典型的な事件について調査をし、証人をじん問した。

价川面　价川高級中学と初級中学の近代的な建物は、アメリカ軍がこの地を占領していた期間、軍事目的に使用するために占領されていた。一九五〇年一一月三〇日、アメリカ軍がこの地を撤退するとき、かれらはガソリンを建物にぶっかけたのち、これに放火して焼きはらった。

この面のその他の公共建築物もおなじ方法で破壊された（1）（2）。

平安南道粛川　一九五〇年一二月四日、アメリカ軍が撤退した日、撤退するアメリカ軍は、かつて軍事病院としてかれらが使用していた鉱山一里順堂人民学校（小学校）をガソリンをつかって焼きはらった（3）。

一九五〇年十二月三日と四日に、おなじ方法で焼きはらわれた建築物はつぎのとおりである。

粛川女子中学

粛川人民学校（小学校）
延山女子中学
延山男子中学
密川にあった二つの人民学校
粛川「天主教」教会（4）（5）

ロ　文物の略奪と破壊

平壌博物館　これは朝鮮民主主義人民共和国の最も重要な博物館であるが、一九五〇年一〇月二九日と一一月三日平壌を占領したアメリカ軍によって所蔵品をのこらず略奪された。その証拠は、博物館長が提供したものであり、かれは博物館の略奪された状況を目撃している（6）。

この博物館は、公園にかこまれた丘の上にある、博物館のなかに、セメントでつくられた穴ぐらが一つある。アメリカ軍が占領するまえ、博物館の貴重物品はみなこの穴ぐらの中におさめられ、必要な通風口以外はみな完全に密封し、その上に土をかぶせてあった。アメリカ軍は上級の命令をうけてこの穴ぐらを捜査し、発見した。彼れらはこれをほりかえし、かれらが最も貴重なものと認めた品物を軍用トラックをつかって運び去った。博物館のなかにあった一つの保険箱もうちこわされ、彫像はほしいままに破壊された（6）。

韓興洙教授は戦争のおこる前、朝鮮物質文化遺物調査保存委員会の委員長を長年にわたって担任してきたが、戦争開始以後はみずから、文物のハカイ損失状況の調査をひきうけた。空襲がこのような建築物をハカイしたことについて、彼がおこなった証言は本報告の五でのべた。

かれは、アメリカ軍はその占領していた期間、さきにのべた平壌博物館のほかにまた、金日成大学の歴史博物館、清津歴史博物館、咸興歴史博物館、平安北道妙香特種博物館、黄海道海州歴史博物館へ侵入したと語った。六千七百九件の芸術的歴史的価値をもった品物が略奪あるいは破壊され、資料と書籍は焼きはらわれた。無茶な破損と破壊をうけた歴史的価値をもつもののなかには、平安南道江西地方の高勾麗時代（約紀元四百年ごろ）の古墳と壁画がある。この古墳は破壊されたのち、倉庫として使用された。また、平安南道龍岡地方にあった美しい壁画でかざられた古墳は、朝鮮の平和な住民を監禁する監獄として使用され、黄海道安岳地方にあった高勾麗時代のたくさんな壁画をもつ古墳は手榴弾で破壊され、そのあとで爆破された（7）。

八　穀物の破壊と没収

さきにのべた（四）若干の状況の中で、最初に逮捕され、のちになって虐待あるいは屠殺された者は、かれらが正式な徴用証をみせられず、受領書や、賠償金を渡されなかった時に、穀物と役畜提供を拒絶したからである。このほか、各郡の人民委員会の調査委員会は、アメリカ軍がかれらの地区を撤退したあとで、かれらがつくった統計を調査團に提出した。この統計は、占領軍が平和な住民の需要を無視して、占領軍にとって不必要な食糧と役畜を大量に没収し、ほしいままに破壊したことをものがたっている（2）と（5）。

調査団が調査した典型的な実例としてはつぎのようなものがある。

順川郡長二里　一九五〇年一二月一五日、アメリカ軍がこの地区を撤退してまもなく、アメリカ機は白昼低空で来襲し焼夷弾を投下し、野原につんであった俵づめの食糧を焼きはらった（8）。

安州郡農林里　一九五〇年一〇月九日、一農家およびその他三〇名の村民が一しょに逮捕され監禁された。そ

れは、かれらが徴用証もみせられず、受領書や賠償金も受けとらない時、アメリカ軍への食糧と役畜の提供を拒絶したことが原因であった（9）。

价川　一九五〇年一〇月二日、アメリカ軍は軍用トラックをつかって食糧倉庫から五百袋の米と粟を運びだして橋をつくるのに使用した（10）。

价川郡三浦里　一九五〇年一一月五日、アメリカ軍は二名の農民の家にあった五百斗の米にガソリンをぶっかけて焼きはらった（10）。

安州郡北城里　アメリカ軍はなんらの徴用証も見せず受領書もわたさず、賠償金も払わずに食糧と役畜を要求した（11）。

二　捕虜を虐殺した犯罪行為

价川　制服をきて軍人証をもっていた一名の朝鮮人民軍の兵士は、かれの父親車裕石の家で、かれの母親と一しょに捕虜になった。それから二日して、アメリカ軍はかれとかれの母親を銃殺した。その屍体は、かれの父親によって発見された（12）。

碧潼　米機は、平安北道の第五号捕虜収容所を三回にわたって爆撃した。

一九五〇年一一月九日午後二時
一九五〇年一一月一四日午前九時三〇分
一九五〇年一一月一九日午後一時三〇分

調査団は、第一回爆撃ののち国連組織に対して抗議を行ったことを朝鮮当局から知ることができた。抗議文の

なかには捕虜収容所の位置がくわしくのべられている。しかし、調査団自身は、その関係文書をみていない。
この捕虜収容所はいまでは空中から識別することのできる大きな標識がつけられている。この三回にわたる爆撃をうけたときは、みなよく晴れた日であり、鴨緑江とちいさな河の合流点にあるちいさな半島の突端にたてられたこの捕虜収容所は、他のどのような目標とも誤認するようなことはありえない。捕虜たちは退避したので、死傷者はでなかったが建物は破壊された。
昌城　平安北道の第一号捕虜収容所は、アメリカ機によって二回爆撃された。一回は、一九五一年一〇月一三日夜の一〇時、殺傷弾と猛烈な炸裂弾による爆撃をうけた。イギリス軍の士官二名、イギリス軍の捕虜一名とアメリカ軍の捕虜五名が負傷し、負傷したアメリカ軍の捕虜のうち三名はその後負傷のために死亡した。捕虜収容所の工作員のうち二名は死亡し、負傷した者は一名である。捕虜収容所でアメリカの標記のある炸裂弾の破片と弾尾が発見された。一九五二年三月一六日、ふたたび爆撃をうけた。イギリス軍の捕虜が入っている三ヵ所の宿舎がこの爆撃で破壊され、イギリス軍の捕虜一名が負傷した。
この捕虜収容所は、北朝鮮の山の中にある。この収容所のちかくには、鉄道、兵営、軍用倉庫、軍事施設およびいかなる軍事目標もない。
この二回にわたる爆撃についての証拠は、この収容所にいる数名のイギリス軍捕虜が調査団に提供したものである(13)(14)。

七　結　論

調査団は、この報告でバクロした事実について十分慎重に考慮し、これらの事実にたいして文明国家が普遍的に承認している国際法の原則を適用した。

本調査団の任務は、最後的判決をくだすことではない。それはそのようなことをおこなう資格をもった法廷ではない。その任務は事実を調査し、またこれらの事実のバクロを国際法に違反する犯罪行為として指摘するに限られる。もし、この報告のなかでバクロされた犯罪行為について答弁するところがあるならば、それは適当な国際法廷においてその答弁を聴取したのち、はじめて最後的判決をくだすことができるのである。

この基礎のうえに、調査団はつぎのような結論を与えた。

1、朝鮮のアメリカ軍が故意に朝鮮人民軍ならびに北朝鮮の平和な住民にたいして、蒼蝿およびその他の人工的に細菌を感染させた昆虫を撒布し、死と疾病を撒布した意図は、一九〇七年の陸戦法規と慣例に関するヘーグ公約の規定に違反し、普遍的に承認されているところの一九二五年のジュネーブ議定書でかさねてのべられている細菌戦禁止の法律に違反する、きわめて重大なおそるべき犯罪行為である。

2、アメリカ軍が北朝鮮の平和な住民のなかに毒ガス弾およびその他の化学物質を使用したことは、一九〇七年のヘーグ章程第二三条甲項、戊項を計画的に故意に破壊し、また、一九二五年のジュネーブ議定書を破壊する犯罪行為を犯したものである。

3、アメリカ軍およびその指揮下にある李承晩軍の兵士が、かれらの占領した各地区において、なんの理由もなく、また裁判もおこなわずに、多くの婦人と児童をふくむ平和な住民あるいは個人を集団的に屠殺したことは、居住民の生命を保護する占領国の責任についてあきらかにした一九〇七年のヘーグ章程（第四六条）の規定を無視するものである。

4、アメリカ軍およびその指揮下にある李承晩軍の兵士が、かれらの占領した地区の平和な住民に対してほしいままに逮捕、監禁、虐待および酷刑をくわえたことは、これまた一九〇七年ヘーグ章程のなかであきらかにされた規定を破壊するものである。

5、アメリカ軍が前線から遠く離れた無防備都市と農村を爆撃したこと、および空中から手あたり次第に非軍事目標に破壊をくわえたことはまた、公認されている戦争法規と慣例を無視したことであり、とくにヘーグ章程を破壊する行爲である。

6、アメリカ軍は保護をうけるべき建築物、たとえば廟宇、教会、芸術機関、科学機関、歴史的な古蹟と病院を破壊した。ある種の状況下では無防備都市と農村を手当り次第に爆撃しており、また、その他の状況下ではこれらの保護をうけるべき建築物に対して故意の襲撃をくわえている。だがこれらの建築物は、その本来の目的のために完全に使用されていたものであり、また、必要なときにはそれにふさわしい標識をもそなえていたものである。アメリカの部隊は一九〇七年のヘーグ章程、とくにその第二七条をふたたび破壊したのである。

7、アメリカ軍は戦争の切迫した状況が必要としない場合にあったにもかかわらず、火と炸裂弾を用いて民用あるいは非軍事的な公共建築物に故意の破壊をくわえた。この行爲は、ヘーグ章程とくに第五五条と第五六条を破壊するものである。

8、アメリカ軍が占領軍の給養が必要でない状況下において、徴用証をしめさず、その賠償をはらわず、受領

書をわたさずに、平和な住民の食糧と個人の財産を没収し、あるいはこうした食糧と個人の財産を故意に破壊したことは、ヘーグ章程とくに第四六条および五二条を破壊する行為である。

9、アメリカ軍の捕虜屠殺行為は、一九二九年と一九四九年の捕虜の待遇に関するジュネーブ公約を破壊するものである。

10、歴史的な芸術品および個人財産にたいするアメリカ軍の略奪行為は、ヘーグ章程（第四七条）に違反した犯罪行為である。

調査団は、上述の各点が、ニュールンベルグ国際軍事法廷法規第六条の規定する戦争犯罪を構成するものと認める。

調査団はここにバクロした犯罪行為の程度と性質を考慮した結果、朝鮮におけるアメリカ軍はニュールンベルグ法規の規定した反人類的犯罪行為をつぎのようにおかしたものと考える。

1、いかなる罪名の裁判をもおこなわず、多数の平和な住民とくに難民を、大規模なボク滅あるいはみな殺しにし、多数の朝鮮人民に対して恐怖手段をとり、また、一九五二年一月二八日いらい、平和な住民に対して細菌兵器を大規模に使用したこと。

2、北朝鮮人民の生活様式を破壊あるいは破壊しようと企図し、かれらの学校、大学、博物館、歴史的な記念碑と文物を破壊し、かれらの政府機構を破壊し、政府工作人員を殺害したこと。

調査団は、こうした普遍的な殺りくは個々の人間の暴行ではなく、それはアメリカ軍隊がその占領下にある全地域にわたって行った普遍的なやり方をしめすものと思う。と同時に、アメリカ人が朝鮮の広はんな地区に対して細菌兵器と化学兵器を使用したことは、一国の全人民あるいは一部の人民の絶滅を企図したものである。こうしたことから、調査団は、一九四八年の「集団屠殺罪を防止し、懲罰する公約」にもとづいて、アメリカ軍隊が

集団屠殺罪を犯したものと認める。
こうした結論によって調査団は、こうした犯罪行為のため全世界の正義の裁判をうけるべき人を指名しなければならない。調査団は、これらの犯罪行為のなかの多くのものは、もしアメリカ政府の指導者とアメリカ軍の最高統帥部が事情に精通し、計画をたてなかったとしたなら発生し得なかったということを、なんらためらうことなく断言するものである。ゆえに、本調査団は、これらの者を告発すると同時に、こうした犯罪行為に対してかならず責任を負わねばならない者と戦場において指揮にあたったすべての将校およびこうした国際法に違反した命令をうけいれ、これを執行したすべての兵士を告発する。
われわれがこの結論をえたのちは、国際民主法律家協会がわれわれにあたえた任務を完成したことになる。
われわれは、われわれが朝鮮で調査をおこなったときの直接経験が、ここにバクロした野ばんきわまる暴行について、われわれをせんりつと恐怖で一杯にしたことを、かならずのべる必要があると考える。われわれは多くの人が、この報告のなかでわれわれの実証したおそるべき事実について、ちょうどわれわれのなかの多くの者がこんどの調査にあたるまえには、こうした事実について信じがたい感じをいだいたのとおなじように、信じないであろうことを知っている。それゆえ、われわれは法律家としての資格をもって、一人の普通の男子と婦人の資格をもって、ここにバクロした事実の眞実性をおごそかに保証するものである。われわれはそれぞれちがった国家から集った者であり、われわれの宗教信仰はことなり、政治的見解はことにし、言語すらことなっている。われわれは良心にもとづき、われわれの法律家としての責任を十分に意識し、全力をあげてわれわれの任務を完成したのである。
この報告はわれわれの活動の成果であり、われわれすべての者が一致して同意したものである。
この報告をよむどんな人でもみな、われわれとおなじようにこの犯罪と犯罪を犯した者に対しておさえること

のできない戦慄を味うであろうことをわれわれは確信するものである。
世界の正義の公道はかならずこれを維持しなければならず、いかなる国家、いかなる個人が、いかに大きな力をもつものであろうとも、かれらの罪悪に対する当然のむくいをのがれることができないということを、われわれはだんことしてかたく信ずるものである。
正義は必ず伸張させねばならないし、正義を守るために、世界はかならず平和を獲得しなければならない。
この報告が世界の平和をたたかいとる闘争に対して貢献することができるよう、とくに朝鮮に対して貢献することができるよう、われわれは希望する。朝鮮がうけているくるしみをわれわれは永遠に忘れることはできないし、それはかならず急速に平和を獲得しなければならない。
最後にわれわれはつぎのことを指摘しなければならない。朝鮮の事件は孤立した事件とみなすことはできず、また、これは一つの実際の戦争発展の一段階であって、この段階は全世界に危険を波及し、全世界を戦争の深淵になげこむ可能性をもっていることをわれわれは深く信じている。細菌兵器というこの非人道的な武器の使用については、このいわゆる文明国家のやり方がどれほど野ばんな程度に達しているかを表現しており、それはすべての男子、すべての婦人と児童をおびやかすものであるとわれわれは認めなければならない。平和な生活と自己の安全をひたすらにねがっているすべての人民は、みなこの教訓を忘れてはならない。平和は人民の財産である。かならずすべての人民が積極的に闘争することによって平和をまもらねばならない。
この報告は英文をもって作成され、一九五二年三月三一日北京において調査団全員によって署名された。

ブランドヴェイネル
カヴァリエリ
ガスター

ジョキエル
柯柏年（中国文）
メーレンス
デ・ブリット
ワシルーコフスカ

一九五二年九月二十日印刷
一九五二年十月一日發行

白人は有色人種を迫害する

定價　一六〇圓

譯者　勝部元　小野義雄

發行者　田畑弘

印刷所　京都市下京區西洞院通七條南入
内外印刷株式會社

製本所　京都市中京區御前通舊二條下ル
株式會社兼文堂製本部



三一書房

發行所　株式會社　三一書房
京都市左京區北白川西平井町二四
電話吉田⑦三一〇一番
振替京都六四〇三番
東京都千代田區神保町一ノ一四

會員番號A219008

II

細菌戦黒書——アメリカ軍の細菌戦争——国際科学委員会報告

細菌戰黑書

アメリカ軍の細菌戰爭

国際科学委員会

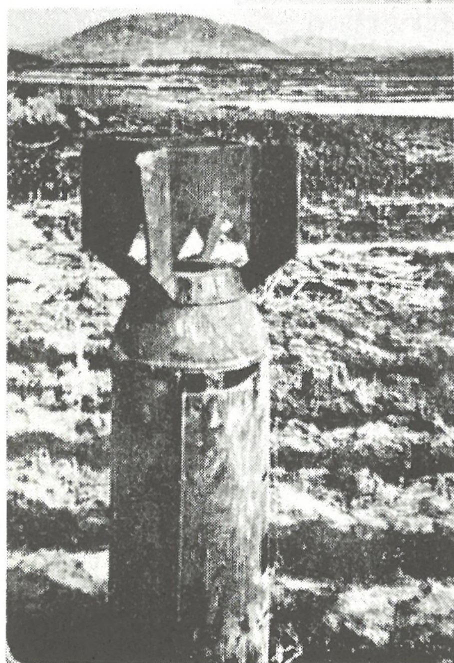
報　告



蒼　樹　社



（右）アメリカにおける細菌工場――ライフ誌より

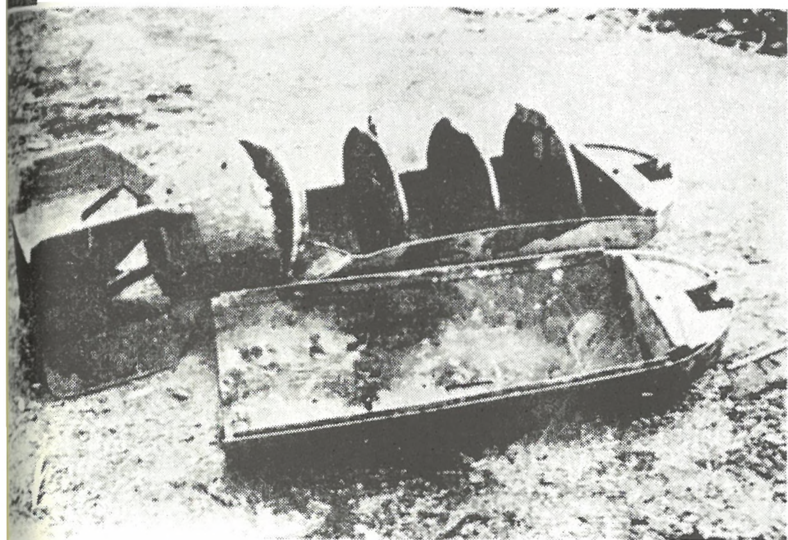


（左）北鮮平原郡青山面の普武里と金成里、漢川方面カリセ里一帯にばらまかれた細菌爆弾



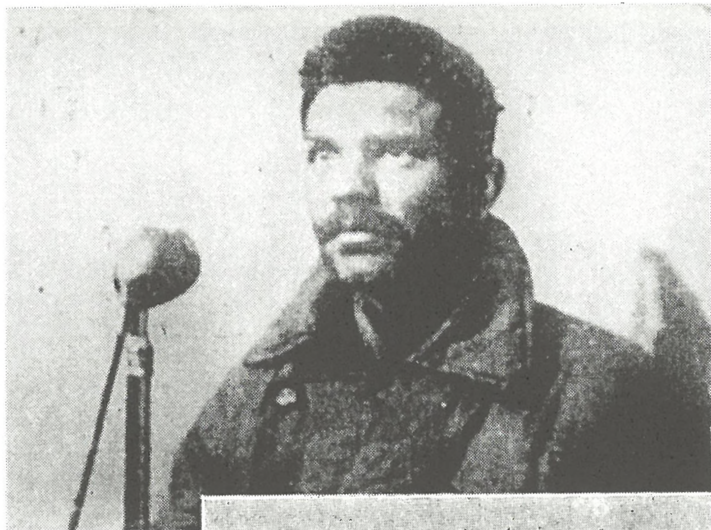
（上）　細菌爆弾の落ちた跡

（下）　二つに割れた細菌爆弾





（上）　防疫班に情況をきく調査団
（下）　細菌の附着した細菌爆弾の破片

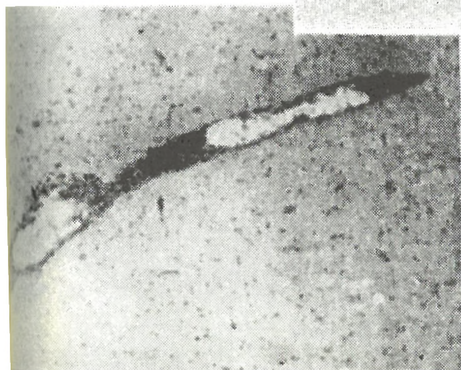


（右）細菌爆弾投下者、米第五空軍部隊所屬、ジョン・クイーン中尉

and press, who picture the chinese as barbarian
criminals, and who lead American troops to believe th
if captured, they will be shot, or worse. I am begi
ning to see very clearly just who is the peace-lover
and who is the warmonger responsible for this inhum
war, and I am determined to struggle for peace again
Wall Street capitalism, to clear my conscience of my pa
errors. I am filled with determination to join the
peace-loving camp, and with the determination to
become a new man.

Kenneth L. Enoch
8 April, 1952

（右）おなじくケニス・エノック中尉の供述書



（左）顯微鏡で拡大された細菌

もくじ

付録

細菌戰黑書

国際科学委員会報告

片山さとし訳

まえがき

一九五二年のはじめ頃から、朝鮮と中国の領土で、すこぶる異常な性質の現象がおこつているので、これらの国の人民と政府は、じぶんたちが細菌戦争の攻撃目標になつているのだ、と主張するようになつた。

世界各国の人民は、こういう戦争のやり方を否認する意志、いや、それどころか憎悪する意志を、ずつと前から明らかにしてきていただけに、そういう事態がどんなに重大なものであるかがよくわかつた。そういうわけで、国際科学委員会をつくつて、現地の証拠をしらべるべきであるということになつた。

委員会のメンバーは、じぶんたちの責任がどんなに重いかということを自覚していたので、先入観から免れるためにあらゆる努力をはらい、じぶんたちの知つているかぎり一番厳密な科学的原則にし

たがつて、その調査をおこなつた。いまここに、その活動のくわしい内容と、委員会のたどりついた結論とを、報告書として読者のまえに提出する。この報告書をつくる仕事には、八つの国語をつかう人たちが参加した。だから、もしそれが優雅さにかけていたとしても、あらゆる大陸の人びとにとつて、明快で、あいまいなところがなく、わかりやすくせねばならなかつたことを、読者の方は思いだしてくださることと思う。

委員会の組織と活動

朝鮮民主人民共和国の外相朴憲永氏は一九五二年二月二十二日、また中華人民共和国外相周恩来氏は三月八日、アメリカ側が細菌戦をやつていることに公然と抗議した。二月廿五日には、中国人民世界平和擁護委員会の主席郭沫若博士が、そのことについて世界平和評議会にアッピールをよせた。

三月二十九日、郭沫若博士は、オスローでひらかれた世界平和評議会の執行局会議の席上で、同伴してきた中国代表たちの援助をうけ、また朝鮮代表李箕永氏の立会いのもとで、執行局のメンバーや

その他の国民代表に、問題となつている現象について、たくさんの情報をつたえた。郭博士の言明によると、国際赤十字社委員会は、政治的影響力をうけることを十分に免れていないので、偏見のない現地調査をする能力がないと、中国と（北）朝鮮の政府は考えているとのことであつた。こういう反対論はのちになつて、国連の専門的機関である世界保健機構にもむけられた。しかし、朝中両国政府は、公平で独立的な科学者の国際的団体を中国にまねき、両国政府の主張の基礎になつている事実を調査させることを、心から希望していた。それに参加する科学者たちは、平和をまもるために活動している組織に関係があろうとなかろうとかまわないが、しかしその人たちは当然人道主義的事業に貢献しているために有名な人物でなければならないというのであつた。そして、この団体の使命は、両国政府の主張が正しいか、正しくないかを判定することであつた。徹底的な討論をつくしたのち、執行局は、そういう国際科学委員会の形成を要求する決議を満場一致で採択した。

そこで、オスロー会議がすむとすぐ、この問題に関係のある分野でできるだけ有名な、ヨーロッパと南アメリカとインドのひじようにたくさんの科学者たちから、この団体に参加する承諾をえるように努力をはらつた。仮承諾の通知がまとまるとすぐ、中国科学院近代物理学研究所所長であり中国平

和委員会の一メンバーであり、オスロー会議後科学委員会を組織するためヨーロッパにのこつていた錢三強博士は、中国科学院と中国平和委員会の主席郭沫若の名前で招請状をはつした。この委員会にとつて最低限度どうしても必要なメンバーの数が、六月中旬までにそろつたので、一行はただちに中国にむかつて出発した。

国際科学委員会は、六月二十一日と二十八日に北京につき、中国科学院と中国平和委員会の代表からあたたかい歓迎をうけた。そのメンバーはつぎのようであつた。

アンドレア・アンドレーン博士(スウェーデン)、ストツクホルム市立病院管理局中央臨床研究室主任。

ジャン・マルテル氏(フランス)、農学士 Ingenieur-Agricole. グリニョン国立農業大学動物生理学研究室主任、前アンラ畜産技師、イタリアとスペインの牧畜学会通信員。

ジョセフ・ニーダム博士（イギリス）、王立協会員、ケンブリッジ大学生化学サー・ウイリアム・ダン講師、元重慶駐在イギリス大使館参事官（科学）、前ユネスコ自然科学部長。

オリヴイエロ・オリヴオ博士（イタリア）、ボローニャ大学部人体解剖学教授、前トリノ大学一般生物学講師。

サムエル・B・ペツソア博士（ブラジル）、サン・ポーロ大学寄生物学教授、前サン・ポーロ州公衆保健局長、レシフエ、パライバ両大学医学部名譽教授。

N・N・ジユーコフ＝ヴエレジニコフ博士（ソ連）、ソ連医学学士院の細菌学教授兼副院長、細菌戦参加のため起訴された元日本軍軍人のハバロフスク裁判の主任医学鑑定人。

はじめ参加を予想されたある有名な科学者たちが来れなかつたのは、ひじように残念であつたが、委員会は到着をまつ最後の日を七月十五日ときめた。しかし、のちに、

フランコ・グロチオシ博士（イタリア）、ローマ大学微生物学研究所助教授。

は、委員会が瀋陽（奉天）からかえる直前の八月六日北京に着いて、あたたかい歓迎をうけた。同氏はそのため、委員会の仕事にさいごの三週間しか参加できなかつたので、列席顧問の地位につき、その資格で仕事の進行に大きな援助をあたえた（付録四四）。さいごに、北京で参加したのは、

錢三強博士（中国）中国科学院近代物理学研究所所長。

で、同氏は郭博士の代表として、ヨーロッパから北京まで委員会に同伴してきた。同氏は委員会の満場一致の招請をうけて、中国当局から連絡員として委員会につけられた。連絡員の地位は、委員会の審議のなかで、発言権はもつていたが、決議権をもたなかつた。この科学者の団体には、つぎの人たちもふくまれていた。

N・A・コワルスキー氏、ジューコフ＝ヴエレジニコフ氏の通訳秘書、また

S・B・ペッソァ夫人、ペッソァ博士の通訳秘書として。

国際委員会は、中国側の設けた接待委員会の援助をうけた。それは、つぎの人たちから成つていた。

主席

李徳全夫人、中国赤十字社総裁、世界平和評議会評議員

副主席

廖承忘氏、世界平和評議会評議員

賀誠医師、中華医学会名誉理事長

秘書長

宮乃泉医師、上海医学院院長

副秘書長

計蘇華医師、中華医学会秘書

專門家連絡員

鐘恵瀾博士、北京人民医院院長、中国協和医学院内科臨床教授

呉在東博士、南京大学医学院病理学教授

方　綱教授、中央衛生院微生物学副研究員、北京

朱弘復博士、中国科学院昆虫研究室副主任

厳仁英博士（北京大学医学院産科婦人科助教授）

楊士達博士（上海震旦大学医学院公共衛生学教授兼院長）

接待委員会のメンバーの大部分は、危険と骨折をいとわず、科学委員会の旅行に同伴して、必要のおこるごとにあらゆる連絡の仕事をする準備をたえずととのえていた。ときには、そのあるものは、ほかのたくさんの中国科学者や医師といつしよに、オブザーバーとしてかまたは証拠を提出するために、科学委員会の会議に出席した。委員会は、これらすべての同僚たちに感謝したいとおもう。かれらの科学上の業績と誠実さに、委員会はふかい尊敬の念をいだいた。

委員会の会議のやり方についていえば、議長の役目は、メンバーのあいだでほとんど順番の廻り持ちでやつた。マルテル氏は科学書記にえらばれた。委員会の第一回会合は、六月二十三日北京でひらかれたが、ひらかれたすべての会合を月日順にかんたんに概括したものは、付録（一）のなかにいれてある。

委員会の一般的なやり方についていえば、委員会は、中国中央衛生部、瀋陽（奉天）東北区衛生部

それに平壌の朝鮮保健省の部長や大臣やその秘書課ときんみつな連絡をとつて活動したといえる。委員会は、もちろん、これらの科学者ぜんぶから援助をうけたが、それは、これらの人たちの仕事の分野が、委員会のあつかう問題と関係があつたからである。さきに名前をあげた人たちのほか、それぞれ中国東北人民政府衛生部長と副部長である王斌博士と白希清博士に、委員会はお礼をのべたいとおもう。両博士は、じぶんの力で提供できるかぎり、あらゆる情報を委員会に提出するため少しの骨おしみもしなかつた。（北）朝鮮保健大臣と次官である李炳南博士と魯振漢博士にもおなじくお礼を申しのべる。しかもこのお礼のなかには、これらの有名な医官たちが、はげしい空襲下のたえまない危険と不便をおかしながら、ひじように冷静な態度でじぶんたちの仕事をしていたことにたいする尊敬の念をこめるほかない。

この点では、また、委員会のメンバーは、その朝鮮訪問中にさいわい会うことのできた朝鮮の細菌学者やその他の専門家たちが、みんなその祖国に献身的な奉仕をつくしていたのにたいして、ふかい尊敬の念をはらいたいと思う。委員会は、その職務をはたしている最中に命をすてた朝鮮の一番すぐれた三人の細菌学者に敬意を表する。委員会はまた、陳文貴博士、魏曦博士、何琦博士のように、朝

鮮の防疫検験隊に勤務していた著名な中国専門家の私心のない奉仕にたいする尊敬を記録にとどめておきたいとおもう。これらの人たちは、中国のはるか遠い地方にあるじぶんたちの研究室のものしずかな快さに別れをつげるべきときがきたと考え、細菌防禦の前線にでて、朝鮮の同僚たちとあらゆる困難と危険をともにしていたのである。

委員会の会合は、ときによつてその性格がかわつた。あるときは、メンバーたちが秘密会議で何時間も科学上の問題を討論したし、またある場合には、中国の科学専門家が出席したりすることもあつたし、さらに別のときには、あらゆる職業のたくさんの目撃者の証言をきくため広い部屋が必要なこともあつた。証人のなかには、捕虜になつた諜報員一人（付録三六）と四人の飛行士（付録三七―四〇）があつた。ときには、二人か三人の小委員会を任命して、中国の同僚たちと連絡をとりながら、特殊な問題を調査させ、それについて委員会に報告させることもあつた。またときには、一日中を北京、瀋陽、平壌の実験室ですごしたこともあつた。それらの実験室では、中国と朝鮮の科学者たちが、かれらの研究の結果をひじようにくわしく説明してくれた。また、必要のあるときには委員会のメンバーは、北京や瀋陽にあるたいへんりつぱな図書館を利用することもあつた。

中国や朝鮮の専門家がととのえたいろいろの実例についての資料は、この報告書の付録の大部分をしめている。それらの資料については、以下の諸節でかんたんに説明する。しかし、これらの資料は、偶然ひよつこり見つかつたというようなものではなく、もつともつと大量な材料のなかの見本にすぎないことを理解していただきたい。ここに提出した資料は、朝鮮の資料よりもむしろ中国の資料が多くなつた。その理由は、朝鮮の人たちは、はるかに困難な事情のもとで仕事をしていたし、そのため委員会としても、わりとみじかい間——それも丁度とくに困難な時期に——だけしか朝鮮に滞在することができなかつたからである。

それと同時に、委員会は、今年の前半にプラーグから発表された文書の基礎になつたオリジナルな科学的材料をよく知つておく必要があると考えた。できれば、それらの文書が正しいかどうかを判定する必要があつた。じじつ、これらの文書を浄化する必要のあつたことは、のちに明らかになつた。つまり、それらの文書の中には、のちに撤回された誤解や、暫定的鑑定、たんなる翻訳のまちがいなどがあつた。これらの点については、ひじようにたくさんの仕事をしたし、その結果については付録のなかにしめしてあるが、委員会の一般的な結論は、プラーグを通じて流布されたこれまでの調査団

の報告書の中のおもな主張が正しかつたことを、事実上みとめた。

委員会のやつたおもな旅行は、つぎの通りであつた。六月二十三日から七月九日までのあいだ北京で事態の大筋をときほごした後、委員会は瀋陽にゆき、十二日から十五日までそこで仕事をした。ついで、接待委員会を同伴して、鴨緑江をわたつて北朝鮮にはいり、七月二十八日から三十一日までのあいだ、空襲に邪魔されながら平壌で会合をひらいた。それから、北に引きあげたが、八月六日再び国境をわたつて中国東北区にはいるまえ、捕虜飛行士に会うため二日をついやした。この大旅行の技術的な組織は、申し分なく上出来であつたことを記しておかねばならない。

そのまえ、七月十五日と十六日とには、ほんの短い時間の旅行をしたことがある。それは、特別仕立の飛行機と汽車とジープをつかい、チチハルとラハをへて、甘南地方の諸所をおとずれたのである。これらの土地には、ペストに感染した齧歯類がばらまかれていた（付録一三をみよ）。これらの場所の位置は、内蒙古との境にそう黒龍江省のなかにある。その他の公式の旅行は、大切なものではなかつた。

この委員会のやつたような企畫に必ずつきものの語学上の困難について、いくらかのべておくことは大切である。委員会じしんのなかには、七ツの言葉をつかう人たちが参加していたが、そのメンバーの大部分はフランス語をはなし、また聞きとれることがわかつた。それで、フランス語を仕事をするときの言葉としてつかつた。ロシア語、英語、イタリア語が話されると、ただちにフランス語に訳された。中国側では、中国科学者のひじように多くが、りつぱな英語やフランス語をはなせることが、大へん仕事に役だつた。しかし、会合のときには議事録をとる関係で、中国語ではなし、それをすぐ、そしてしばしばそれぞれ別個にフランス語とロシア語と英語に訳した。フランス語の通訳には楊士達博士、丁驥氏があたり、ロシア語の通訳には楝述博士、英語の通訳には厳仁英博士があたつた。仕事が後半の段階にはいると呉恒興博士が貴重な文筆上のまた語学上の援助をあたえてくれた。委員会にはまた、そのメンバーの一人が中国語をはなしまた聞きとることができて、そのことが証人との対談のときとくに役だち、その上中国語の読み書きもできたので、そのことが文献の参照や文書の検討を容易にするという便宜があつた。もう一人のメンバーは、直接英語とロシア語とを連絡することができた。中国科学者のなかにも朝鮮語のわかる人はすくなかつたので、朝鮮では事情がもつとふくざつであつた。しかし、委員会はさいわい、すばらしい語学者である王仁変博士に手つだつてもらうこと

ができた。同博士は朝鮮語を自由にまた完全にフランス語、英語、または中国語に訳することができた。そのほかにも、朝中語通訳をつかつた。中国語を通じて、朝鮮語をヨーロッパ語の一つに訳し、またそれと同時に朝鮮語を直接ロシア語に訳することによつて、平行的な照合をすることもできた。たえず筆記の校合をやつたので、大切な点についてはほとんどまちがいがなかつたことと思う。さいごに、会合のうちのいくつかの議事は、のちの参考のために録音器で記録をとつた。すべてがそういうわけであつたから、委員会としては、委員会が中国人と朝鮮人の専門家と証人の心底を見ぬくことができなかつたのだという批判にたいして、自分自身を守ることができると考えている。

下に署名した委員会のメンバーの名前には、署名者の能力と専門分野をしめすのに適当な肩書をつけ加えた。委員会のメンバーたちがそれぞれちがつた経験をした場合には、それを骨の折れる長い討論にかけた。科学的方法についての知識と理解だけで十分ことが足るすべての場合には、めいめいのメンバーがそれぞれ平等に力をつくした。しかし、じぶんたちの専門分野からかけはなれた問題をとりあつかうときには、その問題についてほかの人たちよりも多くの能力をもつメンバーが批判的な説明をして、ほかのメンバーの確信をつくりあげていつた。こうして、この報告書は、ほんとに集団的

な著作になつた。

委員会のメンバーが自分自身で見聞きし、したがつて証人としての責任をとる事柄いがいのものについては、委員会としては、やむなく朝鮮と中国の文書にたよるほかなかつた。中国と朝鮮の医師その他の科学者の能力と誠実さを疑うべき理由はすこしもなかつたけれど、委員会としては、けつして警戒をおこたりはしなかつた。委員会は、うまずたゆまず実例の分析をやり、できるときにはいつでもオリジナルな事実に直接接觸するため最大の骨折をおしまなかつた。委員会のメンバーは、政治的、道徳的、感情的影響をうけないようにたえず用心をし、その活動は、ものしずかで科学的な客観性という雰囲気のなかですすめられた。委員会がさいごに達した確信は、当然ある程度まで、委員会の対談し質問した数百人の証人が信頼できるものであることを基礎にしている。かれらの証言はあまりに簡単明瞭であり、あまりに一致していて、あまりに自主的であつたから、それに疑をさしはさむことはできなかつた。

この報告書の主文にある説明のなかに、この報告書の主張の基礎にした朝鮮または中国当局のすべ

ての文章を組みこむことは、あきらかに不可能であつた。委員会のメンバーのおこなつた個人的テスト、試験、質問などについては、そのあらましを本文のなかでのべておいた。それらすべての場合の十分に詳しいことは、付録参照と指示してある関連文書と注釈のなかに見出すことができる。

いちばん最後の付録は、ここに発表する文書のなかにその名前の出てくるすべての中国人と朝鮮人の科学者のくわしい履歴をつたえている。

文書の考證*

委員会のメンバーがはじめてあつまつた時に、かれらに利用できた文書は、朝鮮と中国の政府が発表し、プラーグの世界平和評議会書記局から、また各国にある中国当局の種々の通信機関の手で、西欧に流布された文書だけであつた。

朝鮮保健省の第一回報告（SIA/一）**は、一九五二年一月と二月の事件を扱つていただけであつ

た。そのなかにある材料は、国際民主法律家協会調査団の（朝鮮）報告書のなかでもう一度吟味された。この報告書には、朝鮮のペスト出現についての材料、それに当然のことながら、国際調査団のメンバーのおこなつた目撃証人の調査の結果がつけくわえてある。

＊　本文のなかで参照を求めてあるのは、本書の付録であり、これはそのうち発表する。

＊＊文書については、つぎの記号をつかう。プラーグ文書はSIA／、新華通信社はNCNA／、国際科学委員会に提出された文書のうち中国のものはISCC／、朝鮮のものはISCK／。

いちばんくわしい報告書は、中国の「アメリカ帝国主義細菌戦犯罪調査団」の二つの報告であつた。この調査団は、三月中朝鮮と中国東北（満洲）の両方で調査をおこなつた。その主なものは朝鮮で仕事をした小委員会の報告で、これは四月に北京で印刷され、NCNA／八五（補足）に全文が発表され、その一部はSIA／三に発表されている。この報告はいちばん完全な昆虫学上の情報をふくんでいるものである。この報告が取り扱つているのとおなじ材料は、国際民主法律家によつても記述され、ふたたび北京で印刷され、その全文がSIA／八として出されているが、厳密にいつて科学上

の重大意味をもつような新しいことがらは、すこしもつけくわえられていない。

世界平和評議会書記局から意見をもとめられたあるヨーロッパの科学者たちの特別報告は、写真によつて昆虫学上の鑑定をやつており、SIA／二として公表されている。それは朝鮮と中国の両方の材料にふれている。これとおなじ材料を基礎にしている四人の中国人科学者のもう一つの報告は、SIA／一二として公表されている。

これまで出た報告をしらべたい人たちは、上にあげた順序で研究したらいいと思う。法律家調査団のメンバーがヨーロッパにかえる時（四月中頃）までには、複写したりタイプに打つたりした新しい材料が、かれらに持ちかえらせるために、ひじようにたくさん用意された。そのうちとくに重要な十件の一組は、その当時はまだ部分的にしか分析されていなかつたが、〇〇〇一から〇〇〇一〇までの数字記号をつけているので、「四ゼロ文書」とよばれている。

その他の材料は、科学的価値がたりないわけではないが、おもに法律的なものと個人的なものであ

つた。目撃者の証言は、SIA/六と一〇にまとめられているが、そのうちのいくつかは、ほかの場合にも(たとえば〇〇〇〇五)記述された実例に関するものであつた。さまざまなアメリカ捕虜と諜報員の供述はSIA/七にあつめられたが、捕虜になつたアメリカ飛行士のくわしい供述についてはたくさんの文書がつくられ(SIA/一四、一五、一六、一七、一八)、それらの供述書の原稿は、たしか五月世界平和評議会の公表した一文書のなかに、写真石版にしておさめられた。細菌戦についての新聞記事の抜粋はSIA/五にまとめてある。

第二次世界大戦中の日本軍細菌戦との關連

東アジアに細菌戦がおこつているとの主張を調査するときには、日本側が第二次世界大戦中に、中国にたいしてたしかに細菌戦をやつたという事実を、けつして無視してはならない。委員会としては、わりとよくこの問題についての知識をもつていた。というのは、委員会のメンバーの一人がハバロフスク裁判の鑑定主任であつたし、もう一人は細菌戦そのものが中国におこつていた当時、中国で公式の職務についていたごくわずかな西欧科学者の一人であつたからだ。一九四四年、この科学者は、自

分の任務の一つとして本国政府につぎのように報告したのである——はじめのうちこそ大きな疑惑を感じていたが、いくつかの地方で日本軍がペストに感染した蚤をばらまいたし、またばらまいていることを、中国軍医署のあつめた資料はあきらかに示しているように思われる、と。それで、これらのメンバーは、ふつうなら腺ペストなど発生しないけれども、そこの条件がその蔓延にすこぶる有利な土地に、腺ペストが発生した例を、かなりたくさんあげることができた。周知のように、腺ペストというものは、ふつうの状態のもとではある種のはつきりと限られた地方（たとえば福建省）にだけは発生するが、そこ以外にはひろまらないのである。

中国衛生部の文庫のなかから、一つのオリジナルな報告書が委員会に提出されたが、それは一九四一年に日本側が湖南省常徳で人工的にペストを流行させたことを取りあつかつたものであつた（付録一一、ISCC/一）。この文書は、今日でもすこぶる大切なものであり、たしかに歴史的な興味があるものである。中国側の公式記録は、この方法で日本人から攻撃をうけた縣城の数を十一としるしている。つまり湘江省四、河北、河南の両省それぞれ二、山西、湖南、山東の各省それぞれ一である。人工的にばらまかれたペストの犠牲者数は、一九四〇年から一九四四年までのあいだにおよそ百人で

あつたと、今日中国側では推定している。

付録に復製したこの文書は、その上、歴史的な興味ももつている。中国軍医署は、当時この文書十部を重慶駐在各国大使館に配布したことがわかつている。ところが、一九四六年一月の有名なマーク報告によると、細菌戦の方法についてアメリカが大規模な活動をはじめたのは、まさにこの中国側報告書のくばられたのと同じ年、つまり一九四一年であつたということは、単なる偶然の一致ではなかつたにちがいない。委員会はさいわい、朝鮮で活動しているときに、常徳事件についての報告書の原文をかいた有名な伝染病専門家にあうことができて、なぜ国民党政府は、第二次世界大戦の終るまえにもはや自分の手のなかにはいつていた証拠を、あくまで追及しなかつたかということについて、その意見をきくことができた（付録一二）。周知のように、かれのかいた報告書の結論は、のちにハバロフスク裁判の被告の供述によつて十分に確認されたのである。

「細菌兵器の製造と使用のため起訴された元日本軍軍人の裁判にかんする資料」（モスクワ、一九五〇年）という出版物は、日本の細菌学者石井四郎（かれ自身は不幸なことに被告席にいなかつた）

の指導のもとにやられた実際活動についてのゆたかな情報を世界に提供した。コレラ、チフスそれににペストのような細菌を、その培養基で、しめつた菌ごとはかつて文字通り何百キログラムというふうに、一時に大量生産する技術をつかつていたことが、疑いもなく確認された。また、たくさんの鼠やひじようにたくさんの蚤を飼育するすこぶる簡単な性質の技術もつかつていた――もつとも、じつさいには、蚤しかばらまかなかつたようであるが。その上、さまざまな証人たちは、撒布方法を監督するため、中国各所の日本軍基地に、自分のいつた日付についての証拠をどしどし提出した。特別の秘密部隊（悪名のたかい「七三一」部隊）やその研究所、飛行士施設、それにロシヤや中国の愛国者がむごくも試験動物につかわれた監獄についての詳しい材料がたくさんでてきた。後でのべるように（八〇ページ）、委員会はその活動中に、ハルビンの特別工場が石井の命令でつくつた陶器「爆弾」の残りすくない見本のうち、いくつかを調べることができた。

日本の軍国主義者どもは、一般的には生物学的兵器をつかつて、特殊的には昆虫兵器をばらまいて、世界を征服しようという考えをあくまですてなかつたようだ。かれらは大連から出てゆくまえに、大学や各省の図書館にあつたあらゆる雑誌から、細菌戦にいくらかでも関係のある論文を、系統

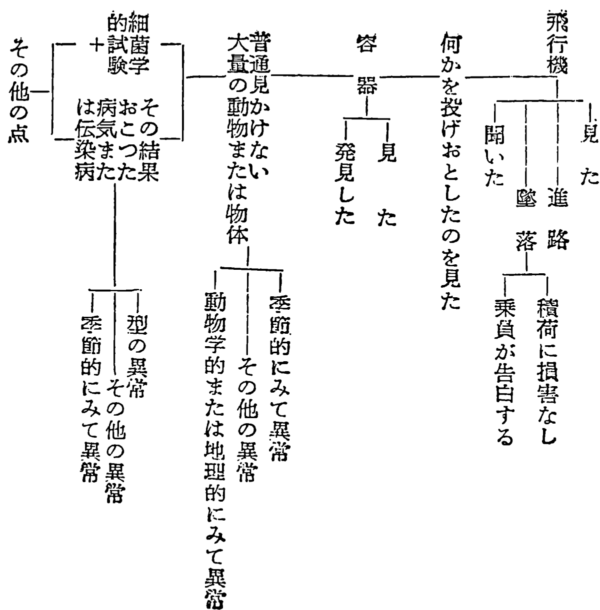
的にひきさいて持つてかえつた。朝鮮や中国東北（満洲）で細菌戦がやられているとの主張が、一九五二年のはじめ頃に出はじめるまえ、新聞が引つずき二回にわたつて石井四郎の南鮮訪問を報道したこと、その上かれが三月またも南鮮にやつてきたことを忘れてはならない。日本の占領軍当局はかれの活動を奨励しているのかどうか、アメリカ極東軍司令部はもともと日本で考えだした方法をつかつているのかどうか、それは委員会のメンバーの心から、ほとんどはなれさることのできない疑問であつた。

委員會の採用した事件分析の方法

事柄の性質上、細菌兵器をつかつたかどうかということは、立証がことのほかむつかしい。それを立証するかんぜんな証拠としては、たとえば、飛行機が墜落したとき細菌に感染した生物体が無事にのこり、その乗員たちがただちに、その細菌兵器使用の行動をみとめるというようなことが必要である。しかし、こんなことは、いろいろな理由からみて、とてもおこりそうにないことはあきらかであ

る。だから、さまざまな事実を部類わけして、一つの首尾一貫した（事件の）ヒナ型のなかに組みこむ方法を考えだし、それらの事実がおたがいに相手方を説明しあつて、事件の具体的な姿をつくりあげることができるようにする必要がある。そこで委員会が考えまた活動する上で、まず必要になつたのは、ある種の図式であつて、その図式は一つ一つの事件の調査をやる場合に研究せねばならぬ事実を、はめこむ枠として役立つようなものでなければならなかつた。

理想的な条件のもとで、一つ一つの事実が、かならずその中にふくまれるような図式（つまりヒナ型）は、つぎのようであつた。


飛行機
見た
進路
墜落
開いた
積荷に損害なし
乗員が告白する
何かを投げおとしたのを見た
容器
見た
発見した
普通見かけない大量の動物または物体
季節的にみて異常
その他の異常
動物学的または地理的にみて異常
細菌学的試験
その結果おこつた病気または伝染病
型の異常
その他の異常
季節的にみて異常
その他の点

もちろん、こういう型に完全にあてはまるような事件は、めつたにあるものでないし、あるいはけつしてないかも知れない。とはいえ、もはや細菌戦のやられていることのりつぱな確証としてもいいくらい、この型にちかいような実例はある。この方法でやると、細菌兵器をつかつた人たちの活動を元通りに組みたて細菌兵器のあたえた効果をあきらかにすることができる。委員会はそういう理想的な型のもつている論證性をいちばん多くそなえているように組みあわさつている事実のあつまりに、とくべつの注意をはらつた。数多くの型（の事件）を比較対照すれば事実が一般的にどのように組みあわさつているかがわかるが、その組みあわさり方をしらべれば、事態の全体はしぜんと明らかになるものである。（下記一〇〇ページをみよ）

プラーグ文書の昆虫学的資料

委員会が北京で活動をはじめたときに、その前にあらわれたさいしよの仕事の一つは、プラーグ文

構が基礎にしている科学上の材料の系統的な検討であつて、この活動のさいしよの一面は、中国科学院の中国科学者やその鑑定に責任をおつた学者団体と協力して、昆虫学的証拠の表をつくることであつた。委員会は、委員会がこんどの仕事にあたる高い能力をもつていることに、少しの疑もないという意見を、たちまちもつようになつた（付録八）。その上、委員会には敏速な相互貸付制をもつた広汎な図書館をつかう便宜があるし、各所で蒐集した昆虫は秩序正しくりつぱに保存されている。どうにもならないただ一つの困難は、中国という亜大陸にいるたくさんの昆虫群の系統的な分類が、もはや半世紀もかかつてやつているのに、まだ十分にわかつていないことであつた。だから、新しい種類の昆虫が外から持ちこまれたのだという主張がある場合にも、はたしてそれがみんなその通りであるかどうか断定できなかつた。それで委員会としては、これこれの場合にはこれこれの昆虫の種類が、いまそれらが大量にあらわれている地域に、これまで存在したことは、いままでのところすくなくとも記録されていない、という事実で満足するほかなかつた。

アメリカの飛行機が通過した後で発見された異常な昆虫の大群の見本として、中国専門家のところに送られてきた昆虫がどんな種類に属するかは、一つの表にまとめておいた（付録八）。そのなかに

は、九種の雙翅類（六種の蠅、三種の蚊と蚋）、一種の積翅類、一種の弾尾類、一種の微翅類、三種の直翅類それに二種の蜘蛛（蜘蛛類）があつた。後でのべるように標本虫の一種をあわせて合計十八種になつた。

これまでの細菌文書（たとえばSＩＡ／四）がヨーロッパであたえたそもそもの印象の一つは、アジア大陸のこの地方ではいままで生存することが知られていなかつた、種だけではなく屬にさえ属する節足動物が発見されているというのであつた。このことは確認されなかつた。とはいえ、三つの場合にはこの点であきらかに変則な現象があつた。採集されたたくさんの昆虫群のなかからたびたび見つかつたヒレミイア Hylemyia 種（黒蠅 anthomyiid fly）は中国東北でふつうにいる四種の蠅のどれとも、また中国各地でこれまで記録されている十五種のどれとも同じでないことがわかつた。しかし、その屬には、世界の各地をいれると約六百の種があり、それら全部のほんとの棲息地はまだ十分にわかつていない。おなじく、糞蠅 sun-flies（Helomyza modesta; Meigen）が見つかつたが、これもこれまで中国で記録されているこの屬のどの種ともたしかに一致しなかつた（付録八）。それとまつたく同じことは蚋（Orthocladius）についてもいえる。すべての証拠品をしらべる場合には、動

物学や地理学から見ての事実のくいちがいに適当なウエイトをおかねばならない。

それはともかく、動物地理学の面よりも変則状態がはるかにひどかつたのは、生態学の面であつた。さまざまな種がもともとこの地域にいたにせよいなかつたにせよ、それらが今年のはじめの三ヵ月間に、ひじようにたくさんあらわれたのを見かけたという事実こそは、たしかに奇妙この上もないことであつた。というのは、その頃はまだ、中国の北部や東北それに朝鮮の地上には、雪がつもつていたからだ。委員会は、あらゆる職業のひじようにたくさんなふつうの男女が、それらの大群を見た（そして、できるかぎり早く殺した）のだということを、立証するのには、すこしの困難も感じなかつた。今までしらべた十八種のうちすくなくとも十二種以上は、その出現が季節的にみてたしかに変則であることがあきらかであつた。別の言葉でいえば、つまりそれらは、権威ある昆虫学者の個人的経験や公刊された著作によつて、ふつう出現するものと予想されている季節よりも、それぞれ六乃至十四週間も早目に集団をなして出現したのである。この出現季節の繰上りは平均して九週間、つまり二ヵ月以上であつた（付録八）。

さてつぎに、いくつかの興味ある問題が持ちあがつてくる。家蠅とだいたいおなじ程度の大きさの蠅さえ、それが数万数十万と集つている有様はどんなに仰山なものであるかは、かんたんに想像がつくが、しかし弾尾虫（Isotoma neigishna; Börner）はその大きさがひじように小さい（長さがわずか二ミリ）ので、ひじようにたくさんのものが高い密度であつまつておらねば、いくらかでも人の注意をひくことはできない（付録八）。できる場合には、密度を算定した具体的な数字を表にまとめておいた（付録七）。SIA／一二のなかで、中国昆虫学者の一人が一つの大切な観察をやつているがそれは温度が摂氏零下十度のときにあらわれたヒレミイアのひじような大群のなかで、卵をうむばかりになつている個体がたかい比率をしめていたということであつた。このことは、これらのものの発生についての神秘をますます深めた。それとおなじように目ざましいのは、野こうろぎ Gryllus testaceus の場合であつて、一九五一年に北京で書かれた丹念な論文には、偶然その生活史を主題にしたものがある（付録八）。この種の数千の成虫が、朝鮮に接する中国東北（満洲）の遼東省寛甸のちかくで、時もあろうに三月にあらわれたのである。三月といえば、中国東北よりもずつと気候のあたたかい北京でさえ、卵の段階にあるものをのぞいて、この虫はまだ発生しているはずもない時であつた。

ところで、いろんな種類の虫の群が、冬でもポツンポツンとあちこちに出現する例は、もちろん昆虫学の文献のなかに見られる。しかし、こんなに多くの種の昆虫が一時にそういう現象をおこすということは、その原因が純粋に自然的なものであると仮定すれば、とても考えられないことであつた。委員会は、中国東北（満洲）と朝鮮のこの冬の気象事情が、例年とまつたくかわりないものであることをたしかめた（付録八）。したがつて、中国人と朝鮮人がこの異常な現象を、アメリカの飛行機の通過と結びつけて考えるのは、すこしも驚くべきことではないし、しかもそれらのアメリカの飛行機が、多くの場合、爆発しない物体を投下し、そしてその時、虫が出てきたのをみた目撃者さえもあるのである。委員会はそういう目撃者と会見して（付録二二、二五、二八）、かれらが十分に誠実であることと、かれらのはなしが合理的で信頼できることをたしかめた。後でみるように（八〇—九六ページ）、平凡なまたすこぶる特殊な型の容器が見つかり、研究された。残念ながら、ヨーロッパにとどいている文書のいくつかには（四ゼロ文書のように）、あらかじめ飛行機が通つたことについての必須の証言がふくまれていないものがあるが、委員会はこの大切な点を明らかにすることができた（付録七）。

ひじようにたくさんの昆虫の種の出現した時期が、たしかに、繰上がつていたことはみとめるが、

それはよしんば気象学上の事情に異常があつたせいではなかつたにせよ、なにかほかの自然的要因が作用して、すべてのものの発生をおなじ程度だけ繰りあげたのだという議論がでるかも知れない。この点の検討は幸にもすこぶるやさしかつた。つまり、いろんな種をそのふつうの発生の順にならべたグラフをつくり、それにそれらが異常発生をその発生順に書きこみさえすればいいのだ。もし一律にはたらく自然の要因が作用しているのであれば、二つの曲線または直線は平行に走ることになるはずであるが、(付録八)のなかにある図表を一目みれば、それがそうなつていないことが十分にしめされている。異常発生の順序はひどくでたらめであつて、人為的な要因が干渉したことをしめしている。

委員会が活動をはじめるまえに、多くの国々である程度の成功をおさめた議論の一つは、あの悪名のたかいナパーム爆弾の使用がつづいているので、地表の一部がひどく熱くなるようなことも、ありうるのだというのであつた。ナパーム爆弾にそれほどの効力があるとすれば、それは多くの種類の昆虫の生活週期をかきみだして、それがふつうの発生よりも数週間または数カ月まえに発生するようになることがあるかも知れないのだ、と。そこで、委員会は、三十三の主な事件をふくめて昆虫が大量発生した実例についての幾ダースもの報告――そのいくかつは表にしておいた(付録七)――は、

もともと中国東北からおくられてきたものであるが、そこはもちろん、ナパーム爆弾のすこしもつかわれたことのない地域であつたという事実を興味ぶかく注目した。

以上にのべたことはみんな、SIAやそれと同種の文書にのべてある昆虫の種についてもあてはまる。中国昆虫学者は、「蟻」とか「馬蠅」とかいう俗名でそれらの文書に記してあるいくつかの種を確認することはできなかつたが、それは非科学的な目撃者のつかつた言葉が原因になつて、いくらかの混乱がおこつたのであろう。この点については、のちに委員会は、鞘翅類(標本虫)Ptinusについての新しい証拠をしらべたが、それについてはあとでのべる(付録二七)。この実例やまたその他の感染昆虫の実例のどちらの場合でも、付録にあつめた材料は媒介体と病気の発生とのあいだの関係を研究するのに役立つ。またこの点に関連があるのは、大量の昆虫を駆除するために中国と朝鮮がどんな手段をとつたか(付録四二をみよ)、またふつうの昆虫を手当り次第にとつてしらべる場合に、病原菌が見つかるかどうかということである(付録四、五)。

ばらまかれた昆虫についての医学的註釈

読者はつぎの諸節で、科学者でない人にとつては、なじみのなさそうな名前をもつたある種の昆虫や蜘蛛に出くわすかもしれない。この節はそういう昆虫について簡単な説明をくわえようとするものであり、説明の順序は付録でとつたのと同じ順序にしたがつた。

ばらまかれた昆虫のなかで、いちばん多く見かけるのは黒蠅 anthomyiid fly, Hyiemyia sp. である。この属の蠅は、北アメリカにはとくにたくさんいて、五百以上の種があり、そのうちのいくつかはつねに人家にたかつている。それらは人間の排泄物のなかで繁殖するので、当然腸内疾患の機械的媒介体として重要である。この種の多くは、蛹の段階に地下で冬をすごし、ふつう成虫が大量に発生するのは、五月より早くはない。これらの蠅は、自然状態のもとで、植物に病気をおこす種々の病原菌を感染させることができる。

糞蠅 Sun-fly, Helomyza sp. (family Helomyzidae) は、糞のかたまりにたかる昆虫である。幾十ダースもの種があつて、その大部分は、幼虫のときばかりか成虫になつても、人間の排泄物、蝙蝠、小哺乳動物などにくつついて生活している。これらの蠅のいくつかの種は、人家にあつまり、食物をけがし、病原菌からおこるすべての人間の病気の機械的な媒介体になる。

家蠅 Musca domestica とその南方種 Musca vicina は、たえず人間といつしよに生活していて、人間の病原の運搬者としてよく知られている。この蠅には、六十種以上の病原菌がくつついているのが見つかつている。

大家蠅つまり馬小屋蠅 Muscina stabulans も、人間のまわりで生活する昆虫であり、人間の病気の媒介体であるとみとめられている。

以上はみんな双翅類である。積翅類の代表はネモウラ Nemoura 種、つまり石蠅 stone-flies の一種である。これらは小川や流れ水のなかで繁殖し、その幼虫は水のなかの微生物を食つている。

成虫も、自分が成長した環境からあまり遠くへはなれたがらない。

弾尾類は羽のない原始的な昆虫であるが、その代表的なものは黒跳虫 Isotoma sp. である。これはくさりかけた植物性の物質や腐植土の多いしめつた土地、野菜の根などに発生するいくつかの種は溜り水の表面で発生する。

自然状態のもとで、人蚤 Pulex irritans つまり人体に寄生する蚤は、ペストの大発生をひきおこすことができる (Blanc と Balthazar)。この蚤が媒介体として細菌戦に利用されたことは、後で見る通りである。

標本虫 Ptinus fur (鞘翅類) は約三十五から四十の種をふくむ属に属し、その大部分はおなじ習性をもち、人家の付近にすんでいる。ここで問題になつている種は人家、倉庫、馬小屋、鳥小屋や水車小屋、図書館や工場などでいちばん多く見つかる。それは精白した穀物、穀類、棉実、腐つたパンやビスケツト、粉、麦稈、絨氈、革などにすんでいる。そして、それらのもののあいだに卵をうみつ

ける。変態の過程は三カ月から四カ月ぐらいで、そのため一年間に少くとも三世代が生れることができる。成虫の標本虫は五年間生きることができる。それはヨーロッパ、アジア、北アメリカに見られ、広く分布している。自然状態の標本虫 Ptinus からは、害毒性のある炭疽菌が見つけ出されている（付録二七、二八）。

蜘蛛のなかでは、狼蜘蛛 Lycosidae 族の二歯狼蜘蛛 Lycosa 種と三歯狼蜘蛛 Talentula 種が代表的である。これらは肉食をし、蚊、蠅、蟻その他の種をくい、なかには人間の病気の媒介体になるものもある。これらの蜘蛛が人間に危害をくわえるときにおこる病気は、咬みつくときに出す毒液だけでなく、同時に病原菌が感染するということによつてもおこる。これらの蜘蛛の排泄物も、病原菌をもつているらしい。その寿命はひじようにながく、数年間にたつする。成虫は、二年間食物をとらずに生きていることができるし、数カ月は水をのまなくてもすませる。また、軽い霜にもたえることができる。

科学的文献のなかには、昆虫や蜘蛛類を大量的に人工生産する方法をのべているものがある。この

問題についてのいちばん完全な知識は、アメリカの昆虫学者たちのかいた「無脊椎動物の飼育方法」（ニュー・ヨーク、一九三七年）という協同著作のなかに見いだすことができる。

上述の説明からわかるように、ばらまかれた昆虫のあるものは、病気の媒介体であることがわかっているが、他のものは病気の伝達になにかの関係があるものとしては教科書にでてこない。そして、黒蝿 Hylemyia と糞蝿 Helomyza などの蝿は、しばしば人家にあつまってくるが、黒跳虫 Collembolid Isotoma sp, などは、ほんのわずかしか人間との接触はない。それで、一寸見たところでは、このような節足動物が、人間の病気の伝達に、なにか重要な役割をはたしそうにはおもえない。しかし、媒介体のいわゆる特異性の幅の大きさということだけでなく、まだあきらかになっていない媒介体＝寄生主という関係のある種の面も考慮せねばならない。

たとえば人間と鶏蛆 Dermanyssus gallinae との関係は、ひじように限られた特殊な条件のもとでだけおこる。一九四四年いぜんには、脳炎ヴイールスを伝達し保存するうえで、この外部寄生虫がどんな重要な役割を演ずるかについてはわかつていなかつた。それいぜんには、脳炎の伝染病を人工

的にひきおこそうとして、だれかが鶏蛆をつかつたとすれば、それは馬鹿げたことに思われたであろう。

人間とみつせつに接触する種が、かならず野性種よりもつと有効な病気の媒介体であるということは、一般的法則としてみとめることはできない。たとえば、たくさんの例のなかから、アエデス・スカプラリス Aedes scapularis とハエマゴグス・スペガツジニイ Haemagogus spegazzinii という蚊をあげることができよう。研究室の条件のもとでは、これらの種は黄熱病を伝達する。ところで、この第一のものはひじように人間になれていて、いつでも森林地帯の付近にある人家にあつまるが、第二のものはけつして人家にはいらない。それでも、人間と共生する前者は、黄熱病の伝達にすこしも重要な役割をはたさないが、野生種の方はその媒介体として有名である。

たとえば、黒跳虫 Isotoma を例にとれば、いろいろの仮説をたてることができる。ただし、これらの仮説は実験をするための推測にすぎないものであるという事を見失なつてはならないし、その実験の結果がどうなるかについては、われわれは何も知らないのである。たとえば、

(a) 黒跳虫　下等哺乳動物への感染　体外寄生体（蚤、蛆など）　人間への感染。

(b) 黒跳虫　食物や水の汚染　人間への感染。

(c) 黒跳虫の体内で病原菌の繁殖　黒跳虫、先天的病気　下等哺乳動物への感染　外部寄生　人間への感染。

(d) 黒跳虫　植物への感染。

このほかにもたくさん仮説がたてられる。

これとおなじ種類の仮定は、石蝿 Nemoura にもあてはまるが、この場合には、おそらくまだほかの可能性も考えられよう。しかし、それについては、いまのところくわしくのべることはできない。半ば屋内にすむような蝿が、媒介体としてはたす役割を理解することはこんなんでない。とくに研究室の人工的条件が感染率をたかめ、病原の毒性をたかめるときには、ことにそうである。

まだもう一つ大切な点を強調しておく必要がある。おなじ一つの種が、ある地域では半野生であるが、他の地域では屋内にすむようになることもあることがある。一つの例として、ケルテシア Kerteszia 属のアノフェリン Anopheline 蚊をあげることができよう。これは、南アメリカの北緯二十四度から北では屋内にすむ習性がなく、マラリアを伝達する役割をはたさない。しかし、その線から南では、反対に、多く屋内にすみ、そのためにマラリア伝達のうえで重要な役割をはたしている。

さいごに、マラリアにたいしてアノフェレス蚊が、ペストにたいして蚤が、リケッチアにたいして虱やダニがやるように、寄生虫や細菌が感染する病気で節足動物が媒介体としてはたす役割をはっきりと証明することができるようになるためには、長い期間の研究が必要であつたことは衆知のことである。病原伝達のうえで節足動物のはたす役割は、こんごも引続き研究することが必要である。駆除方法がまだはつきりしていないのを見こして、あまりよく知られていない異常な昆虫の種を媒介体としてつかうことは十分にありうる。そして細菌戦争のやり方として、病原と媒介体と人間との新しい相互関係を人工的につくりだすことができるということが考えられる。それをするため研究は、たとえ骨は折れても、成功しないことはなさそうに思われる。

植物病理学的資料

これまでの細菌戦の文献には、アメリカ飛行機が植物の包みを投下したことが、いくつかのべてある。それらの包は、千フィートぐらいの高度で破裂して、ひろい場所に葉とかその他の植物の部分をまきちらしたのを、目撃者がたいてい見ている。この種の事件は、三月二十日、朝鮮の定州（NCNA／八五、九ページ、SIA／一三、四ページ）やそのほか、中国東北と北朝鮮の十カ所でおこっている。その一つの場合には、そういうものが落ちてくるのを、一人のイギリス人従軍記者が自分で見ている（SIA／六、二ページ）。委員会のメンバーは、国際的に有名な中国植物病理学者や植物学者といつしよに、その植物学的また細菌学的同定について討論した（付録一）。

あるときは大豆の茎や莢に、紫斑病菌 Cercospora sojina Hara（別名Cercosporina Kikuchi, Matsmoto and Tomoyasu）を感染させていたのが、確証されたことがあつた。この菌は、植物の

病原で、朝鮮や中国にもともといることが記録されており、大豆の収獲に大きな被害と損失をあたえたものであつた。そのとき討論したほかの実例の場合にも、投下された植物の組織のなかから病原体が見つけだされ、それがただ表面に感染していたばかりか、中までかんぜんに感染していたことがわかつた。

また、いくつかの葉の破片が炭疽病菌（Glomerella 種、その無性期は Colletotrichum といわれる）に感染していたことがあつた。その葉で見つかつた菌は、種々さまざまなものに寄生することができ、接種実験によると、林檎の木、梨の木、棉の木などに被害をあたえる。ふつうの棉炭疽菌（Glomerella gossypii（South）Edg.）は棉や棉にちかい植物にしか被害をあたえない。しかし、林檎を、にがく腐らす菌（Glomerella cingulata（Stoneman），S & S.）は三十以上の寄生植物に被害をあたえるが、棉には被害をあたえない。これらの菌は両方とも、中国にいることが、記録されている。しかし、このたび発見された菌は、それとは形態学上のちがいがあり、またその寄生する範囲もはるかにひろい。

植物病をばらまいた第三の例は、委員会が活動をはじめたのちの七月になつて、遼東省南部の岫巌のちかくでおこつた。マクロフォマ・クワツカイ・ハラ Macrophoma kuwatsukai Hara が桃の葉（ほんらいの寄生主ではない）に伝染しているのが見つかつたのであるが、この菌は林檎と梨の実をくさらせ（輪紋病班）、またはそれらの木に癌種病をおこさせたり、小枝をかれさせたりする。取りだされた菌は高い伝染性をもつていた。

上記の三つの実例の場合については、植物性物質の包がおちたのを目撃した証人のくわしい報告がある。

この植物病理学戦争のなかで、委員会の注意をひいたもう一つの事件は、例のように中国東北（満洲）遼東省にアメリカの飛行機が一機侵入したのち、安東付近の孫家堡子村に玉蜀黍の粒がばらまかれたことである。それらの粒には、アメリカやヨーロッパで野菜類の病原体として知られているテカフォラ・デフォルマンス Thecaphora deformans に似てはいるが、それとおなじではない黒粉病 Thecaphora の一種が伝染していることがわかつた。この植物病原体は、これまで中国には、その

存在が記録されていない。

投下された葉は、しばしば切れ切れになつていたが、それが何の葉であるかわからなかつたのはただ一と包きりであつた（炭疽病菌の場合）。第一回の事件では、葉は大荳 Glycine max であり、第三回目の事件では、桃 prunus persica 第四回目は玉蜀黍 Zeamys であつた。この外の場合の投下は、しばしばケルクス種 Quercus sp.（樫）とソルグム・ヴルガレ Sorgum vulgare（高粱）であつた。これらのなかでは、二つの事件がとくに興味をひいた（付録一〇）。北鮮大徳山でおとされた葉の一かたまりは、落葉樫 Quercus aliena, Bl. var. rubripes, Nakai の葉であることがわかつたが、この木の分布はげんみつに三十八度線以南にかぎられている。五月三日に中国東北の海龍縣に、おとされた一かたまりの葉は、やまからばし（くすの一種）Lindera glauca Bl. であることがわかつたが、この木は南朝鮮にあるだけで、中国東北にはすこしもないものである。

人間の病気だけでなく植物の病気の媒介体として、昆虫をつかつた可能性のあることものべておかねばならない。たとえば、黒蠅 Hylemyia spp.（上述四五ページと付録一〇をみよ）が、梨と林檎

の火白症（Erwinia amylovora）玉蜀黍萎凋病（Phytmonas stewartii）と野菜軟腐病（Erwinia coratovora）——三つの細菌病——それにキャベツの「黒脚病 black leg」菌（Phoma iingam）をもつていることはよく知られている。大家蠅（上述四六ページと付録一〇をみよ）が梨と林檎の火白症菌をもつていることもよく知られている。中国病理学者は、ばらまいてあつた昆虫（と葉）からいろいろな種類の細菌を取りだしており、それについての研究がすすんでいる。

そこで、植物病の撒布が、朝鮮と中国東北（満洲）でやられている生物学的戦争のなかで一役をはたしているにちがいない、ということはほぼいえる。

朝鮮の事件（ペスト）

先にのべたように、日本が第二次世界大戦中にやつたペストその他の細菌戦の古典的方法は、容器または噴撒の方法によつて、ペスト菌に感染している大量の蚤をばらまくことであつた。一九五二年

のはじめから、北鮮のあちこちに、ぽつぽつとペスト流行の中心点がたくさんあらわれたが、その際いつでもそれといつしよにたくさんの蚤がとつぜんあらわれたし、そのまえにはかならずアメリカ機がそこを通過していた。二月十一日の事件をはじめ、そういう事件が七つほどSIA／一に報告されているが、そのうち六件ではペスト菌が蚤のなかに見つけだされたことが証明された。文書SIA／四は、二月十八日安州付近に蚤がばらまかれたことをつけ加えている。蚤は、細菌学的にみて・ペスト菌をふくんでいることが明らかになつたが、その撒布後の二十日その地区の発南里にペストが発生した。村の人口六百のうち五十人がペストにかかり、三十六人が死んだ。

委員会の受けとることのできた最善の報告によると、過去五世紀のあいだ朝鮮でペストのおこつたことはなかつた。ペストの流行した一番ちかい中心地は、中国東北（満洲）の遠く三百マイルはなれた土地か、それとも福建の南方一千マイルのかなたの土地であつた。そのうえ、二月という月は、この土地の気候からみて、人間のペストがはやるにはふつう三カ月以上はやすぎる。とくに、またその時出現した蚤は、ふつう自然状態でペスト菌をはこぶ鼠蚤ではなく、人蚤（pulex irritans）であつた。そして、この蚤は、われわれが中国側の同定（付録一二）その他の指摘（付録一九）から知つて

いるように、第二次世界大戦中日本軍が細菌戦につかつたものであつた。

一方、委員会は、朝鮮で二つの特別の実例を研究するようにすすめられた。（付録一八、二〇）その第一の実例では、三月末江西郡で、前夜村の上空を敵一機が旋回したその翌朝、一人の農民がじぶんの家の井戸のちかくにあつた瓶のそばへ行つた。そうして、たくさんの蚤が瓶のなかの水の表面にうかんでいるのを見つけた。その農民は、たぶんその蚤にかまれたのであろうか、数日後に腺ペストにかかつて死んだ。死因がペストだという診断は、朝鮮と中国の専門家のやつた病理学的また細菌学的試験で確認された。それらの蚤にはペスト菌が伝染していたことも証明された。委員会のメンバーは、上記の専門家らが患者の体から分離した微生物の培養を観察して、これらの培養菌がたしかにペスト菌であることに確信をもつた。病理学的および組織学的標本もしらべた。江西では、すばやく衛生上の措置をとつたので、ペストの蔓延はくいとめた。

二番目に研究したのは、朝鮮にいる中国義勇軍の二人の中尉が、准陽附近のはだか山のうえで、ひじようにたくさん密集した蚤の群を見つけた事件であつた。そのちらばり方から見て、これらの蚤は、

北北東の方向から、かなりゆつくり落ちてきた容器のなかから、ばらまかれたもののようにおもわれた。しかし、容器はあとかたも見つからなかつた。土地を黒くし、また自分たちのズボンさえまつ黒にした虫の密集にいくらかおどろいて、この二人の青年——委員会はのちに直接この二人に質問をした——は、じぶんたちの宿舎にかえり、戦友をつれてき、松の枝に石油をかけて火をつけ、それで蚤をころした。この場合には、軍人たちはいろいろの方法で病気になるのをふせぎ（付録二一）、またかれらのすばやい対策がうまくいつたので、いつも人間の通る道に蚤がはいだしてゆく余裕はなかつた。朝鮮——中国部隊のやつた試験によると、これらの蚤はペスト菌に感染していたし、またそれは人蚤であることがあきらかになつた。

これらの蚤が、人間に寄生する蚤（P. irritans）であつたことは、強調しておかねばならない。この昆虫の生態学からわかつているところによると、人間の住家をはなれたところで、この蚤をたくさん見つけることはできないはずであつた。では人間の住居から遠くはなれた荒れ地に、一時に何万という数のこの昆虫がでてきたということは、どんなふうに判断したらよいのか。こんな魔女の宴会が、なにか自然の方法で出現するということはありそうにもないことであつた。この事件に非常に関

係のありそうなことは、それらが見つかつた日の午前四時ごろ、付近に宿営していた中国人民義勇軍の人々が、その地の上空を飛行機が旋回するのをきいたことであつた。

この事件を分析してみると、この場合、人蚤によるペストの伝染の連鎖のなかで、ふつう必ずその中にあるべきいくつかの環が行方不明になつていることがわかる。外部寄生体によつて伝染するこの病気は、ふつうまず齧歯動物にあらわれ、それにつづいて人間のあいだにあらわれ、そのつぎに人間から人蚤が感染する。それからやつと、この人間の寄生体は、もつとひろくペストを蔓延させることができるのである。

すべてこれらの事実や、これ以外のおなじような事実から見てみると、委員会としては、日本軍が第二次世界大戦中にペスト蔓延のためつかつたのとひじようによく似た——たとえまつたく同じではないにしても——方法を、こんどはアメリカ軍がつかつているのだという結論をくだすほかに仕方がなかつた。

平壌でこれらの実例を討論している間中、委員会は、ペストについての、中国側の最高専門家の一

人、そして一九四一年の（日本軍細菌戦についての）報告（付録一一）の執筆者まさにその人からの援助をうけた。この専門家のもちだした証拠によると、かれはその当時、日本軍が細菌戦をやつているという事実を世界に公表せよと、国民党政府にむかつて力説したが、成功しなかつたということであつた。それが成功しなかつた理由の一部は、アメリカ側がそれを止めたからだというのがこの人の考えであつた（付録一二）。かれはまた、いま朝鮮でつかわれている種類のペスト菌は、高い毒性をもつていることに注意せよと指摘した。

ペストに感染した蚤をまくことは、もちろん、ペストを流行させるための只一つの方法ではない。それ以外の方法がつかわれることはあるし、われわれはつぎに、事実そういう方法がつかわれていたのを見ることにする。

甘南事件（ペスト）

もう一つの実例は、それを組立てる諸要素が、わりと完全に連続してそなわつていたので、委員会は、それをひじように詳しくしらべるようにすすめられた。それは、ペストに感染しペストにかかつている野鼠の大軍が、突然あらわれてきた事件であつた。一九五二年四月五日の朝、甘南の町（甘南縣）の行政管轄下にある四つの村の村民がおきでてみると、自分たちが鼠みたいな動物の群に包囲されているのに気がついた（付録一三）。この町は中国東北（満洲）黒龍江省の西部省境にそつていて、まさに内蒙古ととなりあわせている。

その前の晩、たくさんの村民が頭の上を一台の飛行機が通る音をきいた。中国防空監視隊の情報によると、この飛行機は十時直前鴨緑江をこえ、十一時三十分甘南の上空にあらわれたが、それからもはや自分の使命をおわつたかのように、もときたコースを引かえしていつたということになつている

（付録一三）。それはアメリカ空軍のF—八二型双胴夜間戦斗機であつたことを、防空監視隊は確認した。朝になると、村民たちは家の中や中庭や、屋根の上、なかにはベッドの上などでたくさんの鼠が死にかけていたり、死んだりしているのを見つけた。他方、住宅地のはずれにも、たくさんの鼠が散らばつていた。だいたい3×9マイルぐらいの広さのある居住地域のなかやちかくで、あつめたり殺したりした鼠の合計は七百十七匹であつた（付録一三）。これは、季節的にみて変則の現象であつた。というのは、この地方でこの小さな齧歯動物がふつう姿をあらわしはじめるのは、もう一月もあとであつたからだし、それにこれ程たくさん一ぺんに出現したのも、今までにないことであつた（付録一三）。また、それが現れた場所も変則であつた。というのは、野鼠はけつして人間の家にやつてこないからだ。

また、この地方に、この種の鼠があらわれたのは、この動物の分布からみても変則であつた。この地方の人たちは、これまでこの種の鼠を見たことはなかつた。それは Microtus 属に属し、形態学的には Microtus (Stenocranius) gregalis gregalis に似たものであると同定された。この種のものは、甘南より北西の中国東北（満洲）の諸処に棲息することが、徳田氏によつて報告されており

（一九四一年）、またほかの人はもつと西の地点に棲息することを報告している。もつとくわしい分類学的研究は、いま中国の科学者がすすめている。そのうえこの属は、中国東北のうちペストが地方病になつている場所で、ふつうこの病気の媒介体になつている三つの属のうちにはいつていない（付録一五一六）。この事件について、瀋陽（奉天）とこの村の両方で委員会のやつた証拠品の分析は、これらの野鼠があのように一定の場所に集中していたのは、ある程度まで農家のかつている猫の仕業にちがいないということを示しているが、しかしこの外部から侵入してきた種の野鼠は、猫が見つけるまえに一様に病気になつていたか、死にかけていたこともあきらかになつた。そして、そのうちのあるものは、猫のゆけないような場所で死んでいた。

甘南地域は、記録のあるかぎりでは、いままでどんな種類のペストもおこつたことのないことがわかつているし、また一番ちかくでこの病気が風土病になつている場所からこの野鼠が移住してくることも、その距離や障害の点から見て、とても出来そうにないことを示す理由が、十分以上に提出されている（付録一四）。さらにペストが風土病になつている地帯の齧歯類のあいだに、ペストの外部寄生体がふつうあらわれるには、季節がすくなくとも一カ月ほどはやかつた（付録一三）。細菌学的試験

に十分適するように、保存されていた鼠は、たつた一匹きりであつたが、この標本がペスト菌に毒感染していた証拠がえられたことは、上述の目撃者の説明とあわせて、これらの野鼠の集団が、たしかにペストにかかつていたことを、まちがいなく示していた（付録一三一、一四）。この点の証拠は、委員会のなかの実験をする能力のあるメンバーが、瀋陽の中国医科大学細菌学実験室で委員会の全員の立会いのもとに、中国科学者と協力してやつた直接の実験によつて確認された。

証拠の鎖のなかのおもな欠け目は、どんな種類の容器も「爆弾」も見つからなかつたという事実であつた。けれども一九五二年一月、日本の雑誌（サンデー毎日）に、感染した鼠の荷物を地上におろしたのち、あとかたもなく、燃えてなくなるように、強い紙でつくつたパラシュート付き容器の記事がのつていた事実からみれば（付録一七）、たとえ証拠の鎖のこの一つの環が行方不明になつたところで、いままでのべたたくさんの詳しい証拠が無効になつてしまうなどとは、とても考えられない。また別の日本の新聞の報道（講和新聞、一九五二年八月）は、石井四郎の前助手小沢の指導のもとに、齧歯類の大量生産をやる飼育所のあることを、ばくろしていた（付録四一）。

あとはただ、委員会が、十人の農民から瀋陽（奉天）で証言をきいたこと、またこれらの農民を一人一人その家庭に訪ねていつたことを、つけ加えておくことだけが残つている。委員会はまた、この事件がおこつたのち、現地の衛生手配をした伝染病学者、ペスト菌を研究し分離した細菌学者、それに齧歯類の専門的研究をしている動物学者から証言をきいた。委員会は、この場合村民たちがペストにかからなくてすんだのは、この異常な齧歯類がはじめて発見された瞬間からとつた衛生上の予防対策のおかげであり、またその同じ日の正午に、村民たちが、猫と犬を一匹のこらず大いそぎで殺してしまつたおかげであると考えている。その時とつた予防対策のなかには、中国東北で人家の蚤をころすために、ふつう使われているひじように有効な方法もあつた。それは家具をみんな戸外へはこび出した後、土の床や爐の上にうすく乾草や藁をしいて、それに火をつけるのである。そういうわけで、ペストに感染した蚤が、病原菌を人間にうつすことはできなかつた。

そこで、委員会の意見によると、村民がその音をきいた飛行機が、一九五二年四月四—五日の夜間、甘南地区にペストにかかつている、たくさんの鼠をおとしたことには、すこしの疑いものこらない。この飛行機は、アメリカのF八二型双胴夜間戦斗機であつた。

寛(カン)甸(チエン)事件（炭疽病）

委員会は、黒蝿 anthomyiid flies と蜘蛛が、同時に異常出現をした実例をくわしく研究した。一九五二年三月十二日、鴨緑江ちかくの遼東省南東部にある寛甸の町の住民は、正午から半時間すぎたとき、アメリカ戦斗機八機が市の上空を通過するのをみた。こういうふうにアメリカの飛行機が上空を侵犯するのはふつうのことで、ほとんど毎日の出来事になつていたから、それらがアメリカ機であることがわかるのには、何の困難もなかつた。中国軍防空監視隊は、それをF―八六型機とみとめ、その進路を記入した。ところでそのうちの一機が、明るい円筒状の物体を落したのが、あきらかに見られた。そのすぐ後とその後数日間、町の人たちは学校生徒もまじえてその物体が落ちたようにおもわれた東門の向い側の地帯をさがして、たくさんの黒蝿ヒレミア（Hylemyia, sp.）と蜘蛛（Tarentula, sp.）をあつめた。

この事件がおきてから九日ほどして、一人の生徒がさいわい、あの物体が落ちた地点にあいていた浅い穴のなかやまわりから、容器の破片をたくさん見つけた（付録二二、二三）。その地点は小さな島の玉蜀黍畑であつたが、この季節にはその島をかこむ川床は乾あがつていた。いちばん大きな「爆弾」の破片は金属であつたが、いちばん多かつたのは細い穴のたくさんあいている、うすい石灰質の物体であつた。それらが、どんな性質のものであるかは、すぐにはわからなかつたが、後ではつきりした。それについては別に論じることにする（九二頁）。その発見の場所には、翌日、二人の十分な能力のある昆虫学者が検分にいつたが、この二人はもうそのまえ四日間その附近をさがしていたのである。かれらは、またたくさんの蝿をあつめたし、熱い湯で雪をとかしながら、容器の破片をできるだけ多く注意ぶかくあつめた。

雪があつたので少くとも畦と畦とのあいだの溝には雪があつたので、まわりの温度がひくいと不精になる昆虫どもは、一週間以上たつてもその落下地点のすぐちかくからはなれなかつた。またそのために（同時におとされた）ひじようにたくさんな鶏の羽が、そのおなじ地帯におなじようにそのまま残つていた。昆虫とアラクニド蜘蛛の一種がその時出現したのは、季節的にみて変則であり（上述三

七〜四四ページをみよ）、また前者がそこに出現したのは、動物学上の種からみて地域的にも変則であつた（上述三七〜四四ページをみよ）。

中国側のやつた権威ある細菌学的試験によると、昆虫にも、蜘蛛にも、羽にも、炭疽病をひきおこす病原体（炭疽菌 Bacillus anthracis）がくつついていることが証明された（附録一二）。炭疽菌が節足動物の中または上にいるということは、ひじように突飛な現象とかんがえねばならない。それが鶏の羽にたくさんくつついていることは、それほど注目すべきことではないが、中国北部や中国東北（満洲）で手当りしだいにあつめた対照標本の羽を、中国側で細菌学的に試験したところでは、炭疽菌は見つからなかつた。そのうえ羽は、昆虫の移住を安全にするためにつめただけのものであるかも知れない。とはいうものの、ほかの実例では、炭疽病に感染した羽だけがばらまかれたことのあつたのを、記憶しておかねばならない。この事件の結果として、この町の中または付近に、炭疽病にかかつた人のあつたということについては何の報告もなかつた。

上にのべた事実から、委員会としては、三月十二日遼東省のこの小さな町の附近に少くとも一機の

アメリカ飛行機が、炭疽菌をつけた昆虫と蜘蛛を、少くとも一つの特殊型の容器でおとしたのだと結論するほかに仕方がなかつた。

遼東と遼西の事件（呼吸炭疽病器）

委員会は、鴨緑江をこえてやつてきて、またその向うへかえつていくアメリカ機が、さまざまな種類の物体をおとすのを見た一群の実例をくまなく研究した（付録二七）。現地の目撃者がすぐにさがしにいつたとき、落下地点とおもわれるところには少しも容器が見つからなかつたが、ほかのもの、とくにたくさんのプチヌス・フル（Ptinus fur 種の標本虫へふつう貯蔵した穀物その他の乾燥物の害虫）か、または綿毛だらけの鶏の羽のかたまりが見つかつた。ある場合にはたくさんの家蝿 Musca vicina がとつぜんあらわれたが、これはまだ雪が地上につもつていたときなので、例のように季節的にみてひどい変則の現象であつた。標本虫がいたということは何も季節的変則ではないが、それが戸外に、しかも真つ昼間ひじようにたくさん出現するというのは生態学的にみて異常であつた。これら

三つの生物体は、みんな炭疽菌で汚染されていたのを中国細菌学者が見つけた。そして、それらから取り出した種々の桿菌は、それらのくつついていた物がちがつていたのに、醗酵試験でみんなまつたく同じ態度をしめした――これは異常で疑わしいことであつた。

二十四人の目撃者を徹底的にしらべたが、そのうちの幾人かは飛行機からものが落ちてくるのを見た人たちであつた。中国防空監視隊の観測記録はどの実例についてもみんなそろつていたが（図表）、その情報によると侵入飛行機はだいたいF―八六型戦斗機で、ただ一回だけB―二六型爆撃機が例外として一機あつた。一つの実例では、数人の人たちが、大きな赤い魔法壜のようなものの投げおとされたのを見たし、それは地上三十フイートぐらいのところで爆発し、皮や角を燃やすときのようないやな香がした（容器についての節をみよ）。もう一つの場合については貴重な証言があつた。その証言は、落下地点とおもわれる場所には容器がぜんぜん見つからなかつたが、その代りまさにその地点からたくさんの羽がだんだんと風に吹きちらされ、羽のちらばつた三角地帯がだんだんとのびひろがつている有様を説明していた。この場合、容器についての説明は、寛甸でつかつた自滅式「卵殼」型容器をつよく思いださせるものがあつた（付録二二と下述九二ページ）

遼東、遼西両省のたくさんの場所の事件をしらべるためには、飛行機、容器、出現した生物体、細菌試験についての証拠のほかに、呼吸器炭疽病と出血性炭疽脳膜炎という人間の致命的な病気についての具体的でよく分析された資料もあつて、いまではたくさん証拠ができている（付録二七）。これらの病気については鉄道員、輪タク運転手、主婦、学校教師、農民の五つの実例をしらべた。これらの人たちのかかつた病気は、みんな同じような急激な進展をしめし、死体解剖とその後の組織学的検査では病理学的に見てみんな同じような像をしめした。死んだ人のうち二人の原因は標本虫であつたようだしほかの二人は蠅と羽であつたように思われた。委員会は、中国側の科学者同僚のくだした診断とかれらの指示した証拠にまつたく満足であつた。その上、証人の調査（付録二八）はそれらの文書自体（付録二七）にかけていたものをみんな明らかにしてくれた。つまり、五人の犠牲者のうち四人までは、組織的な捜索の全般に参加して昆虫や羽をあつめたばかりか、大部分の人たちがやつていた正しい予防法をやつていなかつたことがわかつたこと、つまりその四人の男女たちはマスクで気道口を守つていなかつたし、手袋をしないでまた鉗子（やつとこ）をつかわないで生物体をいじつたことを明らかにしてくれた。顕微鏡のもとで細かにしらべてみると、標本虫 Ptinus は、気道を通じて炭疽病を伝播させるのに、よく適しているらしいことが明らかになつた。というのは、それは、そ

の甲のうえに、もろいキチン質の棘状突起をたくさんもつており、人間がそれを吸いこむことができるからであるが、この事実は文書ではあきらかに看過されていた。

しかし、これらが炭疽病に感染した生物体によつてひきおこされた唯一の死亡例ではなかつた。くわしい病理学的分析をくわえた五人の実例はただ見本として提出されただけのものなのである。またこの地方でこの病気がおこるのは、これまでのところ非常にまれであつたことをよく理解していないと、この五つの実例を正しく理解することはできない。提出された統計資料（付録二七、二八）によると、近年中国東北では、典型的な皮膚または小腸疱炭疽病はひじようにめずらしいばかりか、出血性脳膜炎をおこす呼吸器炭疽病はまつたく存在していないことが示されている。

炭疽菌を細菌戦につかうことを提案した文献のあることは有名である。自然状態のもとでは、人から人への伝染はほんのまれにしかおこらないから、それを自然発生的に流行させることは容易でないが、しかし、この桿菌はひじようにたくさんのものに寄生することができるし、また毒性のある場合には高度の伝染性があり、また四囲の条件にたいする、とくにつよい抵抗力をもつていて、長い間そ

の地方を汚染することができるという長所がある。そのほか、この病気は、呼吸器を通じて伝染するとき、ひどく急性であることを付けくわえておかねばならない。というのは、上述の犠牲者はみんな突然病気でたおれるまでは、わりと異常がなく、倒れたのちには、四十八時間以内に死んでしまつたからである。

炭疽病が気道を通じて伝染するということは、アメリカのやつた細菌戦についての研究との関係からみて大きな意味がある。というのは、一九四七年にデトリツク細菌兵器工場から公表された研究(付録二七、三五)は、合成培養基で培養すると新しい種類の炭疽菌をえることができるし、それらはとくに高い毒性をもつているばかりか、気道を通じてとくによく伝染することを示しているからである。

持ちだされた証拠を基礎にして、また自分自身の調査と、ひじように多くの専門家や素人の両方の証人を長い間しらべた結果を基礎にして、委員会としては、炭疽菌に汚染されたさまざまの生物体が中国のこの二省の方々にばらまかれたし、そしてそのために、この地方ではいままで知られていなか

つた致命的な伝染病、つまり肺炭疽病と、それによつてひきおこされる出血性脳膜炎がたくさんひきおこされたと結論するほかなかつた。疑うことのできない目撃者の証言は、それらの感染した物体をはこんできたのは、アメリカの飛行機であつたことをしめしていた。

大同事件（コレラ）

（北）朝鮮保健大臣がくわしい注意をはらうように委員会にすすめた事件の一つは、コレラによるある種の死亡例で、これは一九五二年五月いらい農村地帯におこつていることの例証になるものであつた。操縦士がなにかを見つけようとしているかのように、一時間以上も一台の飛行機が頭のうえを旋回している音のきこえていた夜（五月十六日）がすぎて朝早く、村の若い婦人が山腹で草をつんでいるとき、ある種の、蛤をいれた藥包を見つけた。かの女はいくつかの蛤をうちに持つてかえり、それを夫といつしよになまでたべた。そのおなじ日の夕方、両人は突然病気になり、次の日の夕方までに両人とも死んでしまつた。医学上の証拠は、死亡の原因がコレラであることを示していた（付録二

九）。そのほかにも、現地の郷土防衛軍がその山腹で蛤の包を見つけたが、朝鮮と中国の専門家のやつた細菌学的試験は、蛤がコレラ菌にひどく感染していたことを示していた。

この事件をくわしくしらべれば、しらべるにつれて、事件の全体はますます異常なものになつてきた。第一に、そのように感汚した海産の軟体動物（Meretrix meretrix）が田舎の真ん中の山の上に出現するということは、ひじように不自然な現象と見るほかない。そのうえ、この二人がコレラで死んだことは伝染病学的にみてひじように異常であつた。委員会は、提出された証拠によつて、コレラが朝鮮の風土病でないことを確信した。というのは、過去四十年間にたびたびコレラはおこつているが、それはいつでも海口から入つてきたものであることを跡ずけることができたからである。しかし、こんどの場合は、きつすいの農村地帯の真ん中であつた。その上、これまで五月に朝鮮でコレラが発生したことは、今世紀になつてたつた一回しかなかつた。つまり八月以前に発生することは、めつたになかつたのである。それから、見つけた蛤にもいくつかの特異な点があつた。朝鮮では蛤を売るのに、ふつうは藁につつまないし、それがその時現われたのも、ふつうの季節より一月ほどはやかつた。じじつ戦争がはじまつてからというもの、蛤は少しも市場に出まわつていなかつた。そして、

もしだれかが山腹の方々にわざわざその包をおきにいつたとすれば、厚い石灰質の蛤の殼の多くが、なぜ割れていたかを説明することはむずかしい。

けれども、その地域がどんな場所であるかをしらべてみれば、事実の連鎖に一道の光をなげかけることができる。蛤の見つかつたところは、その山の頂にある水揚げ場から約四百ヤード、いくつかの貯水池や泉の湧く池から約千ヤードばかりはなれた場所であつた。その水揚げ場は、これらの貯水池や池の水を汲みあげて、いくつかの海岸部落や港町に分配し、その水の一部は飲用水になるのである。蛤が現われた夜のまえの晩、アメリカ機は水揚げ場のちかくの浄水施設を小型爆弾で正確に破壊したが、ポンプ自体は被害をうけなかつた。委員会が自分でしらべた現地住民のくわしい証言（付録三〇）によると、蛤があらわれた第二回目の空襲の夜は、くらくて風があつたことがあきらかになつた。これらの事実はみんな、アメリカ側が、飲料水貯水池を汚染しようと計画的に注意ぶかくたくらんだこと、しかし蛤をおとした夜は天候状態がわるくて、操縦士が貯水池のありかを見つけだすことができなかつたので、その計画の大目的は失敗したことを明らかにしている。問題のその夜、貯水池は鏡のような水面を見せていなかつたのであろう。

とはいえ、海にすむまた少くとも河口にすむ瓣鰓類の軟体動物の一種類が、それを淡水源にいれて、その淡水源を汚染するのに適していると考えたのだとするのは、やはりおかしなことであるかも知れない。ところが、ひじように興味ある証言は、コレラ菌が塩分の好きな有機体であることを、委員会に思いおこさせたばかりか、日本の研究文献のなかには、海水産軟体動物瓣鰓類は、コレラの生長の媒介物として、ひじように適していることを示しているもののあることを明らかにした（付録三〇、三一）。この点は、この種の細菌戦の計画を復元するための最後の環になるものであつた。蛤は淡水のなかで浸透圧の変つたために、徐々に死んでゆくが、その間、それはコレラ菌にとつて自然の培養器として役だちついで死ぬると、コレラ菌を放散して、およそ三十日ぐらいのあいだ飲料水を汚染するのである（付録三〇）

そこで、委員会としては、アメリカ空軍部隊が、あらかじめ注意ぶかくたてた計画にしたがつて、まず大同浄水施設を破壊し、そのときポンプはこわさずに残しておき、ついで飲料水貯水池をコレラで汚染しようとしたものであると、結論するほかなかつた。死んだあの若夫婦は戦禍の荒廃のために貧乏になつていたので、その汚染の媒介にしようとした蛤のいくつかを軽卒にもたべたのである。

この実例は、蝿がコレラの人工的運搬者になることについて、別の場所（一一九〜一二六ページ）でのべた証拠との関係でも研究すべきものである。

容器または「爆弾」の型

さて容器または「爆弾」（かりに、ほとんどまたはぜんぜん爆発物を含んでいない兵器に、この言葉がつかえるとしたら）の型について、いくらかの注意をはらうべき時がきた。いろいろの時や所で、ことに瀋陽と平壌で、委員会はひまを利用し、生物体を空からおとすのにつかつたさまざまの容器をしらべることができた。それで、委員会のメンバーは、プラーグ文書のなかにのべてあることを立証することができたし、またそれにのべてある方法のどれよりも、もつとうまく工夫してある新しい方法をひじように詳しく研究することができた。すぐ後でよくわかるように、委員会の仕事は、ある一つの事情のために容易ではなかつた。その事情というものはまもなく明らかになつたが、新しい方法のなかには、「自滅式容器」つまりこなごなにこわれて発見が容易でない容器、またはその中味をお

ろしてしまうと自動的に引火して消えてなくなる容器のあることであつた。その上、プラーグ文書ぜんたいを通じて、それに委員会のあつめたその後の証言のなかにさえ、一すじの避けがたい混乱があつた。この混乱は、容器がおちてきたときにその場に目撃者がいた場合にさえ、その目撃者がかならずしも容器をさがし出せなかつた——その理由の一部はもちろん、何をさがしていいかまるでわからなかつたことである——ことに原因があつたし、また容器を見つけたときでも、それについての目撃者の説明が、当然必要なだけくわしくなかつたことに原因があつた。この混乱は不幸にも空軍将校捕虜の証言によつても一掃されなかつた。というのは、操縦士と航空士というかれらの地位からみて、かれらは爆弾や容器についてくわしく細かい知識をもつ資格がなかつたからであろう。またそれらの操縦士が出席した講義の一つで（クイン／アシフオーク、下記一六二ページと付録三八をみよ）、「われわれの爆弾はまだ実験の段階にあるし、爆弾にもいろいろの型がある」というはつきりした言明がやられている事実を記憶しておかねばならない。それでこの節の内容は、適当な保留条件つきで受けとつていただきたい。

容器には、さまざまな形と組立てのものがあるが、それはそのさまざまな用途によるものであろう。また、病源菌がついた生物を目標地点の上空に直接ばらまくこともできるように思われる。そこで以下では、まず、この方法、つまり容器をぜんぜんつかわない噴撒方法からはじめて、自滅式容器でおわるのが便利であろう。その中間には、あまり専門的な研究をへていないような仕掛の容器がはいるが、それにはパラシュートつきのものもあればそうでないものもある。

(一) 噴撒法。 NCNA／八五、四ページ（中国科学調査団朝鮮分団の報告）では、中国義勇軍の一兵士は、二月十一日アメリカ機一機が鉄原で九百フィートの高さから昆虫を噴撒させているのを、現実に見たという主張がなされている。これはアメリカ機の通過後6×3マイルの長方形地帯の雪のうえに、季節はずれの昆虫がたくさん見つかつたという事実から推測した以外のものではないように思われる。しかし、四人のアメリカ操縦士の証言はまつたくはつきりしたもので、別々の五つの講義で、噴撒がやれるし、またやられるだろうときいたという点で一致している。これらの供述の一つには（オニール、ISCK／四、付録三九）、飛行機のなかに取りつけた装置の図面があり、もう一人（クニス、ISCK／五、付録四九）は、六月から噴撒をはじめるということを、きいたとのべてい

る。しかし、前者の証人は、少くとも二月十八日から噴撒をはじめたと信じられるという理由をのべているから、あの中国義勇兵の推論は正しかつたのかも知れない。

噴撒でばらまく昆虫の種類についていえば、蚊のような弱い生物にはこの方法が適当でないことは確かなようであるが、蝿にはやれそうだということを指摘している議論もある（付録一二）。バクテリア、ヴイールスまたは毒素が、空中撒布の形でばらまかれるのは、もちろんこの方法であろう。

（二）非爆発体と紙包。いくつかのプラーグ文書は、その中から昆虫がでてきたいろいろな色の紙包の発見について説明している。また二月十一日、鉄原の中国義勇兵は、三機のアメリカ機が非爆発物体を投げおとしたのを見たが、それは高さ八インチ、直径四インチの円筒状の黄色い紙包であることがわかつた（SIA／一、六ページ、SIA／四、五ページ）。その付近のほかの場所には、昆虫をいれた 4×4×1/4 インチの矩形の灰色の紙包があつた。三月四日には平壌で白い紙包が（NCNA／八五、八ページ）、三月十日には昌道で褐色のが（NCNA／八六、六ページ）見つかつたといわれている。捕虜操縦士（イノツク／ウイルソンとクイン／アシフオーク、下記一〇五ページをみ

よ）の出席した講義のうちの二つでは、病気に感染した昆虫をつつむために紙をつかうことが説明された。かたい昆虫はただ紙にくるんだだけで低空からおとせるであろうが、紙包はすべての場合に金属製のビラ用容器、つまり「爆弾」のなかからでてきたものであるというのが、むしろ当をえていそうに思われる。この爆弾は空中で破裂してひらくのである。では、それに移ろう。

（三）空中爆發可変時限信管つきビラ爆彈。この容器の型は、朝鮮中国で発表されたすべての細菌戦の説明のなかに、いちばん多くあらわれるもので、これら両国当局のあつめた容器のうちで、たしかにいちばん普通のものである。委員会のメンバーは、この型の見本をたくさん見た。この爆弾はふつうのアメリカ製五百ポンドHE爆弾とだいたい同じ大きさと同じ形であるが、その重さはやつと百五十ポンドぐらいで、手で飛行機に積みこめる（付録四一）。この爆弾は円錐形の口ばしをもつておりその尖端は時限信管になつている。この口ばしの中は小さな空室になつており、その下につづく円筒形の爆弾の胴体は、三つの鋼製隔膜で四つの室に仕切られている。囲壁は縦にわれていて、蝶番にとりつけた片一方の半分がひらき、希望する瞬間にその中味を投げだすことができるようになつている。いちばん下の室の床から下では、囲壁はもう一遍小さくなつて、円錐形の空室をつくり、その空

室の側面から四つの尾ひれがとびだしていて、その底にはパラシュートをつけたときに、パラシュートがでるくらいの大きさの穴があいている。公表されている爆弾の寸法は、いろいろとちがつているが（NCNA／八五、SIA／一三、ISCC四など）、委員会がみ、また捕虜操縦士が説明した見本は全長約四フイート、直径一フイート二インチであつた。囲壁は インチの厚さの鋼でつくつてあり、その四ツの室の全容量は一四・五ガロンくらいであつた。時限信管の長さは三インチよりすこし長かつた。標識は「ビラ爆弾―五百ポンドM一〇五組―アメリカ時限（―信管）―無内容」と読めた。捕虜飛行士のした説明によると、（付録三七、四〇）、爆弾の扉は、ほぼ百フイートの高度でひらき、だいたい三百フイートの直径にちかい面積の土地に内容をばらまくものと推定されている。

目撃者の典型的説明（付録）は一軍医のそれであるが、この軍医は、三月二十六日寧遠上空を旋回していた一機のアメリカ機が、急降下で二つの爆弾をおとしたのを見た。両方とも爆発のとき二つにわれて、長さ二百ヤード、巾百ヤードの地面に昆虫をいつぱいばらまいたが、その最高の密度は爆弾の破片がつくつた穴（深さ五インチ）のまわりの一平方ヤード百匹であつた（NCNA／八五、五ページ）。委員会は自分で目撃者をしらべる機会があつたが、その多くは農民で、これらの農民は遼東

省長白縣で、三月二十七日と三十一日に飛行機のおとしたこの種のビラ爆弾が、虫にとりかこまれているのを三つほど見つけた（ISCC／四、SIA／一〇）、また平壌で、委員会は、これらの容器が取りまとめてあるのを視察したが、ここにはこの容器についての細目の表をのせておくことにする（付録二六をみよ）

号数	月日	時刻	所	道	摘要
二〇八	二、二六	夜	平原	平安南	ハエ、温度零下四度
二〇九	二、二八	暁	金化	江原	ハエ、300×300フイート 温度零下三度
二〇五	二、二八	午後八時	平原	平安南	ハエ
二一〇	三、一	朝	信川	黄海	ハエ、落下地点を中心の円形に、二千七百平方フイート、温度零下一度
二〇一	三、五	真夜中	文川	江原	ハエ、600×300フイート、昏睡
二〇七	三、一〇	午前四時	成川	平安南	ハエ、落下地点を中心の円形に

直径百五十フイート、最大密度一平方ヤード二十—三十迄

二〇四	三、二一	夜	文川	江原	ハエ
二〇六	三、二六	午前九時	寧遠	平安南	ハエ、落下地点中心の円形に面積百平方ヤード

上記については、後はただ四人の捕虜飛行士が、その出席した五つの講義のどれでも、この型の容器については可なり詳しい説明をきいたと、委員会に証言した点をつけくわえておけばいい。これらの飛行士は四人とも、かれらの飛行機につみ、かれらがおとした細菌爆弾は、この型に属するものであると信じていた（付録三七、四〇）。

周知のように、ビラ容器の使用については、国際新聞界で論争がもちあがつているが、アメリカ化学部隊の司令官は、それが生物体をはこぶのによく適していることを記録にのこしている（SIA／九、一ページ。NCNA／八五、五ページ。ISCC／四）。

（四）空中爆發プロペラつきビラ爆彈。この容器は、上述の一変種であろう。口ばしの信管には小さな受動空中推進器つまりプロペラがついており、それが一定回数回転すると爆発がおこるものと思われる。この型については、委員会が活動をはじめるまえに公表された文献には、ほとんどのべていないし、それをつかつた証拠もない。けれども、捕虜飛行士のうけた講義の一つのなかには、この型についての説明があつた（オニール／マックロリン、下記一〇五ページをみよ）。

（五）プロペラでひらく扉つきビラ爆彈。この型は、上記二種とその外見はおなじであろうが、口ばしの受動プロペラつまり空中推進器は、それが予定の回数を回転すると、爆弾にたてにとりつけてある扉をつぎつぎにひらく仕掛になつているようである。扉がひらくと、包が風にふきとばされる。この型についても、プラーグ文書は何ものべていないし、委員会も直接の証拠は見つけなかつたとはいえ捕虜飛行士のうけた講義の一つではこの型の説明がやられている。（クイン／アシフオーク、下記一〇五ページをみよ）。

（六）墜落後ひらく扉または側面つきビラ爆彈。この型では爆弾の半面または、半面にある一連の

扉が、墜落の衝撃をうけたときにだけ、電池が作用してひらく仕掛になつている。つまり、墜落の衝撃で、電池のなかの隔膜がやぶれて、酸が極板にちかづいてゆくのであろう。この型は、プラーグ文書ではのべていないし、それが存在する直接の証拠もなかつた。しかし、捕虜飛行士が出席した講義の一つでは、これの説明があつたし（クイン／アシフォーク、下記一〇五ページをみよ）、この飛行士はのちに、その口供書のなかでそれをスケッチすることができた（付録三八）。これらの説明からみると、この型の爆弾にはパラシュートがついていたにちがいないと思われるし、かれらのきいた講義のなかで、病気に感染した昆虫をパラシュートでおとすといわれた容器は、この型であつたかも知れない（オニール／マックローリン、クニス／ホレン、クニス／マックローリン）、その一人（付録三九）は、のちにこのパラシュート容器がどんなふうな外観であるかをスケッチすることができた。

（七）絹パラシュートつき紙またはボール紙円筒。 委員会がじつさいに見た只一つのパラシュート容器の型は、照明弾につかうのに似ているといわれているものであつた。それは厚さ $\frac{1}{8}$ インチの側壁をもつたボール紙の円筒で、長さ一フイート二インチ、直径五インチであつた。われわれのみた見本には "USC 5/1—1—1952—Lot 100—F—6"（アメリカ容器、五／一—一九五二年—組一〇

〇F－六）としるしてあつた。それについていた絹のパラシュートは、わずか二フイート三・五インチの直径であつた。もはや指摘されているように（NCNA／八五、五ページ）、その大きさはふつうの照明弾パラシュートのわずか十三分の一で、ながい間空中に浮んでいることはできまい、と推定されている。また、ボール紙にぜんぜん焼跡のないことが指摘されているが、これは委員会のみた見本についてもたしかにそうであつた。この容器のみつかつた一つの場合には、それがどうも蚋を投下したものであつたらしいことは、たいへん意味のあることである。（江東、三月二十六日、NCNA／八五、SIA／一三）。この種の弱い虫（蚋 Ortho cladius）または蚊をはこぶには、このような方法をつかうのが、たしかに便利であろう。

（八）紙パラシュートつき紙容器（自滅式）。この興味ある型については、委員会も実物をみなかつたし、捕虜飛行士も情報をくれることはできなかつた。しかし、こういう仕掛のものは、一九五二年一月サンデー毎日にのつた榊亮平少佐の論文のなかにくわしく説明してある（付録一七）。その説明によると、この容器は強い紙でできていて、いくつかの室があり、また一定のおもりがつけてあり、それに取りつけてある信管は、適当な瞬間がくると容器と紙（または絹）パラシュートの両方に火がつ

くようになつている。榊の説明によると、容器が地上にとゞいてひらくと、生物体（ペスト感染の鼠）はしずかに逃げだすことができ、その後、たつぷりと時間をおいて火がつき、跡方もなくなつてしまうというのである。しかし、この機械は、地上二十フイートか三十フイートでその積荷をおろして軽くなつてからのち、火がついて消えてなくなるまでに、さらに遠くへ吹きながされるようにすることも容易であろう。榊がこのペスト感染鼠の容器使用についてとくにのべている事情を考えると、甘南事件には、この種の容器がつかわれたのではないかと考えたくなるが（上述六三ページ）、しかしそれについての特別な証拠はない。齧歯類を投下するために紙容器をつかう場合には、それらが容器をかみやぶつて出ないようにするため、動物どもをすくなくとも半麻酔状態にしておくことが必要になつてくる。委員会は、ただそういう点に注意を喚起するためにだけ、これらのことを記録にとどめておく。

（九）土器または陶器の爆弾型容器。 第二次大戦中、日本の細菌戦部隊は、ハルビンちかくの特別工場ですくなくとも二つのちがつた大きさの「陶器」（じつは土器）製爆弾型容器をつくつた。その見本（大きい方は長さ約二フイート六インチ、小さい方は約一フイート六インチ）を、委員会は瀋陽

（奉天）でしらべた。この種の容器は、上記の論文（付録一七）で榊がやつているように、日本ではまだ細菌培養用に推奨されているが、委員会は朝鮮や中国で一九五二年にそれがつかわれた証拠を何もみつけなかつた。この容器は、むしろあらゆる容器の型のうち、いちばん巧みな、見つけにくい、「卵殻」容器の先駆者としての地位をしめているのである。

（一〇）人造卵殻容器。 三月廿一日遼東省寛甸市外で、石灰質容器の破片二百以上と帽子型の鋼板一つ、それにそのくぼんだ表面にとりつけた金属軸一本をみつけた。その時の実情（ＩＳＣＣ／三に報告されている。付録二二）は、これらのものが、十二日アメリカ機のおとした容器の残骸にちがいないし、その中に炭疽菌のついた黒蠅や蜘蛛、鶏の羽をいれておとしたのだと考えるべき理由があることを示していた。この金属片と石灰質破片は、中国科学院近代物理学研究所と応用物理学研究所がくわしく研究して、この容器の原形を復元しようとした（付録）。

こうして、もとの容器は円筒状であり、すくなくともその一方の端は円蓋形であることが推察された。全長は一フイート三インチ以上で、軸の長さは十一インチであつた（付録二二）。鋼帽板の嵌入

部の半径は五インチ足らず、板の直径は六五インチであつた。容器の石灰質胴体の半径は五・五インチであつた。石灰質側壁の厚さは一・一六インチよりすこし多く、外面の全部がアルミニューム塗料でぬつてあつた。X光線でしらべたところ、側壁の物質はおもに炭酸カルシューム であることが証明された。分光器でしらべてみたら、それにふくまれていた材料はおもに方解石であつたが、いくらかのマグネシュームもはいつていた。それから、ある種の方法によつて、このもろい方解石で箱をつくり、化学検査をしたら、有機物がふくまれていることがわかつたが、それはおそらく方解石粉を粘結するためにつかつたものであろう。こんなにもろい容器が、飛行機をはなれるときの衝撃にどうしてたえるかということは、まだ明らかになつていないから、事実にたいするわれわれの理解には、まだ何かの欠陥がある。

寛甸事件（ISCC／三）は、もはやSIA／三、三二ページとSIA／八、六ページに部分的に報告されていて、委員会は、その保存された石灰質破片をしらべることができた。しかし、それはこの種の事件のうち、委員会の注目をひいた只一つの事件ではなかつた。さいきん六月六日、碧潼（北朝鮮）ふきんに昆虫を投下したときは、フットボールの二倍くらいの大きさの銀の球が、むしろゆつ

くりとななめにおちてきたといわれている（付録二四）。これも上記の容器とおなじものであることは、ほぼ疑いがない。その上、北井子事件（ISCC／五、SIA／六、一ページ）についての一人の目撃者の説明は、アメリカ機が光る物体をおとしたとのべている。この場合にも、炭疽菌のついた大量の羽がおちてきた。その他の証言のなかにも（たとえばSIA／一〇、一ページ）、この種の型についてのべたものがあるが、それがたしかにそうであつたかどうかは、はつきりとしていない。いずれにせよ、委員会としては、三月と六月に鴨緑江の両側で、アメリカ軍がこの種の容器をつかつたことは、疑いがないと考えている。

（十一）その他さまざまな容器。 あとはただ、上にのべた以外のいく種かの容器もつかつた証拠がでていることを、つけくわえることだけが残つている。齧歯類については、円筒形の金網籠が（NCNA／八五、五ページ）と木の箱（NCNA／八五、六ページ）をつかつたといわれている。じじつ、こういうものが空から降つてきたとすれば、それはおそらくある種のパラシュート爆弾の中味の一部ではなかつたかとおもわれる。大同のコレラのときは藁包であつた（付録二九）。また手榴弾型の爆弾もあつたといわれている（NCNA／八五、六ページ、SIA／一三）。しかし、委員会は、

それを見なかつた。とはいえ、委員会のメンバーには、平壌ふきんで緑色の透明な昆虫容器をしらべる機会があつたが、これは弾丸のように打ちだされたものだといわれていた（NCNA／八五、五ページ、六ページ、SIA／一三）。細菌戦に砲兵が参加することは、アメリカ飛行士捕虜の出席した少くとも二つの講義のなかで言明されている（イノツク／ウイルソンとオニール／ウイリアムズ、下記一〇五ページをみよ）。しかし、委員会は、この種のやり方について榊がのべているようなものが、実際につかわれた証拠は見つけなかつた。榊がのべている方法というのは、ウエルチ菌（ガス壊疽）や破傷風菌をふくんだジエリーを榴霰弾にぬることである（付録一七）。とはいえ、中国軍塹壕の付近に一時しよつちうあらわれていた綿入れの冬服用の綿には、パラチフス菌がくつついていたことがわかつた（DGMS、CPVEからの通信）。

（十二）投下した生物の地上撒布。 この報告の付録やプラーグから発行されたこれまでの文書をよむ人たちは、いつでも目撃者たちが、ビラ容器「爆弾」の――ふつうほとんどひん曲つていない――残骸を中心にして円形の昆虫密集地帯があつたということを、話しているのに気がつくだろう。これはおそらく昆虫が、容器のひらいた真下の地点のまわりに、たいていいつでも集中的に撒布されるこ

とを意味するものであろう。

これらの場合のほかに、委員会は、投下された物体の地上撒布について二つの興味ある実例に注目した。その一つの場合（ISCC／五）（付録二七、二八）には、羽が落下地点から風にふきとばされて、長さ半マイル、底辺1/4マイル足らずの三角地帯にひろがつた。この三角地帯はだんだんと長さも長くなり、巾もひろくなつていつた。容器もその破片もぜんぜん見つからなかつたが、この場合の爆弾はおそらく卵殻型であつたものと思われる。もう一つの実例では、ひじようにたくさんの人蚤が、草木の生えていない、山腹で見つかつた（ISCK／三、付録二〇、二一）。この昆虫群は30ヤード×10ヤードの楕円形の地帯にひろがつていた。そして、その密度は、楕円の二つの中心つまり焦点の一つのあたりがいちばん高かつた。これはおそらく、楕円の長軸のうえを移動したある種の物体、おそらくパラシュート容器によつて、蚤が投下されたことを示すものであろう。

捕虜諜報員の証言

朝鮮当局は委員会にたいして、戦争がはじまつて以来、諜報員が北朝鮮におくりこまれていて、細菌戦についての疫学的情報をあつめて送るというはつきりした目的をもつて、仕事をしていることを知らせてくれた。これらの諜報員の多くは捕虜になつたが、かれらの自白はアメリカ側の諜報組織とこれの諜報員に命令された活動に大きな光を投げかけた。もはやSIA／一七のなかに、ある諜報員、たとえば一人の中国人と一人の朝鮮人とについてのくわしい情報が公表されている。

委員会のメンバーには、これらの諜報員の一人とながい時間会見する機会が平壌であつた（付録三六）。この青年は学校を中途でやめ、一九四五年南朝鮮政府の「青年団」に参加したが、アメリカ軍がついに撤退するとき、それについていつた。かれが北朝鮮に反対したおもな動機は、あきらかに政

治的信念よりも、むしろちつぽけな個人的利益であつた。

ほかに生活する道もなかつたので、この証人はアメリカ軍の補助情報部隊に参加した。かれは一九五一年十二月から一九五二年三月までのあいだに京城の「K・L・O」という組織でうけた政治上、軍事上、衛生上の訓練について説明した（付録三六）。その組織で、かれは、ほしいとおもう情報を手に入れる技術をおしえられた。細菌戦がはじまつたのは、まさにこの期間であつた。かれは二月のはじめ頃、たくさんの予防注射をされたが、それがどんな性質のものであるかは知らされなかつた。かれは出発の直前まで、外国軍の将校とはぜんぜん接触がなかつたが、いよいよ出発というとき、アメリカ軍の少佐が通訳を通じてかれに指令をあたえた。その指令のなかでは、かれの活動すべき特別の地域が指定され、アメリカ軍が知りたいとおもう病気の精密な細目があたえられた（チフス、ペスト、コレラ、脳炎、赤痢、天然痘）。この証人は、北朝鮮の統計資料の編集制度をおしえられ、できれば保健省その他の政府機関と接触してそれを手にいれ、必要とあればそれを盗みだせとの命令をうけた。またかれは、食べ物にとくに注意し、昆虫が伝染病をひろめた場所で夜をすごさず、煮たて水以外はのむなといわれた。「北朝鮮は病気でいつぱいだ」と、かれはきかされた、「しかし、おまえ

の注射が大丈夫おまえを守るだろう。」

そこで、証人は三月二十九日北朝鮮にもぐりこんで、五月二十日つかまるまで、つれていつていた無線電信技師といつしよに活動した。質問にこたえるとき、かれはむしろ口数がすくなかつたが、それは協力者をかばうためのもののようであつた。かれは、北朝鮮の保健要員との接触には、ほんのわずかしか成功しなかつたし、アメリカ軍司令部には、ほとんど、いやぜんぜん情報をおくることができなかつたといつた。

この証人は、北朝鮮に不法入国をするまえには、細菌戦をやつていることについて、何の示唆もうけていなかつたことを明らかにした。かれはただ、北朝鮮にはたくさんの伝染病があり、南朝鮮の軍隊は「いちばん近代的な科学兵器をつかつて、いい成績をあげている」ときいていただけであつた。かれが細菌戦について知つたのは、警察の告示を読んだのがはじめてであつた。

委員会としては、この証人の態度と、その使命やうけた指令についてのかれの証言とには真実性があること、この証言をうるためには、肉体的にも精神的にも、すこしの圧迫もくわえる必要はなかつたということに意見が一致した。そのほか、かれはむしろ、金を目あての傭兵的人物であるように思

われた。委員会としては、戦線の向う側から疫学的諜報員をおくりこんでくる公算がないとは考えなかつた。委員会は、この諜報員の任務が、細菌戦の効果についての情報を提供するにあつたことをみとめた。この結論は、アメリカ軍の積みかさなる罪証の塊に、あらたに一つの罪証をつみくわえるだけのものにすぎない。

捕虜飛行士の證言

一九五二年一月十三日、アメリカ空軍の、B―二六爆撃機一機が、朝鮮の安州上空で打ちおとされた。五月五日までに、その航空士K・L・イノック中尉と操縦士ジョン・クイン中尉は、じぶんらが細菌戦に参加したことをみとめたすこぶる長い供述をして、それが北京から世界に発表された。先にのべたように、これらの文書はSIA／一四と一五にそれぞれおさめてあり、またプラーグで発行された小冊子のなかにも、その原稿の石版刷りといつしよにしておさめてある。そのうちの細菌戦に関

係のある部分はこの報告書の付録にもいれておいた。SIA／一七と一八の両文書も参照すべきであるが、これらの両文書のなかにくわしく記してあるさいきんの会見記は、技術的、科学的にほとんど新しい証拠をつけくわえていない。

これら飛行士のおもな陳述のうち、大切なのはどの点であるか。まず第一に、両将校とも日本と朝鮮で細菌戦の方法についての秘密講義に出席せねばならなかつた。これらの講義は、極秘の情報をふくんでいるとの印象をかれらにあたえたが、培養細菌を直接くつつけたり噴撒させたりする方法、生物学的に、また機械的に病気を伝達する昆虫の使い方、齧歯類をパラシュート容器にいれてつかう方法、毒入りの食物の使用法、細説をくつつけた砲弾の使い方を説明したものであつた。各種の容器つまり「爆弾」を説明し、スケッチした。それを投下するための適当な高度や空中速力をおしえた。クイン大尉が出席した講義でなされたとくに大切な言明は、(a)「ほとんどすべての昆虫が病気の伝播のためにつかえる」こと、(b)「かならずしも必要ではないが鼠を落すことのできる」こと、そして(c)「はつきりした治療法のわかつていない」脳炎をつかう意図のあることであつた。

第二に、両将校とも細菌戦飛行をやる命令をうけとり、心の中ではひどくいやであつたが、まさに

その飛行をやつたことである。そのときつかつた特殊爆弾にはいろいろ風変りな点があつたが、操縦士たちがそれをあまり詳しくしらべることができないように、それらの爆弾は特別の監視下におかれる場合もあつた。ある一つの講義では、各種の容器を投下するのにいちばん適した飛行機の型がおしえられた。二人の飛行士は、たくさんの同僚たちがやはり細菌戦飛行をやつていたことを個人的に知つており、その後みんなとしやべつているうちに、細菌戦の訓練をうけた空軍々人のたくさんいることがわかつた。（SIA／一七）。イノック中尉は、「病菌爆弾」という言葉で飛行命令をうけたが、クイン中尉は「不発爆弾」という言葉で命令をうけた。しかし、両人とも、復命のときには（つまり飛行結果を報告するときには）、「不発爆弾」という言葉をつかえといわれた。

これらの告白が、西欧世界に大きた影響をあたえたことはうたたがいがない。しかし、細菌戦をやつていることを信じたくない人たちは、これらの告白は肉体的または精神的な脅迫をうけてやつた自白であるとあつさり片づけて、たつた二人の青年がそういつてるだけであるといつたり、そんな青年はほんとにはいないのだとか、あの陳述はみんなつくりごとだとかほのめかしたりする傾きがある。しかし、クインのした話のなかに、矛盾のあることを証明しようとした企ては、失敗におわつた。

(SIA/六一)

こういう事情のもとでは委員会が、朝鮮での予定会合場所の一つで、上述の将校二人とだけでなく、さらにもう二人の将校F・B・オニール中尉とポール・クニスに会うことができたのは、たいへん重要なことであつた。これらの二人の説明はもつと長く、そしてもつとくわしくさえあつた(付録三九、四〇)。委員会にとつては、この四人のアメリカ飛行士に会つていると、まるでアメリカ生活のりつぱな横断面のまえにたつているような気がした——一人は冷静な頭脳をもつた電気技師、一人は中産階級の商人、一人は若い化学研究者、あとの一人は農村出身のガツチリした製鋼工場労働者であつた。委員会は、自由に談笑できる条件のもとで、これらの人たちとながい間話しあつた。委員会のメンバーは、これらの戦時捕虜にあのような陳述をさせるために、肉体的であろうと精神的であろうと、少しも圧迫をくわえなかつたということに意見が一致した。それらの陳述は、かれら自身の自由な意志によつてなされたものであり、しかもかれらを捕虜にした中国人や朝鮮人の友情と親切をながいあいだ経験して、自国政府の軍事上の秘密とおもわれるものをばくろすることにたいする当然の躊躇よりも、あらゆる人種と人民にたいする義務の方が、もつと大切であることを自覚したのちにな

されたものであつた。会談の大部分は、飛行士らと委員会のメンバーとのあいだの質問応答であつたが、一人一人の飛行士が、会見のはじめに、文書になつているのとだいたい同じような証言をし、良心にみちびかれてたつしたその信念にはまちがいがないと、おごそかに誓つて、その証言をおわつた。これらの証人たちの陳述（ISCK／四と五）と、このときの会見についての資料をふくむ註釈とは、付録として本書につけてあるから、ここではもはやそれについてとやかくいう必要はない。しかし、文書にした陳述と質問応答からみて、一九五一年のおわり頃から一九五二年のはじめにかけて、アメリカ空軍のなかで、どんなことがやられていたかを明らかにすることが、もはやできるようになつたと思われる。何がやられていたかはつぎの表からわかろう。

一九五一年六月――クニスは、敵が細菌戦をやるかもしれぬというのでひらかれたアメリカ情報部のローリーの講義に出席した。

〃　八月廿五日――イノツクは、日本でウイルソンの講義に出席した。「アメリカは細菌戦をやる計画をもつていないが、敵がやるかもしれない」

〃　十月――イノツクは、朝鮮でブラウニングの講義に出席した。おなじ言明。

〃　十二月一日——オニールは、朝鮮でアシフオークの講義に出席した。細菌戦をやる意図についてはつきりした態度をしめさなかつた。

〃　十二月——イノツクは、朝鮮でもう一遍ブラウニングの講義に出席した。十月とおなじ言明。

〃　十二月十八日—クインは、朝鮮でアシフオークの講義に出席した。「敵が細菌戦をやるかもしれないので、それにたいして備える必要」。

一九五二年一月三日——クインの第一回目の細菌爆弾飛行。下命も復命も「不発爆弾」という言葉でおこなわれたが、ほかの事情から、かれはそれが何であるかを知つていた。

〃　一月六日　——イノツクの第一回目の細菌爆弾飛行。「病菌爆弾」という言葉で下命されたが、「不発爆弾」という言葉で復命した。

〃　一月二十二日—オニールは朝鮮でマツクローリンの講義に出席した。細菌戦はきつとやられるにちがいないという言明。

〃　二月十五日——オニールの第一回目の細菌爆弾飛行。「病菌爆弾」という言葉で下命され「空中爆発VT」という言葉で復命された。

〃　二月十八日—オニールは、とくべつな設備をほどこした飛行機から、噴撒方法で細菌をまいているのをみた。

〃　二月二十二日—クニスは、アメリカでホレマンの講義に出席した。細菌戦をやっていることとはっきり否定したが、アメリカ軍が細菌兵器をもっていることはみとめた。

〃　三月二十一日—マックローリンの講義に出席した。一月一日いらい細菌戦をやっていることをはっきりと言明した。アメリカ政府は、できるかぎり長い間、それを否定するだろうというはっきりした言明。

〃　三月二十七日—クニスの第一回目の細菌爆弾飛行。「高射砲制圧爆弾」という言葉で下命、「飛行結果を観測せず」として復命させられた。

上記の事実からみて、北朝鮮と中国で細菌戦をはじめるという命令は、一九五一年の末にはでていたにちがいないし、細菌活動をやるための空軍要員の訓練は、その前から用心ぶかい訓話によってすすめられていたが、かれらにどのような活動が期待されているかは、一九五一年一月いごでも、かれ

らがじつさいに朝鮮の土地をふむまでは、かれらに知らされなかつたという結論が、どうしてもさけることはできなくなる。アメリカと日本の基地では、細菌戦というものは、理論上そういうことがやれるという、純粋に防衛的な性質のものであるといわれた。しかし、飛行士たちは、朝鮮の基地についてみると、自分らの到着するより数週間または数カ月もまえから、もはや細菌戦がやられているのを見てびつくりした。その一般命令は、開城の休戦会談がすすんでいる最中にだされたにちがいないという事実を、かれらは見のがしはしなかつた。

そのほか、飛行士たちから別々にきいた証言のなかには、興味のある点がいくつかあつた。捕虜の銃殺を禁止するというような公認された戦争慣行について教えをうけた記憶がかれらにぜんぜんないこと、アメリカ軍の操典のなかでそれについての規定をぜんぜん見たことのないこと、ましてある種の戦争の形態は少くともある種の国民によつて禁止されているのを少しもきいたことがないということなどは、注目にあたいする。つぎに証人たちの証言は、細菌爆撃をやれという命令は、かれらの同僚の士気にみじめな影響をあたえるにちがいないという点で一致していた。そういう命令がでることは、かれらの多くにとつて最後の藁ぎれ（破滅のもとになる小さな最後の事件）であつた。というの

は、かれらはもう、北朝鮮の市民を屠殺するようにかれらをけしかける兇悪さにむかむかしていたからであつた（付録四一）。これらの証人が、捕虜になつたのちに、朝鮮人や中国人――この両国人は武器をすてた人たちをもはや敵とは考えていない――から友情にあふれた取扱いをうけたとき、どんなに大きな感情の激変を経験したかは、十分に想像することができる。

会見した将校たちは、どんな型の容器がつかわれているかは、あまりよく知らなかつたようであるが、それは、操縦士や航空士としてのかれらは、兵器将校がもつているほどの知識を、あたえられていなかつたからであることは疑がない。またかれらは、つかわれている生物材料がどこからくるかについては、ほんの推察しかできなかつたが、かれらのうちのあるものが、それは日本からくるのかも知れないと考えていたのは意味ぶかいことであつた。

八月中のある新聞報道は、石井四郎の元助手で小沢という人間が日本で飼育場を経営しているのが見つかり、そこでは月十五万匹の齧歯類が生産されているという意味のことをのべていた。この情報は、甘南事件の解決をたすけるかも知れない。

要するに、委員会としては、細大もらさぬ会談と直接の個人的接触の結果として、委員会のまえで証言した将校たちの誠実さをうけいれ、その正直さを支持すべきあらゆる理由をみとめた。かれらはまつたく正常であり、かんぜんな健康状態にあるようにみえ、かれらの話ぶりは自然で、その態度は気楽にくつろいでいた。これらの飛行士は、少しの肉体的、精神的圧迫もうけておらず、かれらの待遇は中国人のヒューマニズムの最善の伝統といえるものであつたことを、委員会はもう一度確認する。それで、委員会としては、これらの飛行士の証言を真実であり、信頼できるものとして受けいれるわけであるが、それらは、これまで現地であつめた厳密に科学的な、そして実証的な証拠をじつにたくさんの点で補足するものであつた。

新中國の衛生

委員会は、中国人民の現在の衛生状態と、その衛生水準を引きあげ、また伝染病の蔓延をふせぐた

めにとられている処置とにふかい印象をうけた。これらの処置は効果的であり、また完全である。中国人民はひどく不満足な衛生状態のなかで暮らしているという考えが、西洋では広くひろまつているが、いまの中国の一般的な状態と、政府のだす保健上の指令を実行するときの中国人民のあの熱情とを、表面的にでもいいから、直接知りさえすれば、そういう考えを追つぱらうのに十分である。

過去数年間にもたらされた異常な進歩をしめすためには、二三の数字をあげるだけでたくさんである。中国東北では、一九五一年に三千五百万匹の鼠がころされ、一九五二年の春には一千万匹の鼠がころされた——これは、世界のほかの地方には前例のない鼠にたいする戦争であつた。蝿やその他病気の運搬者になりうる昆虫にたいする斗いは、じつにありとあらゆる面ですすめられており、北京はほとんど一匹の蝿や蚊もいない都市になつてしまつた。解放前には、種痘は数がすくなくて、効力がたりず、一年間に種痘した最大の人数（一九四六年）は七百三十万にもたりなかつた。しかし、解放後三年間に三億七百万人が種痘して、天然痘はほとんどかんぜんになくなつてしまつた。助産婦を再教育したおかげで、一九四九年から一九五一年までのあいだに初生児破傷風からくる死亡率は三分の一ほどさがつた。全体としての幼児死亡率は、このおなじ期間に半分ほどへつてしまつた。伝来の漢

方医学をやつていたたくさんの開業医が、この一大保健運動に助手として動員され、かれらにも近代医学の訓練―これを受ければ、かれらにもりつぱな役割がはたせる―をうける能力があるし、意志もあることを証明した。北京の他の大都市では野良犬がぜんぜんいなくなつたが、それらの犬は脳炎ヴィールスの貯水池であり、たくさんの伝染病の運搬者であるとの嫌疑がかけられていたものであつた。そのほか、ワクチンや血清をつくる製薬所の組織と生産能力がうんと進歩した。委員会は北京でこの方面の施設をたずねてゆき、その能率、高度の生産量、そしてすぐれた科学的研究能力に感心した。

保健運動は、北京やその他いくつかの「模範」都市だけにかぎられているものではない。信頼できる報告者によれば、それはこの亜大陸のいちばんへんぴな隅ずみにまでひろがつているといわれている。一つの団体としての委員会は、東北旅行のときに、そのことを直接自分で見ることができた。この旅行のときには、内蒙古の境界にそつた黒龍江省北部のへんぴな場所をおとずれたのであるが、委員会のメンバーは、村々の清潔さにひどく感心したものである。

解放いごは、これまで他のどこでもやつたことのないような巾と範囲の大きな保健教育運動が、じ

じつ中国でおこつている。それがいままであげたような成績をあげるためには、男や女や子供など全人民の一人一人の心からの協力が必要であつた。これらの人たちは、積みかさなつたガラクタのとりのけ、田舎や荒れ地の念いりな清掃、窓の遮蔽、各種の毒虫との斗い、殺虫剤やワクチンの生産と使用——公衆保健の一般水準をたえず急速に引きあげるありとあらゆる事柄を考えついて、感激をこめてそれを徹底的にやりぬいた。基礎教育は利用のできるあらゆる教育手段によつて、大きな集会やポスターによつて、絵本と壁新聞や新聞によつて、また舞台からも銀幕の上でもやられてきた。

細菌戦争またはその疑いのある場合にぶつかつたとき、中国の農民大衆は何をなすべきかをちやんと知つていて、すこしの混乱も恐慌もなくそれをやつてのけた。委員会は、中国農村の多くの方面からやつてきたひじょうにたくさんの証人と直接あつたおかげで、数百、いや数千数万の普通人が、中央や地方の保健部（省にあたる）の指令に指導されて、規律ただしい行動をとりながら、田畑や街を隅から隅までさがしあるき、空から降つてくる容器のはきだしたありとあらゆるものをみんなあつめては殺しているありさまを、まざまざと思いうかべることができるようになつた。

今日の中国の衛生上の進歩は、相つぐ国際衛生機関が、これまでいくらか漠然とした形で勧告してきた処置を積極的に遂行したという結果になつている。このように短い期間に、このように多くの進歩をとげるということは、中国政府が人民の各階級層の無条件的な支持をえていなかつたならば、とてもやれなかつたであろう。農民に工場労働者、学者に宗教団体が、政府のめざす目的にさんせいして、その達成に最善の努力をつくしている。

概観

さて、ある種の事実は表の形にまとめることが有益である。これにはプラーグ文書のなかにそのあらましがのべてある事実だけでなく、六月、七月、八月中に調査のため委員会にもちだされてきた事実もいれねばならない。わりにはつきりしている一定数の事件を、折りたたみ表（付録七）におさめておいた。その各々の事例に、索引番号、日付、場所と事情、飛行機の通過がみとめられたかどうか、何か物のおちるのが見えたかどうか、容器がみつかつたか、どんな場所に昆虫その他の生物の異常な

密集がみられたか、またできる場合には動物の密集度についての注、および昆虫学上のまたは動物学上の同定、細菌学的試験の結果や疫学上の観察を書きいれておいた。この表にふくまれているのは、ほんのわずかな数のわかつている事件だけであることを、諒解していただかねばならない。

この概括表からあきらかなことは、微生物病原に感染した生物が出現したときに、かならずしも人間の病気が、おこつていないことである。その理由の大半は、事件のおこつた地域の都市農村の住民が、空からばらまかれたように思えるどんな動物やどんなものでも、みんなさがしだしてすばやく殺してしまつたことである。そういう活動が非常に効果的にやられたので、表がしめしているように、多くの場合生物学的検索のために必要な標本さえも残らないほどであつた。また、その他の場合には細菌学的検索の結果、めざした型の病原体が見つからないことがあつた。

敵機の中国東北侵入は、今年になつてからひじように多く、その大部分の場合に爆発のおこる爆撃をやらなかつたことは、ここに記しておく価値がある。二月二十九日から三月二十一日までのあいだに、アメリカ機九百五十五機が百七十五編隊にわかれて中国東北の上空に侵入した。その地域は遼

東、遼西、吉林、松江、黒龍江の七十県におよんだ（SIA／三）。これとおなじような別の数字もあげられていて（NCNA／八五、SIA／一三）、さいきん中国上空の侵犯はへるどころかむしろ多くなつている。たとえば、八月七日までの一週間に、アメリカ機三百九十八機が七十九編隊にわかれて中国領土上空に侵入した。

事件が中国東北で、どんなふうに地理的に分布しているかも興味がある（付録七地図をみよ）。四月の末までに分析のゆきとどいた事件だけをとつてみても、その大多数（十八件）は朝鮮国境の大部分に接している遼東省でおこつた。ここで目につく事実は、報告される事件のほとんど全部が、いつでも鉄道や幹線道路のちかくでおこつていることである。いちばんへんぴな州の黒龍江でおこつた八つの事件についても、おなじ特長があるのは注目すべきである。そこでは、チチハルとハルビン以北の鉄道の一つが、大きくS字形にまがつて、その側面は百マイルかそれ以上もあるが、事件はみんなその沿線のあちこちでおこつたのである。

これまで公表された文書は、一方では、感染昆虫と人間の病気との関係についての細菌学上のまた

疫学上のくわしい証拠をあげており、他方では、昆虫と飛行機の通過との関係についての証拠をあげている。しかし、それらの文書にあげてある材料は、しばしば不完全なものであつた。このことが一つの理由になつて、委員会は、これまでの諸節でくわしくのべた准陽、甘南、寛甸、遼東、遼西、大同などの事件について、中国と朝鮮の科学者の協力をうけ徹底的な調査をやつたのである。これらのすべての調査からみて、飛行機と病菌運搬者と人間の病気とのあいだの関係は、もはや論争の余地がなくなつた。

この報告書のはじめのところで、事件を分析する方法について説明しておいた。さていままでは、いちばん十分に分析した実例から材料をあつめて、それらを一つの一覧表にまとめるときがきた。こういうふうにいろいろの型を比較対照してみると、そこに一つの組織的な計画がはつきりと浮かびあがつてくる。飛行機はいつでも見たか聞いた人がおり、その進路もしばしば記録されている。そして捕虜飛行士の陳述が、あとでそれを補足している。ついで、表のなかには、容器の落下についての必要な資料、つかつた病菌運搬者とそれについての変則的な点、細菌学上の試験、さいごに臨床例がでてくる。

これらすべての事実について、委員会は、多数の普通中国人から話をきいたり、かれらに質問したりした。委員会のメンバーは、これらの証人が誠実であり、鈍重なほど正直であつたことを確信している。かれらの証言の特長は、すこぶる簡単明瞭であることであつた。

つぎに専門的な問題についていうと、委員会は、朝鮮のペストが、まだペストが風土病になつている中国東北(満洲)の諸地域から入つてくる交通によつて運びこまれたのではないかという可能性を考えてみた。なぜこの可能性を否定したかについては、いくつかの理由がある。第一に、朝鮮の新しい流行中心地と上述の風土病地帯との中間にある地方に、いつでもいいがペストがおこつたという報告がなかつたからである。第二に、このペストの発生には、季節的にみてひじように重大な変則的な点があつたからである(付録七、一八、一九をみよ)。第三に、ペストの場合には、人間のペスト流行がはじまるまえにペスト菌の寄生した死んだ鼠があらわれるのが特長であるが、それがぜんぜん見つからなかつたことである。第四に、診察の結果がしばしば病気発生前の飛行機の通過やその病気に適当な病菌運搬者の撒布とあきらかに関係のあつたことである。最後に、これらの両国の国境でひじように厳重な衛生上の予防手段が、中国と北朝鮮によつてとられているし、またはじめからとられていたことである。

	飛行機、きいたまたはみた／進路を記録／乗員を訊問	投下、物のおちるのをみた	容器、みつけた	噴撒法をつかつた疑い	動物またはその他の媒介体集中度のたかい変則／季節の変則／位置の変則／種の変則	動物またはその他の媒介体細菌学的試験	ついで人間におこつた病気／季節の変則／位置の変則／病気の型の変則	媒介体の病気／季節の変則／位置の変則／病気の型の変則
安州（朝、ペスト）SIA/1,4	+				+ +	+	+ + +	
Cheum-Dom（朝、ペスト）SIA/1	+	+	+		+ + + +	+		
甘南（中、ペスト）ISCC/2	+ +				+ + + +	+		+ + + +
江西（朝、ペスト）ISCK/2	+			+	+ +	+	+ + +	
淮陽（朝、ペスト）ISCK/3	+				+ +	+		
寛甸（中、炭疽病）ISCC/3	+ +	+	+		+ + + +	+		
遼東（中、呼吸器炭疽気）ISCC/5	+ + / + + / + +	+ / + / +			+ + +	+	+ + + +	
碧潼（朝）付録S20	+	+			+		+	
長白（中）ISCC/4	+	+ / + / +	+ / + / +		+ + + +			
鞍山（中、脳膜炎）ISCC/6	+			+			+ + + +	
大同（朝、コレラ）ISCK/1	+		+		+ + + +	+	+ + +	
捕虜飛行士（ISCK/4,5）付録CC(30)DD(31)	+ + +	+	+	+		+		

いくつかの病気は、たとえば炭疽病のように、人間にたいしてと同様、家畜にたいしてもつかわれた（NCNA／八五、付録二七）。ある種のばらまかれた媒介体には出血性敗血症菌 Pasteurerm-ultpocida（septica）の発見が確認されたが（付録七、表）、それは実験用動物にあまりにもふつうの伝染病であるから、はじめはさして重要なものとは思われなかつた。しかし、それは家畜にたいする武器としてつかわれたものであるかも知れない、と想像していい理由がある（付録四三）。

コレラ菌については、さきに研究したくわしい実例（大同）の場合、汚染した軟体動物のなかからあらわれたけれども、昆虫とくに蠅から見つけた場合も少くなかつた（付録七）。このことはチフス菌とパラチフス菌、それに志賀赤痢菌についてもあてはまる。これらの病原体は、これまでこれらの病気がぜんぜんなかつた地帯で、蠅の大群から発見された。そこで、手当り次第につかまえたふつうの蠅の内部かまたは外部に、この病原微生物がいるのではないかという問題がもちあがつた。現在の戦争がはじまる数年まえに発行された中国の医学文献のなかには、まさにこの問題について対照実験となる研究がふくまれている（付録四）。それによると伝染病の非流行期には、ふつうの蠅はチフスまたはパラチフス熱の細菌やコレラ菌をおびていないことを示していた。この問題に関連のあ

る付録には、ことし瀋陽（奉天）でやつたおなじような研究についての新らしい記録がはいつている。

これと関連のある一つの問題は、昆虫の細菌運搬についての研究に定量的研究方法をつかうことである。この問題はとくべつの付録（三）でとりあつかつた。

昆虫媒介体の演じた役割について、もはやプラーグ文書その他でいわれていることを補足するために、いくらかの言葉をつけくわえておかねばならない。一つの付録（八）は、ばらまかれた昆虫の動物学的同定にあてた。もう一つの付録（二）は細菌戦に関連のある医学的昆虫学上の問題を一般的に研究するうえで、読者をたすけるであろう。

これまでの報告のなかには、いくつかの疑問があり、とくに朝鮮での事件についてそうであつたが、それはまだ解決していなかつた。そこで、委員会は、平壌滞在中、保健大臣李炳南氏に一連の質問（付録九）を提出したところ、その回答はやがてえられた（付録九）。その結果、翻訳のまちがい

がいくつかあつたことが、あきらかになつた。さいしょの朝鮮の報告（SIA／一）につかつてある「ダニ」という言葉は、じつさいには赤虫 Trombicula akamusi をさすものであつた。またおなじ文書のなかには蝙蝠に寄生する蝿 nycteribiid flies についてのべてあつたが、これについては、これらの昆虫が細菌戦に関係があることは論証できない、といまでは考えているという報告を、朝鮮当局から委員会はうけとつた。

けれども、サルモネラ属やシゲラ属で汚染した死んだ魚が一度ならず山腹にあつたのが見つかつたという言明については、確認をうけとつた。この種の現象は、いつでも飲料用水源のちかくでおこつたことが力説してあつた。この点は、委員会がくわしく研究した大同事件（七六～七九ページと付録三〇）を思いおこさせるが、そこではコレラを伝播しようという意図がはつきりとあらわれていた。

西欧科学者の好奇心をとくに呼びおこし、委員会としても真剣な関心をはらつた一つの問題は、飛行機の通過後に発見された「凍結乾燥した蛋白性物質」の問題であつた（NCNA／八五）。それはいくつかの塊になつて発見されたが、粘着性と吸湿性をもつており、雪の表面におちているとき水を

すいこんでいた。化学分析の結果、それは蛋白質の分解物――プロテオーゼ、ペプトン、ポリペプチッドから成つていることがわかつた。細菌学者は、それからマンニツトを発酵する赤痢菌を分離した。委員会が朝鮮で活動していた期間には、この種の事件はぜんぜんおこらなかつたので、朝鮮軍の報告を基礎にするほかなかつたが、これは、凍結した乾燥細菌培養をそのまま投下したものであるとの仮設が十分になりたつことがわかつたし、保健大臣自身がそれをみとめていた。

ひじような低温という事情のもとで昆虫をばらまく問題については、捕虜飛行士が、その証言のなかで、とくに寒さにたいする抵抗力をつけた昆虫を生産する方法についてのべていることを、委員会としては指摘しておく（とはいえ、そういう主張をかならずしも裏書きするものではない）（付録三九）。

ずつとまえの節（三七ページ）で、飛行機のばらまいた十八種の昆虫と蜘蛛について説明しておいた。そのうち九種類が病原微生物に感染していたことが、細菌試験によつてはつきりと断罪された。その他のものはどうであつたか。委員会としては、それらがぜんぜん感染していなかつたとの結論をく

だすことはできなかつた。いつたいどんな細菌をさがしていいか正確にわかりもしないときに、これらのものから病原微生物をとりだすことはむずかしいのだ。まだまだ考慮すべき可能性は多いのである。

細菌戦についてのアメリカ側文献のなかには、朝鮮でみられることと矛盾するものがいくつかある。まだ淘汰されないで通用しているそれらの著作のなかにある、或る種の判断は、委員会の観察とはほとんど一致しない。ある種の重要な事例では、技術上の進歩がかれらの意見をかんぜんに時代おくれにしてしまつたように思われる。ペストの場合は、その典型的なものである。十年まえ、ローズベリーは、ペストを戦争目的のために有効にひろめることはできそうであるが、しかし、それは味方の領土に伝染する危険が大きいので、戦線からはるかに遠い地域にかぎられるという保留的な意見をのべた。委員会は朝鮮で、デトリツク細菌工場の前所長でひろい経験のあるこの細菌学者の意見とは逆に、戦線からほど遠くない場所でペストをひろめる企図がたびたびくりかえされたことをあきらかにした。しかし、この対立は表面的なものにすぎない。最近十年間に、消毒技術はどえらく進歩した。一方、ますます効力の大きくなる新しい殺虫薬がさまざまに配合されてつくられ、他方、これら

の薬剤を大量にまた最短時間に雲のようにばらまく、高能率で、ふつうの人でも十分取りあつかえるほど簡単な機械が発明された。これらの機械は、第二次世界大戦中に発達した煙幕器から生れてきたものである。

実際の経験によれば、これらの方法が、昆虫媒介体のひきおこした病気を、領土全体から駆逐するためにつかえることはあきらかである。さいきん発表された報告によれば、朝鮮にいるアメリカ軍はそういう機械をもつていて、「将来の戦争ではふつうの手段や方法で事態に対処するのでは、不十分なことがあきらかになるかも知れない」というので、それらの機械のもつ意味を力説している（付録）。

これらの材料は、文献と戦場でみる事実とのあいだの表面的な矛盾を解決するのに十分である。これらのことは、すくなくとも部分的には昆虫の媒介するほかの病気にもみなあてはまるし、朝鮮でみる一般的な傾向が昆虫媒介体をつかう方向にむかつていることを説明するのに役立つている。今まであげた例は典型的なものであるが、細菌戦をやる可能性を、自然状態の現象にだけかぎることはできな

い。技術と科学の進歩は、どんなことができるかの範囲をひろげ、この場合のように表面的な矛盾に照明をなげかけるのである。朝鮮にいるアメリカ側が昆虫媒介体をほとんどかんぜんに制圧できれば、さつきの文献にあるような保留をつける意味はなくなつてしまう。

それとおなじ理由で、委員会は、細菌やヴィールスや毒素を空中噴霧機でまくのが、細菌戦のただ一つの有効な方法であると考える人たちに同意することはできない。この点では、日本人の経験（上記三〇／三四ページをみよ）を、いまでは一段たかい水準で利用することができるのである。

けれども、委員会のしらべた実例のうちの一つ、つまり中国東北の遼東省瀋陽（奉天）と鞍山の両市で流行した脳炎の実例（SIA／三、八。〇〇〇一〇）は、ヴィールスを直接空中撒布の方法でばらまいたのではないかという問題をもちだしている。委員会としては、このことについてしつかりした結論にたつすることはできなかつた。というのは、病気と飛行機の侵入とのあいだにはつきりした関係のあることを立証することはできなかつたからである。とはいえこの事件の証拠はじつに混乱しているので、それについての文書はぜんぶ付録にいれておく（ISCC／六、付録三二、三三、三四、三五）。

委員会は、朝鮮、中国市民の死亡総数や罹病総数、それに死亡率などを世界に発表する立場にはいない。それらを発表することは、これらの死亡や病気の責任をおうべき人たちに、これらの人が必要とする最後の資料をあたえることになるのだから、望ましいことではない。そういう情報は、委員会が専門的意見をのべることを請われた事件の証拠としては必要でない。必要なことのすべては、委員会の確認したことがらを知ること、つまりたくさんの人間が孤立した地点でまたは伝染病の流行のまんなかで死んでいき、しかもその時の事情がすこぶる異常であつて、それらの伝染病の出現の跡をつけてゆくと、いつでもアメリカ空軍の活動にかえりつくということを知ることである。大切なのは、もはやおこつたことと、これからおころうとしていることから、世界が警告をうけとることである。すべての人民が、途方もない危険のともなつているこの種の戦争の潜勢力を知らねばならないのである。

結　論

一九五二年のはじめいらい、朝鮮と中国にひどく異常な性質の現象がおこつているので、これらの

国の人民と政府は、アメリカ軍が細菌戦をやつているのだと主張するようになつた。細菌戦に関連のある事実をしらべるためにつくられた国際科学委員会は、現地に二ヵ月以上もいたのち、いまその活動をおわるところまできた。

委員会の面前には、大量の事実があらわれたが、そのうちのいくつかは首尾一貫した型をしめしており、これらの型は高い論理性をもつていることがあきらかになつた。そこで委員会は、その努力をとくにそれらの型の研究に集中した。

委員会は、つぎのような結論にたどりついた。朝鮮と中国の人民は、たしかに細菌兵器の攻撃目標になつている。この兵器をつかつているのはアメリカ軍部隊であり、その目的に応じてじつに種々さまざまのちがつた方法をつかつているが、そのうちのいくつかは、第二次世界大戦中日本軍のつかつた方法を改善したものであると思われる。

委員会は、論理の階段を、一歩一歩のぼつて、そういう結論にたどりついた。委員会としては、い

やいやながらそうなつたのである。というのは、委員会のメンバーは、こんな非人間的な技術を、各国人民の総攻撃の面前で、じつさいにつかうことができるなどとは、信じたくなかつたからである。

いまこそ、すべての人民は、その努力を倍にして、世界を戦争から守り、科学上の発見が人類の破滅のためにつかわれるのを食いとめねばならない。

付録

四十六件の付録表

一、委員会の会議の月日順概要。
二、昆虫媒介体による病気伝染の原理についての概観。
三、昆虫のはこんだ細菌の定量的研究についての覚書。
四、中国のふつうの蠅による病原の機械的運搬についての覚書。
五、瀋陽（奉天）にも自然的にいる蠅が腸内病原菌または炭疽菌をくつつけているかどうかをきめる研究（ISCC/八）。
六、瀋陽と寛甸の両市で採集した鶏の羽の現地標本が、炭疽菌をくつつけているかどうかをきめる細菌学上の研究（ISCC／九）。
七、北朝鮮と中国東北区（満洲）でおこつた事件の概括表。プラーグ文書でのべている事件のうちわりと重要なものいくつかをふくむ。
八、撒布された昆虫についての昆虫学的資料（ISCC／一〇）。確認された昆虫の種類の表。異常

昆虫の出現の変則性をしめすグラフ。一九五一—五二年の冬期温度の前年比グラフ。

九、（北）朝鮮保健大臣にたいしてした質問（平壌、一九五二年七月三十日）と受とつた答え（北京、八月二十一日）。

一〇、a アメリカ機が中国東北と北朝鮮にばらまいた菌類のくつついている植物物質についての報告（ISCC／七）。

b アメリカ機が北朝鮮と中国東北にばらまいた南朝鮮産植物の葉二種についての報告。

一一、湖南省定徳のペストについての報告（一九四一年十二月十二日）（ISCC／一）。

一二、日本の細菌戦のいくつかの様相についての覚書（ISCK／六）。

一三、黒龍江省甘南県にアメリカ機のおとしたパ四二・ペスト菌に感染した野鼠についての報告（ISCC／二）。

一四、甘南事件の聞きとり書。目撃者その他の証言。調査団の現地調査など。

一五、甘南で採取した野鼠と Microtus gregalis Pallas との比較についての覚書（ISCC／二a）

一六、甘南野鼠と Microtus gregalis との比較についての註釈（O・O）。

一七、論文「細菌戦」、榊亮平元少佐、日本関東軍防疫給水部つき、サンデー毎日（週刊）、一、六八二号、一九五二年一月二十七日。

一八、一九五二年三月二十五日アメリカ機のおとしたペスト感染の蚤にふれて発病した平安南道江西郡のペスト病についての報告（ＩＳＣＫ／二）。

一九、江西事件の聞きとり書（ペスト）。目撃者の答えと科学専門家の言明。

二〇、アメリカ機がペスト菌感染の人蚤をばらまいたことについての報告（ＩＳＣＫ／三）。

二一、淮陽事件―ペスト―の聞きとり書。目撃者の証言など。

二二、遼東省寛甸地区にアメリカ機のおとした石灰質細菌爆弾についての報告（ＩＳＣＣ／三）

二三、寛甸でつかつた「卵殻」容器についての註釈。

二四、六月六日事件の控え。

二五、遼東省長白県にアメリカ軍のおとした四室昆虫爆弾についての報告（ＩＳＣＣ／四）。

二六、平壌、朝鮮防疫部中央実験室の容器展覧についての控え（ＩＳＣＫ／七）。

二七、アメリカ機の中国東北侵入後おこつた呼吸器炭疽病と出血性脳膜炎の発生についての報告（ＩＳＣＣ／五）。

二八、炭疽病の伝播とそれによる死亡に関する遼東省と遼西省事件についての聞きとり書。

二九、一九五二年三月十六日の夜アメリカ機のおとしたコレラ弧菌 Vibrio cholerae に汚染された生ま蛤をくつて発病した大同郡のコレラについての報告（ＩＳＣＫ一）。

三〇、大同事件（コレラ）についての聞きとり書。科学専門家の言明と目撃者の証言。

三一、コレラ弧菌 Vibrio cholerae の運搬者としての蛤 mollusc meretrix についての覚書（ＩＳＣＣ／一一）。

三二、急性脳炎——アメリカ機の侵入によつて発生した瀋陽（奉天）とその附近の一つの新しい病気——についての覚書（ＩＳＣＣ／六）。

三三、アメリカ機の侵入後瀋陽（奉天）におこつた新型の脳炎事件についての聞きとり書。

三四、節足動物がもつている人間の脳炎型の病気についての情報。

三五、瀋陽（奉天）事件（脳炎）についての註釈。

三六、伝染病情報をあつめてアメリカ軍司令部におくるために北朝鮮に派遣された南朝鮮諜報員についての控え。

三七、アメリカ軍が朝鮮でやつた細菌戦に参加したことについての Ｋ・Ｌ・イノック 中尉の証言

（SIA／一四）

三八、アメリカ軍が朝鮮でやつた細菌戦に参加したことについてのJ・クイン中尉の証言（SIA／一五）

三九、アメリカ軍が朝鮮でやつた細菌戦に参加したことについてのF・B・オニール中尉の証言（ISCK／四）

四〇、アメリカ軍が朝鮮でやつた細菌戦に参加したことについてのP・R・クニス中尉の証言（ISCK／五）

四一、四人の捕虜アメリカ飛行士についての控え。

四二、新中国の公共保健衛生運動についての覚え書。

四三、アメリカ機がパスチューレラ・ムルトシダ Pasteurella multocida のくつついた蜘蛛をばらまいた後で鶏のあいだに敗血症の伝染病が発生したことについての報告（ISCC／一二）

四四、フランコ・グラチオシ博士の声明。

四五、病原体撒布のため爆発弾を使うことについての参考として提出された医学文献からの抜粋。

四六、中国と朝鮮の科学者と医師の履歴。

アメリカ帝国主義者はどうして細菌戦をはじめたかの眞相（付錄三七）

（一九五二年四月七日　捕虜ケニス・L・イノックのした供述書）

一九五一年八月末の二週間、わたしは日本の岩国にいた。第三爆撃連隊は八月いつぱいかかつて、朝鮮の群山に引つこしをやつた。いちばん最後に引つこしたのは、地上学校であつた。地上学校が群山にうつつたのは、九月のはじめであつた。わたしが岩国にいたときには、アメリカからやつて来たての乗員が十五人いて、みんな地上学校にかよつていた。この地上学校の授業課目は、第四四〇〇戦斗員訓練大隊学校とおなじであつた。われわれ航空士は航空とB―二六と朝鮮についての講義と問題をうけた。これはもつとよく作業を理解して、戦斗飛行の準備をするためであつた。

一九五一年八月二十五日の午後一時、われわれは地上学校航空教室の秘密講義に出席した。わたしの記憶では、この講義に出席したのは、十人の操縦士と十五人の航空士であつた。操縦士のなかでは、ブロートン中尉、シュミツト中尉、レマク大尉がいたのをおぼえている。航空士のなかでは、ブラウ

ン中尉、ハーディー中尉、ド・ゴー中尉、ジーリンスキー中尉、ガーヴィン中尉、ラーソン中尉とそれにわたしがいたのをおぼえている。わたしは、ラングリー飛行場でいつしよに仕事をしたことのある操縦士や航空士をのぞいて、ほかの人は誰も知らなかつた。われわれの教官は民間人のウイルソン氏であつた。かれ以外の教官はこの講義にだれ一人参加しなかつた。

ウイルソン氏は、この講義が細菌戦に関するものであると語つた。われわれの側では、いま細菌戦をやる計画はないが、いずれやるときがくるかも知れないのであるから、講義は秘密であつて、その内容は誰にも洩らしてはならないし、仲間同志でもしやべつてはいけないと、かれはいつた。

ウイルソン氏の講義はおもに、細菌戦の兵器についてであつた。かれは標本をもつては来なかつたが細菌をそのまゝまいたり、虫やけだものにつけてまいたりする細菌撒布のいろいろの方法を論じた。ウイルソン氏の講義の内容は、次のようなものである。

細菌をそのまゝまく方法。（一）チリと細菌をまぜたものをつめた爆弾をおとす。この爆弾は空中でひらき、細菌のついているチリを風でまきちらす。（二）噴撒装置によつて、飛行機からじかにチリをまく。こうしてチリをまいた所では、どこでも空中に細菌がちらばる。（三）細菌とチリをいつぱいつめた容器をおとす。つまり水の中にはいると口をあける爆弾か、水にぬれると口をひらくボール紙

製の容器を貯水池や湖の中に投下する。そこの水を人や獣がつかい、また昆虫がそれらの細菌を身につけて伝播する。

昆虫をおとす方法。（一）外形は普通の爆弾のように見えるが、中には細菌をつけた虫をいっぱいつめてあり、地面にふれると口がひらき、細菌をつけた虫が外へ出るようになつている爆弾をおとす。（二）地面にふれると口がひらいて、細菌をつけた虫がとび出すようになつている、ボール紙製の容器をおとす。（三）けだものに虫をくつつけてばらまく。

けだものにくつつけて細菌をまく方法。（一）地面にふれると、けだものを外へ出すようになつている落下傘容器で、ねずみ、うさぎその他の小動物をおとす。その小動物には、細菌のついた、のみやしらみがくつついている。（二）舟をつかつて、このようなけだものを敵の後方の海岸から陸にはなす。

細菌をまくその他の方法。（一）細菌のついたビラ、チリ紙、封筒その他、紙で出来たものをおとす。（二）細菌のついた石けん、衣類をおとす。（三）細菌の入つているインキを入れた万年筆をおとす。（四）細菌のついた食物を敵陣におとす。

また、榴弾砲や迫撃砲をつかつて細菌をまくことができるが、前線からの距離がちかいので、この方法をつかうのは安全でない。

まくことができる細菌の種類は、たくさんある。あまり知られていない特別の細菌のほかに、発疹チフス*、チフス、コレラ、赤痢、ペスト、天然痘*、マラリヤ*、黄熱病*など、よく知られている病気の細菌をつかうことができる。細菌をはこぶ虫の種類は多く、いちばん普通なのは、しらみ、のみ、はえ、蚊である。しらみは、のみ、はえとおなじように、チフス、コレラ、天然痘、ペスト、赤痢をはこぶことができる。蚊は、マラリヤと黄熱病をはこぶことができる。

＊つぎの説明は、中国の熱帯および伝染病医学の指導的権威鐃恵瀾博士が加えたものである。同博士は医学博士（ニューヨーク大学）、ロンドン大学の熱帯医学の学位をもち、ロンドンの王立熱帯医学および衛生協会の元会員、ドイツのハンブルグ熱帯研究所の元所員、アメリカの実験生物学および医学協会の元会員で、現在は中国協和医学院（元のPUMC）と北京大学医学部の臨床教授である。

「発疹チフスとマラリアの病原体は、それぞれリケッチアとマラリア原虫によるものであり、天然痘と黄熱病は二種類のちがつた濾過性ヴィールスによるものである。この捕虜は医者ではないのだから、これらの伝染病原と病原菌をゴッチャにしているのは、むしろ当然である。また、かれはDDTの正しい使い方についてもまちがつたことをいつている。」

細菌戦をふせぐ最善の方法は、それにたいする準備をすることである。できるかぎり多くの人が、す

べての病気の予防注射をうけねばならない。もし虫がおとされたら、容器にガソリンか、他の油をかけてやきはらうのがよい。もしも虫が容器からとび出してしまつていたら、その地域にDDTをまくのがよい。できれば、飛行機でまければ一番よい。細菌のついたチリをつかつたときには、DDTをまくことが必要である。むきだしの食物はみんな処分せねばならない。衣服と器物は、熱湯とつよい石けんで洗わねばならない。水はすべて煮たて、食物はみんなよく火を通さねばならない。鼻と口はマスクでおゝい、それでほかのことがみんなすんだら、着物をきかえ、入浴せねばならない。細菌にふれたクズ紙やぼろは、全部焼きすてねばならない。虫をふせぐために夏は窓に網をはらねばならない。ねずみその他のちいさな動物はみんな殺して、ペストの危険をすくなくせねばならない。紙製品またはこれに類した物がおちてきたらすぐに焼かねばならない。

細菌兵器をつかうときには、虫をいためないために、低空、低速でおとさねばならない。落下傘型の兵器の場合は、高度はかまわないが、目標地点から落下傘がそれないために、あまり高すぎないことが必要で、千フイートが適当である。

ウイルソン氏が講義をおわつたのは、三時であつた。かれは、細菌兵器については、誰とも話してはならないと注意して出ていつた。こんな講義を聞いたのは、これがはじめてであつた。一九五一年

九月一日、わたしは群山へいつた。

一九五一年の十月と十二月に、ブラウニングという少佐が群山で、細菌戦にたいする防禦について一時間の講義をした。かれは機会あるごとに何度も講義をやつており、全員が、この一時間講義に出席するようにいわれた。十月と十二月の講義は、内容がおなじであつた。それは部隊の交代のために、いつでも新しい部隊がはいつてきているので、その講義の内容を教えこんでおくことが必要だつたからである。かれは敵側が細菌戦争をやつてくるということは、十分にあり得るといつた。もし敵側がやるとすれば細菌のついたチリか細菌のついた虫をつかうだろう。だからその都度予防注射をせねばならないといつた。この手記の三頁(本書一五二頁)二節目でのべたことについても論じた。

一九五二年一月一日、作戦部の将校が、いつもの通りの訓令伝達会議のときに不発弾に注意し、その数と、それのおちた場所を報告するように命令した。これはいつものことで、その時はなんでもない注意のように思えた。この〃注意〃は作戦部の大隊伝達士官ケアリー大尉が塔乗直前の命令として乗員ぜんぶにあたえたものである。その夜、わたしは頭痛のために飛べなかつたので、他の航空士がかわりにとんだ。

わたしの、次の飛行は、一九五二年一月六日であつた。われわれは、緑八号ルート(平壌と沙里院の

間）にそつて飛行することになり、午前三時に出発した。塔乗員は、操縦士アモス大尉、航空士がわたし、砲手トレーシー軍曹であつた。いつものように、アモス大尉とわたしは、出発一時間まえの午前二時に大隊訓令室と大隊作戦部へ報告にいつた。いつもそこで、さいきんの天候と飛行任務についての通達をうけることになつていた。その夜は、わたしの知らない当直将校の大尉から、黄州へ飛行し、そこで外翼の爆弾二個をおとし、それから他の爆弾をできるだけ早く投下して、群山へかえれとの指令をうけとつた。また、黄州では、高度五〇〇フイート、最高時速二〇〇マイルで投弾するように、かれは命令した。われわれは訓令によると五〇〇ポンド爆弾十個をつまねばならないので、高度が低くすぎはしまいかと、かれに注意した。しかし、かれは、これは極秘だが細菌爆弾なのだから、この仕事については、誰にも話してはいけない、といつた。かれは、翼の爆弾はもう積込みずみで、われわれにかわつて点検してあるから、心配はないし、かえつてきた時は、不発弾として報告するように命じた。それから、中隊作戦室へいつた。そこで砲手にあつた。かれは大隊には報告にいかなかつたので、わたしの知つているかぎりでは、われわれの特殊任務のことを知つていなかつた。外へでて飛行機のそばへゆくと、整備部から派遣された番兵がたつていて、翼の爆弾はもうしらべてある、とわれわれがもはや知つていることを、われわれにつげた。わたしは弾倉のなかの六個の爆弾を点検

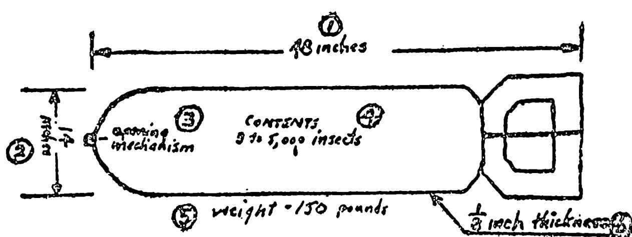
した。六個の爆弾は、普通の五〇〇ポンド爆弾であつた。三時に黄州へむかつて出発した。黄州市の西部に、二個の細菌爆弾を投下した。投下した時爆発しなかつたし、なにも見えなかつた。さらに北に二分飛行し、黄州北方五マイルの街道に、本物の爆弾八個を投下し群山へかえつた。三時に出発し、四時に投弾し、五時に着陸した。これが、われわれが、細菌爆弾をおとした最初であつた。われわれは秘密をまもつた。細菌爆弾は、ちようど五〇〇ポンド爆弾そつくりに見えた。昼間みればちがつていたかもしれないが、わたしが見たときは暗やみであつた。わたしは細菌爆弾を積みこまなかつたし、また積みこんであるところをみもしなかつたが、翼に特別の装置はなかつたので、普通の爆弾と同じように積みこまれていた。

この飛行がすんでから、大隊情報課に復命にいつた時、われわれは、二個の五〇〇ポンド爆弾（じつは一五〇ポンド）を、黄州でおとしたが、それは不発弾であつたと報告した。さらに別の八個の爆弾を投下した場所を報告した。特別任務のことを他の人に知らせないために、爆弾は、はつきりと、不発弾として報告する。しかし上級司令部ではこの報告をみて、どこに細菌爆弾が投下されたかを知ることができるのである。

一月十日、偶然かそれとも計画的だつたか知らないが、アモスとトレーシイといつしよに、またお

任務につかされた。この時はアモスとわたしが大隊の作戦部へ報告にいつた。翼の爆弾四個は、みんな細菌爆弾であるという話であつた。こんどの目標は、緑八号ルートの中和の町で、それから他の爆弾をできるだけ早く投下して、基地に帰ることであつた。われわれの任務は秘密で、細菌爆弾を〃不発弾〃として報告せねばならなかつた。細菌爆弾を投下するときの最高時速は二〇〇マイルで高度は五〇〇フイートであつた。前とおなじく翼の爆弾の点検は、われわれの代りに整備部がやつているはずであつた。中隊の作戦部でトレーシーに会つて、飛行機のそばにいつた。爆弾は前のと同じでふつうの爆弾のようだつた。整備員は、翼の爆弾はちやんと積みこんであるから、心配はないといつた。わたしは弾倉の普通の爆弾をしらべた。午前三時、中和にむかつて出発した。四時十分に、町の西端に、高度五〇〇フイート、時速一九〇マイルで、四個の細菌爆弾を投下した。それから南にむかつて飛び、黄州北方の街道に、ふつうの爆弾を投下し、群山の基地に五時十五分に着陸した。

報告のとき、六個の普通爆弾を投下した所を報告し、前回とおなじく秘密を守るために、〃不発弾〃四個を投下したと報告した。



細 菌 爆 弾 の 圖

「これがわれわれのつかつた細菌爆弾の図である」
(1) 48インチ　(2) 14インチ　(3) 扉を開く仕掛
(4) 中味, 3—5000 匹の昆虫　(5) 重さ150 ポンド
(6) 厚さ, $\frac{1}{8}$ インチ

わたしの考えでは、細菌爆弾は、防疫用のワクチンを作るのと同じような種類の一つの医薬供給所から送つてくるのだと思う。この供給所は、日本の本州か、九州にあるものと考えている。

われわれが投下した型の細菌爆弾は、地面にふれると開いて、細菌や虫を大気にふれさせる。大気が寒いと、虫はじつとしていて活動しない。しかし、太陽の熱があたると虫は活動するようになる。

B—29は、北鮮にビラを投下している。これらのビラは箱に入れて投下するが、この箱は空中でひらいて広い地域にビラをばらまく。このビラも細菌戦争に使うことができる。

細菌爆弾を投下する時には、操縦士が投下する。航空士は、いつ、どこで何個の細菌爆弾を投下したかを、記録する。爆弾は、ボタンを押すと、電気仕掛で投下される。

任務がおわつて、乗員が大隊の情報課に報告するときは、全員が出席し、操縦士と航空士が報告する。これは非公式報告で、全員がテーブルのまわりに坐つて情報部員に報告し、部員はそれを書面にかきとり、上司に提出する。そういうわけだから、細菌爆弾を不発弾として報告するのであつて、それは情報課や無関係な乗員たちが細菌戦の秘密を知るのをふせぐためである。

わたしの知つている限りでは、ふつうの爆弾に似たふつうの細菌爆弾を投下するのは、B—二六爆撃機だけである。しかし、他の型の細菌兵器を投下するのには、B—二六は適していない。ビラは、B—二九と、C—四七、C—四六輸送機で投下するが、おもにB—二九をつかう。ボール箱、落下傘容器、衣類、食料品、石けん、紙、万年筆などといつた種々の型の細菌兵器を投下するには、輸送機がいちばん適している。しかし、B—二九も、これらの兵器に使うことができる。

いちばん最初に、細菌爆弾を使つたのは今年のはじめころ、つまり一九五二年一月一日ころであつた。なぜなら、そのころ、われわれはみんな、〃不発爆弾〃に気をつけよと注意されていたのであるから、そういうのである。第四五二爆撃連隊などという他の部隊でも、だいたい同じころから細菌戦争をはじめていた。

もちろん、細菌爆弾を使うという決定は極秘になされたのである。しかし、この決定はきわめて重

大な性質のものであるから、ひじように高い上級司令部、おそらく東京の極東軍司令部が、その決定をしたものであることは疑いがない。

一九五二年四月七日

ケニス・L・イノック

どうしてわたしはアメリカのウオール街がやりはじめた非人道的な細菌戦に参加させられたか

（一九五二年四月十三日、捕虜ジョン・クインのした供述書）

わたしはアメリカ空軍中尉、認識番号一七九九三A、ジョン・クインである。今年二十九才。一九四八年二月十六日、二十六才でアメリカ空軍に入隊した。わたしの家はカリフオルニヤ州パサデナにある。一九四九年二月廿五日、航空士官学校を卒業すると、空軍大学に入学を命ぜられた。わたしの学んだのは、「学術教官科」という六週間の教授法の学課であつた。それをおわると、参謀本部員と

して「学術教官部」に配属された。わたしの仕事は、助手将校を訓練することであつた。絵や図表や映画、幻燈などをどう巧みにつかうかを教えた。わたしは、そういうことを教えていたとき、朝鮮のB－二六にのりこむため、極東空軍に転勤を命ぜられた。そして、B－二六の飛行をまなぶために、まず八月二十五日ラングレー空軍基地にゆけという命令をうけとつた。そこに八週間いた。ついで、そこからストーンマン兵営におくられて命令をまつた。ストーンマン兵営で、わたしはチフスと発疹チフスとコレラと天然痘の注射をうけた。それから、われわれは、飛行機でアメリカを出発し、一九五一年十一月二十七日日本についた。着陸したのは羽田空港であつたが、B地区の府中につれてゆかれ、朝鮮におくられるのを待つた。府中には十一月二十九日までいて、汽車で日本南部の蘆屋空軍基地におくられた。汽車は一晩の旅で、三十日には蘆屋についた。その日すぐC－四七機で朝鮮の群山飛行場におくられた。わたしは第三爆撃連隊第三大隊第八中隊に配属させられた。第三大隊は第八、第九十、第十三の三コ中隊で編成されていて、群山にいるただ一つの大隊であつた。

一九五一年十二月十七日、第八中隊司令室に報告にいつたところ、翌日九時の講義に出席すべきものとして、わたしの名前が掲示板にでているのを見た。翌日、おなじく名簿にのつていた航空士のラーソンといつしよに、わたしは、講義に出席した。講義は地上学校の大きな室でおこなわれた。室に

は三十人分の席があつたが、出席していたのは二十人で、みんな操縦士や航空士であつた。ラーソンとわたしのほかに、ロバート少尉、シユワルツ中尉、ロージヤース中尉、ワトソン中尉、ロング大尉、ダツフイー大尉、これらはみんな航空士であつたが、ホワース大尉、ランド大尉、シユミツト中尉、ビーソン大尉、ロバートソン大尉、マツクアリスター中尉、これらはみんな操縦士であつた。ラーソンとわたしはコーヒーをのんでいて、数分間遅刻したが、ほかのものはみんなもうきていた。話をしていた大尉は、われわれが遅刻したので、ひどく不機嫌そうな顔をし、われわれのうける講義はたいへん大切なもので、極秘なのだと、われわれにむかつてくりかえした。講義はすべての点にふかい注意をはらつてきかねばならないが、講義がすんだら——自分たちの仲間同志でも——論じあつてはならないという話であつた。講師は日本からきたその道の専門家であるとかれはいつた。それから講師を紹介したが、民間人のアシフオーク氏という人であつた。アシフオーク氏は四十恰好の中年で、やせ型、髪の毛はほとんどなかつた。

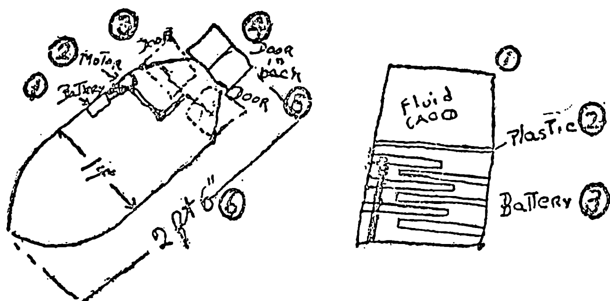
かれは、自分の講義は生物学戦争についてのものであると前おきして、講義をはじめた。生物学戦争というものは考えるだに恐しいものではあるが、科学がすこぶる急速に進歩する原子力時代には、われわれとして、どんな情勢の展開にも準備しておかねばならないのだ、とかれはいつた。将来情勢

がどうなるかはわからないが、われわれとしては、自分をまもる準備をしておかねばならない。もし必要とあれば、細菌戦争をやる方法を知つておくことも必要なのだ、とかれはいつた。かれは、長年のあいだ細菌戦争を研究したと話し、われわれにとつていま必要になつている、とかれが考えるだけの知識を、われわれにあたえるのだといつた。

かれはまず、細菌戦争をやるには実にたくさんの方法があるといつた。細菌はいつどこにでもばらまけるし、その手段についても準備ができている。細菌をそのままおとすことはできない。それは細菌が太陽の直射にあうと、六十秒以内に死んでしまうからだといつた。しかし、たくさんの種類の昆虫や齧歯類に細菌をはこばせることができる。これらの昆虫や齧歯類は、実験室のなかで何代ものあいだ飼うことができ、いつどんな場合でもまたどんなに不利な条件のもとでも生存することができるように、その能力を淘汰することができる。細菌をばらまく方法をいくつかあげるならば、丁度煙幕をはるように細菌のついたチリをまく方法がある。この方法をつかえば風が陸にむかつて吹いているときに海岸に接近して航行している船から細菌がばらまける。また、この方法では低空をとぶジェット機からもばらまける。どんな型のジェット機でも、さしつかえないということであつた。かれは、着物にくつついた蚤や蠅や虱や蚊などの虫によつて、細菌をばらまくこともできるといつた。これら

の虫はまた、その他いろいろの方法、たとえば太陽の光線にあうと破れやすくなつて、虫がはいだせるような箱や爆弾にいれても投下することができる。われわれはB—二六でとぶのだから、この最後の方法、つまり爆弾による方法をおもに論じることにする、とかれはいつた。ついでかれは、翼端のタンクからチリを吹きだしているF—八四ジェット機の絵をしめした。またかれは、蠅と虱みたいな虫がはいまわつている古着の絵をみせた。着物のなかにもぐりこんでいると、これらの虫は温くしておれるのであるが、しかしこれらの虫を淘汰して、寒さにあつてもいたまぬような虫を育てることもできるのだと、かれはいつた。また、それらの虫は長いあいだ食物をたべないでも生きていられるようにすることができる。

それから、かれは、細菌を投下するのにつかう爆弾の絵をわれわれにみせた。これらの爆弾は、それまでわれわれがつかつていた五〇〇ポンド爆弾にとてもよく似ていた。ただし、信管はついていなかつた。この爆弾についてはその大きさや形は問題でなく、ただその中味が大切なのだと、かれはいつた。この爆弾は密封してあり、飛行機から投げおとしたとき以外にはひらかないので、きわめて安全に運搬ができるということであつた。かれは、一つの五〇〇ポンド爆弾の絵をわれわれにしめしたが、その弾殻はとてもうすくて¼インチにも足りなかつた。これらの爆弾は—とかれはいつた—ま



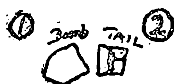
第1図 (I) 電池 (2) モーター (3) 扉 (4) 背扉 (5) 扉 (6) 2フイート6インチ，第2図 (1) 液体 (2) プラスチック (3) 電池

だ実験段階にあるものであつて、その種類もさまざまである。かれがわれわれに見せた絵の一つは、地上にぶつつかると半分にわれる爆弾の絵であつた。もう一つ別の爆弾は、背中に（爆弾が曲つている尾部の近くに）扉をもつていて、それらの扉は爆弾が命中するとひらく仕掛けになつていた。これらの扉は、電池に連結したごく小さな電気モーターでひらくのであるが、電池は爆弾が、地上にぶつつからないかぎり動かぬようになつていた。爆弾が地上におちるまでは、うすいプラスチックの隔膜があつて、電池の極板に液体が近づかないようにさえぎつている。爆弾が地上にぶつつかつた衝撃で液体はプラスチックの隔膜をやぶり、電池の極板をつつみ、そこでモーターが扉をひらくのである。また、かれは、もう一枚爆弾の絵を見せたが、この爆弾は地上におちると、尾

部が割れるものであつた。かれが絵で見せた爆弾は、みんなふつうの五〇〇ポンド爆弾に似せてつくつてあつたが、そのどれにも信管はかいてなかつた。かれはまた、空中で分解する爆弾もあつて、箱にいれた中味の昆虫は、地上におちるまえに、ひろい地域にばらまかれるようになつている、といつた。これらの箱は、太陽の光線にあたると弱くなつて破れ、昆虫（蠅、蚤、蚊）はいだせるのだということであつた。かれの見せたこれら三つの型の爆弾は、みんなおなじ構造であつて、五〇〇ポンド爆弾に似ていたが、囲壁はみんなうすかつた。第一種は二つにひらいているところを見せた。第二種は尾部の近くの背後に扉があり、第三種は尾部が割れてとれているのを見せた。空中でひらく爆弾は、ふつうの針金で翼部の爆弾かけにつるしてある。これらの爆弾はその嘴のところに小さなプロペラーをもつているが、これはつるすための針金がじやまになつて、投下されるまではまわらない。ところが、この爆弾がおとされると針金は飛行機に取りのこされて、プロペラーは自由にまわるようになる。このプロペラーが発電機をまわし、さきに説明したようにして小さな電気モーターに電気を供給する。このモーターは他の爆



(1) 半扉
(2) 他の半分

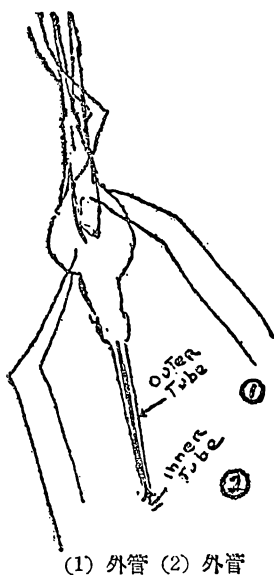


(1) 爆弾
(2) 尾部

弾の場合とおなじく、まず背部の三つの扉をひらき、ついで前部の一つの扉をひらく。そうすると、風が爆弾のなかから箱を吹きとばして、これらの箱はおちるときに散らばつてゆくのである。かれは、この種の爆弾については絵を見せなかつたし、またほんの少ししか説明しなかつた。

つぎに、かれは、どうして細菌をばらまくかを説明した。昆虫なら、ほとんどぜんぶの種類のものが、細菌をばらまくのにつかえる、とかれはいつた。しかし、いまはそのうち数種類について話すことにするが、ばらまいた細菌が南朝鮮にもどつてくることがあつても、これだけ知つておれば、自分の身をまもるには十分であるといつた。腺ペストは、鼠をつかつてひろめることができるが、かならずしも、鼠そのものを投下する必要はない――もちろん投下することはできるのであるが。鼠がたべるし、またたべたがるようなもののなかに細菌をいれて投下すればいいのであつて、そうすると鼠がそれを体にくつつけて伝播する。昆虫を投下するのは、すこぶる簡単で、昆虫はどんな細菌でも伝播する。蠅は発疹チフス※とコレラを伝播し、蚤はペストを伝播する。蚊は各種の熱病、黄熱病、チフス※、マラリア、それにはつきりした治療法のわかつていない脳膜炎※を伝播することができる。脳膜炎はまた日本Bとしても知られており、日本人自身のあいだの病気として、日本人が朝鮮にもちこんだものである。その治療法はほとんどわかつていず、予防法はマラリアとおなじである。ここではマラリア

がどうして伝播するかを説明するが、その他の熱病もおなじ仕方で蚊が伝播するのであるといつた。かれはわれわれに蚊の大きな絵をみせた。これらの蚊は、マラリア患者にかみついて感染するかまたは研究室で伝染させられるまでは、無害である、とかれはいつた。蚊が咬みつくと、その内管も外管も人体につきさささる。蚊は内管で血をすいこみ、それと同時に外管で人体のなかに一種の唾液をつぎこむ。もしその蚊が病菌を保持しておれば、病菌はこの唾液によつて咬まれた人に伝播され、その人は熱病にかかる。



(1) 外管 (2) 外管

食堂の壁にかけてあるポスター(脳炎の予防についての)は、壁をおおうためにかけてあるのではないのだと、かれはいつた。

※つぎの説明は、中国の熱帯および伝染病医学の指導的権威鏡恵瀾博士がくわえたものである。同博士は医学博士、(ニューヨーク大学)、ロンドン大学の熱帯医学の学位をもちロンドンの王立熱帯医学および衛生協会の元会員、ドイツのハンブルグ熱帯研究所の元所員、アメリカの実験生物学

および医学協会の元会員であり、現在は中国協和医学院（元のＰＵＭＣ）と北京大学医学部の臨床学教授である。

「リケッチァ病の媒介体としてみとめられているものは、虱、蚤、扁蝨、小蝨である。今までわかつているかぎりでは、蠅は発疹チフスを伝播しない。というのは、蠅にはふつう病原リケッチアがついていないからである。チフスの伝播には蠅（蠅は大便にたかる習慣があるので、さまざまな有毒微小有機体の機械的運搬者になつている）を別にすれば昆虫の媒介体は必要でない。蚊がチフスの媒介体でないことはたしかである。この捕虜が伝染病の伝播についてのべていることとの或る部分は、現在の医学知識と一致しない。しかし、この捕虜は医者ではないのであるから、病気の伝播について、すべての知識をもつており、また、それを記憶していると考えることはできない。それで、かれが脳膜炎 encephalitis のことを encyphalitis とつずつてかいているのも、当然である。」

われわれは、すべて清潔をまもる規則にしたがわねばならぬし、ことにこんごの数カ月はそうであると、かれはいつた。アタブリンをのめといつて与えられたときには、それをすてないで、飲まねばならない。われわれはみんな、予防注射の効力がきれないように、注射をつずけねばならない、とかれはいつた、そうすれば何もおそれることはないのである。講義は九時にはじまつて、十一時直前に

おわつた。われわれはみんな、細菌爆弾は爆発しないこと、それは、不発弾であることを知つた。

十二月三十一日、ふつうの命令伝達会議のとき、作戦将校は不発弾に気をつけて、帰つてからの復命のときには、すべての不発弾を情報課に報告せよと、われわれに命じた。

一月三日午後二時、わたしは、ほかの二十六人の飛行士、二十七人の航空士、二十七人の無線爆撃手、二十七人の機関士（ある場合には、これらの機関士は、砲手であつた。われわれの中隊では三機が砲手をのせていた）といつしよに大隊作戦部に報告にいつた。わたしの同乗員は、航空士のロージャース中尉と機関士のセイヤー軍曹であつた。天気がよかつたので、無線爆撃手はのせなかつた。わたしは告知板から、われわれの航路と出発時間とをかきとつた。航路は沙里院から平壌にゆくもので、出発時間は朝の二時半であつた。例のような命令の伝達がはじまつた。ふつうの命令伝達では、まず作戦将校が、われわれのきくすべてのことはみんな秘密であるから、秘密として取りあつかうこと――われわれの仲間以外にしやべつてはいけないということを、われわれに命じた。ついで、情報将校が、前夜どのような交通機関の動きがみとめられ、そのうちどれだけに被害をあたえ、どれだけを破壊したかを報告した。陸軍の連絡将校は前線の状況を説明し、気象将校は天候をわれわれに説明してくれた。その他の情報、風や温度などは航空士が告知板からかきとつた。どの点からみても、こ

れはふつうの命令伝達会議としか思えなかつた。

ロージャースとセイヤーとわたし自身は、一時五分すぎに大隊作戦部にあつまつた。そして、わたしは宿直作戦将校のいる小さな室に入つていつた。レイノルズ大尉が宿直していた。わたしが自分の名前をいうと、わたしには特別任務があたえられているのだと、かれはいつた。ほかのことはさておいて、まずまつさきに翼部の爆弾を、できるだけ平壌に近づいておとさねばならぬというのだ。かれは、壁にかけてある地図の一点をさし示して、そこに赤ピンをつきさしたが、それは平壌から南五マイル、幹線道路から東へ三マイルの地点であつた。それから、われわれはふつうの飛行使命をつづけ、できるだけ早くそれをはたして、情報課に復命せよとかれは命じた。翼部の爆弾は二百フイート、またできれば、それ以下の高度でおとし、それは不発弾であるから、その爆発のことは心配するにおよばないということであつた。わたしは細菌爆弾についていつかきいた講義のことを思いだして、いつたいその爆弾は何なのかときいたが、かれは知らないと答え、それよりも命令された通りに実行することがいちばんいいのであつて、なぜそうするのか、それは何かということなど気にかける必要はないといつた。これは細菌爆弾だなと、わたしは考えた。

飛行機のところへ出てゆくと、われわれは一人の番兵にであつた。それで、わたしはそれらが細菌

爆弾にちがいあるまいと思つた。翼部の爆弾についてはもうちゃんとしらべてあるから、心配はいらないのだと番兵はいつた。しかし、わたしは、飛行機をしらべるときに、それを見たが、「翼部の爆弾には信管がない」と航空士のいつたことのまちがつていないのに気がついた。われわれ二人は顔を見あわせた。しかし、わたしは命令は命令だといつて、それらの爆弾は、そのままにしておいた。わたしは、それをどこにおとすかを、かれにおしえ、かれはその場所をかれの地図の上にしるした。

われわれは、二時二十五分に出発し、三時半には平壌すぐ南方の地点についた。わたしは橋のすぐ南で道路から東におれた。二百フィートの高度におりたとき、ロージャースがこれでよかろうといつたので、わたしは四つの翼部爆弾を一度に一つづつ、いそいでつづけざまに落した。それらは不発弾であつた。われわれ両人は、そのとき、それらがたしかに細菌爆弾であることを知つた。

残る任務は四時十五分までにおわつて、五時十分には群山にかえりついた。飛行機からおりると、装備をしまいこんでから、飛行機には異常なしと報告しておいて、われわれはすぐ、復命のために大隊作戦部の情報課へいつた。われわれは高度二百で、命ぜられた地点に爆弾四つをおとし、これはみんな、不発弾であつたと報告した。軍曹がそれをかきとめたが、それは、その朝情報課に報告するためであつた。

一月十日、午後二時わたしは軍隅里と江界間をいつもとおなじふつうの任務をおびてとぶように命ぜられた。同乗員は航空士としてシュワルツ中尉、機関士としてセイヤー軍曹であつた。出発時刻は翌朝二時であつた。この命令はふつうのものであつたので、わたしは、午前十二時三十分作戦部にいつて、いつものように名簿に署名するために入つていつた。ところが、わたしは、また特別任務をあたえられている、ということをおしえられた。そのときも、レイノルズ大尉が宿直であつた。レイノルズ大尉は、わたしが、もはや一度、不発弾についての特別任務をやつたことのあるのをおぼえていて、そのときのことを話し、こんどもおなじ種類の任務だといつた。しかし、こんどはたつた二つの不発弾だといつて、それを軍隅里の北東におとすことを命じ、壁の地図のうえでその地点をしめした。そこは軍隅里北方三マイル、鉄道幹線東方五マイルであつた。飛行機の側ではまた番兵にでくわし、翼の爆弾の手配はすんでいるといわれた。この度も外翼の爆弾には信管のついていないことを、わたしはみてとつた。わたしはシュワルツに、特別爆弾を投下する地点をおしえた。それで、われわれは細菌爆弾をつんでいることを知つていた。二時に出発し、三時二十五分に軍隅里の上空についた。シュワルツが方向をかえろといつたので、わたしは機首をかえて、高度を二百フィートにさげ、爆弾をおとした。それらは不発弾であつた。残る仕事をできるだけ早く切りあげて、四時十分に群山にむけ

てかえりはじめた。群山に着陸したのは五時二十五分で、われわれは装備をしまい、飛行機に異常のないことを報告したのち、作戦部の情報課へいつて、不発弾二つを落したことと、その落した場所を報告した。軍曹は情報課に報告するため、われわれの報告をかきとめた。

十二月十四日、わたしは、翌朝九時地上学校校舎の講義に出席すべきものとして、わたしの名前が掲示板に出ているのに気がついた。わたしは九時大きな室のその講義に出席した。わたしのほかに飛行士や航空士の将校が二十五人出席していた。ビーソン大尉、ラーソン中尉、シュワルツ中尉、ロバート少尉、ワトソン中尉がその中にいた。基地作戦将校のアレン少佐が出席者中の先任将校であつて、講師を紹介した。かれはこの講義は大切で秘密であるといつた。講師のクラーク氏は、原子核研究の分野のすぐれた物理学者であり、ここで原子力戦争のことを、少しばかりわれわれに説明してくれるのだと、かれはいつた。クラーク氏は日本から来たということであつた。

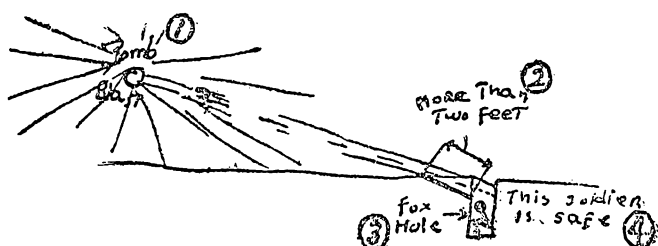
広島と長崎に爆弾をおとしていらい、原子力戦争の科学は大きな進歩をとげたという言葉で、講師は講義をはじめた。B―二九だけが原子爆弾をはこべる時代はもうすぎた。あの当時の大きさの爆弾は、いまでは当時の何倍も(何倍かはいわなかつた)効力が大きくなつた。いまではどんな大きさの爆弾でも、思いのままにつくれる。かれは、アメリカで、かれらのいう「赤ん坊」原子爆弾について

の実験をやつたこと、また爆弾のほかに、砲弾としてつから研究もすすんでいることを話した。かれは、原子力の雷頭部をつけた迫撃砲弾の製作がほぼ完成にちかずいているといつた。水素爆弾についても大きな進歩をとげており、これは現在われわれのもつている型の原子爆弾より千倍も効力が大きいといつた。この爆弾は、たつた一つで、ニュー・ヨークのような都市を破滅させてしまうことができるということであつた。それからかれは、原子爆弾のさまざまな使い方についてわれわれに話した。原子爆弾はそれを地中で爆発させるようにおとして、放射能をもつたチリをひろい地域にまきちらすことができる。このチリは、それのふれる一切の生きものの生命をうばい、その放射能は数週間もそこにのこつている。また、この爆弾は、広島、長崎でやつたように、パラシュートをつけて空中で爆発させることもでき、この方法でやると熱と爆風の効果は、もつと致命的であるが、放射能は、それほど長くはのこつておらず、その大部分は風にふきちらされて、空中に散つてしまうといつた。さらに、この爆弾は深い水中で爆発させることもでき、この方法は海岸にちかい都市にたいしてつかえると、かれはいつた。どんなに大きな港でも、その中の水の大部分を空中にふきあげる。爆発させるところは、深いところであればあるほどよい。吹きあげられた水は放射能をおびて、雨となつて市中にふりそそぐ。その上、爆風の効果もあり津浪がおこつて、港を洗いながし、大きな損害をあたえる。

かれは、放射能雲の実験もおこなわれたが、放射能雲は長いあいだ放射能をたもつていて、それが降るところでは、すべての生命を破壊してしまうだろうといつた。

かれは、小形原子兵器（爆弾）の実験がアメリカのネヴァダ州でやられ、爆発地点から二マイルのところに軍隊がいたが、一人も怪我をしなかつたという話をした。それは爆発が小さく、適当な予防法をとつたからであつた。かれの話によると軍隊はみんな衣服でよく身体をつつみ、頭が簡単壕の尖端から、二三フィート下にくるように、簡単壕のなかに深くかくれていたからである。これはたいへん必要な予防法であり――とかれはいつた――われわれはその理由を理解せねばならないのである。

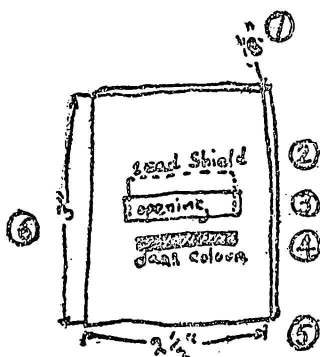
原子爆弾は三種の放射線をだすと、かれはいつた。爆弾が爆発すると、まずどえらい量の熱ができて、爆発の中心点は何百万度にものぼつて、太陽とおなじくらい熱くなり、その熱波は爆発の大きさに比例して半マイルから数マイルにもひろがる。つぎに、原子爆弾が爆発すると、衝撃波がおこり、これは高性能爆薬の爆発よりもはるかに長く持続する。そして、つぎに放射能がおこる。もし諸君が即死しない程度に、爆発地点から遠くはなれたところで、簡単壕のなかにはいつておれば、熱波にたいしても爆風にたいしても安全であり、放射能にたいしても、それがチリや雨になつて降つてこないかぎり、安全である。原子爆弾から出てくる三つの放射線はアルファ線、ベーター線、ガンマ線であ



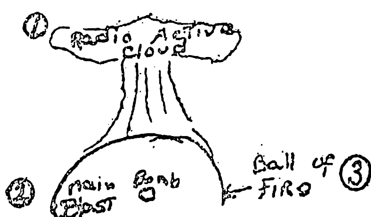
(1) 爆弾爆発 (2) 2フイート以上 (3) 簡單壕
(4) この兵士は安全である。

る。アルファ線とベータ線は、ただ爆発中しかでないし、もし諸君が爆発の焦熱にさえ安全であれば、アルファ線やベータ線のやけどをふせぐにはシャツ一枚、とくにうす色のシャツ一枚で十分である。手や首や顔のように着物でおおわれていず、爆弾が爆発するときに露出している部分はやけどをうけることになる。ガンマ線は、その爆発の型にしたがってかなり長いあいだ持続し、それにたいする防禦としては、着物は何の役にもたたないが簡單壕はいい防禦物になる。ガンマ線はX線とおなじくあらゆるものを通して、骨の生命をくだき、血液を破壊するが、鉛か厚い土砂の屑はこの光線をとうさない。それからかれは、どんな風に簡單壕をつくるかをしめした絵を見せてくれた。鉛だと半インチの厚さで、ガンマ線を通さなくするが、土砂だと少くとも二フイートは必要である、とかれはいつた。ガンマ線は、ほとんど二フイー

トまで土砂をつき通すのである。爆発地点の付近の土砂は、ガンマ線をだしつづける。というのは、ガンマ線をつよくうけたものはやはり放射能をもつようになり、ガンマ線をだすからである。ことに、被爆地点の付近にあつた金物にふれることは、すこぶる危険である、かれは、放射性ガンマ線の大部分は、大きな雲になつて空中に運びさられ、風で吹きちらされてしまうといつた。かれはこのことを絵でしめした。ガン



(1) $\frac{1}{8}$インチ
(2) 鉛　板
(3) 口
(4) 黒い色
(5) 2½インチ
(6) 3インチ



(1) 放射能雲 (2) 爆発の中心 (3) 火の玉

マ線は吹きちらされたのちには、人間にとつては無害になる。が、ネヴァダ州の実験後数日してニューヨークのある写真実験室から、そこの感光紙の多くがガンマ線に感光した跡をしめしているという

報告をおくつてきたという話を、かれはした。ガンマ線は雲にのつて、アメリカ大陸を横断し、この感光紙に感光したわけである。これらの光線は、放射能雲になつてほかへ運びさられてしまうから、あまり長くいさえしなければ、空中爆発後その下の地域に入つても、だいたい安全である、とかれはいつた。けれども、ある種の理由で絶対に入る必要がある場合のほかは、まず訓練をうけた人たちが、ガイガー計数管をもつて入つていつた後からはいつた方がいい。諸君がもしどうしても入つてゆかねばならぬときには、とかれはいつた、金物にさわつてはいけない。だれでも持ちはこべるポケット放射能発見器ができているが、これは諸君が被爆地帯に入つたときに、どれほど長くそこにいて、安全であるかを示してくれるものである、とかれはいつた。かれはその発見器を見せたが、それはタバコの箱ぐらいの大きさで、ただ厚さは½インチしかなかつた。それにはまん中に高さ¼インチ長さ二インチぐらいの口があつて、鉛の板でおおつてあつた。この板をずらして口をあける。蓋の下には一枚の感光紙があつて、これは放射能にあたると黒くなる。また箱の外側には色がぬつてあり、この色を感光紙の色とくらべるのであるが、もし感光紙の色が箱にぬつてある色とおなじになつたら、諸君はそこから立ち去らねばならない。そうしないと、あまりに多くの放射能をうけて危険におちいるからである。それ以上すすむともう引き返せなくなる。

諸君は、被爆地帯に入るときには、鉛の蓋をあけて、口のなかの色を見つめて、それを箱の上についている黒い色とくらべ両方がおなじ色になつたら、そこを立ちさるのである。ついで、かれは、このポケット発見器は、もつと正確なガイガー計数管の止むおえない代用品にすぎないのだといつた。ガイガー計数管はラジオのような働きをし、放射能にちかずくと音をたてるが、その音を諸君はそれにつないである補聴器できくことができる。また、それには小さな計器がくつついていて、ちようど自動車の電流計のように、どれくらいの放射能があるかをしめしてくれる。放射能はラジオトロンまたはそれに似た言葉の単位をつかつて測定すると、かれはいつた。それから、かれは、われわれを一人一人ならべ、補聴器をつけさせて、ガイガー計数管に放射能をおびた物体を近づけて、それをきかせた。はじめ、カチカチいう音がすこぶるゆつくり鳴つていたが、その物体がだんだん近ずくにつれてとても早く鳴るようになり、しまいには一つのカチという音と次のカチという音がかさなりあつて、コロコロとひびくようになつた。講義は九時から十時半までつづいた。

これらの事実から見ると、ウオール街の資本主義的戦争屋どもが、その貪慾にかられて、その無慈悲な貪慾にかられて、この細菌戦争という恐ろしい犯罪をやりはじめ、自分らがもつと多くの金をもうけて、この戦争を拡大しようとしていることは明らかである。かれらは、かれらの非人道的な犯罪

目録に原子戦争さえつけくわえて、第三次大戦をおっぱじめようとしていることさえも、しめしている。これらの帝国主義者は、金もうけのためにはどんなことでもするのであつて、戦争が大きくなればなるほど、かれらはもうかるのである。かれらは罪のない世界の人民がどうなろうと、少しも気にかけていないのである。アメリカの人民、労働者はこれらの犯罪の真相を知れば、きつとこの戦争屋どもを断罪するにちがいない。アメリカの労働者は、かれらの読む新聞や雑誌やラジオからめつたに真相を知ることはできない。これらの機関はみんな金に狂つたウォール街の帝国主義者が牛耳つているからである。かれらは人民が真実を知ることを欲しない。というのは、そうなれば、かれら戦争屋どもが世界の人民にたいして非人道的な犯罪をおかすのを、人民はゆるさなくなるからである。戦争屋どもは戦争を拡大し、大金を儲けるために、これらの非人道的な犯罪をやつていることは、すこぶる明らかである。

わたしは、これらの戦争屋どもの手先になり、細菌爆弾を落させられ、朝鮮の人民と中国義勇軍にたいするこの恐ろしい犯罪をやらされた。わたしは軍人であるから命令に従わねばならないが、それらの命令はウォール街のあの帝国主義者どもがくだすのである。わたしはこの犯罪をやることを拒絶することはできなかつた。しかし、一方、人民にたいするこの非人道的犯罪を実際にやつたのはわた

しであつて、わたしは細菌爆弾をはこびそれを落したが、その犠牲者の大部分は、きつと罪もない女や子供であつたにちがいない。これは人民にたいする恐るべき犯罪である。ドイツのナチでさえこういう戦争はやらなかつたし、人間の皮で電燈の笠をつくつたあのイルザ・コッホでさえこういう戦争はやらなかつたのであるが、わたしはウォール街のアメリカ帝国主義戦争屋どものために、こういう戦争方法をやつたのである。わたしは中国義勇軍に捕虜になつて武器をすててからというもの、もつと小さい罪をおかした人間が期待していいよりも、はるかによい待遇をうけている。しかし、かれらはわたしが、武器をすてたのちには、もはやかれらの敵ではないと、いつでもいつてくれた。かれらはかれらの戦時捕虜にたいする寛大な政策を説明してくれたが、わたしは、ウォール街の帝国主義者のウソの宣伝で育てられてきたので、それを理解することがひじようにむずかしかつた。しかし、中国義勇軍はすこぶる忍耐づよかつた。かれらは寒いときにはあたたかい着物をくれ、食物もすばらしければ寝具もよく、あたたかいところにねかせてくれた。わたしは、かれらの親切に末長く感謝している。中国義勇軍側が長いあいだ辛抱していたのち、とうとう、わたしはわたしの罪がわかつた。わたし自身の良心が、わたしをひどくなやました。そして、このなやみの重荷からのがれるためには、告白をして、悔い改めるということがたいへん役にたつた。

わたしは、わたしのおかした人民にたいする恐るべき罪がわかつた。わたしは、罪もない平和を愛する人民にたいして非人道的なことをしたのである。わたしは、この罪がどんなにわるいものであるかを知つている。わたしは、人民がこのことをよくわかつて、わたしの罪をゆるしてくれることを願つている。それは平和を愛する全世界の人民にたいする罪であつたし、平和を愛するすべての人民の断罪すべき罪であつた。わたしは、平和をのぞむすべての人民の許しをねがつている。なぜなら、わたしの罪は、かれらにたいしてなされたものであるからである。

一九五二年四月十四日

ジョン・クイン

新中国の公共保健衛生運動についての覚え書（附録四二）

一

委員会は北京に到着して、すぐ二つのことに気がついた。それは、

一、道路、公園、広場、商店がとても清潔でととのっていること

二、ハエと蚊がほとんどいないことである。

北京の大部分は相もかわらず旧式な都市で、たくさんのせまくるしいふるぼけた建物や住宅があるが、目にふれる限りの家はみんな、毎日きれいに掃き清められて、ゴミのたまっていることなど、一度もみたことはない。物置場においてある材木や鉄屑でさえ、きれいに積みあげられていた。六、七年前に中国に住んでいたことのある委員の一人は、こうした変りようをみて、びつくりするほかなかつた。

委員会は、町で売つている食料品に、いまではみんなフタがかぶせてあるのを発見した。街頭で売つている茶は、みんなフタのある茶わんに入つており、公園には、フタのついている飲み湯を入れたカメが備えつけてある。タン壺にはみんな、大小に応じて木のフタがされ、このフタには木の柄がついていて、タンをするとき、腰をかがめなくともよいようになつている。便所にも、これと同じやり方でフタがしてある。また、以前にはどこでもみられたタンをはく習慣が、いまでは、ほんとに少くなつている。ハエを見つけたときには、どこでもすぐ、ハエたたきが手にとれるようになつており、どこの農村へいつても子どもたちが力をこめてハエたたきをふりまわしているのを、みることができる。すべての人が、一人のこらず、ハエにたいしてひどく敏感になつている。

二

委員会のメンバーは、北京市公共衛生局長、北京大学医学院公共衛生学部教授の厳鏡清氏に会つたが、かれは、そのさい、つぎのような話をしてくれた。

一九四九年以前には、中国の衛生の程度はとても低かつたが、解放によつて、人民の衛生にたいする態度がすつかり変り、衛生がしごとを向上させるための大切な要素の一つであることを、知るよう

になつた。幹部たちは、この点をいたる所で宣伝してあるいた。こうしたことが、つぎにのべるようないろいろな成果の背景になつている。

一、ゴミ――以前の北京は、ゴミの一杯つもつた都市であり、道路はとてもきたなかつた。なかでも「二龍路」という街路があつて、人はその道を夏は「二龍河」とよび、冬には「二龍山」とよんでいた。というのは、たくさんのゴミがそこにつもつていたからである。一九四九年には、まえからたまつていた、そのゴミ（四十年もの長い間たまつていた）が、みんな掃き清められた。現在では、ゴミはたまるそばから、清掃されている。一九五〇年の一年間に清掃されたゴミは五十万立方メートル、一九五一年には七十万立方メートルであつた。ゴミがふえたのは、生活程度が向上した結果である（か、または、ことによると、人口の増加によるのかも知れない）。ゴミ桶には、いまではみんな、フタがかぶせてある。

二、便所――解放まえには、ふつう便所には、フタがつけてなかつたが、現在ではみんなフタが、つけてあり（前記参照）、毎日、フタのついた容器をもつた人夫が、便所をきれいに汲みとつている。一部の住宅には便所が、なくて、そこに住んでいる人たちは公衆便所を使つているが、それらの公衆便所はみんな、注意深く使われていて、とても清潔になつている。どこの都市にも、新しく公衆便所が

たくさんつくられている。私用便所にも公衆便所にも、みんな石灰がまいてある。北京では今日、市民のうち百人に一人が水洗便所を使えるにすぎない。糞尿はみな、市外の相当遠い地方でバラまかれ、ハエをその上にたからせないように、つねにそれをひつくりかえしている。これらの糞尿からは、混合肥料がつくられている。

三、溝――北京では、明の時代（十六世紀）から、雨水溝がつくつてあつたが、それらはみんな長い間、手入れがされていないので、その機能をはたすことができなくなつていた。解放後、これらの溝はみんな修繕し、その上新しい溝をつくつている。たとえば、「二龍路」はいまでは、一年中ちやんとした道路になつている。北京の一部には、むき出しの溝があつて、人がそこに落ちこむおそれがあり、事実落ちこんだことがあつたが、今ではもうそれがつくり変えられて、暗渠になつている。それは有名な「龍鬚溝」とよばれる溝で、ある人がこの溝のことを脚本に書いている。城外にはまた、いくつかの汚水溜りがあつたが、この汚水も、いまでは処分されてしまつた。

四、水道――以前には、市民の三分の一しか水道を使えず、その他のものはみんな、湧き井戸や汲み井戸から水を汲んで使つていた。解放後の今日では、城内のすべての住民が、水道の水を使つている。

五、ハエと蚊――はやくも一九四九年から、蚊の撲滅運動をやる必要が痛感されはじめ、そのとき以来、この運動は一貫してやられている。この運動のためにとられた重要な手段の一つは、すべての溝にフタをすることであり、もう一つのこれまた重要なしごとは、すべての木の洞をうめることであつた。木の洞をうめるには泥と石灰を使つた。その結果、雨降りののち、それらの洞が蚊の発生場所になることがなくなつた。どこにいつても、そういううめた洞を見ることができる。

便所にフタをつけたことと、便所掃除を毎日やつたこととは、ハエを撲滅するために、いちばん必要な措置であつたらしい。厳博士は、これについてつぎのようにいつた。

「便所を十分に掃除し、溝にフタをつけ、ゴミを清掃すれば、ハエはかならずいなくなります。」

六、犬――一九五二年の春から、北京では、犬を飼うことが禁止されている。委員会は、中国ですごした最初の一カ月間に、一匹の犬もみることはできなかつた。犬を飼うことを禁止した理由は、つぎのとおりである。

① 犬は伝染病を伝播するおそれがある。

② 犬の排泄物がそこいらにあると、ハエがそれにたかりやすい。

③ 犬は脳炎の病毒の保持者となるおそれがある。

④ 犬は交通のじやまをする。

七、衛生運動――この運動は、蚊やハエにたいする戦いのうちでも、いちばん重要な措置であつた。この運動や一般公共衛生の面で、中国があれほど、異常な成果をあげたのは、すべての民衆とあらゆる個人が心からの協力をしたのだということによつて、はじめて説明がつくのである。だからこそ、こんなにも簡単な方法で、信ずることもできないほどの成果が、えられたのである。衛生運動では「みんながみんな健康にならねばならない」「人民は、自分の健康をまもる責任がある」というスローガンが、かかげられた。

ハエと蚊を撲滅するための衛生運動は、毎年三月から始まつて、秋までつづく。ときには大会が開かれて、政府の役人が講演したあとで、市内各区の住民班会議が開かれ、競争がやられる。衛生の責任者はたえず検査をしてあるく。いろいろな大衆組織(婦人や青年)は、すべての決議を一〇〇%やりぬくことを保証する。ふつうは、十戸ごとに一人の責任者が選ばれる。思想や考え方も、いまでは

大きく変つてきており、以前には、隣り同志で批判しあうようなことは、むかしからの風俗にそむくことだとされていたが、いまでは、建設的な意味をもつた相互批判と自己批判がさかんに奨励されている。運動にたいする興味は、年ごとにたかまつてきており、今年の成果は、いままでのどの年よりもよい。

衛生運動は、会議を開くというやり方だけでやられているわけではなくいろいろな、ちがつたやり方をしている。たくさんのみごとな色彩のポスターを貼つて、どうして建物や衣服をきれいにしたらよいか、どうして子どもを育てたらよいか、などということを人びとに教えている。ラジオは、たえずいろいろなことを教えており、新聞はいつでも衛生と衛生的措置について必要な文章をのせている。興味をひくような挿絵入りのパンフレットを安い値段で売つている。芝居や音楽会では、しばしば、一人または二人の俳優、または男女二人が、健康をまもることの意味と、人びとはそのために、なにをしたらよいかということをおしえた歌を歌うが、それがさかんな拍手をうけていることをみても、これが大いに歓迎されていることがわかる。

八、衛生の統計——以上のべたようないろいろな措置がとられた結果伝染病はもう以前のように広がることはなくなつた。一九五〇年四月から六月にかけて、北京で腸チフスのために死亡した数を

一〇〇とすれば、一九五一年同期の死亡数は四〇にへつた。赤痢は一九五一年には、原因不明の上昇を示した（一〇〇～一一四）が、一九五二年には五一に下つた。その他の消化器系統の伝染病（夏季の下痢、寄生虫など）の数字も、一九五一年は七四、一九五二年は三五にへつている。

ここでぜひとも、つぎのことをのべておかねばならない。国民党時代には、種痘を受けた者の数が毎年七百三十万人（これは一九四六年の最高記録である）にたらなかつたが、解放以後一九五一年末までに種痘をうけた者は、全人口の半数以上（三億七百万人）に達した。この数字は一九五二年六月末には、さらに三億六千九百余万人（369,360,893人）に増加している。天然痘の流行は、ほとんどなくなつた。一九四九年以来、中国にはコレラは一度も発生していない。産婆の訓練をやつた結果、初生児の死亡率（初生児破傷風）は下り、北京では、つぎのようになつている。

一九四九年　〇・七二％
一九五〇年　〇・五七％
一九五一年　〇・二五％

産婦の死亡率も、つぎのように、ほとんど半減している。

一九五〇年　〇・二四％

一九五一年　〇・一三％

ペスト流行の可能性を減らすため、中国東北ではたえまなくネズミ退治の運動をやつており、一九五一年だけで三千五百万匹のネズミをとつた。

九、ワクチンの生産――委員会は、湯飛凡博士の指導する中央生物製品研究所を参観した。

中央生物製品研究所は、政府の衛生部に責任を負つており、一九四六〜四七年に設立されたが、現在では大きく拡張されている。同研究所は、中国各都市に七つの支所をもつており、北京にあるのは中央研究所である。同研究所には、七〇〇〜八〇〇人の従業員（そのうち技術者は約五〇〇人）が働いている。生物製品研究所は、北京西部の郊外に動物飼育場をもつており、また、自分のガラス工場ももつている。その科学的水準は最高である。同研究所の主なしごとは、ワクチンの製造と検定である。なかでも痘苗の生産高がきわめて大きいのは、当然である。ふつうの痘苗のほか乾燥痘苗もつくつており、これはアンプルに密封してある。

このほか、大量生産しているワクチンには、腸チフス、パラチフス、コレラ、百日咳、発疹チフス（受精鶏卵で培養）がある。

カチエ苗（不明）は、別棟の建物のなかで培養しており、破傷風とガス壊疽もそうである。

脳炎ワクチン（中国夏秋型脳炎に対抗する）は、ハツカネズミの脳で培養している。すべてのワクチンが、最後にはみんな、衛生部中央生物製品検定所の検定をうけねばならないことになつている。それで、管理はきわめて厳しくやつている。

中央生物製品研究所は、また血清の大量生産もやつており、さらにペニシリンとストレプトマイシンの製造もやつているが、これは現在のところまだ小規模である。

一〇、殺虫剤の生産——害虫駆除運動はおもに、化学的方法をつかわないでやつているが、しかし、DDTその他の殺虫剤の生産も、新中国では急速に発展している。これは反細菌戦と中国人民義勇軍の需要に応ずるうえで、その用途と重要性がみとめられているからである。

三

委員会は、後になつて、中国東北ではどんなふうに衛生活動をやつているか、どんなふうに細菌戦の危険にたいして斗争しているかを、みることができた。

このことには、はやくも北京停車場ででくわした。つまりどんな人であろうと、山海関の以北へ行くには、乗車するまえに、かならず予防接種証明書（それには、写真が貼つてある）を停車場で示さ

ねばならなかつたのである。山海関というのは、列車が長城線を通過する地点である。

客車はとても清潔で、どうして健康をまもり、細菌戦の脅威と斗争したらよいかを宣伝するポスターが、車内のいたる所に見られる（色刷りで、とても人目をひく）。

客車のなかには、フタのついたガラス製の容器に入れた茶がそなえつけてある。駅によつては食物を売る婦人の売子が、一列にならんで、白い上つぱりを着、マスクをかけている。（食物饅頭、鶏のまる焼、ソーセージ）などはみんな、フタのある容器に入れてあり、それをつまむときには、じかに手でやらないで、はさむ道具をつかつている。かの女らはみんな、鉄道当局の管理のもとで働いている個人商人である。

瀋陽から北京にもどつてくる途中、山海関駅で、車輛の消毒がおなわれ、一行はしばらくの間、車から下りていなければならなかつた。細菌戦がはじまつてから、車輛消毒の新しい方法が発明され、それが現在実行されている。それは短いトンネルをつくり、その四方の壁にたくさんのパイプをとりつけ、それらのパイプから摂氏二〇〇度の水蒸気を噴出し、それによつて車輛を消毒するのである。ただし、蒸気をかけては、損傷するおそれのある貨物をのせている場合には、薬剤で消毒する。客車は、ふつうの手動式噴霧器で薬剤消毒をする。

四

瀋陽では、委員会は、状態が北京とおなじであるのに注意をひかれた。つまり、清潔で、ゴミがなく、蚊がおらずハエもほとんどいない。

東北行政区衛生部副部長白希清医師は、反細菌戦のためにとられた措置について、委員会に報告してくれた。かれは、中国東北では、細菌戦がはじまつているとかれらが確信するようになつたのは、一九五二年の二月からであつたといつた。そこで、この細菌戦にたいして、すぐさま広はんな宣伝・教育活動が展開された。全人民が組織され、また、どんなふうにして細菌戦に対抗したらよいかを、みんなが知るようになつた。かれらにたいして、個人衛生の必要性が説明されるとともに、その居住地を、どのように清潔にしたらよいかが説明された。かれらはみな、飛行機または空中から落ちてくるものは、それがどんなものであろうと、すぐさまそれを撲滅せねばならないこと、また、それに手でさわつてはならないことを、心得るようになつた。かれらはみな、ネズミの出る穴という穴は、すべてふさぐことが必要であることを知つた。もしも、襲撃をうけたことが確定的であるか、またはその疑いのある場合には、すぐさま消毒がおこなわれた。この点にかんする詳細な命令は、(附録一三

をみよ）、細菌戦がはじめられたという疑いがもたれたときから、住民たちにたいし、すべての昆虫（ハエ、蚊、ノミ、など）を撲滅するように、教育した。昆虫をさがしだす活動は絶えずおこなわれた。その回数の多い少いは、細菌戦の進行状態によつて決定された。このしごとに、とくに努力したのは、学生と青年であつた。

瀋陽で、委員会は、豆腐をつくるための一つの石臼をみたが、それには近代的で、衛生的なフタがとりつけてあつた。そうしたフタなどつけていない石臼が、中国ではすくなくとも一千年は使われていたのである。それらの石臼は、二つの穴をもつた石を組合せてつくり、上の穴から大豆をそそぎ入れ、下の穴から豆漿が流れでる仕組みで、つぎつぎと水をそそいで石臼の回転を容易にするようになつている。石臼の上部にはちよつとした仕掛がしてあつて、一匹のロバを使つて、それをまわすことができる。以前には、ほこり、ロバの汚物、毛髪、それらにくつついている細菌が豆漿に附着するし、その上夏には製造ができないこともしばしばであつた。しかし、現在ではきわめて工合いのよい木のフタが発明され、ほうぼうでそれが使用されている。このフタの上部には鏡がとりつけてあつて、それによつて豆漿が容器に一杯になつたかどうかを、見られるようになつている。

瀋陽で、委員のあるものは、いくつかのふつうの労働者住宅を訪問した。そこでは、毎朝五時まで

にすみからすみまで清掃をやり掃除がすんでから、その日の野菜や果物を買いにでかける。ある家では、家の片すみに細長い、古ぼけた陶製のカメがおいてあり、それには木のフタがかぶせてあつた。われわれが聞いたところでは、これは、野菜や果物や食器を消毒するためのもので、なかにはクロール・カルク（漂白粉）溶液がはいつており、消毒するときには、それに五分間つけておき、その後さらに、果物は湯のなかで洗い、野菜は煮るのである。中国では、野菜をなまで食べることはめつたにしないが、煮るときの時間は、ふつうとても短い。とりまとめていえば、こうしたすべての保健活動がゆきわたつてきたのに、かれらのむかしながらの旧式な、ときにはとても簡単でさえある生活の有様は、すこしも変つていない。これは、中国の特長であり、人びとに最もふかい印象をあたえる。かれらは、近代化された設備をもつ家屋が建造されるまで、待つているわけにはいかない。そこで、かれらは、現在ある条件のもとで、衛生宣伝活動をはじめたわけである。そうすることによつて、問題を完全に解決できるということ、すくなくとも、今日の中国ではできたということを、この結果は証明している。

五

委員会が、トラックにのつて黒龍江省の最北部で内蒙古との境界線にちかいラハから甘南道まで、百五十キロにわたる旅行をしたとき、どこへいつても、その清潔でキチンとしていたことには思わず驚かされた。石灰をぬり、フタをかぶせたゴミ箱が、村のどの家の前にもおいてあり、きわめて簡単ではあるが、清潔な便所にはみんなフタがかぶせてあり、溝もみなキチンとなつていて、ネズミの穴もみられない。多くの村の四ツ辻には、大衆から喜ばれている黒板新聞があり、白墨で法規や警告やニュースが書いてあり、また、有害な昆虫や細菌のたくみな図解がされている。こうした掲示は、きわめて経済的であり、地方色に富んでいるばかりでなく、容易に書き換えることもできる。

委員会が知りえた多くの具体的な事実は中国東北の人民が、細菌戦に出あつたときには、どうしたらよいかを、完全に理解しており、かれらの虚をつくことは、まつたく不可能だということを、証拠だてている。委員会はこの点についてはすこしの疑いももつておらず、確信をもつている。その原因は、辺僻な甘南道での経験と、委員会がその目でみた証人たちの挙動やことばからきている。委員たちは、朝鮮との国境にちかい、遼東省の民衆と話をしたし、また、瀋陽附近の、多くの成年男女や子どもたちとも話をした。われわれが、これらの人たちの話に耳をかたむけたとき、いままでは知ることもできなかつたようなことがら——おそろしい、そして珍らしい、しかも人を感動させる抒事詩

が、目の前にそのまま展開してきた。われわれには何百人、何千人という人たちが、自製のマスクと手袋をし、手にコーリャン殻でつくつた箸のようなピンセットをもち、毎日々々かれら自身の村のなかをゆつくりゆつくり移動しながら、腰をかがめては小さな昆虫や羽を、一つ一つ拾いあげているのが目のまえに見えてきた。かれらは、こうして忍耐づよい作業をしているとき、かれらのすぐそばにまで、死がせまつてきているのだということを知つていたのである。なかには、恐しいと思つたものもいた——かれら自身そういつている——が、しかし、不平をいうものはいなかつた。

かれらは、かれらの職責を熱情的にはたしているときには、政府の合理的な指示を熱情的に遂行して、空から投下されたすべての物体を一掃し、昆虫や羽毛や齧歯動物をとらえ、容器を捜しているときには、恐怖を忘れている。いいかえれば、かれらは、いままでも、またいまでもなお、人民に奉仕することに、心から甘んじており、その決心をかためているのである。

六

国際科学委員会は、北京市と中国東北の、衛生措置と衛生教育を視察したのち、まつたくの無条件で、つぎの意見に賛同するものである。

一、今日、中国では、偉大な運動がおこなわれていて、個人と社会の衛生を促進している。この運動は、五億の人民の心からの支持をうけており、このような大規模な衛生運動は、人類の歴史がはじまつてから、はじめてのことである。

二、この運動は、はやくもその効果をあらわしており、伝染病による死亡率と発病率を、大きく減少させている。

三、われわれのみたところでは、このような民族を細菌戦によつて滅ぼそうと試みることは、犯罪であるばかりでなく、まつたくのムダ骨折りである。

中國のキリスト教會と細菌戰

カンタベリー寺院副監督　ヒユーレット・ジョンソン博士

宗教というものは、ときどき、ずるい人間のたくらみに奉仕する。それが、いまほどはげしいこと

はないのであつて、戦争屋や金融独占家どもは、もともとキリスト教の倫理的道徳を少しも必要と感じておらず、もしこの道徳がかれらの利益のじやまになることになれば、なさけ容赦もなくそれに反対するのであるが、かれらは今日自分らの支配している新聞やラジオや映画などで、キリスト教徒がソ連、東欧諸国、それに中国で、重大な迫害をうけているという叫びをあげている。かれらは、イギリスやアメリカの人民が宗教を尊んでいて、もしキリスト教徒を迫害するものがあれば、それにたいする反対運動に参加する心構えのあることを知つている。そこで、「諸君の宗教は存亡の危機に面している」とか、「諸君の自由は存亡の危機に面している」とか、またその結果として「脅威に抵抗するために歯まで武装せよ」などという叫びをあげてくるのである。

それで、わたしがかつてソ連や東欧諸国に行つてやつたように、そういう非難がうそかほんとかたしかめ、実情がどうなのかを中国にいつて現場でしらべてみることが必要になつてきた。だから、わたしの中国旅行の計画はひじように広い範囲におよんだ——北京、漢口、長沙、広東、抗州、上海、沙市、南京、蚌埠、天津、瀋陽(奉天)などと。ゆくさきざきで、監督派、組合派、メソジスト、バプチスト、YMCA、長老派、ローマ・カトリツク派などなど、たくさんのキリスト教会の宗教的指導者に会つた。あるときは、アングリカン教会で説教したり、またあるときは上海の聖カトリツク教

会をたずねて三人の僧正にあい、また北京のメソジスト教会、広東のバプチスト教会、その他をたずねてあるいた。

わたしは、ゆくさきざきでローマ・カトリック教会の指導者もまじえて、キリスト教の指導者と長い時間会談した。その手はじめは、組合派の牧師で華北キリスト教連盟の書記長であるP・H・ウォン師が議長になつて北京でひらいた三時間の会談であつた。この会談には、新教教会の十八人の管理者や宗教的指導者が出席したが、そのなかにはT・H・Y・リン監督、メソジスト派の牧師、YMCA（キリスト教青年会）やYWCA（キリスト教青年婦人会）や救世軍の指導者もまじつていた。

みんな自由にまたざつくばらんに、ときには大きな熱情をもつて話しあつた。この会談の結果、わたしは、これらのキリスト教指導者が勇敢であり、進歩的であり、かれらがいままで経験したどんな生活よりも、かれらが説教しているような生活にむしろ近い、中国のいまの社会生活を歓迎しているのだという印象をうけとつた。上海のP・リンデル・ツエン監督は、さいきんのランベス（カンタベリー大監督の邸宅）会談のときカンタベリーであつたことのある人であるが、のちにこの人が上海でわたしに話した言葉でいえば、「国民党の支配下にあつた頃よりも、いまでは悪に反対して、不正直またはそれに似たものに反対して、公然と話すことが容易になりました。いまこそ、わたしはわたし

の心を打ちあけて話せます。しかし、あの頃は、毒にも薬にもならない題目をえらんで、その題目についてばくぜんとしたことをしやべりまくつていたものですが、それ以上のことをするのは危険だつたのです。」

中国のキリスト教会には、外科手術が必要であつたが、もはやそれをやつたということを説明してくれた。この外科手術についてかれらはすこぶる正直にはなした。そして、Y・T・ウー氏はあとでその外科手術の実状をくわしくわたしに話してくれた。ウー氏は全中国のYMCA文書部の執行書記を三十年間つとめてきた人で、アメリカのコロンビア大学とユニオン派神学校を卒業しており、一九五〇年六月のさかんなキリスト教改革運動をはじめたキリスト教指導者の一人であり、いまではその改革委員会の議長をつとめている。この改革委員会はいま中国のキリスト教会の指導権をにぎつている。

傳道と帝国主義との結びつき

ウー氏は、中国のキリスト教と西欧帝国主義とのあいだにある緊密な結びつきについて、そのあらましを話してくれた。この結びつきは、しばしば無意識的なものではあつたが、それでもやはり結びつきはほんとにあつたのであり、それは一八〇七年にキリスト新教が輸入されていらい存続してきた。

この結びつきは、一世紀半のあいだつづいてきているし、現在のアメリカの伝道文書は、伝道運動こそ政治的経済的侵略の文化的先鋒であると、きわめてはつきりと書いている。「人民中国誌」のいぜんの号で、ウー氏は伝道活動のなかで見られる帝国主義の活躍を歴史的にえがいていた。ふつうのアメリカ伝道家は、すこぶる正直であつた。ウー氏がえがいたものによると、かれらの態度はつぎのようであつた。

「アメリカ文明とアメリカ式生活は、世界でいちばんいいものである。それがそうであるのは、全部ではないにしても、おもにそれがキリスト教的であるからであつて、それを——中国と世界に——あらゆる費用をおしまず、おしつけまたひろげねばならない。アメリカ人民のこの貴い財産を脅威するものは、アメリカ人民ばかりか、キリスト教もふくめた全世界の敵である。そういう敵があらわれたところでは、できれば平和的な手段で、しかし必要とあれば戦争で、それを一掃せねばならない。こういう仕事をやりぬくのが、伝道者の聖なる使命なのである。」

こういう考えにそまつているので、とウー氏は議論をすすめる、伝道者たちは帝国主義的侵略計画にぴたりとはまりこんでゆく。伝道者は、近代的設備をそなえた庭園の構内にすむ。そして、名目上そうでないとしたら、事実上かれの教会や教団のボスである。というのは、かれがそれらの団体の資

金を牛耳つているからである。資金は、その団体の政策といつしよに外国から送つてくる。中国のキリスト教が必要としていた外科手術というのは、中国の教会を西欧帝国主義からきつぱりと切りはなすことであつた。これは中国教会が財政的にまた組織的に自分自身の足でたつことを意味した。

これは中国教会としてはたしかに大手術であつたが、中国教会はこの手術で生きのび、わたしの考えでは、それから利益をえた。

教会への政府援助

中国政府がキリスト教会やその宗教活動を少しでも迫害したというのは、まつたくのうそである。共同綱領、つまり新中国の基本法の第五条は宗教の自由を規定している。外国伝道者は、希望とあれば中国に残つてもさしつかえない。多くの伝道師がそうしているし、たとえば、わたしの友人スタイン博士は抗州にのこつている。ただし中国の法律をやぶつてはならない。

教会と外国資金とに経済的分離が実行されて、キリスト教会、とくにアメリカ渡来のものは、自分自身の資金でまかなつていくことになつた。アメリカの中国資産凍結、そして朝鮮戦争がさらにそれ

を決定的にした。それを機会に教会は勇敢にたちあがつた。たしかに教会員の数は、三分の一ちかくもへつた。しかし、はなれていつた教会員は、ただ物ほしさのために、よりあつまつていただけのもので、そういう人たちは〝めしクリスチャン〟とよばれている。そういう人がはなれていつたのは、教会をよわめるかわりにつよめた。政府は寛大な援助をあたえてくれた。教会の建物や牧師館は、その必要のあるときは、免税にされた。キリスト教会は、それで生きのびた。

中国のキリスト教改革運動は、そういう事情から生れてきたのであるが、それがはじまつたのは一九五〇年七月二十八日で、そのとき四十人の中国キリスト教の指導者は、新中国のキリスト教の任務について声明をだした。これは、たちまち各派のキリスト教指導者千五百二十七人のさんせいをうけた。これらの人はクリスチャンの仲間につぎのことを要求した。

一、中国の新基本法、つまり共同綱領を支持すること。

二、教会のなかにある帝国主義の影響を清算し、反動勢力が教会を利用しようとするたくらみをふせぐこと。

三、外国人や外国資金にたよるのをやめて、自治と自主財政と自主的布教を方針とする中国教会をきづくこと。

朝鮮侵略と中国資産の凍結、それにこんどは細菌戦争が、帝国主義とのさいごの結びつきをたち切つた。中国キリスト教会は、ついに自分の足で独立した。そして、みんながわたしに指摘してくれたように、じつにこのことのおかげで、中国教会を一般の同情から切りはなしていた障壁がとりのぞかれたのである。わたしはまず北京の会談で、そういうことをたくさんまなんだ。そして、広東から奉天、杭州から、漢口までのあらゆる都市で、教会指導者と会見するごとに、じつにたくさんの資料をあつめた。

たとえば、わたしは、これらの問題について、P・リンデル・ツェン監督と長いこと話しあつた。かれは親切なことに、われわれの話し合いの要点を一つの手紙にまとめてくれたが、そのなかからつぎの一節を引用しておく。

宗教の自由という問題については、共同綱領ではつきりとまたしつかりとのべてありますので、人民は信教の完全な自由をもつています。この原則にもとずいて、キリスト教会は自主的財政、自治、自主的布教という問題について教会改革全国委員会を組織しました。……河南教区では、二週間まえ、教区の教会を拡大する必要があつて、二人の助監督を任命しました。……さいきんは、漢口、河南、安徽の教区で新たに牧師が任命され、教会が前進している兆候はたしかに

あります。……

ほかのたくさんの資料からも、わたしはこれとおなじ証言を引用することができるが、いまはただ元イギリス監督派伝道団の一員であつた人の手紙を引用するだけで十分である。マイケル・チャン監督はわたしにあてて書いている。

福建省は、中国のどこよりもいちばん多くの教会と信徒をもつているといえますが、福建のキリスト教徒も、過去百年のあいだ資本主義と帝国主義の有害な影響をうけていたことはいうまでもありません。それで、われわれはいまそういう影響をみんなぬぐいさるために、中国人民に属する教会と、中国人民のほんとの幸福のために働く活動家、自治と自主財政と自主的布教を方針とする教会をつくりあげるために大きな努力をはらつています。……福州にある七つのキリスト教徒の団体は、みんなこの改革組織にはいつて、協力しあつています。

細菌戦争の眞相

中国のキリスト教会が、資本主義的・帝国主義的なアメリカとの、くされ縁をたちきつたいろいろの原因のうち、とくにめだつていて決定的なのは、もちろん、アメリカが朝鮮にだけでなく中国にた

いしても、細菌戦争をあらたにやりはじめたということである。

そして、まさにこの点で、中国のキリスト教会は、平和のために独特の貢献をすることができる。というのは、一般にイギリスの公衆、それに教会の指導者らは、わたしが去る五月イギリスを出発するときには、アメリカ軍が細菌戦をやつているという主張を、信じていなかつたからである。「あれは共産党の宣伝だよ。アメリカにそんな怪しからんことがやれるものか――」と、大部分の人はそういつていた。

そこで、中国のキリスト教指導者が、この問題について、どういう意見をのべるかが大切であることを、わたしは知つていたので、地方の教会指導者が細菌戦争にたいしてどんな態度をとつているかを、旅さきの町町でとくにしらべてみた。まず北京を手はじめにして、中国東北区の細菌攻撃の中心地瀋陽（奉天）にゆくまで、その調査をつづけた。

わたしは、いま、中国のキリスト教徒からイギリスのキリスト教徒にあてたたくさんのメッセージをもつてかえつたが、それらはみんな、中国のキリスト教徒と力をあわせて、この前例のない悪業を止めさせろということを要求したものである。「キリスト教文明」をまもるという口実のもとで、中国人種を一気に根絶する努力がやられているのである。むかし、数億の中国人民大衆のほんの一かけ

らを病気からすくうために、中国に医療団をおくつてきた「キリスト教文明」は、いまでは病菌をばらまいて、中国人民全体をみなごろしにしようとしているのである。

そういう脅威にたいして、中国のキリスト教会は、絶対的に中国人民全体と団結して、抵抗をつづけている。はたして細菌戦がやられているかどうかについては、中国のキリスト教界では、かげほどの疑いももつていない。そのことは広東でも奉天自体でも明らかであつた。しかし、わたしは、わたしの主張が真実であることを立証する文書をイギリスにもつてかえつた。そのうちのいくつかを引用させてもらいたい。

P・リンデル・ツエン監督は書いている。

細菌戦争の事実について。わたし自身、朝鮮にいつたことはありませんが、アメリカ軍のいちばん非人道的で、非キリスト教的なこの犯罪をしらべるために、朝鮮と中国東北にいつた個人や友人や知人はたくさんあります。しらべにいつたこれらの人たちのある者は、蠅や蚊や蜘蛛その他の昆虫が、ふつう、そういう昆虫がいるはずもない季節に、キラキラ光る雪におおわれた地面を、群をなして動いているのを見ました。その上、落ちてきた昆虫のうちのある種のものは、もともと朝鮮のその地方にはいなかつたものです。その調査中に、これらの人のうちの幾人かは、アメリカ軍がそ

ういう昆虫をじつさいに落しているのを見ました。それらの調査者のなかでは、組合教会のP・H・ウォン師という一人の牧師、李徳全夫人(なくなつたクリスチャン将軍馮玉祥の未亡人)、それに土曜日再臨派病院のC・C・シン博士を知つています。これらの人たちの誠実さは、疑う余地がありません。それで、これらの人の報告は、信頼できるし、うそいつわりのないものとして、一般に受けいれられているのです。

わたしはT・C・ウォン博士に会つたことを、ここにつけくわえておこう。かれはいま、華北キリスト教連盟の書記長であり、リンデル・ツエン監督がかいている点をくわしく話してくれ、そしてかれ自身が直接細菌を見たこと、それらがアメリカ飛行機から落ちてきたものであることを説明してくれた。

リンデル・ツエン監督の手紙をつづけよう。

わたしには一人の息子があつて、中国東北区の工科大学で物理学をおしえています。その息子の嫁が、市民はアメリカ機の落した虫取りにいそがしいと、二回ほど書いてよこしました。

もう一つ証言をつけ加えれば十分である。それは、杭州のキリスト教会がわたしにもつてきたもので、この市の各派教会の指導者二十五人が署名した文書である。それはウォン牧師の証言を再び引用

し、また二人のアメリカ捕虜――かれらはこの二人の捕虜の長い手紙をよみ、北京ではこの両人の声をきいた――の証言を引用して、つぎのようにいい足している。

クリスチャンの医療活動家の多くは、身を投げだして、愛国的な防疫戦争にはせくわわっています。われわれはみんな、世界平和と人類の威信のために、細菌戦争に反対する斗争に全力をつくす用意があります。

手紙は、つぎのようにのべて結論にしている。

どうぞイギリスのクリスチャンに、われわれ新中国のクリスチャンは人民解放の大革命運動に、いままでよりも、もつとはつきりと、福音の光明を見ていることを知らせてください。

われわれは、撫順競馬場や撫順と瀋陽間の農場の現地で、寒い三月というのに雪のうえにちらばつていた奇妙な昆虫の群れを見つけた人たちの、単純な直話をきいた。また、わたしにいちばん感動をあたえたのは、ヤン・ヘオ・ツンという上海の長老派伝道団の若いクリスチャン婦人の話であつた。かの女はいま奉天にすんでいるが、現地――つまり瀋陽の住宅区地域の氷のはりつめたテニス・コートに呼びだされたのである。かの女は、異常で未知な種類の奇妙な昆虫をあつめる手伝いをしたのであるが、それらの昆虫は、何としても自然的でない方法でそこに到着したのであり、二件の脳膜炎を

ひきおこし、二人の子供にひきつけをおこさせて死なせた。病菌に感染したこの子供たちの頭脳は、付近の病院に注意ぶかく保存してある。

この話はたつた一つの例にすぎないが、細菌攻撃についての話はぜんぶ、長時間われわれと話しあつた瀋陽の宗教的指導者がみんな保証し、また確認した。

中国キリスト教会東北区会議の書記長スン・ペンシ師は、その辺では見かけたことのない蝿を、しかもふつうでは蝿などあらわれる季節でもないときに、自分の庭で見つけたことを、とくに話してくれた。それで付近の学校では学生と先生を組織して、この異常な時期にあらわれたこれらの奇妙な蝿の蝿狩りをやつた。

中国キリスト教会のウォン・チエン師、これも中国キリスト教会のクー・チンクアン師、瀋陽地区のローマ・カトリック改革運動委員会議長のハン・シーチ氏、瀋陽地区のローマ・カトリック改革運動委員会の副議長チュー・ペンイエン嬢らはみんな、中国東北区の細菌戦争のおそるべき真相と野獣的な性格について証言をしてくれた。

この細菌戦争こそは、まことに、イギリスとアメリカの、キリスト教会にたすいる一つの挑戦なのである。

Ⅲ　アメリカ軍の残虐行為——国際婦人調査団報告

アメリカ軍の殘虐行爲（付錄）

国際婦人調査團報告

国際婦人調査團による朝鮮にいるアメリカ軍と李承晩軍の殘虐行爲調査報告書

国際民主婦人連盟の招きをうけて、さまざまな婦人団体—国際民主婦人連盟やその他の婦人団体—から派遣された代表として、わたしたちは朝鮮にいるアメリカ軍と李承晩軍のやつた残虐行為を調べるために、国際婦人調査団に参加しました。わたしたちはヨーロッパ、アメリカ、アジアそれにアフリカの十七カ国を代表しています。

調査団のメンバーは、次のような人たちです。

団長**ノラ・K・ロッド**（カナダ）、副団長**リウ・チンヤン**（中国）、同**イダ・バツハマン**（デンマーク）、書記**ミルセ・スヴアトソヴア**（チエコスロヴアキア）、副書記**トレース・ソエニト・ヘイリゲルス**（オランダ）、**モニカ・フエルトン**博士（イギリス）、**マリア・オヴシヤンニコワ**（ソ連）**バイ・ラン**（中国）、**リ・ケン**（中国）、**ジレツト・ジーグレル**（フランス）、**エリザベタ・ガロ**（イタリア）、**エヴア・プリースター**（オーストリア）、**ヒルデ・カーン**（ドイツ民主共和国）、**リリー・ヴエヒター**

（西ドイツ）、**ジエルメ・アンネヴアル**博士（ベルギー）、**リ・チケ**（ヴイエトナム）、**カンデラリア・ロドリゲス**法学博士（キューバ）、**レオノル・アギアル・ヴアスケス**法学博士（アルゼンチン）、**フアトマ・ベン・スリマン**（チュニジア）、**アバシア・フオデイル**（アルジエニア）、オブザーバーとして**カーテ・フレロン・ヤコブゼン**（デンマーク）。

各国各民族の、またさまざまの宗教や政治的見解をもつているわたしたち婦人——その中には、種々な政党員もいるし、政党に関係のない人もいる——は、目のまえに一つの共通の仕事をもつたのです。つまり、この調査団にわたしたちを派遣した婦人たちや、全世界の平和を愛する人たちにたいして、わたしたちが見たままの事実を、良心的に正しく伝えるという仕事です。

ここに述べてあるすべての事実や、この報告に記録している数字、その他の資料は、調査団のメンバーが自分で書きしるしたものです。これらの事実は、メンバーたちが自分自身の目でみた明らかな事実であり、朝鮮にいる目撃者や官吏が話したことそのままのものです。

この報告書は、一九五一年五月十六日から二十七日までのあいだに、朝鮮の平壌付近でつくり、また署名したものです。

第一章

調査団は、朝鮮と中国の国境の一都市シニジュ（新義洲）をおとずれた。この町は、ほとんど完全に破壊されていた。残つた建物はひどくこわれていた。町はいく度も爆撃されたが、被害のほとんど全部は、一九五〇年十一月八日の夜三回にわたる空襲と、十一月十日、十一日の空襲によるものであつた。調査団がシニジュ（新義洲）をおとずれた日には、三回警報がでた。

シニジュ（新義洲）市人民委員会代表の公式発表によれば、この町は一九五〇年七月には一万四千戸に十二万六千人の住民が住んで、働いていた。調査団は、この町にはすこしでも軍需生産に役だつような工業はなかつたということをきかされた。町には軽工業があつただけである。つまり、大豆、豆腐（大豆製品）の加工、靴、マッチ、塩、箸の製造である。一九五〇年十一月八日この町は、朝鮮にいるいわゆる国連軍に属する空軍百機の爆撃をうけた。この時、総計三千十七あつた国の家と市の建物のうち二千百が破壊され、住宅一万一千余戸のうち六千八百戸がこわされた。五千人あまりの住民が殺され、そのうちほぼ四千人は婦人と子供であつた。十七の小学校のうち十六は破壊され町の十

九の中学校のうち十二が焼夷弾で焼かれた。各派十七の教会のうち残つたのはたつた二つだけであつた。二つの市立病院は、国際慣習の規定通りそれぞれ屋根に大きな赤十字をつけていたのに、焼夷弾で焼かれた。調査団のメンバーは、残つた屋根にこれらの赤十字の跡があるのを見うけた。ある病院では、二十六人の患者が焼夷弾の焔で焼け死んだ。調査団は、大きなプロテスタント教会が直撃弾をうけた時、二百五十人の人たちが死んだということをきいた。調査団が耳にした他のエピソードの中には、市営食堂の爆撃後避難しようとしている間に、三十人の母親と子供が殺されたという話があつた。人口の密集している市場地区では二千五百人の人々が死傷した。十一月八日のシニジュ(新義州)市の負傷者の総数は三千百五十五人であつた。調査団のメンバーは、ガラクタの中から堀り出された爆弾の破片をしらべ、次の記号を書きとめた。Amm. Lot RN—14—29 shell MJ For M 2 a MF MFL 1 Lot—GL—2—116 1944 MJECA 2 ACT464

住民の大多数は、破壊をまぬがれた材木と土で壕をつくり、そのなかに住んでいる。これらの壕のうちにあるものは、こわれた建物からとつてきた瓦や材木の屋根をもつている。他の人たちは爆撃後残された穴倉に住んでおり、なお他の人たちは、こわれた建物の骨の中に張つたテントや、しつくいもぬつてない煉瓦や瓦片でつくつた小屋に住んでいる。ある団員たちはこれらの小屋の一つを訪れた。

そこにはクォン・ムンスン（権文秀）一家が住んでいた。家族は父親と母親と三人の幼児であつた。小屋は二つに区切られていて、一つは居間兼寝室、他の一つは台所であつた。居間の方は三メートルに二メートル、台所は一五メートルに三メートルの広さである。この一家はひろい家と毛布を一枚持つているというので、付近の人たちから幸運だと思われていた。

三回にわたる大空襲が、おもに多数の焼夷弾によつてやられたことは明らかであつた。だが、団員たちは、なぜ被害がこのように広くおよんだのか、はじめはわからなかつた。たまたま、わたしたちと話しあうために集つた市の、吏員や公衆の人たちから話をきいて、やつとその理由がわかつた。わたしたちと話しあつた人たちは、すべて次のようにいつていた。焼夷弾の最初の波が落された時、火を消そうとして街路に飛び出したものは、低く飛んできた飛行機に故意に銃撃された。市が大規模に焼失したのは、火を消そうとしていた市民を、故意に銃撃したことに原因があつた。

市の一婦人チャン・ユンチャ（張潤子）は、かの女の父親と夫は、焼夷弾で燃え上つた自分たちの家の火を消すため水を取つてこようとしている時、低空飛行の銃撃で殺されたといつた。他の婦人キム・インタン（金仁丹）は十一月八日の空襲で三人の孫と娘をなくしたと語つた。子供たちは、かれらの燃えている家から走つてでる時、低空飛行の銃撃によつて殺されたのである。娘は自分の末つ子

を火の中から引きづり出したところを射たれた。キム・ホンエン（金洪潤）は、かれの妻は焼夷弾で燃え上つた家から走り出たところを、機銃掃射で殺されたと話した。

シニジュ（新義州）から平壌へゆく途中で、調査団は、通過した町や村のすべてが、完全にあるいはほとんど完全に破壊されているのを見た。それらの町はナムシ（南市）、チエンチユ（定州）、アンジユ（安州）、スクチエン（順川）それにスンアン（順安）である。大部分の村は廃墟同然であつた。

以上には一九五一年五月十八日調査団の全員が署名した。

第二章

調査団は、朝鮮人民共和国の臨時首都平壌をおとずれた。

戦前、平壌は四十万の人口をもつていた。煉瓦造りや鉄筋コンクリートの、大きな近代建築物がたくさんあつた。またたくさんの近代的なアパートがあつたが、それらはかつては、近代式な煖房設備や衛生設備を完全にそなえていたことが、その残骸からわかつた。

市には、また非常に多くの工場があつた。主な工業は織物、靴、種々の食料品、煙草、酒、ビール、それに肥料の製造であつた。

平壌にあつた主な建物は、一つのオペラ・ハウス、九つの劇場、二十の映画館、一九四五年以後に建造され、設備された一つの近代的な綜合大学、七十三の小学校、二十の中学校、六つの専門学校、四つの工業大学であつた。また二十の夜間成人学校と、戦争勃発当時ほとんど完成されていた一つの大きな工芸講習所もあつた。

市内は、いままつたくの廃墟である。市内の旧地域の大部分では、たおれた家の壁だけが、灰とガラクタの山の中に、あちこちそそりたつている。近代建築物のあるものは、屋根も内壁もなく、ただ骨組だけが立つている。他のものは、かつてそこに建物が立つていたことを示す二、三の壁のかけらが残つているだけである。いままで述べた建物のほかに、多くの教会やすべての市立病院がみんな破壊された。団員たちは、市内でいちばん大きな小学校の廃墟を調査した。外側の壁の一つには「第七十七野砲隊用」とチョークで書いてあつた。調査団のえた証拠によれば、市の八〇%はアメリカ軍が市内から退却する時に破壊した。(アメリカ軍が戦わないで退却し、市を故意に、計画的に破壊したことは、注目すべき大切な事柄である)。破壊は、今日事実上一〇〇%にたつしている。それでも爆

撃はやはりつづいている。調査団が市内でまる一日をすごすうちに、五回の警報が鳴り、その同じ日に約一週間まえに落された時限爆弾が三つ、調査団のメンバーと地方組織の代表者が話し合つていた場所のすぐ近くで爆発した。

団員たちは、市がどんなふうなやり方で破壊されたかを知ることができた。市は戦争がはじまつたときから、ずつと爆撃され通しであるということであつた。いちばんひどい空襲は、一九五一年一月三日におこなわれた。この時、市はアメリカ軍のB—29八十機に爆撃された。B—29は十五分か二十分おきに編隊をくんでやつてきた。爆撃は三日の夕刻からはじまり、翌日の午後まで続いた。爆撃は焼夷弾ではじまつた。次に石油をつめた気球のような爆弾が、つづけざまに落された。それから強力爆弾の波がつづき、また焼夷弾が一しきりやつてきた後、時限爆弾がまき散らされたのである。焼夷弾による火災と時限爆弾の爆発のために、住民はすこしも救出作業をすることができなかつた。したがつて、生き埋めにされた無数の人々は、ついに窒息して死んでしまつた。たくさんの死体は、いまなお掘り出されていない。

一月三日と四日に破壊された建物のなかには、市内の病院の大部分が含まれていた。これらの病院は平らな屋根をもち、六千メートルないし八千メートルの高度からわかるように、どれにも大きな赤

十字のしるしがついていた。これらの病院は、少くとも一個づつの直撃弾をうけた。調査団のメンバーは地方病院の残骸を見学し、三つの大きな爆弾穴をしらべたが、そのうちの二つは深さが約四メートル、一つは七メートルもあつた。市立中央病院は三十メートルの高度まで降下してきた急降下爆撃機に破壊されたといわれている。

市の建物ぜんぶが爆撃だけで破壊されたものでないことは、先に述べた通りである。事実、多くのアメリカ軍が退却する時、爆薬で破壊したか、放火したのである。こうして破壊された建物のうちには、キム・イルセン（金日成）大学、男子中学校、オペラ・ハウス、市の諸施設、多くの食糧工場とすべての政府施設がある。アメリカ軍がこの市から退却する時、かれらは故意に市電の全部に火をつけ、いくつかの橋や水道を爆破したことについても、調査団は報告をうけた。

市を出外れたところで、調査団は、河を見はらす岡の上に立つ有名な仏寺イエンムエン・サ（延命寺）の残骸を見た。二千年の間朝鮮人民の崇敬の的であつたこの寺も、爆撃でこわされたのである。広々とした田圃の中にある寺の位置から判断して、爆撃機がなにか他の目標をねらつていたと信ずることはできない。目撃者の証言によると、アメリカ軍が一九五〇年十二月平壌を退却した時、寺は無事であつた。しかし、一九五一年一月三日にアメリカ機が多数の強力爆弾、焼夷弾、それに焼夷薬の

つまつた容器をこの寺にあびせたのである。

調査団のメンバーはまた、市の有名な博物館をおとずれた。それは破壊はまぬかれたが、二千余年を経ているという有名な二つの仏像もまじえて、その宝物を盗まれていた。有名な考古学者リー・イエセン（李如星）氏は、掠奪された品物の長いリストを、団員たちに見せた。かれはまた、アメリカ軍が博物館に残したものは、北鮮の三十の古墳で発見された貴重な壁画の手摺りの模造品だけだつたと説明した。これらの古墳のうち六つは、朝鮮婦人を拷問するためにつかわれ、手榴弾で古墳が爆破されたときに、壁画はこわれた。

調査団がくりかえしきかされたのは、空から市民にむけて機銃掃射をやつた例であつた。（調査団のメンバー自身も、防備のない田舎のまつ只中で、低空をとぶ飛行機から機銃掃射をうけて、壕に避難せねばならないことがあつた。これは、農民が働いているだだつぴろい野良に機銃火をふきかけたわけであるが、前線から数百キロメートル、また市街や軍事目標物からはるかに遠くはなれたところでおこつたことである。）平壌のガラクタの山の中をあるきながら、団員たちは建物の残骸の中に散らばつている飛行機用機銃の使用ずみ薬莢を多数見つけた。団員たちはまた米軍が新兵器をつかつた証拠を発見した。その一つは、地上に達した時、あるいは建物に接触した時、爆発しないで開く爆弾

である。そして、それがひらくと煉瓦や木材やあらゆるものにくつつく多量の物質が発射され、その瞬間か、少し後になつて、日光をうけてぱつと燃え上り、建物全体を火の海にしてしまうのである。このガソリン気球の使用については、もはや外でも伝えられている。団員たちは、この種の飛道具の破片を検査した。それは長さが約三メートル、巾が一メートルで、先がだんだん細くなつており、いちばん細いところが五〇センチ、いちばん広いところが一メートルであつた。調べた結果、気球のマークは一部分だけ判読された。その読めるマークは——PA RA contract HOAF 33／5077—40—Oa N4 888となつていた。調査団はつぎのことを知つた。つまり、平壌その他の都市で、この型の爆弾がつかわれたのとは別に、昨年の収穫期に畠に実つた穀物に損害をあたえるために、この同じ兵器がつかわれ、この方法で食糧供給に大きな被害が加えられたということである。もはや他でもつたえられている時限爆弾も新兵器の一種であり、雷管は見当らず取りはずされていた。

団員たちはまた、「強力爆弾G B5143」としるされた爆弾ケースを発見した。この爆弾は、モラン・ボン（牡丹峰）にある殿堂を破壊した爆弾の一つであつた。平壌の生残りの住民たちは、原始的ではあるがなんとか工夫した壕や、自分自身で工夫をこらして穴を改造した避難所や、または爆撃された建物の残つた壁の内側に住んでいる。それぞれの目的にしたがつて四つのグループにわかれた団員た

ちは、四時間近くの間、市のさまざまなところを訪れたが、その間誰れ一人として、四方の壁と屋根のある家を一軒も見なかつた。そして団員たちは、ガラクタの堆積の中に住んでいる多数の生き残りの家族に出あつた。たとえば、カン・ボクセン（姜福善）一家は三才と八カ月の子供をまじえた五人家族で、平壌民主婦人同盟のこわれた本部の下の壕に住んでいた。この壕はほぼ一メートルと二メートルの広さで、家族たちは唯一の住家であるこの避難所に行くために、三メートルも深い狭い穴を這つてゆかねばならなかつた。土の壁が低すぎて、大人は真直ぐに立てないのである。

調査団は、この避難所が例外ではなく、むしろ代表的なものであり、同じような状態の家族の例は、もつと多くあげることが出来るとの結論にたつた。この壕に住むカン・ボクセン（姜福善）の娘が調査団に話したところによると、アメリカ軍はオペラ・ハウスやその附近の住家を軍用娼家にした。この娼家に、かれらは街頭でつかまえた婦人や少女を強制的につれてきた。そうなる運命をおそれたので、かの女は四十日間も壕から出なかつた。かの女の友人の夫リー・サンセン（李相先）は、妻をかくしたという理由でアメリカ軍にぶんなぐられたという。平壌の一住民クオン・ソンドン（権善敦）という市の他の地区からきた労働者は、この話はほんとだと保証した。

その他多くの平壌の居住者が、アメリカ軍のやつた残虐行為を話した。三十七才で、四人の子供を

爆弾でなくした母親キム・ソンオク（金性玉）は次のように話した。かの女は一九五〇年七月三日に家を爆破されたのち、ソンサン・リ（善山里）村に引上げた。そこで、かの女は、三十七人の人がアメリカ軍に殺されたのを見た。その中には地方婦人組織の書記もいた。アメリカ軍は、その婦人を裸にして街を引きまわし、そのあとで赤く焼けた鉄棒を膣の中にさしこんで殺した。かの女の幼児は生き埋めにされた。

以上には、一九五一年五月二十一日調査団の全員が署名した。

第三章

調査団のメンバーは、ワンヘイ（黄海）道にゆき、アナク（安岳）、シンチエン（信川）の町をおとずれた。この訪問に参加したのはエヴァ・プリースター（オーストリア）、リ・ケン（中国）、カンデラリア・ロドリゲス（キューバ）、ノラ、K・ロッド（カナダ）、マリア・オヴシヤンニコワ（ソ連）、モニカ・フエルトン（イギリス）であつた。

調査団は、ワンハイ（黄海）道の全地域で十二万人が占領軍に殺され、それに加えて多くの人々が空襲で殺されたということをはつきりとたしかめた。アナク（安岳）市では、一万九千九十二人がアメリカ、イギリス、李承晩軍に殺されたということである。アナク（安岳）市では、調査団のメンバーは、戦前は農民銀行の倉庫であつたが、アメリカ軍が牢獄に変えた建物をおとずれた。それは、それぞれ長さ四メートル、巾三メートルの五つの檻房に区切られていた。証人たちは、これらの檻房はいつぱいになつて、すわることができなかつたといつた。

スンサン・リ（崇山里）街一九四番地の一農婦ハン・ナクソン（韓洛善）は、かの女の夫キム・ボククアン（金奉寛）と義弟キム・ボククオン（金奉均）が一九五〇年十一月十日につかまり、この牢獄に投げこまれたと調査団に話した。この逮捕は二人のアメリカ兵と四人の李承晩軍の兵隊によつて行われた。かの女は逃げだしてかくれた。かの女は、また次のように話した。かの女の夫や義弟その他の囚人は、みんな農民か労働者であり、どこかの役人であつたり、労働党員であるものは一人もいなかつた。多くの子供たち――その中には二才の子供もいた――が、母親といつしよにこの監獄に入れられた。囚人たちは、十五日間食物なしで監禁され、鉄棒でなぐられた。これらの殴打はアメリカ軍将校の命令で、李承晩軍の兵隊によつて行われた。一九五一年十一月二十五日、婦人や子供をまじえ

た囚人たちは、丘につれだされ、堀のなかに生き埋めにされた。

もう一人の証人キム・サンイエン（金相延）――かれはセサン・リ（世山里）街一七二番地に住んでいる――という年配の男は、次のように話した。かれの十二人の家族は、息子、息子の妻、孫二人をまじえて全部つかまつた。最初は、かれ自身何が起つたのかわからなかつた。後になつてかれらは丘につれて行かれ、殺されたことを知つた。市が解放されてから、かれは、かれらの死体をさがしに行き、息子と息子の妻がいつしよに縄でしばられている遺骸を見つけた。どの死体にも傷がないので、キム・サンイエン（金相延）は、かれらが生き埋めにされたのだと判断した。かれの息子は国営工場で働き、突撃労働者であつたというので逮捕された。かれ自身も、十月十八日につかまつたが、同二十九日に釈放された。最後に、かれは団員たちに、かれ自身常日頃信仰ぶかい人間であつたので、キリスト教徒であるアメリカ人の善行を期待しており、このような残虐行為をアメリカ人がやるなどとは、とても想像できなかつたと語つた。

調査団のメンバーは、それからもう一つの監獄をおとずれた。ここでも、団員たちは、囚人がすわつたり、横になつたりする余地がなかつたということをきかされた。囚人を殴るためにつかつた道具を見せられたが、それらはアメリカ陸軍の野球用バットと同じ物であつた（このバットは証拠品とし

てもつて帰つた)。監房の外側の木造の廊下には、血痕がはつきりと見られた。

サンナイ・リ(上内里)街一八七番地の一婦人ショイ・ウムボク(崔応福)は、かの女の夫と息子がこの監獄に監禁され、あとで殺されたといつた。息子の妻はあんまりひどく打たれたので、いまだに床についている。九才の少年パク・チャンオイ(朴燦以)は、父親のパク・ピアンスウ(朴判順)(四十六才)も殺されたといつた。誰が父親を殺したのかとたずねると、「アメリカ人」と答えた。少年とかれの母もつかまえられ、この監獄に監禁された。かれらも殺されぞうになつたが、朝鮮人民軍に解放されたといつた。その母親は、赤く焼けた縫針を指の爪にさしこまれて、拷問されたという。団員たちは、その醜い傷あとを見た。またかの女は、かの女が拷問につれてゆかれた時、外庭の穴に生きたまま投げ込まれる人たちを見たといつた。

調査団員たちは、その穴を検査した。それは使えない井戸で、高さ約六十センチのコンクリートの壁でかこまれ、直径はおよそ一メートルであつた。深さは七、八メートルあり、朝の強い光で人間の死体が、井戸の底にあるのを見ることができた。光るボタンのついた黒い上衣を着た子供の死体が、表面の一番近いところにあつた。

それから団員たちは、市から二キロばかり離れたところに案内された。そこの広々とした丘のそば

に、多くの市民が埋められていた。あるものは小さなグループで、他のものは大勢いつしよに墓に入つていた。遺骸を調査するために、墓は掘りおこしてあつた。一つの墓は、子供たちをうめたもので、身元のわかつたものは、解放されたとき、別々に埋葬した。残りの死体は傷ついていて、見わけがつかなかつた。死体から離れたところに、子供の靴、婦人の髪の毛、本、ちよつとした手廻り品、それに人々が縛り合わされていたロープがあつた。もう一つの大きな墓は、大人の死体で一杯であつた。証人ファン・シンヤ(黄信裕)は、かの女の母は生き埋めにされたが、やつとはい出し、その後またつかまり、埋められたといつた。同じ墓に四百五十人の人が埋められたといわれる。このような墓が、この丘のまわりに二十カ所もあり、また約十二の丘が、こんなふうに使われているということである。

次に団員たちは、地方からやつてきたたくさんの婦人たちに会つた。アナク(安岳)市から三十二キロのオングン・リ(温宮里)からきたキム・センアイ(金聖愛)という十二才の少女は、アメリカ軍が村にやつてきた時かの女は四年生で、両親といつしよに監獄に入れられたといつた。十二日たつて父親ははりつけにされ、河に投げ込まれた。かの女の母親は労働党員であつた。そのため、母親は首を切られた。またかの女の四才の妹は生き埋めにされた。現在かの女は孤児学校にいるが、調査団がこの地方にきたと先生からきいたので、証拠を出すために、先生の許しをうけてやつてきたのだと

いつた。

キム・センアイ（金聖愛）とおなじ学校にいるもう一人の十二才の少女シン・スンヅァ（申順子）は、アメリカ軍が近づいた時、母や姉といつしよに家から逃げだしたが、つかまつたといつた。訊問に答えなかつたのでなぐられ、母と姉は射殺された。かの女は逃げたが、アメリカ軍にまたつかまり、投獄され、なぐられた。団員たちは、かの女の頭にまだ深い傷あとがのこつているのを見た。

ウォンオン・リ（完元里）からきた十六才の少女オク・ブンツエン（玉粉全）は、両親がつかまり、それから釈放され、またつかまつたといつた。かれらは首を切られて河に投げ込まれた。そのことは、かの女をまじえた村全体の人たちが目撃した。その後、かの女はつかまり、立つているだけの狭い監獄に入れられた。そばにいた婦人の子供が泣き出した時、アメリカ兵はその子供を銃剣でつきさした。

アナク（安岳）から八キロのウ・セリ（禹世里）からきたシム・トンビン（沈同敏）という婦人は、夫、義父、義母、義妹がアメリカ軍に殺されたといつた。かれらはみな射たれたが、まだ生きていたので、義父以外は銃剣でつき殺された。義父は生き埋めにされた。アナク（安岳市）ヨナム・リ（麗南里）街四番地にいる四十九才の婦人オク・エウボン（玉礼粉）は、二十五才になる息子がアメリカ軍につかまり、鉄棒でなぐられ、ひどく頭をわられたが、生きていたので、生き埋めにされたといつ

た。かれの嫁は袋に入れてなぐられ、そのままほうり出された。その後、かの女が袋を見つけ出し嫁を救つたが、いまだに床についていて、動くことができない。アナク（安岳）市から二十キロのチエド・リ（崔度里）村からきた若い婦人ツエン・ファウク（千花玉）は、アメリカ軍につかまり、十九人の農民といつしよに射殺されるために連れ出された。かの女は肩を射たれ、ほかの人といつしよに河に投げ込まれた。かの女と四十才の婦人リー・ヒツイン（李喜全）は縄をほどき、約六キロを泳いだ、リイ・ヒツイン（李喜全）は、傷のために死んだが、ツエン・ファウク（千花玉）は、ほら穴にたどりつき、朝鮮人民軍がやつてくるまで、三カ月半そこにかくれていた。かの女は団員たちに左の肩の三つの弾のあとをみせた。かの女は、またかの女の村で百人以上の人たちが殺されたといつた。

旅行中、調査団の車は、途中の村々の住民たちに、しばしば呼びとめられた。住民たちは、アメリカ軍からうけた多くの苦痛の例をくわしく話した。

シンチエン（信川）へ行く途中で、団員たちは足を泥だらけにして、重い道具をはこんでいる農民たちに呼びとめられた。かれらの話では、この地方の河が増水したために、いく月も前に投げ込まれた死体が、水面に浮んできたということであつた。かれらは、その夜同じ村に住んでいた人の死体を引き上げているのであつた。

調査団は、シンチェン（信川）市で数時間をすごした。この町では、二万三千二百五十九人が殺されたといわれる。団員たちは、もと学校で、アメリカ軍が地方司令部につかつていた建物をみた。この建物の外側には、二つの自然のほら穴があつた。第一のほら穴には三十八人の婦人と子供が閉じ込められ銃殺されたといわれる。第二のほら穴には百四人が閉じこめられ、頭の上からガソリンをふりかけ火をつけられた。しかし、全員が焼け死んだわけではなかつた。焔のとどかなかつた人たちは窒息して死んだ。第一のほら穴の壁には血のあとがあり、第二のほら穴の内側には焼けあとがまだはつきりとみとめられた。前に書いた建物の前方にある一つの壕は、その地方の人民を訊問し、拷問するために使われたという。ここでも、壁の上に血のあとを、はつきりとみとめることができた。

つぎに団員は、アメリカ軍が町を占領した時、一部出来上つていただけでアメリカ軍の地方行政府と警察に使われた建物にいつた。この建物の後がわには、朝鮮人民が、空襲避難所にするために掘りひろげた、ちよつとした自然のほら穴のようなものがあつた。建物の中に閉じこめられていた四百七十九人の人々は、アメリカ軍が町を引上げる時、この穴の一劃に入れられ、ガソリンをかけて、焼き殺されたといわれている。穴のなかの他の大きな区劃では、千人あまりの人が機関銃で殺された。コホム・リ（古換里）街二四八番地のハシ・ヤングァン（韓良煥）という目撃者は、かれは製粉労働者

で、アメリカ軍がやつてきた時、町を逃げだして、バルチザンに加わり、解放後に帰つてきて、この穴の小さいほうの区劃から死体を掘り出すのを手伝つたところ、死体は裸で焼けこげており、どれにも射たれたあとはなかつたといつた。

団員たちは、穴のなかの壁に血のあとや焼けあとをみたし、また骨のかけらも見た。

穴の外で、団員たちは、身内を殺された多くの地方住民たちに会つた。コホム・リ（古換里）街二四七番地のチャイ・チュンオク（崔俊玉）という六十五才の婦人は、大きなハサミのような道具をもつてきた。かの女の話によると、それは囚人の足をはさんだり、そのほかそれに似たような拷問につかつたものであつた。またかの女の八人の息子や娘のうち七人は、大きな穴のなかで射たれた人たちにまじつていた。かの女は「アメリカ人は気の狂つたけだものです。かれらはやつてきて、ここにいるものをみな殺しにしました」といつた。

もう一人の婦人サドン・リ（砂洞里）街一九七番地のパク・ヨクス（朴如淑）は、夫と息子と六人の孫が殺されたといつた。息子は農民であつた。かの女は「わたしたちは、アメリカ人はクリスチャンで、紳士だと思つていました。かれらがこんな残忍なことをして人を殺すとは思いませんでした」といつた。

サンドン（上洞）街のペン・スンス（卞性朱）という十三才の少年は、十三人のかれの家族のうちで生きのこつたのは、かれ自身と母親だけであるといつた。ほかのものはなぐられたうえで、ほら穴のなかで焼き殺された。

パク・ス（朴寿）という婦人は、家族をみんななくしてしまつたが、「アメリカ人はキリストを信じていながら、どうして人が殺せるのでしようか」といつた。アメリカ人がやつてくるまで、わたしはクリスチャンであり、きちんと教会にかよつていたが、いまでは、もう何にも信じることができなくなつた、とかの女は言葉をつけたしした。

上にのべたはじめの訪問と二番目の訪問のどちらの場所でも、調査団のメンバーは、ゆくさきざきで、人間の肉のくさつてゆく強い悪臭に気がついた。

それから、調査団のメンバーは、町のすぐはずれの山のそばにつれてゆかれた。ここで、縦十五メートル、横九メートルの煉瓦づくりで、セメントをぬつた平屋根の倉庫を見せられた。窓はたかいところについていて、重々しく門がかけてあつた。ここでは、三百人の婦人が、生きながらやかれたという話しをきいた。その婦人たちのつれていた子供は、餓死させられた。ソンワ（松花）街一一番地の、ヤン・エンデク（梁英徳）という三十八才の証人は、五人の子供があつたが、みんな殺されてし

まつた、と話した。かの女の夫も殺された。かの女自身も二才の子供といつしよにこの倉庫の中にとじこめられた。子供はアメリカ兵にふみつぶされて、はらわたがでてしまつた。かの女自身は二人のアメリカ兵につれだされて、両人から暴行をうけた。それからかれらに拷問されて、外へ放りだされたので、やつと逃げだした。

三十六才ぐらいのサン・アイス（孫愛秀）という婦人は、その家族十五人がぜんぶアメリカ兵にころされたと話した。かの女の三人の子供は、この倉庫のなかで凍死した。

リン・ナンヤ（林那女）という十九才の少女は、アメリカ兵が両親と兄弟二人を射殺したといつた。二十一才のソン・スクマ（宋淑梅）は、十人家族のうち自分一人だけが生き残つたと話した。かの女の夫、赤ん坊、両親、それに兄弟たちはみんなアメリカ兵にころされた。かの女自身は、ハイジュ（海州）で監獄にぶちこまれ、着物をぜんぶはぎとられて、まつぱだかにされた。いつしよにつれていた子供は餓死した。

サンズエン・リ（山田里）街二番地にすむ三十五才のパク・ミズア（朴美子）というもう一人の婦人は、二十二人の家族のうち生き残つたのはかの女だけだといつた。かの女はわれわれに質問した。

「わたしたちの仇討ちに、あなたがたはどういう手助けをしてくれますか？　仇をうたねば生きてお

れません。」

この倉庫から六十メートルのぼつた山腹で、調査団のメンバーは二つの墓をみたが、それはその中をしらべるためにほりかえしてあつた。片一方の方には七十人の子供の死体があり、他の方にはおよそ二百人の婦人の死体があつた。死体はみんなひどく黒こげになつていた。また、その少し上のところには、小さな監房があつたが調査団のきいた話しでは、それは子供専用のものであつたということであつた。その監房はこわされていた。土地の人たちの話によると、この辺が解放されてからのちというもの、倉庫やその付近の墓の一帯はたびたび爆撃をうけたが、それはアメリカ軍が自分のおかした罪の証拠を湮滅するためだと考えられるということであつた。墓までゆくときに、調査団のメンバーは、いくつかの爆弾の大穴をまわつてゆかねばならなかつた。

サンズエン（山田）街八番地にすむ四十二才のソン・チュンオク（孫準玉）は、かの女の家族はみんな殺されたといつた。小さい子供は、斧と小刀でころされた。かの女はいつた。「わたしは前線にいつて、朝鮮ぜんたいが解放されるまでは、何でもします。」そして、つけくわえた。「こんなことをしたのはアメリカ兵だけではありませんでした。イギリス兵だつてやりました。」

あとで、五十代の婦人の一団が、遠いものは四十キロもはなれたシンチエン（信川）あたりから、

調査団のメンバーに会うためにやつてきた。これらの婦人たちは、自分自身の経験を話そうとめいめいが希望していたが、時間がたりなかつたので、その中のほんの一部の人の話しかきけなかつた。

キムズエ・リ（金峙里）からきた六十五才の婦人キム・イエン（金蓮）は、かの女の娘のペン・ドンナン（辺貞礼）（三十四才）は、活動的な農民だというのでつかまつた、という話しをした。アメリカ軍の将校の一人は、お前のためにたまなどつかうのはむだだ、とその娘にいつた。そして、かの女のおぶつていた二つの子供を銃剣でつきさし、その上、手足をしばられていたかの女を串ざしにした。「金日成と共和国万才！」とかの女がさけんだときに、その舌を切りとつて、生けうめにしてしまつた。キム・イエンの話によると、彼女がその娘の最後のくわしい話をきいたのは、李承晩軍の一兵士からであるが、この兵士はアメリカ軍将校の命令で、この野獣行為をやつたことを自慢にしていたということであつた。その上かの女の養子、その母、その兄弟、それに十五と十七のかの女自身の二人の孫も射殺されてしまつたと、キム・イエンは話した。

クオンチユー（孔朱）の村からきた四十一才の婦人ユ・トンズエ（柳東子）は、この地方で罪もない人が三万五千人も殺されたと、調査団のメンバーに話した。かの女の村では、百七十五人の人がころされた。かの女の家族も十八人殺されたが、その中にはかの女の夫や生後五カ月の末つ子もはいつ

ていた。かの女自身もつかまつたが、あとで釈放された。かの女の村には、アメリカ兵もイギリス兵もいたが、両方とも野獣のような行動をしていたと、かの女はいつた。かの女は、アメリカとイギリスの兵隊が罪もない人々を、どんなふうに川のなかに投げこんだかを、自分自身の目で見たと話した。その兵隊たちの国籍がどうしてわかつたかとたずねたところ、イギリスとアメリカの軍服のちがいでわかつたと、かの女はこたえた。かの女はわれわれにききかえした、「イギリス人というものは、慈悲を知らないのですか。あの人たちは小さい子供を殺すのを信仰にしているのですか。」かの女の話によるとアメリカ軍は撤退するときに、かの女の村の人たちにいつた、「いつしよに南についてこい。北鮮には原子爆弾をおとすことになつている。それですべては破滅するのだ。」そこで村人たちが村をでて、南方に移動しはじめたとき、飛行機があらわれて機銃掃射をくわえた。

サンゲン（傘玄）からやつてきたニ・ユニエ（李蓮愛）は、かの女の娘と婿が殺されたといつた。娘は学校の先生であつた。二人は射殺されたのではなく、杖で打ちころされたのであると、この証人はいつた。

サオク・リ（砂玉里）からきた二十二才のパク・オンイン（朴恩仁）は、かの女の夫は、みんな百姓だつた兄弟三人といつしよにつかまり、みんな殺されてしまつたといつた。かの女自身はキム・エ

ンスン（金潤順）という十八才の少女が暴行をうけて、それから殺されたのを自分自身の目でみたといつた。それをしたのはアメリカとイギリスの兵隊であつたと、かの女はいつた。アメリカ兵はいく人かの人の鼻の穴に焼けた鉄をつつこんで、街にひきずつていつたと、かの女は話した。かの女は、それをやられた一人の百姓を知つていた。その人の名前はリー・サンスン（李相淳）といつた。かの女自身はたくみに逃げてゆき、山のなかにかくれた。あとでかの女は夫の死体を見つけた。夫の顔はたたきわられてひらいており、体は焼いてあつた。

チエクソ・リ（冊耆里）街三番地からきた三十才のリー・デイイエ（李知恵）は、夫は庭師であつたといつた。アメリカ軍が夫をつかまえにやつてきたとき、アメリカ兵たちは北鮮人はみなごろしにするのだといつていたと、かの女は話した。かの女は、かの女のすんでいた街の家は百軒あつたが、そのうち九十家族が殺されたといつた。かの女自身は二人の子供といつしよにつかまつたが、監獄へうつされる途中で、逃げてきた。それで、平壌にいこうとしたところ、またつかまつた。アメリカ兵はかの女の銃殺を命じたが、李承晩兵の一人がかの女を逃がしてくれた。かの女は、北鮮人の捕虜が原つぱにつれだされて、石油をぶつかけられ、火炙りにされるのを見た。

サイサン・リ（写三里）のキム・スクセン（金淑先）は、かの女自身が婦人団体の活動家であつた

というので、その子供三人がつれてゆかれ、殺されたといつた。夫も殺された。二十才の娘キム・チュンズア（金春子）は、看護婦の勉強をしていたが、釘を耳につきさされ、背中に大鼓をゆわえつけられはだかで街をひきまわされた。そのあげく監獄にぶちこまれた。アメリカ兵はかの女に暴行をくわえようとしが、抵抗したので、銃でさしころされた。母親はかの女の死体をみつけたが、それはめちやくちやに傷がつき、二つに切りはなされていた。キム・スクセンの話によると、アメリカ軍は町にはいつてくると、娼家をこしらえた。若い少女や婦人をつかまえて、むりやりつれていつた。この証人の話によると、きれいな少女はアメリカ軍やイギリス軍の将校や兵隊にあてがわれ、その他のものは李承晩軍にあてがわれた。かの女は、この娼家にいたことのある三人の少女が、まだ生きているのを知つているといつた。その他のものは殺された。かの女の村には、百四十軒の家があつたが、全部で二百四十人の人が殺された。

サンチエン・リ（上倉里）の村からきた十四才のファン・イクス（黄益水）は、十一人の家族のうち七人がアメリカ、イギリス、カナダ兵に殺されたと話した。かの女自身は、鉱夫の父が活動的労働者であるというので、つかまつた。そして、母親や二人の兄弟といつしよに監獄にいれられた。かの女自身はぶたれた。かの女は脛のうえの傷あとを調査団のメンバーに見せた。その家族は、それから、小

屋につれてゆかれ石油をかけられた。しかし、小屋がもえるまえに、パルチザンがやつてきて、逃がしてくれた。パルチザンのなかには、かつてかの女の父親といつしよにいたけれども、たくみに逃げだしてきた男が一人いたのに、かの女は出あつた。この男は、かの女の父親は銃剣で五ヵ所ほどつきさされ、頭は打ちくだかれたと、かの女に話した。かの女の兄弟は、首に縄をまいて街をひきまわされ、ほかの五人の犠牲者といつしよに火炙りにされた。

黄海道を旅行中、調査団のメンバーは、ゆくさきざきで、こわれた都市と焼けた村々をみた。

以上には、黄海道をおとづれた調査団のメンバーの全員が署名した。一九五一年五月二十六日

第四章

平安南道南浦（日本帝国主義時代の鎮南浦）と、江西の調査報告。一九五一年五月二十二——二十三日。

参加者、ジレツト・ジーグレル（フランス）、ファトマ・ベン・スリマン（チュニジア）、アバシシア・フオデイル（アルジエリア）、リ・チケ（ヴイエトナム）、イダ・バツハマン（デンマーク）、カーテ・フレロン・ヤコブセン（デンマーク、オブザーヴアー）。

南浦は爆撃をうけるまえ、六万の人口をもつていた。いまではほぼその半分が町から出ていつた。われわれは、平安南道人民委員会委員長ソク・チャンナム（石昌男）から、南浦にはぜんぜん軍需工業はなく、おもな工業はガラス、繊維、製陶、化学肥料であつたという報告をきいた。もちろん、南浦は黄海に面する海港ではあるが、商業上でも、軍事上でも港としては重要でない。というのは、海が浅いからである。

市には二万の建物があつた。工業大学、農業大学、劇場が一つづつあつたが、今ではみんなこわれてしまつた。市の十三の病院には、ぜんぶ赤十字の印をつけておいたが、焼夷弾でひどくこわされ、そのたつた一つに修繕がきくだけである。二十六の学校のうち、つかえるのはたつた二校しかのこらず、小つぽけな教会たつた一つが、やつと破壊をまぬかれた。

南浦のアメリカ軍占領は、一九五〇年十月二十二日から十二月五日までつづいた。その間に、たくさんの建物がやかれ、いつさいの食糧が破棄された。占領中、アメリカ軍は千百五十一人の人を野獣

的に殺した。そのうちの半分以上は、女子供であつた。

南浦はたえまなく爆撃されたが、いちばんひどい爆撃は、一九五一年五月六日のそれであつた。わたしたちは、市内を乗りまわし、また方々で車をとめて調査した。見わたすかぎり、ほとんどすべての家がかんぜんにこわされて、地面の爆弾穴、ガラクタの山、いく本かの煙突が、以前そこに家のあつたことをやつと示していた。残つた建物はひどい被害をうけていた。わたしたちが立ちどまつたところでは、どこでも、わたしたちのまわりに人人があつまつて、かれらの最近の悲劇、かれらの近親の死亡と、家の焼失のことをわたしたちに話し、アメリカ軍に拷問されて、うけた傷を見せてくれた。

市内のヨンドン・リ（永洞里）地区は、生存者の一人がいつたように、墓場にかわつてしまつた。それぞれの家族ごとに、三——四人、ときには十人の家族をうしなつた。一部が岡の上にあるこの地区では壁は一つものこつておらず、木々は黒焦げの幹がひかつているだけであつた。一つの爆弾穴のふちにたつて、リ・タンエアウ（李東華——四十二才）という男はいつた。「ここにわたしの家がありました。五月の爆撃のとき、家族のうち六人、家内に、二人の子供、三人の親類——をなくしました。わたしたち朝鮮人はわが国をまもります。どうか、国際婦人連盟は朝鮮のこの事業をまもつて下さい。」キム・スヨン（金水永）というもう一人の男は、かれの家族十人をみんななくした。かれはいつた。

「朝鮮人はみんな一人のように団結しています。わたしは、わたしの感情をうまく表現できませんが、世界はきつとわかつてくれるでしよう。」

ほかの人たちは復讐をさけんでいた。

この同じ地区で、五月六日病院に焼夷弾が命中して、十六人の患者が殺された。

市内のほかの地区では、わたしたちは、ひどい火傷の治療をする臨時病院をおとずれたが、それは深い地下につくつてあつた。それは広さ一メートル半ばかりの低いむきだしの廊下で、岩をくりぬいて十七台の寝台をおくだけの場所であつた。

南浦の大きな市場は、四月廿一日のまつぴるま爆撃をうけた。四十八人ほど死んで、たくさんの食糧がだめになつた。今では市場はほとんど空つぽである。

北鮮最大の工場の一つである肥料工場は、一九五〇年八月三十一日六時間（午前九時から午後三時まで）の爆撃をうけた。九百人の労働者のうち三百人が死に、いくつかある大きな建物はひどくいたんで、大部分は修繕もきかなくなつた。

午後になつて、わたしたちはいく人かの証人にあつた。そのなかには二人の子供、キム・スンオク（金崇玉）、少女、十三才、キム・クオンホ（金共若）、少年、十一才がいたが、両人とも孤児院から

やつてきたのであつた。アメリカ軍は南浦にやつてくると、子供をむりやりキリスト教徒にしようとした。それをきかなかつたものは、食糧がもらえず、拷問をうけた。アメリカ軍は、退却するときに、中国義勇軍がやつてきたら子供をみんな殺してしまうという宣伝と、アメリカ軍は北鮮に原子爆弾をおとすという宣伝をひろめた。

グオン・タイソン(権泰成――四十四才)、はどの政党にもはいつていず、製粉工場をもつていて、労働者を十人やとつていた。アメリカ軍はやつてきたときその工場を没収し、逃げるときには何もかもぶちこわしてしまつた。それでも、グオン・タイソンはアメリカ軍の宣伝にまよわされて、アメリカ軍についていつた。かれは同郷人のいく人かといつしよに三十八度線ちかくの海州にむけて出発した。海州にはたくさんの避難民がよりあつまつていた。ところが、アメリカ軍は、その群集に機銃掃射をくわえて、数千の人を殺した。

プロテスタント牧師のホ・ヨンユク(許良郁――四十六才)は、南浦で四千五百人のクリスチヤンが殺されたといつた。これらの人たちもアメリカの宣伝にまよわされたのである。たとえば、オンヤン・リ(温陽里)教会の会衆は、そのとき舟にのつて南浦を立ちさろうとしていた千五百人の人びとのなかにまじつていた。ところが、アメリカ軍は、海上からかれらにむかつて砲火をひらき、空から

は機銃で攻撃をくわえた。これは何かのまちがいだと考えたプロテスタントたちは、讃美歌をうたいはじめた――しかし、アメリカ軍は発砲をつづけて、二百七十五人を殺した。

農民組会の組合員キム・クオンタイ（金権泰――四十八才）は、組合員だというのでつかまつた。アメリカ兵はかれの足と手をぶんなぐり、この拷問のために指はまがり、二度とふつうに歩くことはできなくなつた。かれの妻と娘もアメリカ軍にぶたれた。かれの妻はぶたれて鼻がかけた。

江西の町では、大きな中学校をはじめ大部分の建物がこわされた。信川地方の田舎では、十月二十日から十二月七日までの占領中に、アメリカ軍は千五百六十一人の人を虐殺した。このうち千三百八十四人は射殺（男九百三十二人、女四百五十二人、そのうち四百五十四人は八才以下の幼児）、五十七人は絞殺（男四十二、女十五）、五十人は生埋め（男二十五、女十）、三十五人は棒でなぐりごろし（男二十五、女十）、三十人は焼き殺し（男三十二、女三）などであつた。この報告は、およそ四十人ばかりの男や女の生存者の面前で、人民委員長リ・ヤンスク（李良叔）がわたしたちにしてくれたものであつた。その日じゆうわたしたちのきいた、たくさんの証人の説明を基礎にして、わたしたちは、アメリカ軍はつぎのような「犯罪？」のかどで人民をつかまえたのだということができる。愛国者であること、軍隊に親戚があつたこと、農民組合その他消費組合のような民主団体に参加していたこと、

また以上のべたような人を親戚にもつていたこと（消費組合の売店に働いていた一人の男は、両脛にたくさんの傷あとのあるのをわたしたちに見せたが、これはアメリカ兵が赤熱の棒で火傷させたものであつた）。

アメリカ兵は、この千五百六十一人の犠牲者のうち、拷問で死ななかつたものを山につれていつて、あるものは射殺し、残りのものは生埋めにした。その共同墓地は、アメリカ軍の退却すぐあとで見つかつたが、それは、この殺人をやるまえに、アメリカ軍に墓穴をほらされた土地の農民がしらせてくれたのである。

共同墓地はつぎの場所で見つかつた。タイチヤンモ（泰昌基）、ムヨン・リ（武永里）、ワサンボン（花像峰）、チヤンタイクアン（張泰館）、チヨンソン・ミエン（朝善面）、リカ・ミエン（利加面）、トンクル・ミエン（東君面）。タイチヤン・モの山の上から、わたしたちは、まわりの山々や岡の上に、たくさんの共同墓地があるのを見ることができた。

人民委員長や大勢あつまつた犠牲者の母親、妻、父親、子供らにつれられて、わたしたちはこの山の共同墓地のそばにいつた。いくつかの死体は近親が見わけて、谷の向い側の山にうつし、塚のなかに葬つた。わたしたちは、その塚もみた。一九五〇年十二月、共同墓地をほりえかしたときには、どの

人はどういう方法で虐殺されたか、ということをたしかめることができた。わたしたちのいる前で、だれだかわからないいくつかの死体から、おおいをとつてみせてくれた。わたしたちは、死体の手が背中でしばられ、いくつかの頭蓋骨は打ちくだかれているのをみた。また、わたしたちは、アメリカ軍の薬莢、血まみれのボロ、髪の毛、縄、靴その他着物のきれはしなどを見つけた。ちぢれの見えない黒髪と死体にまとう独特の着物をみて、この犠牲者たちが朝鮮の農民であることは、わたしたちにすぐわかつた。

この山だけでも、八つの共同墓地があり、その一つは長さ八十メートル、もう一つは七十メートル、深さは死体を二段に積みかさねるのに十分であつた。その他の穴はもつと深く（ほぼ五メートル）、もつと短かつた。

少しはなれたところに、小さな塚があつたが、これは朝鮮人が、墓地の中で母親といつしよにみつかつた二十人の子供の死体をうめたものであつた。

わたしたちをこの山につれてきた婦人の一人、タン・ブクトン（卓伏同――四十四才）は、かの女の兄弟の死体が頭を膝のあいだにつつこんで、手は背中でしばられたまま墓のなかに坐つているのを見つけたと話した。墓がほりかえされたときに自分に見えた光景は、あまりにもおそろしかつたので、

まつたく見ることさえもできませんでした――目をひらいた死体、背中に赤ん坊をくくりつけたまま殺された母親など……と、かの女はつけたした。

いく人かの証人が話をしたが、その中の一人のキム・キスン（金基順――五十八才）は、かれの息子と嫁、そしてこの夫婦の子供たちが、かれのかくれているあいだに生き埋めにされたと話した。かれはその生き埋めの場所をさがしだし、手を背中でしばられている死体を自分でほりだした。

わたしたちは、この拷問と虐殺をやつたのは、アメリカ軍だけか、それとも李承晩軍がまじつていたのかと、まわりの人たちにたずねてみた。答えは「この辺にいたのはアメリカ軍だけで、アメリカ軍がやつたのです」というのであつた。

その日一日中、わたしたちは何べんも空襲警報にひつかかつた。というのは、ここは海岸ちかくで、アメリカ機がたえず漁民の出漁をさまたげ、朝鮮人の食糧調達のじやまをしていた場所であつたからだ。夜だけは、いくらかの漁船が出漁することができた。

この辺をアメリカ軍が占領しているとき、アメリカ軍は一万五千八百六十袋の穀物に火をかけてやき、退却するときには二万三千四百五十三袋を持ち逃げした。

アメリカ軍は豚や鶏、家鴨などのすべての家畜、それに馬もいくらかまじえて、殺して食つてしま

つた。

穀物の収穫期も近づいた一九五〇年の秋、アメリカ軍は四千三百ヘクタール（一ヘクタールは約一丁二十五歩）の稲田と二千百ヘクタールのその他の穀物畑を焼夷弾でやきはらつた。

備考。南浦では、街や家があとかたもなくなつてしまつたので、わたしたちに話をしてくれた人たちは、自分の住所をおしえることができず、ただ名前だけを知らせてくれた。

上記には、一九五一年五月二十七日、平安南道をおとづれた調査団のメンバーの全員が署名した。

第五章

一九五一年五月二十二日から二十四日まで、代表者の一団

リウ・チンヤン（中国）

ジエルメン・アンネヴアル（ベルギー）

エリザベエタ・ガロ（イタリア）

ミルセ・スヴアトソヴア（チエツコスロヴアキア）

は、江原道文川郡のマズエン（万先）村（平壌から一五〇キロ、元山から四八キロ）と、おなじく江原道の元山港を視察した。

代表団は、平壌、江東、山東の諸郡を通過したが、これらはほとんどみんな焼けうせていた。また代表団は有名な温泉地陽徳を通過した。陽徳はいまではガラクタと廃墟のかたまりにすぎなくなつていて、その中には中学校の残骸もまじつていた。わたしたちは、夜農民が畑をたがやしているのをみた。というのは、ひる間たがやすと、アメリカ機が機銃攻撃をくわえるからである。畑はていねいにたがやされていた。

マズエン・リ（万先里）では、農民たちは、夜しか仕事ができないのに、春の百姓仕事がふつうよりも早目におわつたと、わたしたちに話した。

マズエン・リのまわりで、代表団は、山や森や田畑や村落におちてきたアメリカの焼夷弾で、ひろい山林地帯がやけてしまつているのを見た。

マズエン・リの住民がわたしたちに話したところによると、五月二十三日の夜、アメリカ機が村に

三つの爆弾をおとし、いく軒かの家をこわしたということである。

キム・ソンイル（金松律）という農民は、つぎのような話をした。アメリカ軍は、一九五〇年十月十四日から十二月五日まで、マズエン・リを占領していた。かれらは人民軍と五日間戦つたのち、村に侵入してきた。占領期間中、かれらは人民軍に包囲されていたので、自分たちの陣営を有利にするため、ふきんの村々をやきはらい、逃げなかつた住民をつかまえ、マズエン・リにこしらえた仮監にぶちこんだ。数日してから、かれらはいく人かの婦人を釈放したが、かの女たちは山に逃げこむか、自分の家の廃墟のなかにかくれてしまつた。みんなでおよそ五百人が投獄され、五十四人が殺され、七十六人が元山におくられ、いまだに行方がわからない。投獄された婦人はみんななぐられ、そのうち二十人は暴行をうけた。

キム・ソンイルは、アメリカ軍といつしよにやつてきた南朝鮮人はただ通訳だけで、李承晩兵は一人もいなかつたと主張した。

マズエン・リから四キロのクミ（久美）村では、村人が避難していた防空壕に、アメリカ兵が手榴弾をなげこんで、老人、婦人、子供九人をころした。

アメリカ軍をおつぱらつたのち、村人は犠牲者を掘りだし、それらがどんな方法で殺されたかをし

らべた。

（一）口に薬莢をつつこんで爆発させた。

（二）斧で頭を割つた。

（三）生埋めにした。

この死体発掘の目撃者のなかには、キム・ソンイル、セン・ウーン（孫雲）、前人民委員会議長ツエン・センカル（全仙傑）、ヤン・キワン（梁載煥）、その他の人がいた。アメリカ軍は退却するとすぐ、この村を焼夷弾でやきはらつた。一九五〇年十二月十五日と二十日に、いちばんひどい爆撃をくわえた。この爆撃中に農民チエン・キソン（千基松）の家族（十人、このうち七人は子供）はみなごろしにされ、子供四人をまじえた十人の村民は飛行機から機銃攻撃をうけた。

キム・プーチエン（金富伝――四十三才）は四人の子供の母親であるが、アメリカ軍は、「共産主義者」だ、といつて村民を迫害したと、調査団のメンバーに話した。コ・リ（高里）村の人民委員会の副委員長であつたかの女の夫を、アメリカ軍はつかまえた。かれらは、木の棒と銃の台尻でひどくなぐり、半殺しにして元山につれていつたが、そこで、かれはぶたれた傷がもとで死んでしまつた。村の人民委員会委員長は生埋めにされ、かれの年とつた父親は射殺された。キム・プーチエンはい

つた。「コ・リの婦人団体の会長チエン・マンスク（全満淑――三十一才）は「赤」だというので、アメリカ軍につかまり、二日間つづけさまに暴行をうけた。」

二人の子供の母親で二十七才のチヤ・オクスン（卓玉順）は、かの女の夫はコ・リの郵便局ではたらき、かの女自身はちつぽけな田畑をたがやしていたが、アメリカ軍は、「赤い」家族だといつて、かれら夫婦と子供（下の子供はやつと一才であつた）もいつしよに、監獄にぶちこみぶんなぐつたと話した。かの女はその後二度と夫にあつていない。数日間、監獄にいるうちかの女はたつた二杯の飯をうけとつただけである。それで、赤ん坊に乳をやることができなくなつた。元山の監獄にいるときには、アメリカ兵が毎晩いく人かの少女をえらんで、暴行をくわえた。元山の監獄に二十日いたのち、かの女は人民軍の手で釈放された。

コ・リの農民婦人であるカン・ユアンアン（姜栄安――二十八才）は、生後十八カ月の赤ん坊の母親であるが、アメリカ軍がやつてくるまえに、山に逃げこんだと話した。収獲物の手入れをしようとして、帰つてきた日に、かの女は赤ん坊といつしよに投獄された。子供がひもじさに泣くのを止めさせないというので、かの女はぶたれた。四日間ひとりぽつちの監禁をうけたあとで、赤ん坊といつしよに元山につれてゆかれ、そこで人民軍の手で釈放された。

元山は日本海の港で、北江原道の首都である。北江原道の労働党委員長チェ・クアンヨル（崔光烈）は、われわれにつぎのような説明をしてくれた。

「戦前、元山には十二万三千百二十七人の住民がいた。このうち、今のこつているのは、わずか五万七千六百六十七人である。そして、元あつた二万七千三百四十五の家や公共建物のうち、のこつているのは、わずかに九千二百五十七であるが、その中には多少ともこわれた家もふくまれている。」

「アメリカ軍の占領は、一九五〇年十月十四日から十二月九日までつづいた。その後一九五一年三月三十一日まで、元山は爆撃機（B―二九）二百七十五機と戦斗機九百十七機の攻撃をうけ、高性能爆弾八百三十八箇をおとされ、家や住民は三千五百十九回機銃掃射をうけた。また、この間、軍艦は四百八十七回、市を砲撃した。犠牲者は負傷五百十八人、死亡四百九十八人、そのうち男二百五十五人、女二百四十三人、そしてそれには二百四十一人の子供がまじつていた。

わたしたちが元山に滞在している間中、軍艦はたえず市とその周囲に砲撃をくわえていた。艦砲射撃は、五月二十三日から四日にかけての夜ことにはげしかつた。役所の報告によると、その夜、打ちこまれた砲弾は六千七百五十二発、六十五の公共建物と四十九の民家――これらはもうこれまでに被害をうけていた――が、かんぜんに焼失または破壊された。十一人の死者があり、重傷者は四人、三

人が軽傷をうけた。わたしたちは市内の砲撃をうけた地区を視察したが、そこは精油所にちかいところで、精油所はかんぜんにこわれていた。そこで、わたしたちは、いくつかの高性能爆弾と焼夷弾をしらべた。

どの家もどの家も、ガラクタのかたまりになつていて、その上をおおつている焼薬はまだ煙をだしていた。わたしたちのつくすぐ前に、母親と二人の子供の死体がほりだされた。この婦人の死体を葬るため藁むしろにつつむのを、わたしたちは見た。

防空壕に逃げこんでいた住民の大部分は、ガラクタの取り片づけに忙しかつた。

わたしたちがそこにいるうち、三回も空襲警報がでて、わたしたちは山腹の防空壕に待避せねばならなかつた。この防空壕は、これらの不幸な人たちに残された唯一の住居であつた。こうして、ほんとの穴居人町があらわれたのである。

わたしたちは、そういう「町」の一つであるチュンチョン・リ（春川里）をおとずれた。この町はぜんぶ洞穴であり、それは谷間の傾斜にほつてあつた。入口は木の枝の網でカムフラージュしてあつた。住民は、アメリカの飛行士がみつけて、機銃掃射をくわえるのをおそれているのである。

江原道民主婦人連盟の委員長クオン・チンル（権真禧）は、つぎのような公式報告をわたしたちに

読んできかせた。

「江原道の砲爆撃は、一九五〇年の六月はじめからはじまつた。たくさんのほかの建物がこわされたほか、つぎのような破壊をうけた。

（一）一九五〇年七月十三日、労働者の休息の家——ここでは百六十八人の労働者が死んだ。第十三小学校、中央病院、赤十字病院——ここでは看護婦長が死んだ。また第一病院——ここでは患者三人と看護婦二人が死んだ。

（二）一九五〇年八月十三日、師範大学と鉄道工場（B—二九型八機が爆撃）—百人以上の労働者が死んだ。

（三）一九五〇年八月十五日、精油所（この後も数回爆撃された）と造船所。

（四）一九五〇年九月十三日、第三女学校と道立中央劇場が命中弾をうけた。

（五）一九五一年一月二十五日、市立図書館。現在、元山にはただ一つの学校も病院ものこつていない。授業は小さな組にわけてやつており、教師は市内の各地にある組から組をかけまわつている。この市は三十八度線にいちばん近い地方にあるので、住家は一軒もなくなつている。一九五〇年六月二十五日から一九五一年三月三十一日までに、二千二百九十八人の婦人と二千二百九十二人の子供が、江原

道だけで殺された。六百七十六人の子供は両親をなくした。」

十月九日から十二月十一日まで、アメリカ軍がこの道を占領しているあいだにやつた残虐行為について、クオン・チンヒ（権真禧）はつぎのような公式報告をしてくれた。

「鉄原では、千五百の市民が殺されたが、そのうち百三十人は逃げこんだ防空壕で生埋めにされた。」

「カルマ（葛麻）の町（鉄原郡葛間面）では、農民のオム・ソンホ（厳声浩）とその家族は、六人の子供をまじえてアメリカ軍に銃剣でつき殺された。」

「オクトン・リ（玉洞里）（平康郡）の村では、農民セ・ドンチョ（呂東朝）の嫁（二十三才）は八カ月の身重であつたが、アメリカ軍につれてゆかれた。かの女は着物をぬがされ、公衆の面前でさらされ、木にくくりつけられた。かの女は腹を切りさかれて、赤ん坊をとりだされた。」

「ミーイエン・リ（美延里）（安辺郡安東面）では、農民セ・ヤンソン（呂良先）の家族の三人の婦人が防空壕につれてゆかれたが、アメリカ兵が暴行をしようとしたとき身をまもつたので、乳房を切り取られ、膣に赤熱の鉄をつつこんで殺された。」

「元山のコンソン（論松）街にすむ四十二才の婦人チエ・オクリ（趙玉裡）は、十四人のアメリカ兵

につづけざまに暴行された。かの女はまだ生きているが、床をはなれることができないほど弱つている。今はトンチャン（東朝）村にすんでいる。」

「ロコク（路谷）の村（鉄原郡梨洞面）では、三十二才の婦人キム・ヒョースン（金孝順）とその子供たちが、十一月三日アメリカ軍につかまつた。かの女は着物をぬがされ腹に銃剣をつきさされ、その後で射殺された。子供たちはかの女の側で餓死した。」

「十三万の住民のいた江原道だけでも、二千九百三人の婦人がアメリカ軍や李承晩軍に暴行をうけた。」

調査団のメンバーは、このほかの証人とも話した。

プロテスタントの宣教師で、四十九才の寡婦のチエン・キエンフア（全権花）は、かの女の嫁のユン・スンセ（尹順子）が夜中にたたきおこされ、二人の娼婦といつしよに自動車につれこまれたことを話した。かの女は稲田のなかに逃げだしたが、追つかけられ、暴行され、射殺された。チエンの兄弟チエン・チユンクアン（全忠寛）とその妻パク・キエンリエル（朴景烈）は街をあるいているとき飛行機の機銃火でころされた。前者は十二月二十九日に、後者は十二月二十四日に。チエン・キエンファは、この夫婦の子供六人をそだてている。

元山のキエンサン・リ（景山里）街にすむ農民婦人で四十六才のシン・イエンオク（申英玉）は、かの女の嫁は二十五才で、九カ月の身重だつたが、（過去二年のあいだこの地の婦人団体の議長をつとめていた）、一九五〇年十一月十八日につかまつたと話した。「赤」だというので、ぶんなぐられ、五日後、町の四つ辻で公衆のさらしものにされた。生れるばかりになつていたかの女の赤ん坊は、棒を子宮につきさして殺された。母親はその場で死んだ。これをやつたのは、二人のアメリカ兵と一人の李承晩兵であつた。

この死刑執行に強制的に立ちあわされた目撃者としては、リン・パクマン（林白晩）とキム・オンヨ（金恩女）がいる。

この婦人の夫パク・チャンイン（朴燦仱二十六才）つまり、シン・イエンオク（申英玉）の息子は、つかまつてぶんなぐられ、射撃されて、死んだものとして森の中におきすてられた。家族がそれを見つけて家につれてかえつたが、傷がもとで今死にかけている。

元山の住民で五十五才のキム・センヒ（金聖姫）は、一九五〇年十一月二十一日、五人のアメリカ兵がクリスチャンの男やもめシン・ボンキン（申奉均）の家におしいり、かれの留守中いちばん上の姉娘シン・ファスン（申花順）を二人の妹の面前で暴行したと、調査団のメンバーに話した。二人の

小さな妹が泣きながら逃げだすと、隣の家の前でそれを射殺した。いちばん上の姉娘は三日後に死んだ。

セドン・リ（世洞里）（元山市内）にすみ、婦人団体の会員で、三十八才の農民婦人リ・クムスン（李錦順）は、自分は一九五〇年十二月二十五日生後一ヵ月の赤ん坊といつしよにつかまつたと、わたしたちに話した。かの女は元山の町のカルマ・リ（葛麻里）の郊外につれてゆかれた。かの女は毎晩訊問されるごとに背中と腹をぶたれた。十一月二十日釈放されたが、その五日後かの女の子供は死んだ。十一月二十日、かの女の夫がつかまり、七日間拷問されたのち、どこかへつれてゆかれた。釈放後、リ・クムスンは安辺郡世源面のチョンチエン・リ（春田里）にちかい谷間で夫の死体を見つけた。そこの川の土堤には、三十九人の死体がころがつていたが、手はみんな背中でしばられ、めいめいの左の目には弾丸を打ちこまれて穴があいていた。

この章には、一九五一年九月二十六日、北江原道をおとづれた調査団のメンバーの全員が署名した。

第六章

調査団のつぎのメンバーからなる一団は、朝鮮の北部を視察した。

ヒルデ・カーン（ドイツ民主共和国）

リリー・ヴエヒター（西ドイツ）

バイ・ラン（中国）

トレース・ソエニト・ヘイリゲルス（オランダ）

旅行は平壌から介川、それから煕川、江界、満浦にゆき、平壌にひきかえした。

平壌から介川にゆく途中、調査団のメンバーは四つの小さな町――それはほとんどかんぜんにこわされていた――と、その他たくさんの焼けうせた村や農民の住宅を見た。

メンバーは、旅行の全道程で、こわれていない町は一つも見なかつたし、被害をうけていない村をすくなかつた。

調査団のメンバーは六つの山火事をみたが、そのうち二つは自分らの面前で火がついた。

――一つは平壌と介川のあいだで、もう一つは熙川と介川のあいだで。両方の場合とも飛行機の音がきこえ、調査団のメンバーは、地面から火柱のたつのをみたが、そのすぐ後でもえさかる火が見え、それは突然急速にひろがりはじめた。メンバーは、火が木の枝にもえうつるのを見た。この旅行の途中、調査団のメンバーは、山火事で黒くなつた山腹をたくさん見かけた。

介川面は、介川の町と四つの村から成つている。その位置は平安南道の北部にある。道人民委員会の委員長キム・ベンホ（金炳午）は調査団のメンバーにつぎのような報告をしてくれた。一九五〇年の十月二十五日、介川はアメリカ軍第二十七装甲師団に占領されたが、この師団は他の参加国の軍隊で補強をうけていた。

キム・ベンホは、とくにイギリス、オーストラリア、カナダ、トルコの各軍と数百の李承晩軍のいたことを注意したが、全軍八―九万にたつしていた。占領は四日間つづいたが、介川で被害をうけぬところは一つもなかつた。

介川面には一万三千軒の家があつた。そのうち、六千五百以上が、こわされていたが、その大部分は爆弾でやられたものであり、のこりは退却のときにアメリカ軍が火をかけたものである。残つた家も被害をうけていた。

一九五〇年の六月前には、七千六百頭の牛がいたが、アメリカ軍が退却したあとに残つたのは、わづか二千二百頭であつた。七千八百頭いた豚は、三百頭しか残らなかつた。鶏は十万羽いたのが、たつた千羽しか残らなかつた。

キム・ベンホは、そんなにたくさんの牛が持ちにげされたし、男の多くは人民軍に参加しているのに、婦人たちはふつうよりも、二週間ほど早く作物の蒔きつけをおわつたと話した。

介川は、こわされる前には、高等学校一つ、中学校六つ、小学校三十一、図書館一つ、劇場一つ、病院と診療所十三をもつていた。これらの施設はみんなこわされた。今でもたえ間なく爆撃をうけているので、再建はとてもやれない。

この方面には、八万以上の住民がいて、その八割は農民であつた。いま住民の数はおよそ六万で、みんな農村に疎開している。アメリカ人は射殺、焼き殺し、なぐり殺しで、千三百四十二人をころした。わかつているだけでも、八百六十人の婦人が暴行されたが、しかし多くの婦人は恥づかしいので事実をつげていない。調査団のメンバーは、それらの犯罪はアメリカ軍がやつたものと信じているのかと、キム・ベンホにたずねてみた。かれは、そうです、ほかでもないアメリカ軍がやつたことにまちがいないと答えた。

一つの例として、かれは、つぎのような話をした。占領中、かれ自身パルチザンの一指導者であつた。かれの部下の一人に、有名な組織者のキム・ケスン（金桂順――三十一才）がいた。かれは自分の家族をみんななくした。かれの妻リー・ウアクシル（李和実）は子供をつれいたが、アメリカ軍につかまつて、夫のことをきかれた。かの女は情報をやらなかつたので、拷問にかけられた。アメリカ軍はかの女の左腕を切りとり、ついでかの女の左脚を切りとつて、さいごには、子宮を切りひらいて胎児をとりだした。かの女が死んだのち、この家族の四人の子供は家のなかにとじこめられて、焼き殺された。キム・ケスンは、かえつてきたとき、その死体をみ、近所の人からその話をきいた。

介川の町のマジヤン・リ（馬場里）街二番地にすんでいるリー・ジンヒエン（李真賢）という婦人は、調査団のメンバーに次のような報告をしてくれた。かの女の妹は農民としてすぐれた働きをしたので、政府から勲章をもらつていて、この辺の婦人民主運動の役員であつた。アメリカ軍がやつてくるまえに、リーはいつしよに逃げようと妹にすすめたが、妹は役員だというので逃げないので、リーは両人の子供をつれて、ひとりで逃げだした。リーは妹がこないので、いつたいどうしているのかと、八つになる自分の息子をつれて見にいつた。かの女ははだかにされて、木にくくりつけられ、アメリカ人になぐられながら、かの女の夫やかの女の団体のことをきかれていた。かの女が答えなかつたので、

電気の拷問にかけられた。八つになる息子は腹をたてて、兵隊どもにとびかかつていつて、射殺された。この若い婦人は数日間拷問をうけ、アメリカ兵はそれを住民たちにみせた。さいごに、かれらはかの女を射殺した。

リー・ジンヒエンもつかまつたが、かの女は妹との関係をかくして、やつと生命をたすかつた。リーは、妹の話はたつた一つの例であつて、まだほかにもたくさんの残虐行為を知つていると、調査団のメンバーに話した。かの女は、アメリカ軍が婦人や少女狩りをやつて、ジープで娼家につれこむのをみとめた。リーやその他の若い婦人は顔に灰をぬり、老人のような着物をきて、それをのがれた。

ほとんど完全にこわれた介川の町で、調査団のメンバーは、なかんずく、爆撃された病院の一つをみた。その屋根にはまだ赤十字のしるしがのこつていた。町の婦人団体の会長は、ある一つの小さな住宅区域で五百人の人が殺され、住宅はかんぜんに焼きはらわれたといつた。

婦人と子供の群衆が調査団のメンバーをとりまいて、自分たちの話をきけとせがんだ。これらの婦人の大部分はひどく興奮していて、泣きながらわたしたちの手や着物をにぎりしめた。時間がなかつたので、これらの人たちの話をぜんぶ聞くことはできなかつた。調査団のメンバーは、つぎのような名前と事実とを書きとめた。

チヤ・ユスク（車有淑）という老婦人は、アメリカ人がきたとき、人民軍に参加して斗い傷をおつていた息子が軍服をきて家にいたが、かの女の目の前で射殺されたと話した。

キム・イスク（金伊淑）という若い婦人は、農民組合の指導者であつたかの女の夫が殺されたと話した。かの女は赤ん坊をせおつて逃げた。アメリカ兵はかの女をつかまえ、赤ん坊を地面にたたきつけて、ふみ殺した。

オ・インブン（呉仁粉）は、二十八才のかの女の娘のキム・ユンジユ（金融珠）が数人のアメリカ兵に暴行され、溺死させられたと話した。

リー・スンシル（李順実）という若い婦人は、はだかで十二日間、多くの兵隊といつしよに一つの室におかれた。

介川のブクブ・ミエン（北富面）にすむ二十才のキルリヨンニ（吉英礼）は、かの女の兄弟や義姉妹がアメリカ軍に殺されたといつた。

介川のヒエンリヨン・リ（玄英里）にすむ三十七才のホン・ユンボク（洪連福）は、かの女の夫が射殺されたといつた。

介川のリヤンヘン・リ（良玄里）にすむ三十四才のキム・リヨンシル（金英実）は、かの女の息子

が殺されたといつた。
介川のチュンフン・リ（重黄里）五七番地にすむ三十才のリ・ムウンジュ（林雲珠）は、かの女の兄弟がアメリカ兵に殺されたといつた。
介川面のセンポ・リ（善浦里）にすむ三十四才のチョイ・センチョ（超先朝）は、アメリカ兵がかの女の夫を射殺したといつた。
わづかな家をのぞいては、ほとんど何もなくなつているこの町の訪問をおわつて、調査団のメンバーは、農村にある孤児院にいつた。そこでは、いま四十八人の子供がそだてられている。これらの子供は爆撃された町から救いだされたのである。六つくらいの小さな男の子は、爆弾の衝撃でつんぼとおしになつていた。かれの名前も親戚の名前もまだわかつていない。介川では、調査団のメンバーは、介川の北方の或る村の民主婦人連盟の会長であるリー・センシル（李生実）に会つた。かの女はいろいろ話したが、数週間まえかの女の村で、アメリカ機一機が急降下して、野良ではたらいていた三人の男に機銃火をひらいた。二人の男と三匹の牡牛が殺され、三番目の男は重傷をうけたといつた。
江界は慈江道にある。道人民委員会の委員長リー・チョウセン(李珠善)氏は、わたしたちに次のような報告をしてくれた。「この朝鮮のいちばん北の道は、人口がすくなくおもに農民が多い。道内には

いくらかでも重要な工業は一つもない。敵軍は道内のほんの一部を占領しただけである。この道の人民政府は、あらゆる手段をつくして難民の救助につとめたが、すべての人に食糧と家をあてがうことは、たいへん大きな問題である。アメリカ機が北に逃げる人民に機銃攻撃をくわえ、道やたんぼの家畜を殺すので、困難はますます大きくなつている。」

江界の町には四万の住民がいた。教員を訓練する二つの大学、林業大学一つ、高等学校一つ、中学校二つ、小学校四つ、劇場一つがあつた。これら文化施設ぜんぶのうち、男子中学校ただ一つだけがまだ立つているが、それも被害をうけている。保健センターは、屋根に赤十字のしるしをつけていたのに、それでもこわされた。

町には二つのプロテスタント教会と一つのローマ・カトリツク教会、儒教の廟一つと天道教の教会一つがあつたが、みんなこわされた。住民のなかのキリスト教徒たちは、はじめ教会のなかや近所に避難をしていた。かれらは、アメリカ人が教会建物は見のがすだろうと考えていたのである。

江界の町だけではなく、山の中のほんの小さな百姓屋まで、アメリカ機の爆撃をうけて焼けてしまつた。

江原の町は一九五〇年十二月十二日はげしい爆撃をうけて、ほとんど完全にこわされてしまつた。

アメリカ機はおもに焼夷弾をおとし、あとで時限爆弾をおとした。時限爆弾は、おとされてから二十日までのあいだ、さまざまな時間に爆発した。

一九五一年二月のはじめ、もはやこわれたこの市に、はげしい爆撃があらたにくわえられた。こんどはおもに時限爆弾をつかつたので、住民はその後の二十日間町によりつかなかつた。

調査団のメンバーは、この地域で只一つ軍事目標になりうるものは、鉄道と停車場であるが、これらのものは、もはや一九五〇年十月九日の爆撃でこわされていたという報告をきいた。

調査団のメンバーは、ほとんど完全にこわれたこの市をおとずれて、外科医のバイク・キジエ（白基載）博士と話した。バイク博士は、一九五〇年十二月十二日に市立病院が爆撃されるまえ、低空をとぶアメリカ機が、病院の屋根の赤十字に機銃攻撃をくわえたといつた。

一九五〇年十二月十二日の爆撃後、バイク博士自身百人以上の負傷者を手当した。一九五一年二月の爆撃後、かれだけでも二百人以上の人間が死んだのをみた。バイク博士はアメリカ機が農民の住宅を爆撃するのを見たとも話した。かれは、たとえば、農民パク・フーリヨン（朴厚連）の家がどんなふうに爆撃されたかを、またこの家では十人が殺されたことを話した。

調査団のメンバーは、政府がどうして伝染病をさけたかについて、バイク博士にたずねた。答え

は、大規模な予防注射によつてであるが、そのための薬品は世界の各地の朝鮮の友人から送つてきたものだというのであつた。

委員会のメンバーは江界で三人の農民婦人にあつたが、この人たちは、わたしたちが町にきているときいて、わたしたちに礼をいいにきたのである。そのうちの一人はいつた。「わたしは四人の子供のうち二人を爆撃でなくしました。わたしは、うんとはたらいてかれらに復讐してやるのです。というのは、わが人民軍が何でも必要なものをみんな受けとれれば、アメリカ軍を追いだすことができますし、そうすれば平和がふたたびやつてくるからです。」

満浦は朝鮮と中国との国境にある。人民委員会の委員長リー（李）は調査団のメンバーにつぎのように話してくれた。この町には一万二千七百人の住民がいる。工業としては、木材、繊維の軽工業がいくらかあるだけである。満浦ははげしい爆撃を二回うけた。一九五〇年十一月十二日には、ほとんど完全にこわされてしまつた。調査団のメンバーは、その廃墟をおとずれて、異常にたくさんな焼夷弾のかけらがあたりにおちているのをみとめた。一九五〇年十二月七日、もはやこわれてしまつていた町はもう一遍爆撃をうけ、地下壕や廃墟のあいだにすんでいた人が三百五十人以上もころされた。調査団のメンバーは、一つの爆弾穴をみたが、それは深さが少くとも七メートルはあつた。満浦には、

またたくさんの文化施設があつた。なかんずく調査団のメンバーは、大きな学校建物と劇場の残骸をみとめた。

ほかのこわされた都市とおなじに、ここではたくさんの住民が地下の穴に住んでいる。調査団のメンバーは、そういう住宅の一つをみた。それは元の地下室の一部であり、中はまつくらで、二人の小さな子供がいて、小さい方は二才であつた。この二人は十三才の兄が世話していた。調査団のメンバーは、この兄や近所の人から父親は鉄道の労働者で母親は一九五〇年十二月七日の爆撃で死んだということをきいた。リー氏は、人民政府はまずまつさきに、だれも世話のしてがない子供の面倒を見ているのだと話してくれた。

この章には、介川、熙川、江界、滿浦をおとずれた調査団のメンバーの全員が、一九五一年五月二十七日署名した。

結　論

調査団のメンバーが、朝鮮の各地でいろいろの調査をしたのち、調査団は、つぎのような結論にたどりついた。

朝鮮の人民は、アメリカ占領軍から、無慈悲で系統的な絶滅作戦をうけているが、これは人道の原則に反するばかりか、たとえばハーグやジュネーヴできめた戦争法規にも反するものである。それはつぎのような方法でやられている。

(a) 食糧、食糧貯蔵と食糧工場の系統的な破壊によつて。森林や熟れた作物は焼夷弾で系統的にやかれ、果樹は切りたおされ、野良で家畜をつかつて働いている農民は低空をとぶ飛行機から機銃掃射を浴びて殺されている。こういう方法で、朝鮮の人民ぜんたいが飢餓の運命にさらされている。

(b) 町から町を村から村を、つぎつぎに系統的にこわすことによつて。これらの町や村の大多数は、どんなに想像をたくましくしても、軍事目標とは考えられないし、工業中心地とさえも考えられない。この系統的な破壊の目的は、まず第一に朝鮮人の斗志を打ちくだくこと、第二にかれらを肉体

的に消耗させることであるのは明らかである。この止むことのない空襲で、住宅、病院、学校などが計画的にこわされている。灰のかたまりになつてしまつた町。生きのこつた住民が防空壕のなかにすむほかない町にさえ、なお爆撃はつづいている。

（c） 国際法で禁止されている兵器を系統的につかうことによつて。つまり焼夷弾、石油爆弾、ナパーム爆弾、時限爆弾、それに低空をとぶ飛行機から市民をたえず機銃掃射することによつて。

（b） 朝鮮人を残虐にみなごろしすることによつて。アメリカ軍や李承晩軍が一時占領した地域では、占領期間中に、数十万の市民、老人から子供までまじえた家族のぜんぶが、拷問され、打ち殺され、焼かれ、生埋めにされた。そのほか数千数万人は、せりあうような監獄のなかで、飢えと寒さで死んでいつた。これらの人びとは、何の罪もなければ、取り調べも、裁判も判決のいいわたしもなく、監獄にぶちこまれたのである。

これらの大衆的拷問と大衆的虐殺は、ヒトラー・ナチスが、その一時占領したヨーロッパでやつたより以上のものである。

質問をうけたすべての市民のした証言は、これらの犯罪のほとんど全部が、アメリカ軍の兵隊や将校がやつたものであり、そうでない場合でもアメリカ軍将校の命令でやられたものであることを示し

ている。だから、これらの残虐行為の全責任は、朝鮮のアメリカ軍総司令官、つまりマッカーサー将軍、リッジウェイ将軍、そして自分のことを国連軍といつている侵略軍のその他の司令官が負うべきものである。これらの残虐行為は、前線の将校の命令によつてなされたものであるが、その責任は、自分の軍隊を朝鮮におくり、その国連代表が朝鮮戦争にさんせいの投票をした政府にもある。

調査団は、朝鮮にたいしてやつた犯罪の責任者は、一九四三年の連合国宣言にきめてある、戦争犯罪のかどで告訴されねばならぬし、おなじ宣言に定めてあるように、世界の人民によつて裁判されねばならぬと自分たちは確信をあきらかにする。

調査団は、朝鮮の戦争は、すこしの猶予もなくおわらせるべきであり、外国侵略軍は今すぐ朝鮮から引きあげるべきであるということを、自分のつかえるあらゆる手段をつかつて主張するように、普通人の名前で、世界のすべての人民に呼びかける。

調査団はまた、朝鮮にたいする即時の援助を組織すべきことを、世界のすべての人民に訴える。朝鮮の人民は、朝鮮の領土にいるアメリカ侵略軍のおかした残虐な犯罪の結果として、餓えと病気におびやかされているのである。

調査団は、世界の各国政府、わが婦人連盟に加入していようといまいと世界中のすべての婦人団体、

世界平和評議会、平和のためにたたかうすべての団体、そしてその政治的宗教的意見がどうあろうと平和の事業を尊重するあらゆる人道主義団体と公的な指導者に、この文書をおくることを、国際民主婦人連盟に要求する。

調査団は、朝鮮にいるアメリカ軍と李承晩軍のおかした残虐行為をしらべるための国婦際人調査団の、この報告を、国際連合に提出することを国際民主婦人連盟に緊急に要求する。

この報告書は、英語、フランス語、ロシア語、中国語、朝鮮語の五カ国語でつくった。

調査団長　**ノラ・K・ロッド**（カナダ）

副団長　**リウ・チンヤン**（中国）、**イダ・バツハマン**（デンマーク）、

書記　**ミルセ・スヴアトソヴア**（チェコスロヴァキア）、**トレース・ソエニト・ヘイリゲルス**（オランダ）。

調査団員　**モニカ・フエルトン**（イギリス）、**マリア・オヴシヤンニコワ**（ソ連）、**バイ・ラン**（中国）、**リ・ケン**（中国）、**ジレツト・ジーグレル**（フランス）、**エリザベタ・ガロ**（イタリ

ア）**エヴァ・プリースター**（オーストリア）、**ジエルメン・アハンネヴァル**（ベルギー）、**ヒルデ・カーン**（ドイツ民主共和国）、**リリー・ヴエヒター**（西独）、**リ・チケ**（ヴエトナム）、**カンデラリア・ロドリゲス**（キューバ）、**レオノル・アギアル・ヴァスケス**（アルゼンチン）、**フアトマ・ベン・スリマン**（チュニジア）、**アバシア・フオデイル**（アルジエリア）。

あとがき

このまえの大戦で、日本の国民は、世界の戦史にはじめてあらわれた二つの犯罪的な戦争方法を、身をもつて経験した。一つは、広島、長崎におとされた原子爆弾であるが、もう一つは、日本軍自身が大陸でやつた細菌戦争であつた。

さすがに、いま日本の国民は、原子爆弾の非人道的な残虐さに、しんこくな呪咀の声をあげている。しかし、げんに中国や朝鮮で、日本軍のやり方を発展させたむざんな細菌戦争がやられていることには、十分な関心をはらつていないようだ。細菌戦争というものは、世界ではじめて日本人がやりはじめたものであるから、それにたいする呪咀と攻撃は、原子爆弾にたいしてと同じようにやらねばならぬのが、わが国民の国民的な義務であろうと思う。まして、朝鮮、中国でアメリカ軍のつかつている細菌兵器の供給源の一つは、日本国内にあるといわれているのである。(アメリカ本国では、メリーランド、ミシシツピイ、インデイアナの諸州とワシントンの郊外、またカナダのサツフイールドに細菌兵器工場や施設があり、日本では、埼玉県春日部町にある動物取扱所や研究所―所長は小沢市三

郎―が細菌戦用の動物の供給にあたつているといわれている。)

むかし、大本営発表というものがあつた。いまでは、大本営発表！　というと、きつとみんながどつと笑いだす。それほど、それはばかばかしいものであつた。細菌戦についてのアメリカ側の主張をきいていると、日本軍の大本営発表を思いださせるものがある。

むかし、ヒツトラーは、小さなうそではなく、大きなうそをつけといつた。小さなうそは、一人一人の直接の経験で、それがうそかほんとかたしかめられるので、すぐにばれてしまうが、それができないような大うそをついて、独占した報道機関でそれを宣伝すれば、大うそは容易にばれないというのである。大本営発表はその伝であつたし、細菌戦についてのアメリカ側の主張もたしかにそうである。

細菌戦の話をすると、どういう証拠がありますか、といわれる。いろいろな報道をあげて説明すると、それが事実かどうか信じられない、あなたはいつて見てきたわけではないでしようといわれる。アメリカ側の「大うそ」の宣伝は、そういう「真理に忠実な慎重な心理状態」を世界の一部につくりだしている。アメリカの報道機関に一辺倒している日本では、ことにそういう心理状態がつよい。

世界の一流科学者を動員しておこなわれた国際科学委員会の細菌戦調査は、世界の一部にあるそう

いう心理状態を打ち破るにたるめんみつで説得的な調査であつた。それは、ばかばかしいほど科学的に事実をよくしらべ、アメリカ軍が細菌戦争をやつていることを、すこしの疑いの余地もないほど、くわしくりつぱに証明した。こういう科学的な調査さえ信じられない人は、なにかためにする「曲学阿世」といわれても仕方があるまいし、アイゼンハワーが大統領になつたことも、毛沢東や金日成などという人間が中国や朝鮮にいることも信じない方がよかろう。いつて見てきたわけではないでしようから。……しかし、そういう「慎重」な人たちにかぎつて、あんがいかんたんに大本営発表を信じこむ人たちではあるまいか?

さて、この科学委員会の報告書は、一九五二年九月十五日北京で発表されたときには、さすがに朝日新聞その他の日本の新聞も外電でそのことを報道した。本書は報告書の本文を英文と中国文を参照してほん訳したものである。報告書の本文のほかに、四十六件の付録のなかからも適当なものをいれるつもりであつたが、いろいろの都合で実現しなかつた。それで付録のなかでは、捕虜飛行士二人の手記と中国の衛生運動をとりあつかつた覚書の三つだけを入れた。ヒューレット・ジョンソン博士の論文は、この報告とはぜんぜん関係のないものであるが、細菌戦と新中国の一面を面白くえがいているので、本書の付録にした。

あの奇怪な朝鮮戦争については、いままで三つの国際調査団が組織された。いちばんはじめは、一九五一年春の国際民主婦人連盟の調査団であり、つぎは一九五二年春の国際民主法律家協会のそれで、さいごがこの国際科学委員会である。このうち第二の法律家協会の調査報告は、もう「白人は有色人種を迫害する」(三一書房)の付録として出版されているので、本書では、国際民主婦人連盟の調査団報告を、付録としてつけた。これらの報告を読めば、アメリカ軍の朝鮮戦争がどういう性格の戦争であるかがよくわかる。

蒼樹社から本報告書のほん訳を依頼されたとき、わたしはあまりにもかんたんに引きうけてしまった。ところが、ほん訳に手をつけてみると、自然科学の専門的知識のないわたしには、術語その他がひじょうに困難であつた。さいわい、民主的自然科学者の某氏に報告書の本文のぜんたいを、またこの某氏をつうじて某老大家に本文の一部を通読訂正していただけたので、ほつとした。なおまだまちがいがあれば、訳者の責任であり、こんご訂正したい。資料については、日本平和委員会事務局その他のお世話になつた。以上の方々や会にあつくお礼を申しあげる。

十一月　　訳者

国際科学委員会
細菌戦黒書

譯者　片山さとし
發行者　奈切勝美
印刷者　齋藤六之助
発行所　株式会社 蒼樹社
東京都千代田区神田猿樂町2の11
振替東京　191719

訳者トノ申合セニヨリ検印廃止

昭和28年1月10日　印刷
昭和28年1月15日　発行

都内定価 240円　地方定価 250円

定価——本体三、〇〇〇円＋税　ISBN4-938303-25-6

発行——二〇〇〇年九月一五日　編集復刻版第一刷
二〇〇一年五月一五日　第二刷

国連軍の犯罪——民衆・女性から見た朝鮮戦争

発行者——船橋治

発行所——不二出版
〒一一三—〇〇二三　東京都文京区向丘一—二—一二　電話〇三（三八一二）四四三三
振替〇〇一六〇—二—九四〇八四

印刷所——三進社

製本所——青木製本

解説者紹介——藤目ゆき（ふじめ・ゆき）

大阪外国語大学教員
一九五九年　大阪府に生まれる
一九九〇年　京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了
主　著　『性の歴史学』不二出版　一九九七年
訳　書　『ある日本軍「慰安婦」の回想』岩波書店　一九九五年